2023 年度 早稲田大学卒業生調査
報告書

2024 年 7 月

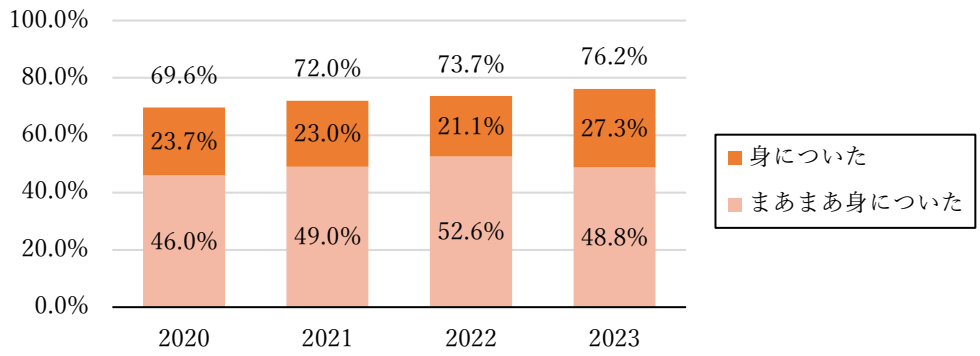
早稲田大学　大学総合研究センター

研究倫理番号　2021-366

全体要旨

本報告書は、大学総合研究センターが、2010 年度に学部に入学した卒業生を対象に実施した卒業生調査の集計、分析結果を掲載した報告書である。調査は、2023 年の 12 月末から 2024 年の 1 月末までにかけて 9,897 名を対象に、大学に登録されたメールアドレス・住所にメール・ダイレクトメールを送付し、1,292 件の回答を得た（回収率 13.0%）。

第 1 章では、本調査の概要や対象者の在学時の学修・生活環境について整理し、第 2 章では、この 4 年間の調査による共通項目の推移を記述した。分析の結果、専門科目や一般教育科目、ゼミ、卒業論文作成といった正課教育の熱心さがいずれもこの 4 年間で上昇傾向にある。また、「自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表したりした」「授業内容について、他の学生と議論した」「授業内容について、教員と議論した」のような課題発見・解決型の学修、双方向・対話型の学修経験が上昇傾向にある。学修成果については、上昇傾向の項目が複数あり、最も顕著なのは「自分の考えを分かりやすく表現できる」であった（図概要）。役立ち度についても大学時代の経験が役に立っているとする回答が上昇傾向にある。特に顕著なのは、「ゼミ」であり、2020 年度調査の 50.0%から 2023 年度調査では 59.7%に上昇していた。



図概要　学修成果「自分の考えを分かりやすく表現できる」の推移

第 3 章では、卒業後の離職の有無や早期離職の時期（卒業後 5 年以内，3 年以内，1 年）と、入学時や在学時の項目との関連を分析した。例えば離職した者は、学部が第一志望ではない傾向にあり、特に 1 年で離職した者は、大学も学部も第一志望でない傾向にあった。大学入学前の学習行動や、在学時の学修行動や成績、また大学の DP 項目の習得において、離職した者の方が全体的に低い傾向にあり、特に 1 年で離職した者に顕著であった。また大学の学びの仕事への役立ちや、現在の仕事の満足度や生活の満足度においても、同様の傾向がみられた。

第 4 章では、在学時の経験として特に「ゼミ」「卒業論文作成」に着目し分析を行った。まず、「ゼミ」「卒業論文作成」の経験は、在学時における双方向的な学修経験などとの関係が示唆された。また、これらに熱心に取り組んだ回答者は、問題や課題を発見し、そのテーマを批判的に検討して他者に発信するといった学修成果が相対的に高かった。卒業後との関連については、特に現在の職種が「教育・学習支援業」「学術研究・専門・技術サービス業」の回答者において、「ゼミ」や「卒業論文作成」が「現在の仕事に役に立っている」とより回答している傾向にあった。

目次

第１章　調査概要と対象について……..p. 3
　１－１．調査概要……..p. 3
　１－２．調査対象者の在学時の学修・生活環境……..p. 5
第２章　卒業生調査の４年間の推移……...…p. 6
　２－１．卒業生調査の推移を見る……...…p. 6
　２－２．インプット……..……..……....…p. 8
　２－３．スループット……..……..……p. 12
　２－４．アウトプット……. p. 19
　２－５．役立ち度……. p. 23
第３章　離職関係の分析……...…. p. 27
　３－１．本章の目的……. p. 27
　３－２．勤続年数と離職時期の区分……. p. 27
　３－３．離職と在学・入学時の項目との関係……...…p. 35
　３－４．離職と現在の仕事や生活との関係……..……p. 57
　３－５．まとめ……. p. 62
第４章　ゼミ・卒論についての在学時及び卒業後に関する分析...……p. 63
　４－１．分析対象と概要……. p. 63
　４－２．ゼミ・卒業論文作成と学修経験……...…p. 65
　４－３．在学時の熱心度と学修成果……..……....…p. 70
　４－４．ゼミ・卒業論文作成と現在の仕事への役立ち度……..……p. 80
　４－５．まとめ……. p. 86

付録　全体の集計データ……. p. 88

第１章　調査概要と対象について

大学総合研究センターは、2018 年度から学部卒業後 10 年時点の卒業生に対して、早稲田大学の教育改善の一環として客観的データを得るために卒業生調査を実施し、2023 年度は第６回目の調査を行った。本報告書では、学部卒業後 10 年を経過した卒業生を対象に、複数の観点から分析を行った。第２章では、４年間の経年変化を分析し、早稲田大学の教育及び教育改善がどのようにインパクトを与えたのかを記述する。第３章では、卒業後の離職の有無や早期離職の時期（卒業後５年以内，３年以内，１年）と、入学時や在学時の項目との関連を分析する。第４章では、在学時の経験として特に「ゼミ」「卒業論文作成」に着目し分析する。

なお調査は大学総合研究センターが実施し、データ分析、報告書執筆は同センター遠藤健（第１章、第２章)、山田寛邦（第３章)、丸川拓己・遠藤健（第４章）が担当し、付録作成、報告書編集補助を学生スタッフ丸川拓己が担当した。

１－１．調査概要

上述した分析を行うにあたって、課題としてきたのは回収数・回収率である。第３回の 2020 年度調査からは、学内の研究倫理申請を行った上で在学時に登録されたメールアドレス宛にもウェブ回答 URL を送付した。その結果、回収数・回収率は 1,350 件（15.4%）に増加した。第６回となる 2022 年度調査についても同様の手法によって実施し、前回の第５回調査よりは高くなり 1,292 件（13.0%）と多くの回答をいただけた。調査に協力いただいた皆様に感謝申し上げたい。

対象者：2010 年度学部入学者（昨年度：2009 年度学部入学者）
回収時期：2023 年 12 月 25 日～2024 年 1 月 22 日（昨年度：2022 年 12 月 22 日～2023 年 1 月 23 日）
調査方法：①ウェブ回答 URL を登録されたメールアドレスに送付、②ウェブ回答 URL が印刷されたダイレクトメールの郵送（昨年度：同様）
送付数：9,897（昨年度：9,848）
回答数：1,292（昨年度：970）
回答率：13.0%（昨年度：9.8%）

また、分析の前に秘匿化された調査対象者（母集団）のデータ（n = 9,897）と本調査結果とを結合した。調査対象者の母集団と回答者の比較によって、回答者はどのような卒業生なのか、ここでは卒業学部の情報から検討する。母集団と回答者の所属していた学部を比較すると（図１－１)、国際教養学部や政治経済学部では母集団よりもやや少なく、教育学部や文学部ではやや多い結果となった。

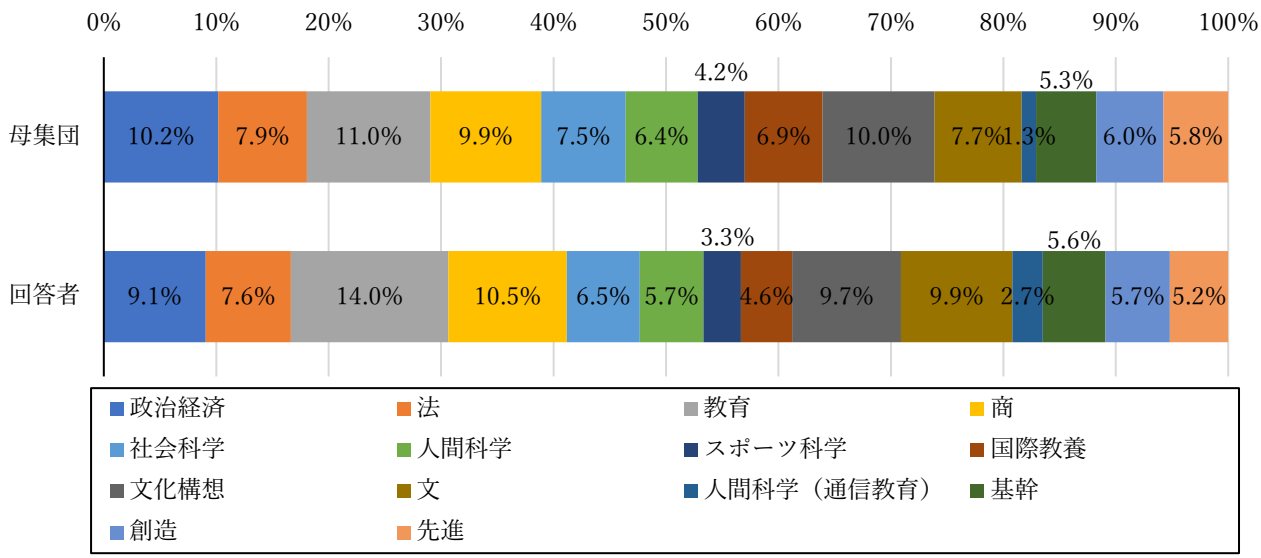


図１－１　母集団と回答者の学部の割合

１－２．調査対象者の在学時の学修・生活環境

次に、本調査の対象とする 2010 年度学部入学生の在学時の学修・生活環境について整理する。表１－１では早稲田大学、高等教育政策、社会のカテゴリーで 2010 年～2013 年度にかけて生じた比較的大きな出来事を作成した。

表１－１　2023 年度 卒業生調査対象者の在学時のおもな出来事

	早稲田大学	高等教育政策	社会
2010 年 4 月/9 月	入学 ・「授業の到達目標」「半期 15 回分の授業計画」を明示するようシラバス項目の見直しを実施 ・「Course N@vi」は約 17,000 科目中約 5,000 科目で活用		・政権交代
2011 年	・東日本大震災復興支援室設置 被災学生の就学支援、被災地域支援、研究を通じた復興支援を展開		・東日本大震災
2012 年	・中長期計画 Waseda Vision 150 を策定	・中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（質的転換答申）	・政権交代（安倍政権）
2013 年			
2014 年 3 月/9 月	標準年限卒業		

まず、調査対象者が在学していた期間は早稲田大学の創立 125 周年を経て、150 周年を見据えた中長期計画 Waseda Vision 150 が策定された時期であった。教育面では、2008 年に公表された Waseda Next 125 で掲げられたグローバル化推進によって留学生の受け入れや教育の国際化が図られていた。同時に、FD 推進センターが設置され、教育のグローバル化として海外からの留学生の受入れ、日本人学生の海外留学の促進、世界各国からの留学生との交流の充実を図ったと報告されている（早稲田大学校友会 2009[1]）。また１年時から２年時にかけて東日本大震災が発生し、早稲田大学では東日本大震災復興支援室を設置し①被災学生の就学支援、②被災地域支援、③研究を通じた復興支援を展開した（早稲田大学校友会 2013[2]）。2012 年にはいわゆる質的転換答申が文科省から示され、学習者を中心とした教育がより求められるようになり、アクティブラーニングが大学教育においてより推奨されていく時期であった。

以上のように、調査対象者が在学している間に、教育のグローバル化推進を図っていったことや社会的にも東日本大震災や政権交代といった大きな出来事が生じた。

[1] 早稲田大学校友会、2009、『早稲田学報』1176。
[2] 早稲田大学校友会、2013、『早稲田学報』1199。

第２章　卒業生調査の４年間の推移

２－１．卒業生調査の推移を見る

本章では、2020 年度から 2023 年度までの卒業生調査を用いて、４年間の推移を記述する。調査対象者は、各年度で学部卒業後 10 年としており、2007 年～2010 年度学部入学者である。各調査の概要は表２－１の通りである。

早稲田大学は、2007 年に創立 125 周年を迎え、10 年間のビジョンである「Waseda Next 125」を策定した。その間、教育改善や国際化の推進等が展開されており、当該期間に学部生であった卒業生の学び、経験、その後のキャリア等をみることを通じて、施策の効果の一側面を捉える。

表２－１　各卒業生調査の概要

	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
対象者	2007 年度学部入学者	2008 年度学部入学者	2009 年度学部入学者	2010 年度学部入学者
調査時期	2020 年 12 月 26 日～2021 年 2 月 10 日	2021 年 12 月 25 日～2022 年 1 月 31 日	2022 年 12 月 22 日～2023 年 1 月 23 日	2023 年 12 月 25 日～2024 年 1 月 22 日
対象者数	8,762	9,807	9,848	9,897
回答者数	1,350	1,013	970	1,292
回収率	15.4%	10.3%	9.8%	13.0%

本章では、この４年間に共通した質問項目をもとに、インプット（受験理由）、スループット（学部時代の教育経験、熱心であったこと）、アウトプット（学部卒業時点の学修成果、大学教育の役立ち度）の観点で記述していく。４年間の推移において特に変化のあった点を以下に記述する。

・インプット

志望理由については、「伝統・校風が好きだから」がこの４年間で減少傾向にある。2020 年調査では 71.7%であったが、2023 年度調査では 66.4%まで減少した。また、「将来の希望する職業分野を勉強できるから」についても４年間で減少傾向にある。2020 年度調査では 64.6%であったが、59.9%まで減少した。

・スループット

教育や課外活動、アルバイト等での熱心さは、正課教育の熱心さが微増傾向にある。専門科目や一般教育科目、ゼミ、卒業論文作成いずれもこの４年間で上昇傾向にある。

学修経験についても肯定的な回答が高まる傾向にある。「自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表したりした」「授業内容について、他の学生と議論した」「授業内容について、教員と議論した」のような課題発見・解決型の学修、双方向・対話型の学修経験が上昇傾向にある。また、「語学の

授業以外で、外国語で議論や発表をした」「留学生と一緒に学んだ」といった国際性に関する学修経験も他項目と比較して割合は小さいが、推移として見ると上昇傾向にある。さらに、「授業の一環として大学外で学んだ（フィールドワーク等)」経験についても上昇傾向にある。在学時の東日本大震災、その後の復興に向けた諸活動の経験が含まれている可能性も考えられる。

・アウトプット

学修成果については、上昇傾向の項目が複数ある。最も顕著なのは「自分の考えを分かりやすく表現できる」であり、2020 年度調査の肯定的な回答割合が 69.9%から 2023 年度調査では 76.2%に上昇している。他にも「物事を論理的に考えることができる」や「相手の状況や考え方を尊重できる」、「異文化を理解できる」、「外国語を理解し、話せる」といった国際性に関する項目も確かに上昇傾向にある。

役立ち度についても大学時代の経験が役に立っているとする回答が上昇傾向にある。特に顕著なのは、「ゼミ」であり、2020 年度調査の 50.0%から 2023 年度調査では 59.7%に上昇している。「専門科目」や「一般教育科目」といった大学教育の中心となる正課教育についても役立ち度が上昇している。課外活動でも「部活動・サークル活動」、「資格取得や教職、国家試験勉強」において上昇傾向である。

以上、卒業生調査の直近４年間の推移において特徴的な点を概説した。教育の質向上や国際化推進といった卒業生たちが学んでいた時期の施策は、確かに年次を推移するごとに効果が現れている可能性がある。これについては、大学入学前の経験や卒業後の経験など複合的な要因によっても説明されるものもあるため慎重な分析も必要になるだろう。

２－２．インプット

・勉強したい分野がその学部にあったから

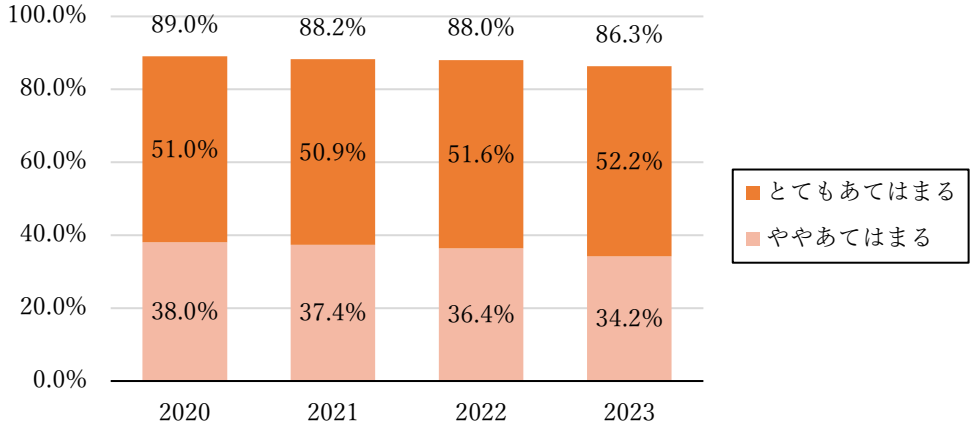


図２－１　受験理由＿勉強したい分野がその学部にあったから

・就職に有利であると思ったから

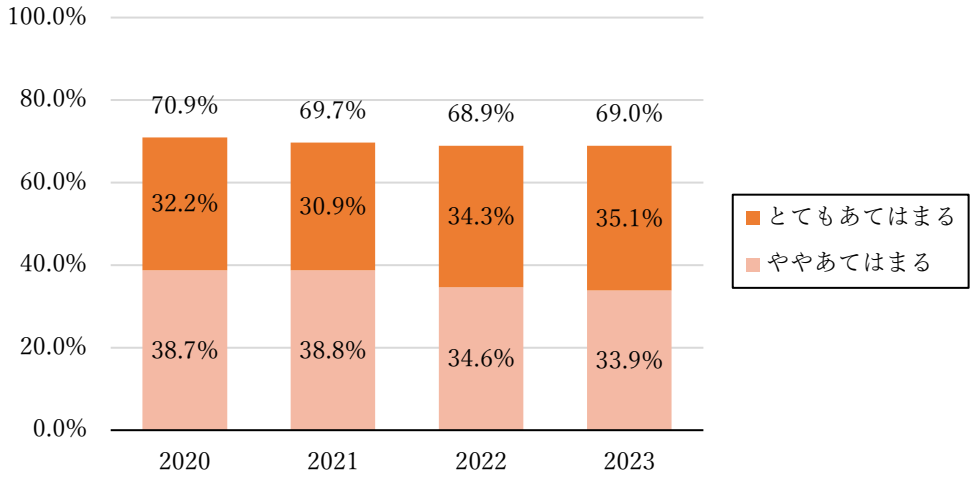


図２－２　受験理由＿就職に有利であると思ったから

・将来の希望する職業分野を勉強できるから

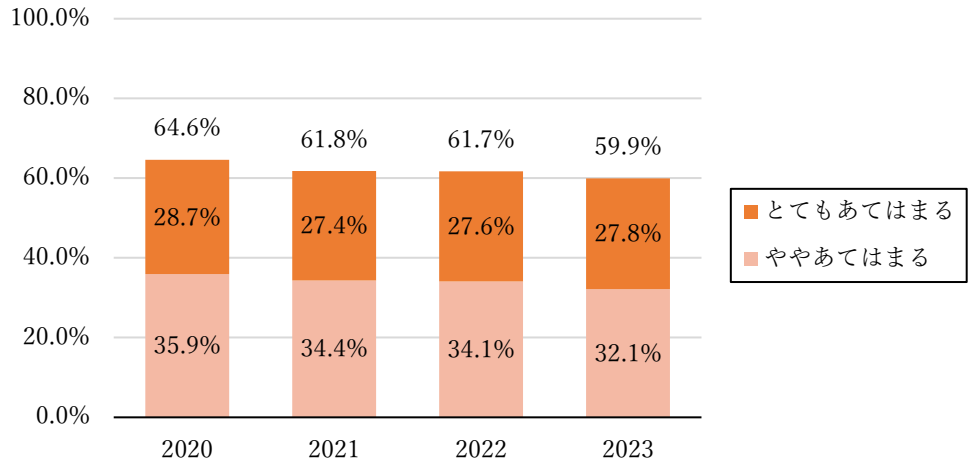


図２－３　受験理由＿将来の希望する職業分野を勉強できるから

・資格の取得が有利であるから

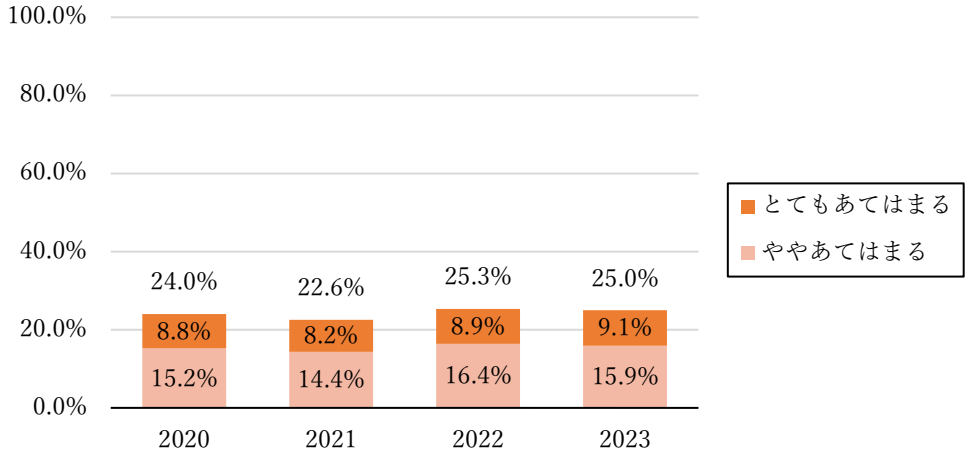


図２－４　受験理由＿資格の取得が有利であるから

・指導してほしい教員がその学部にいたから

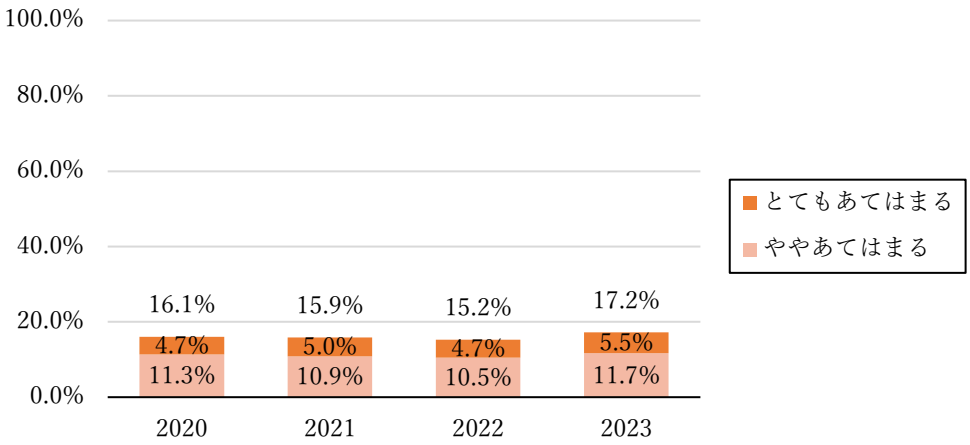


図２－５受験理由＿指導してほしい教員がその学部にいたから

・学力（偏差値など）が適当であったから

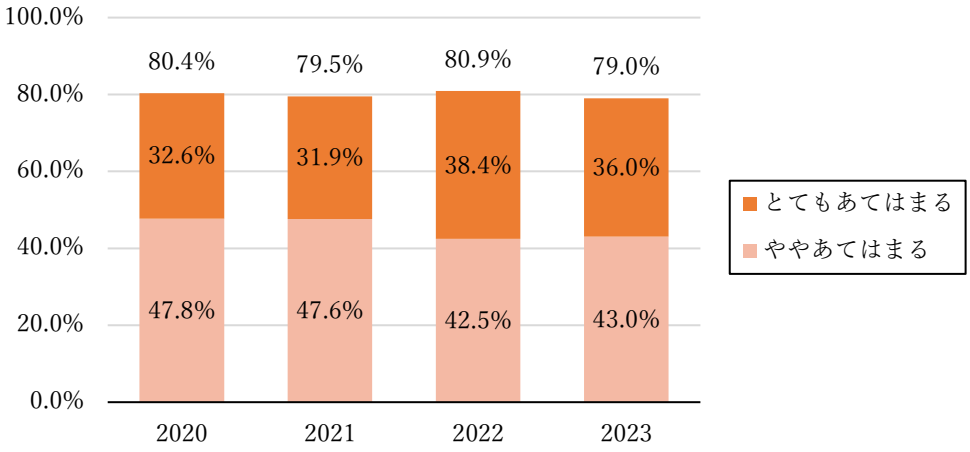


図２－６　受験理由＿学力（偏差値など）が適当であったから

・進路選択の幅が広い学部を選択した

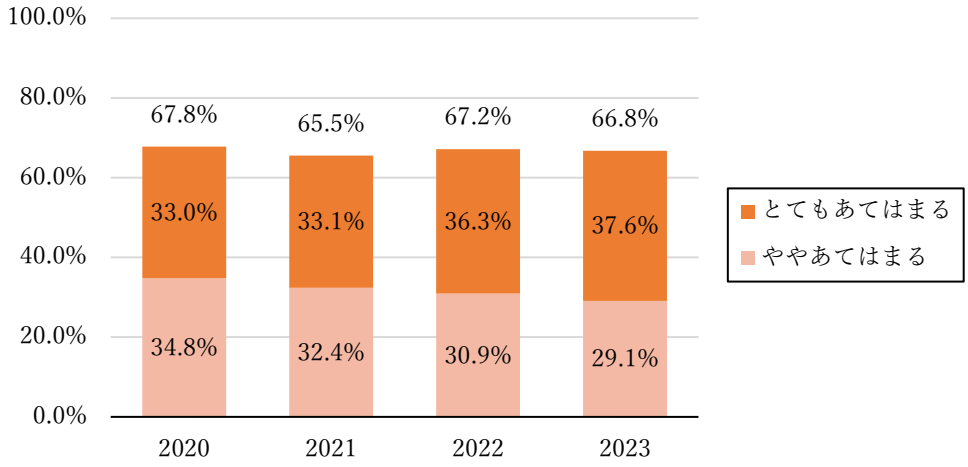


図２－７　受験理由＿進路選択の幅が広い学部を選択した

・高校の先生や家族または塾などで勧められたから

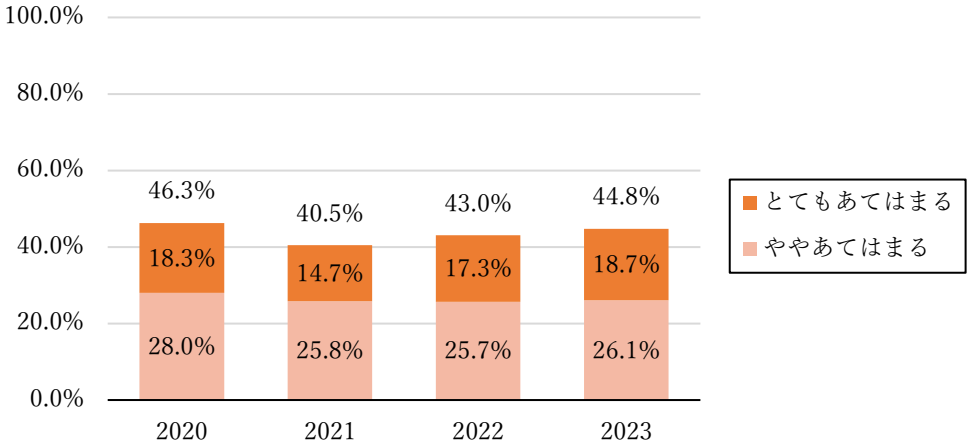


図２－８　受験理由＿高校の先生や家族または塾などで勧められたから

・伝統・校風が好きだから

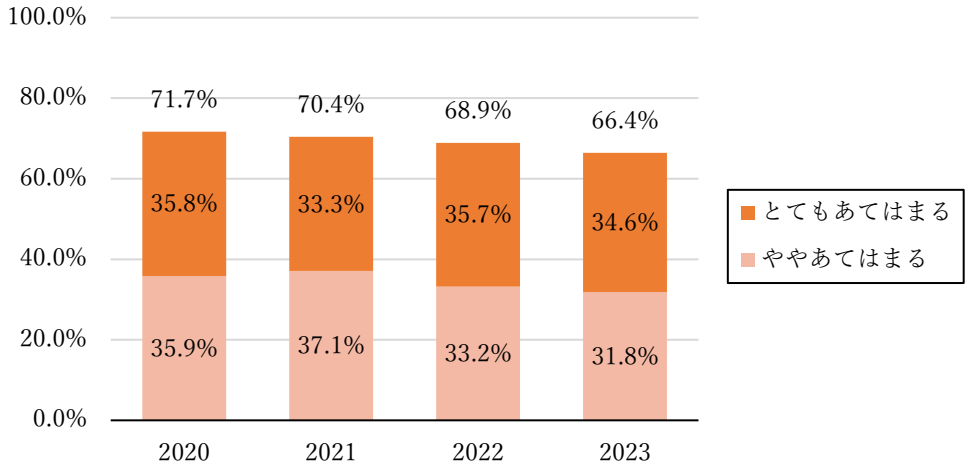


図２－９　受験理由＿伝統・校風が好きだから

・国際化が進んでいるから

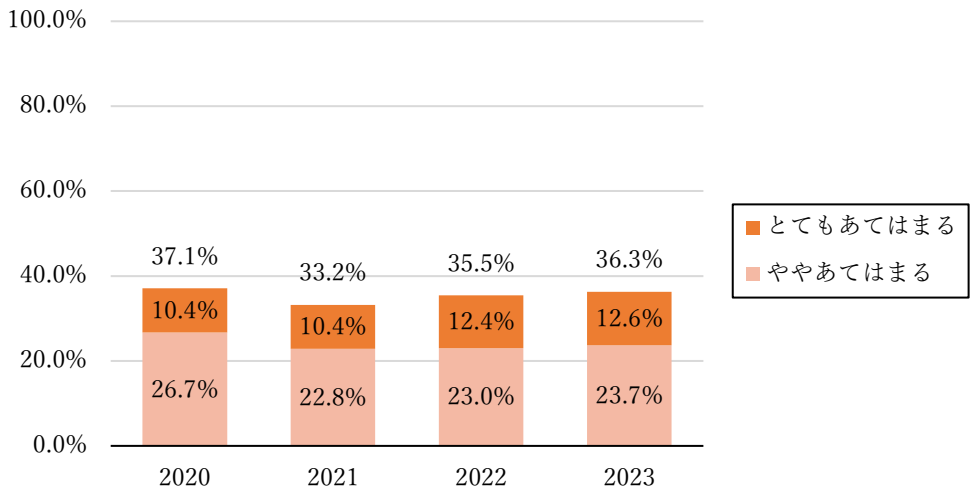


図２－10　受験理由＿国際化が進んでいるから

２－３．スループット（熱心さは経験なしを除く）

・専門科目

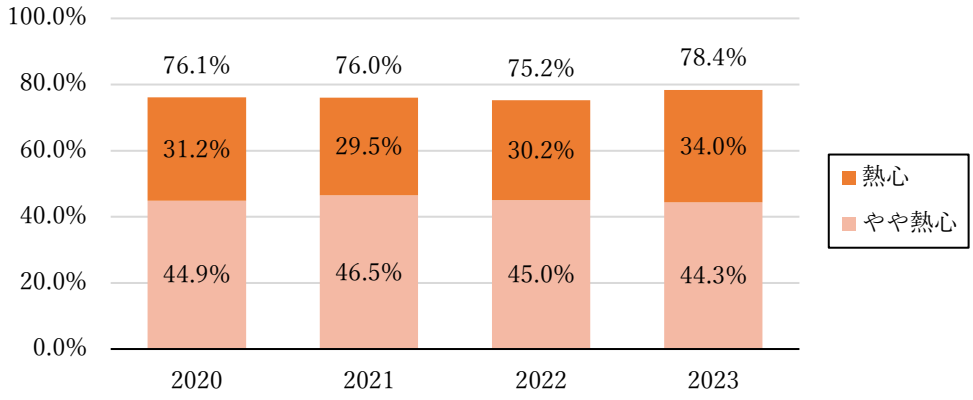


図２－11　在学時の活動の熱心さ＿専門科目

・一般教育科目

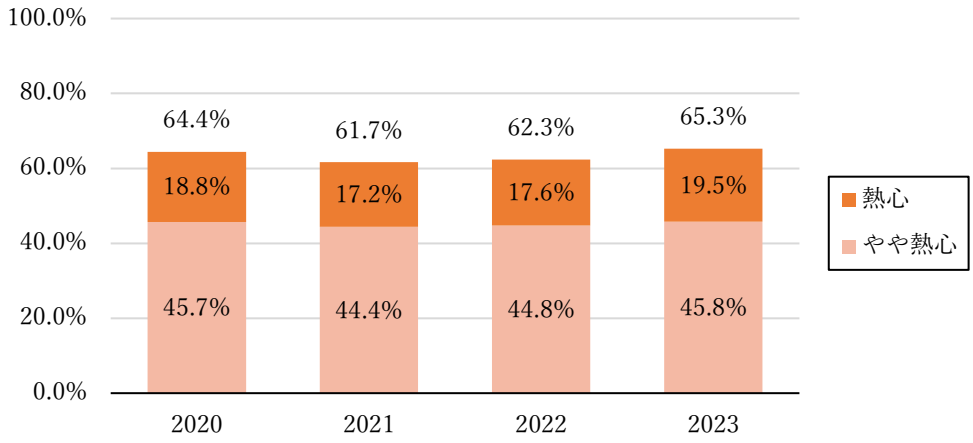


図２－12　在学時の活動の熱心さ＿一般教育科目

・ゼミ

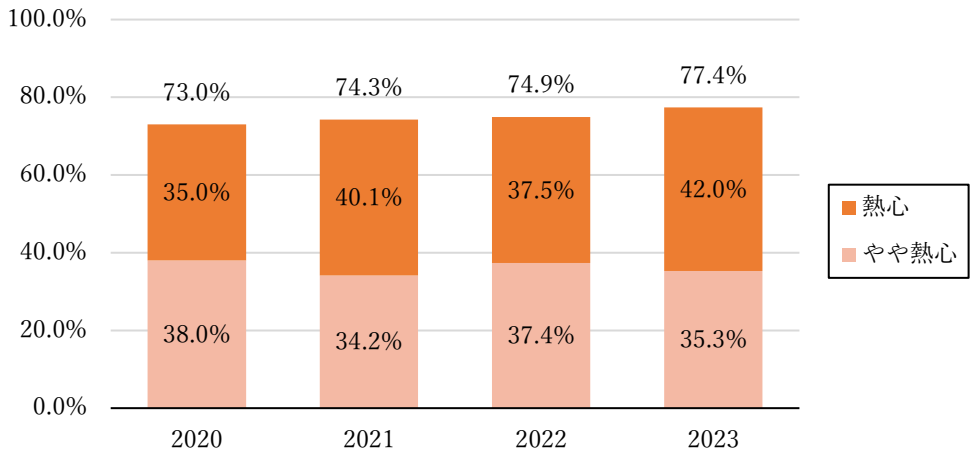


図２－13　在学時の活動の熱心さ＿ゼミ

・卒業論文作成

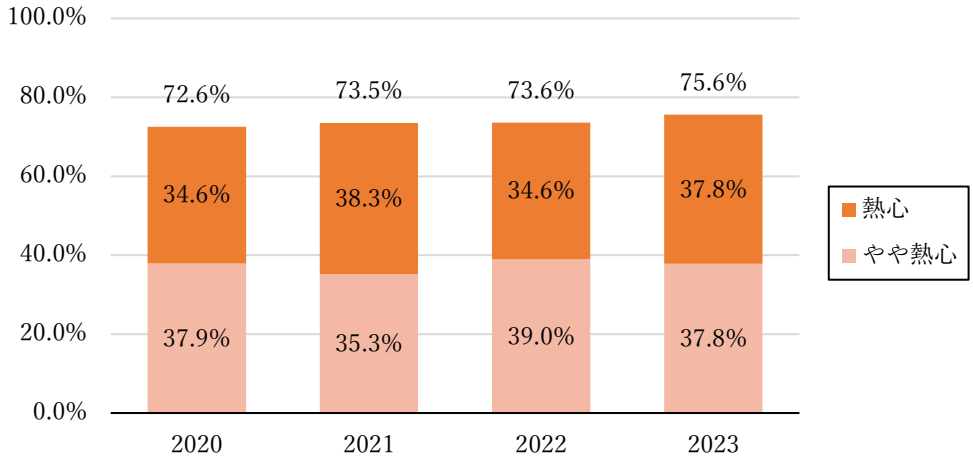


図２－14　在学時の活動の熱心さ＿卒業論文作成

・部活動、サークル活動

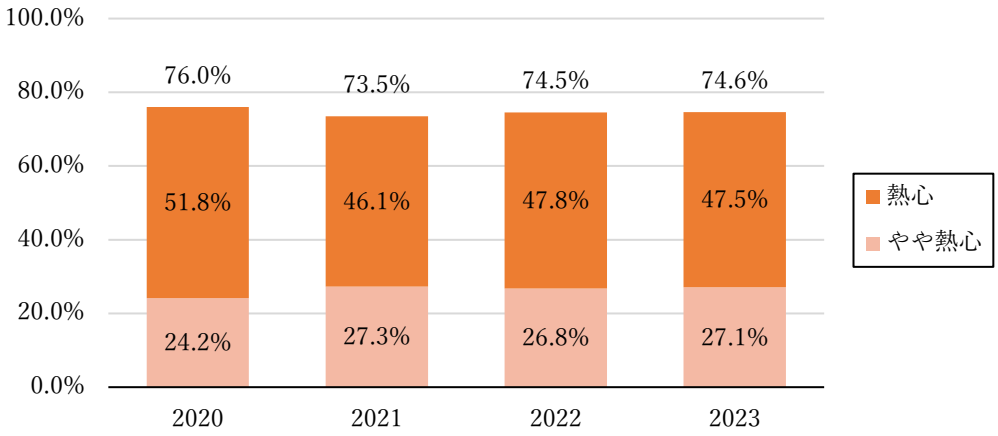


図２－15　在学時の活動の熱心さ＿部活動、サークル活動

・学内のアルバイト

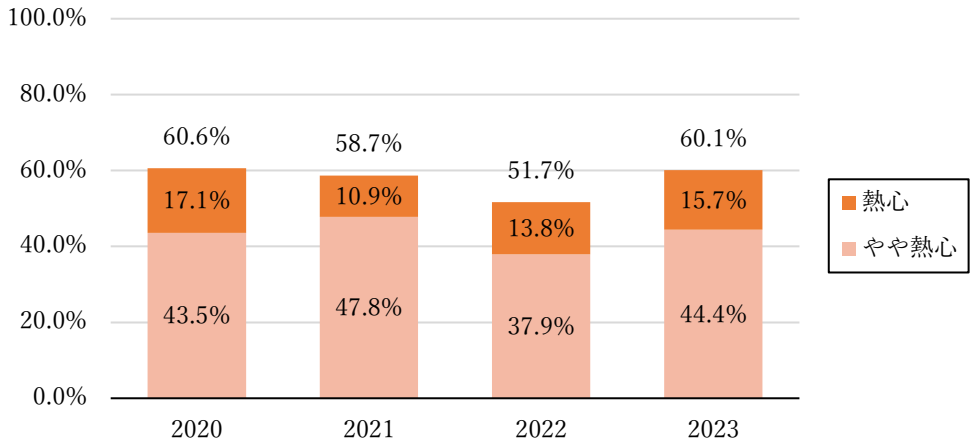


図２－16　在学時の活動の熱心さ＿学内のアルバイト

・学外のアルバイト・定職

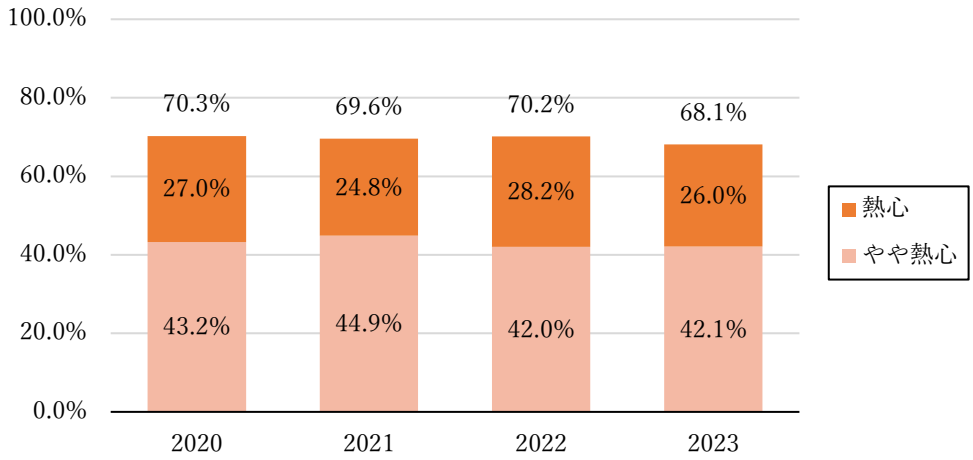


図２－17　在学時の活動の熱心さ＿学外のアルバイト・定職

・ボランティア

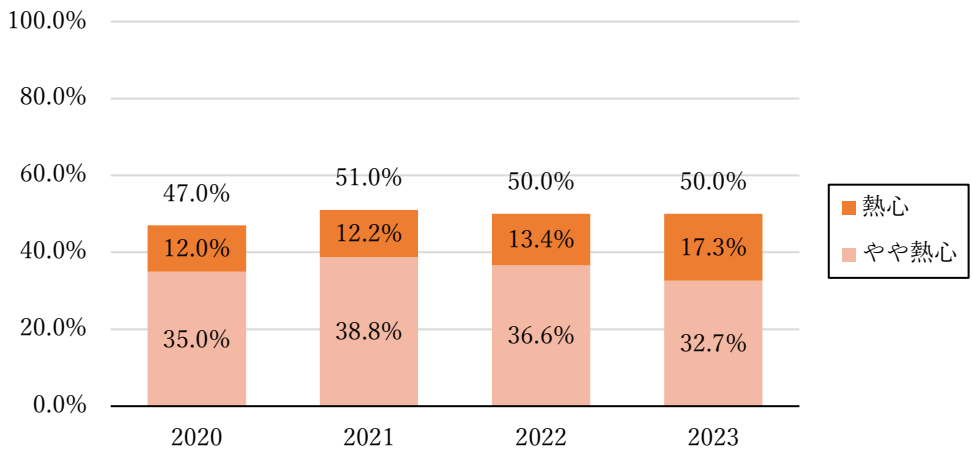


図２－18　在学時の活動の熱心さ＿ボランティア

・インターンシップ

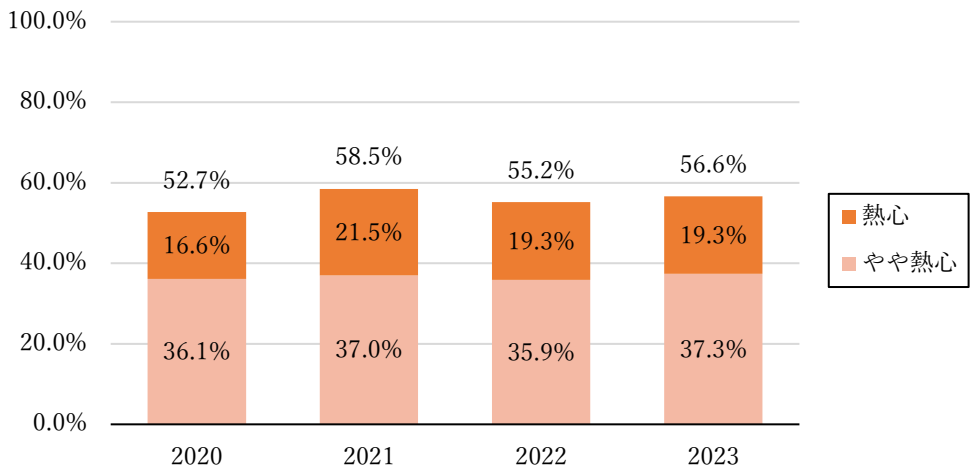


図２－19　在学時の活動の熱心さ＿インターンシップ

・早稲田大学以外での勉強

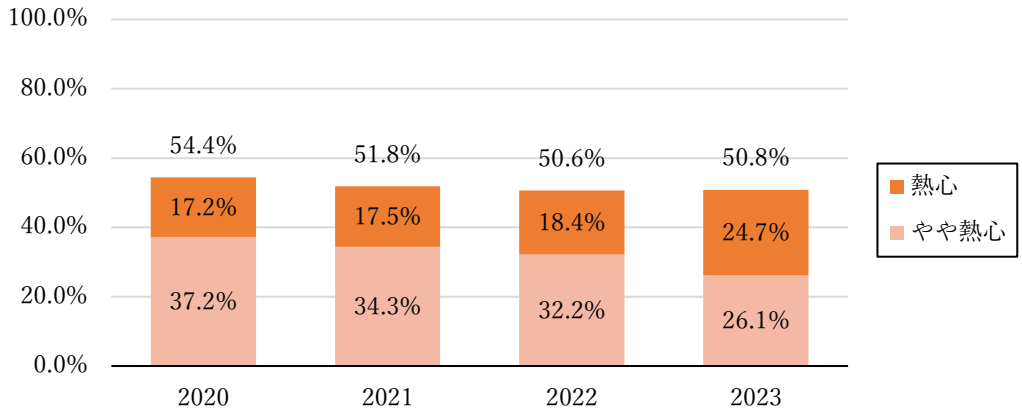


図２－20　在学時の活動の熱心さ＿早稲田大学以外での勉強

・資格取得や教職、国家試験勉強

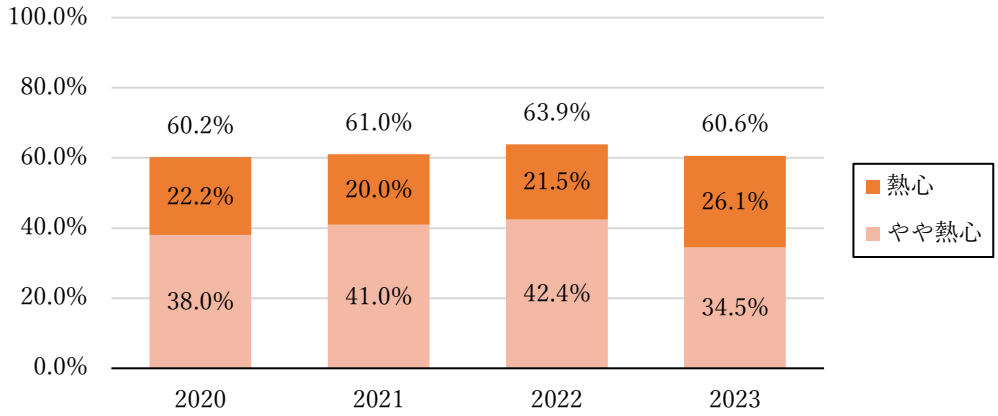


図２－21　在学時の活動の熱心さ＿資格取得や教職、国家試験勉強

・大学関係の活動（早稲田祭、100 キロハイクなど）

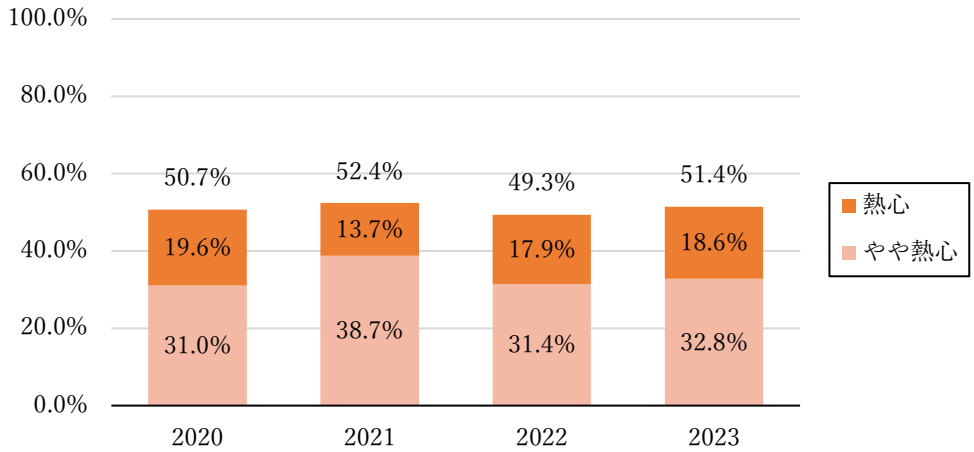


図２－22　在学時の活動の熱心さ＿大学関係の活動（早稲田祭、100 キロハイクなど）

・図書館を利用した

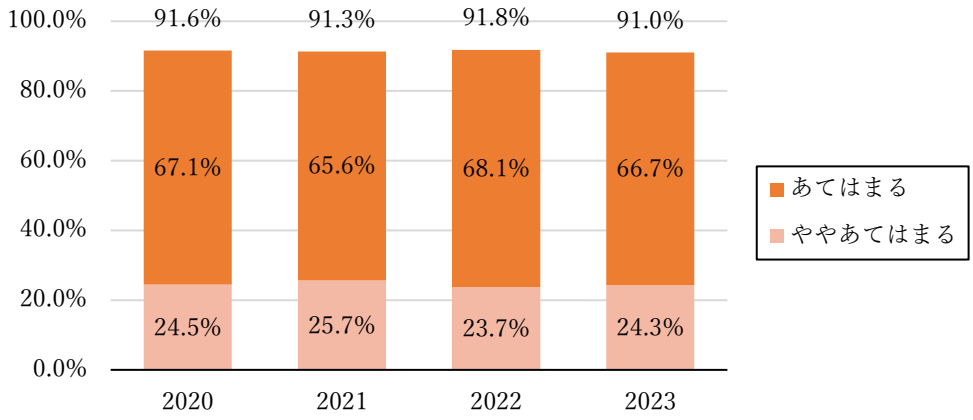


図２－23　在学時の活動＿図書館の利用

・読書（漫画や雑誌を除く）をした

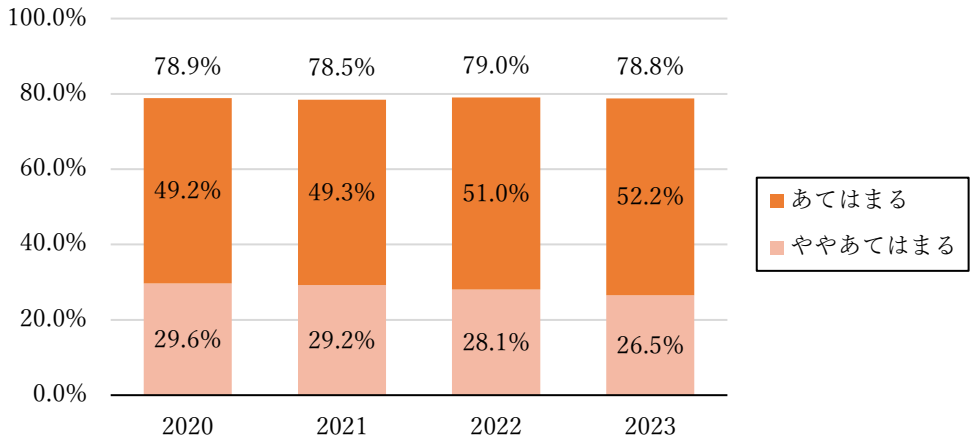


図２－24　在学時の活動＿読書

・自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表したりした

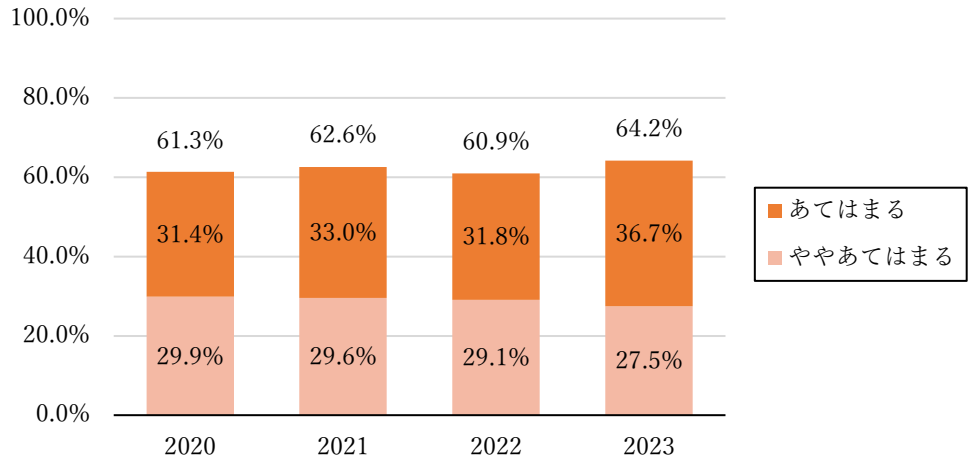


図２－25　在学時の活動＿研究・発表

・授業内容について、他の学生と議論した

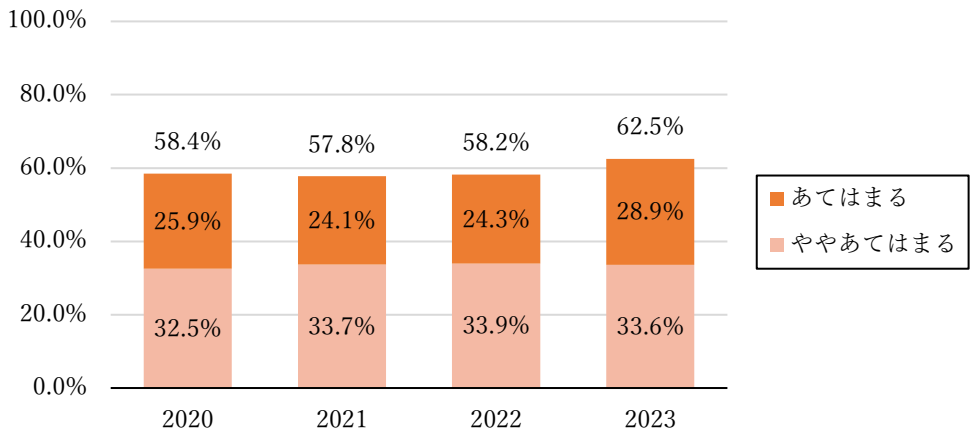


図２－26　在学時の活動＿授業内容についての学生との議論

・授業内容について、教員と議論した

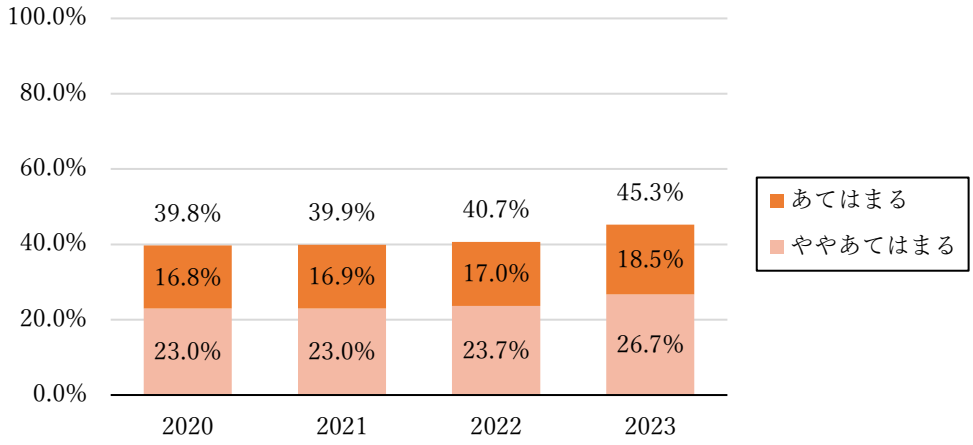


図２－27　在学時の活動＿授業内容についての教員との議論

・語学の授業以外で、外国語で議論や発表をした

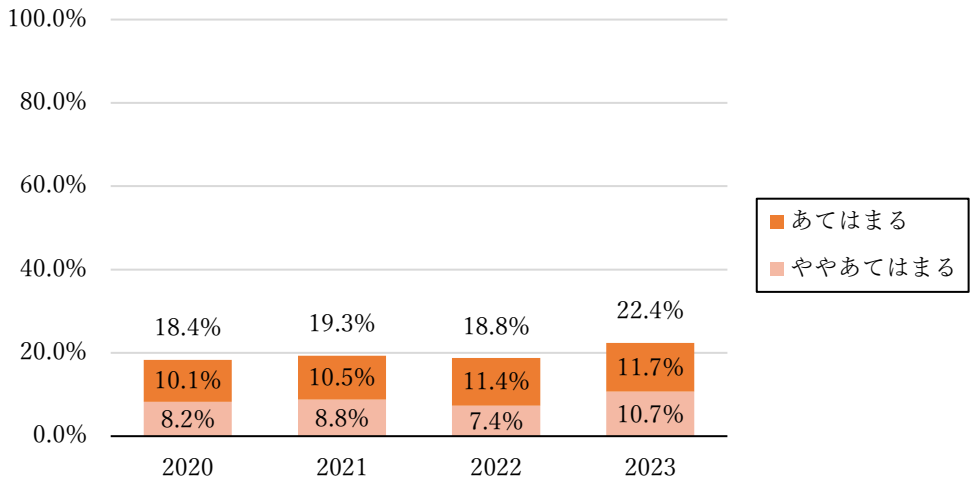


図２－28　在学時の活動＿外国語での議論や発表（語学の授業以外）

・留学生と一緒に学んだ

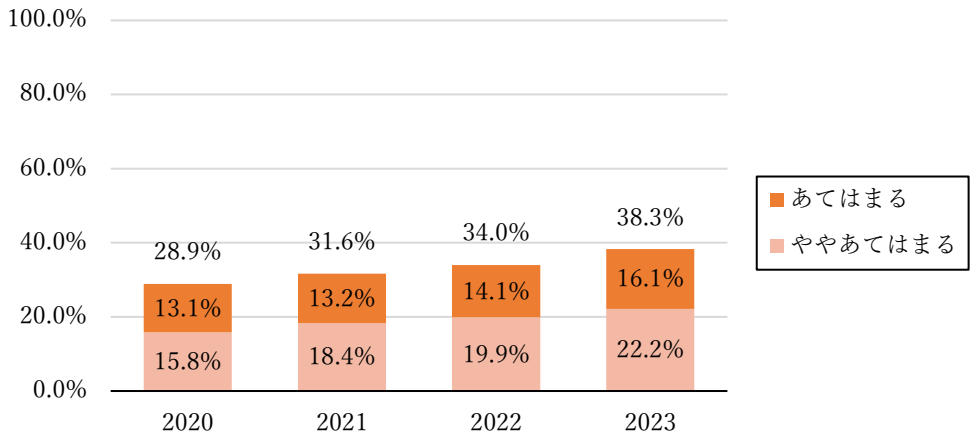


図２－29　在学時の活動＿留学生との学習

・授業の一環として大学外で学んだ（フィールドワーク等）

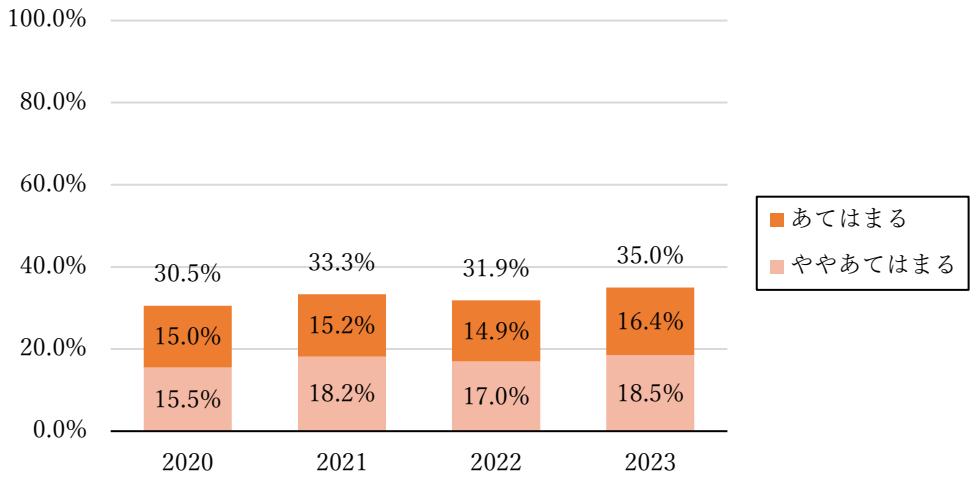


図２－30　在学時の活動＿授業の一環としての大学外での学び

・よい教員に巡り合えた

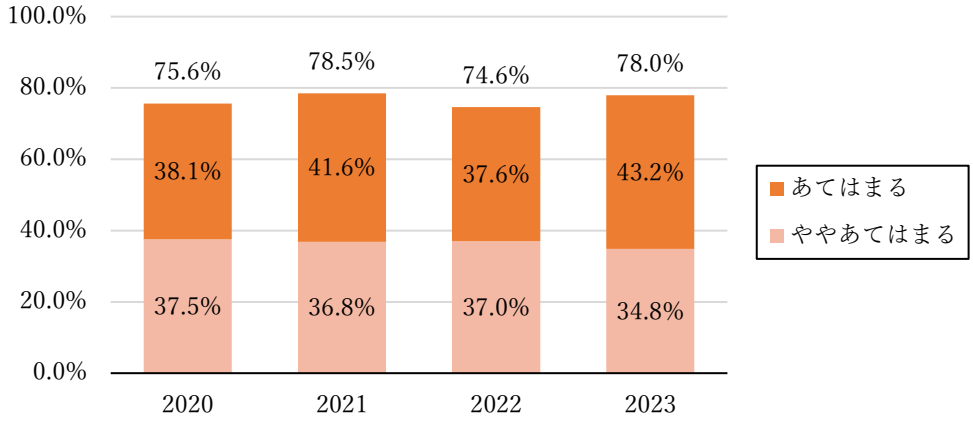


図２－31　在学時の活動＿よい教員との出会い

２－４．アウトプット

・既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる

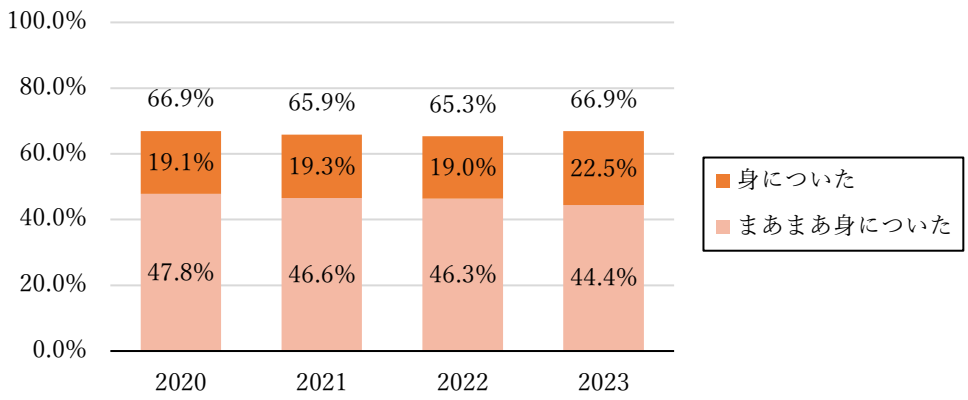


図２－32　学部で身につけたもの＿アイデア創出力

・物事を論理的に考えることができる

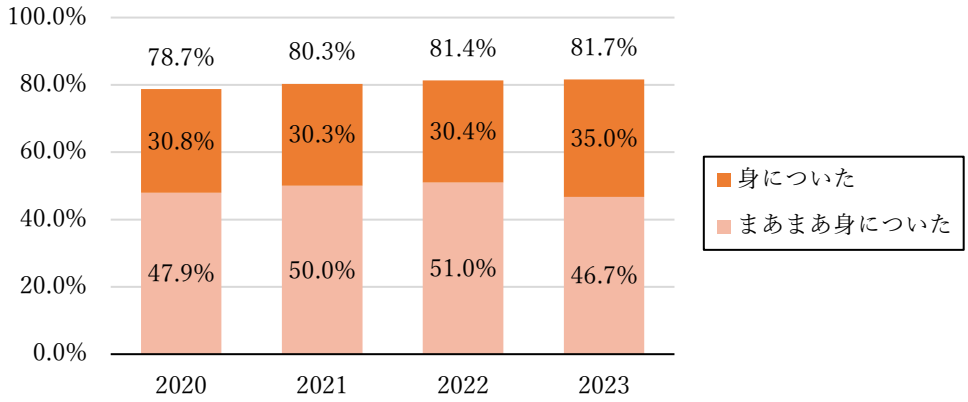


図２－33　学部で身につけたもの＿論理的思考力

・課題の解決方法を提案できる

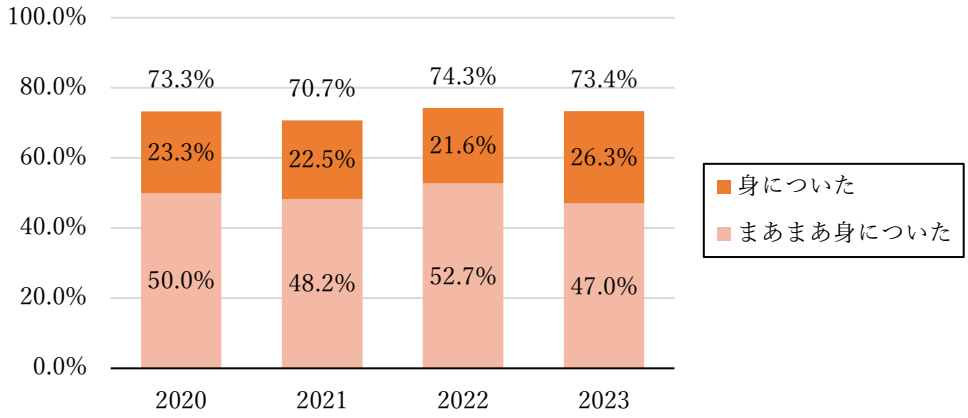


図２－34　学部で身につけたもの＿課題解決力

・自分の考えを分かりやすく表現できる

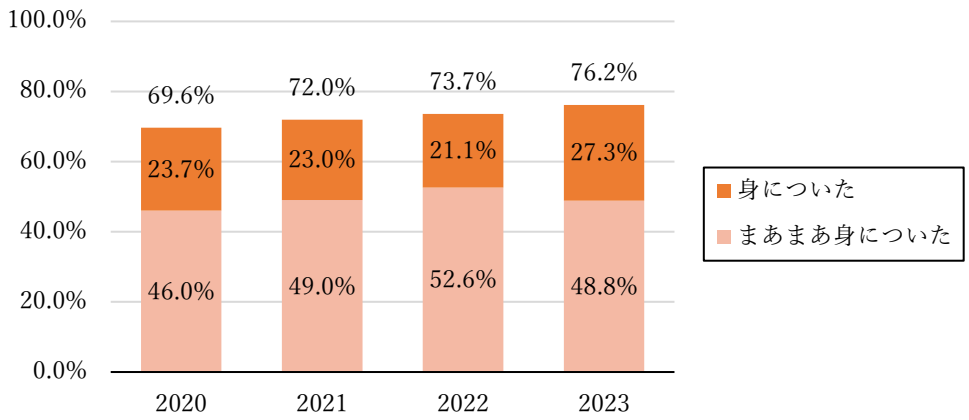


図２－35　学部で身につけたもの＿表現力・プレゼンテーション能力

・相手の状況や考え方を尊重できる

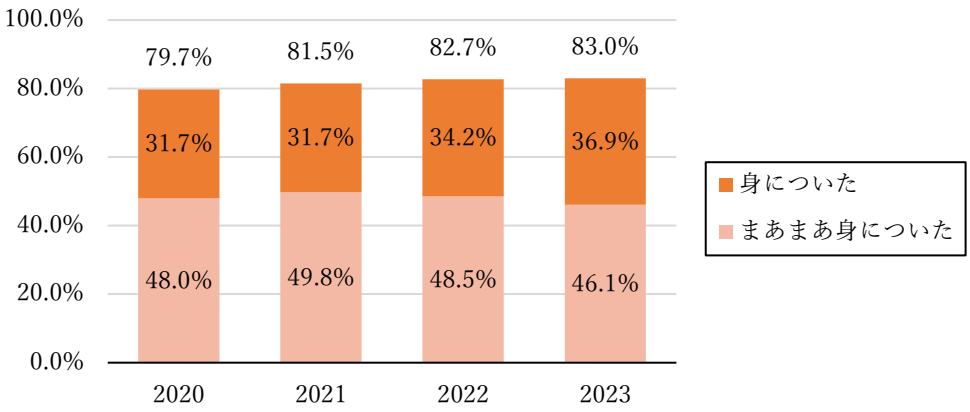


図２－36　学部で身につけたもの＿相手の状況や考え方を尊重できる

・物事を多面的に考えることができる

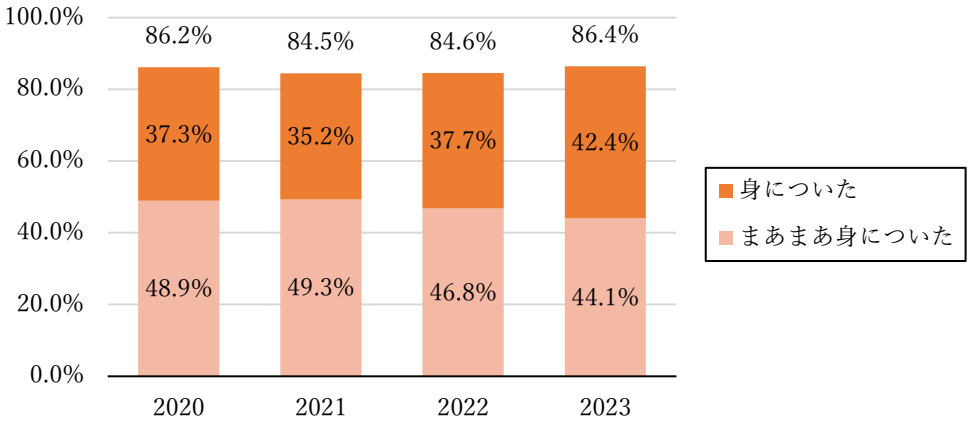


図２－37　学部で身につけたもの＿物事を多面的に考えることができる

・健全に批判することができる

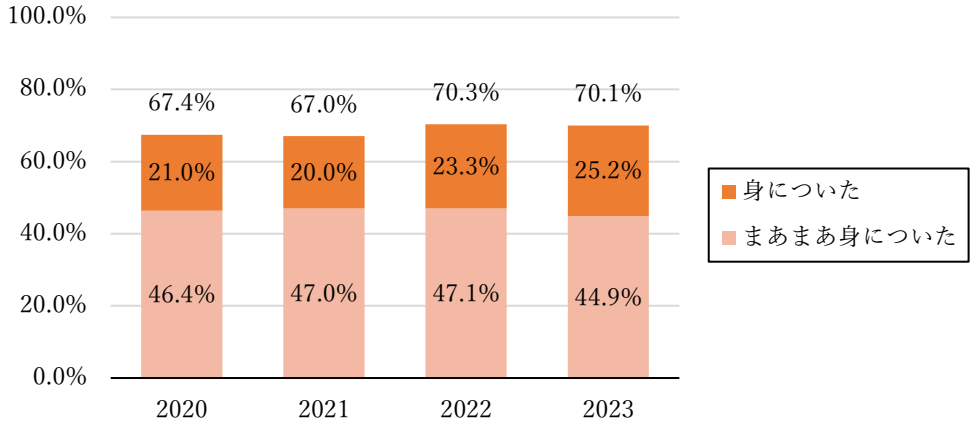


図２－38　学部で身につけたもの＿健全に批判することができる

・多様性を受け入れられる

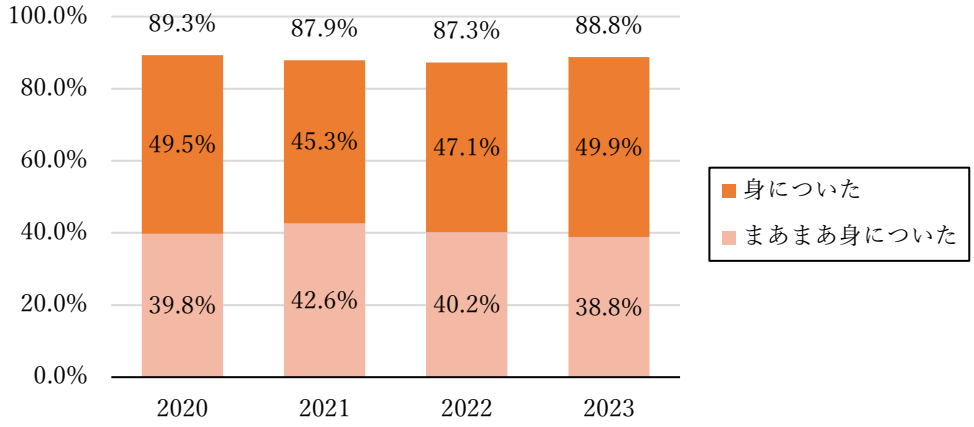


図２－39　学部で身につけたもの＿多様性を受け入れられる

・異文化を理解できる

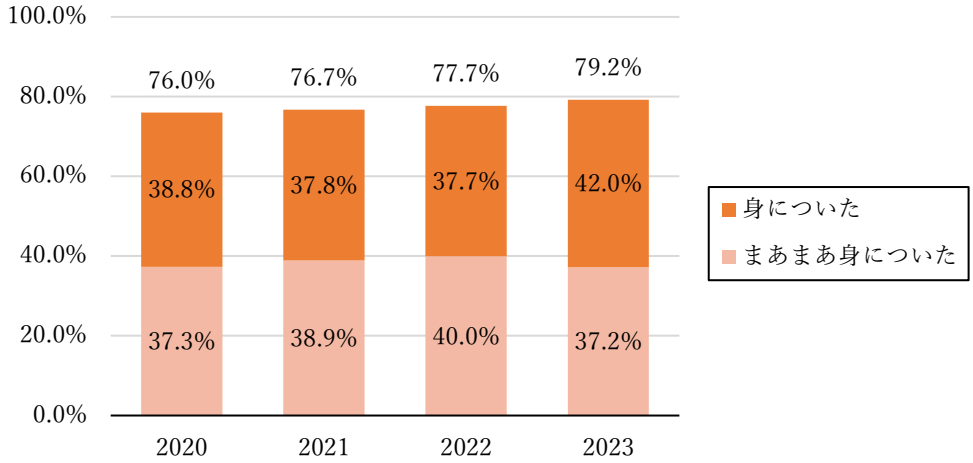


図２－40　学部で身につけたもの＿異文化を理解できる

・外国語を理解し、話せる

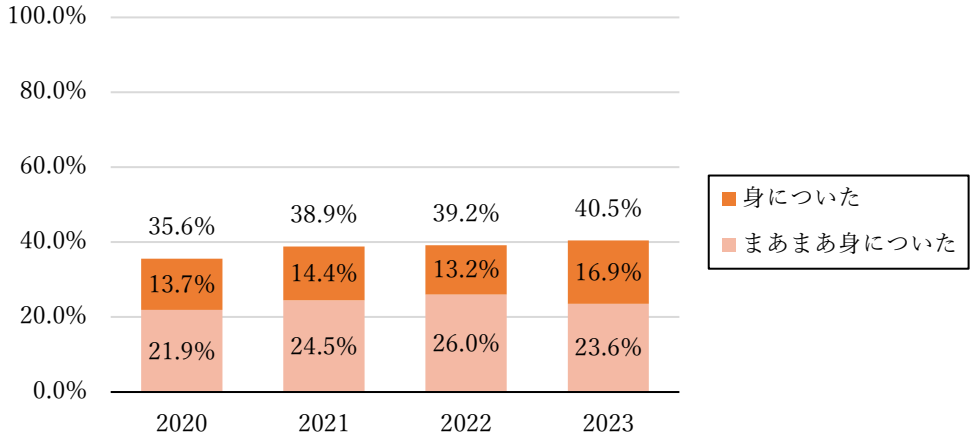


図２－41　学部で身につけたもの＿外国語を理解し、話せる

２－５．役立ち度（経験なしを除く）

・専門科目

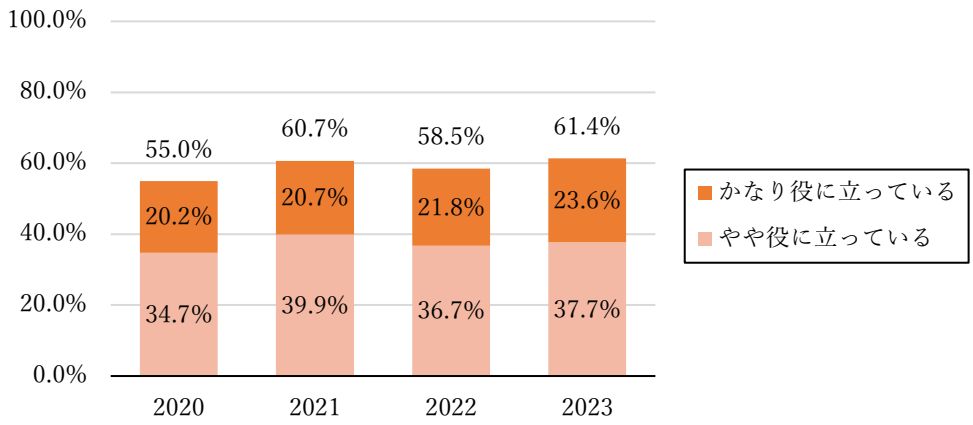


図２－42　教育経験の役立ち度＿専門科目

・一般教育科目

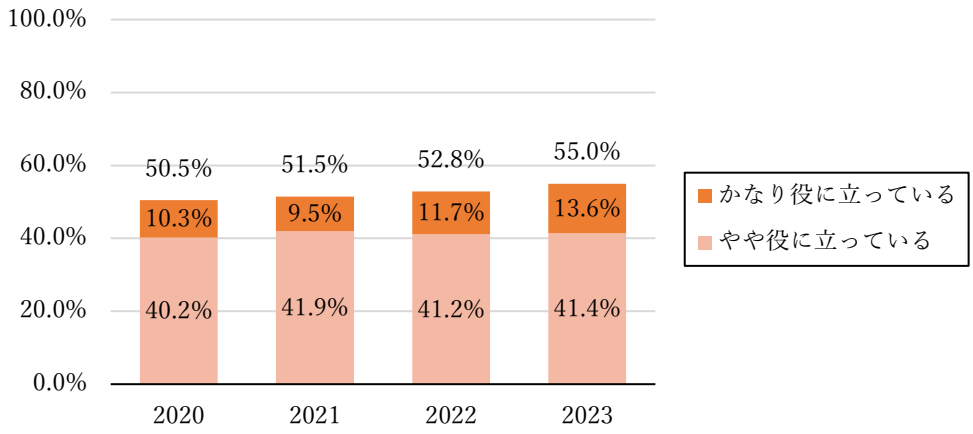


図２－43　教育経験の役立ち度＿一般教育科目

・ゼミ

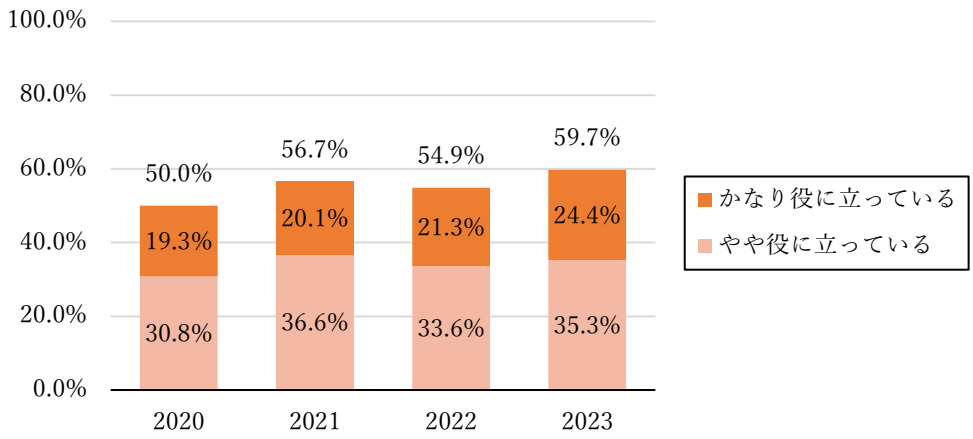


図２－44　教育経験の役立ち度＿ゼミ

・卒業論文作成

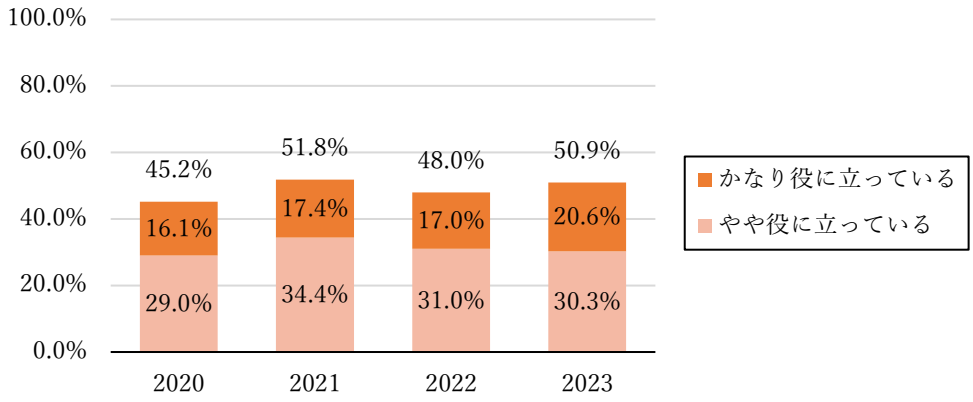


図２－45　教育経験の役立ち度＿卒業論文作成

・部活動、サークル活動

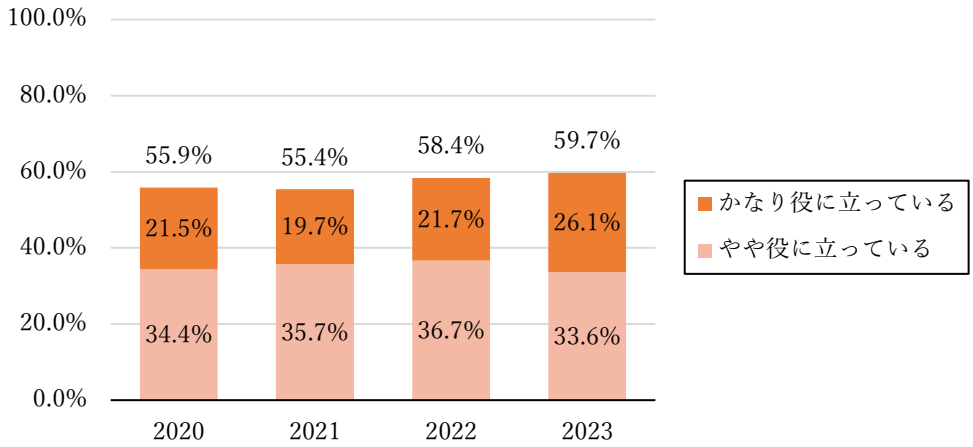


図２－46　大学時の経験の役立ち度＿部活動、サークル活動

・学内のアルバイト

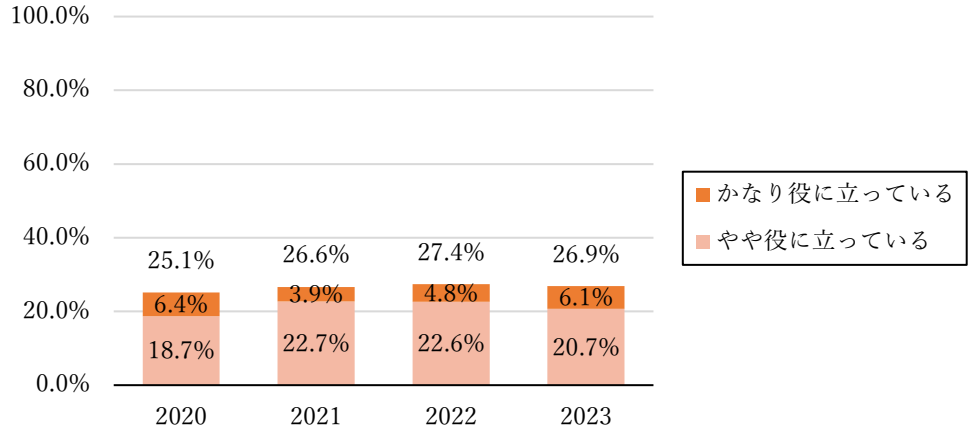


図２－47　大学時の経験の役立ち度＿学内のアルバイト

・学外のアルバイト

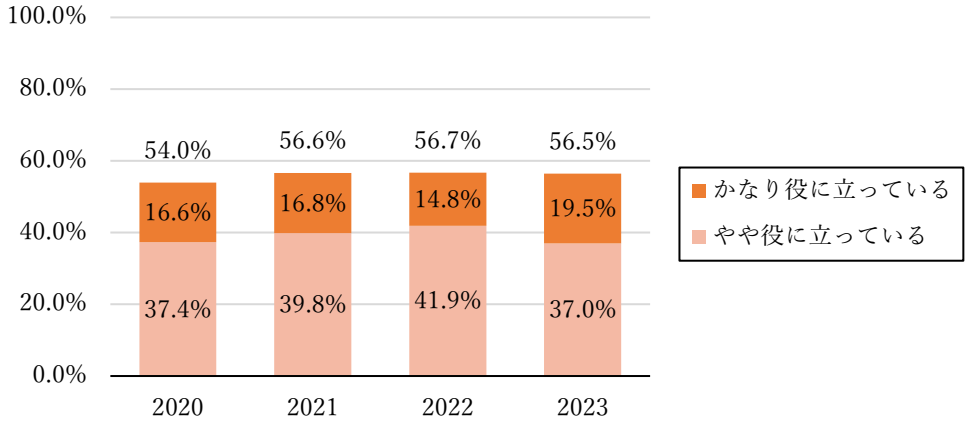


図２－48　大学時の経験の役立ち度__学外のアルバイト

・留学

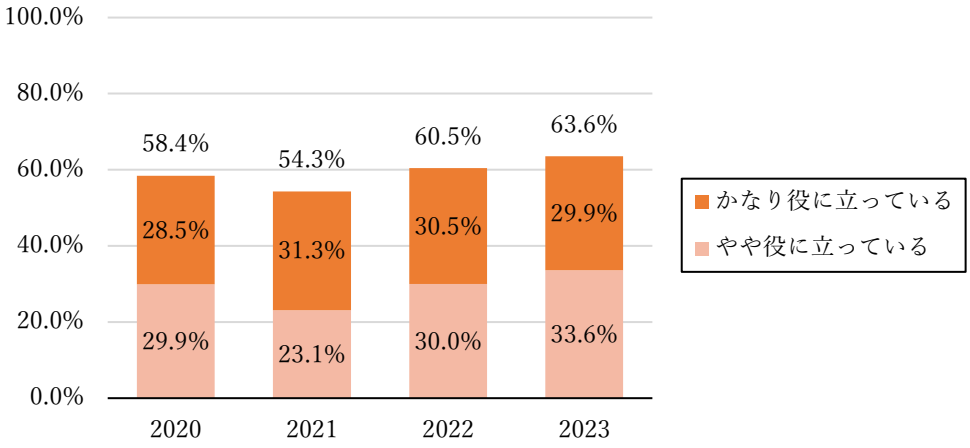


図２－49　大学時の経験の役立ち度__留学

・ボランティア

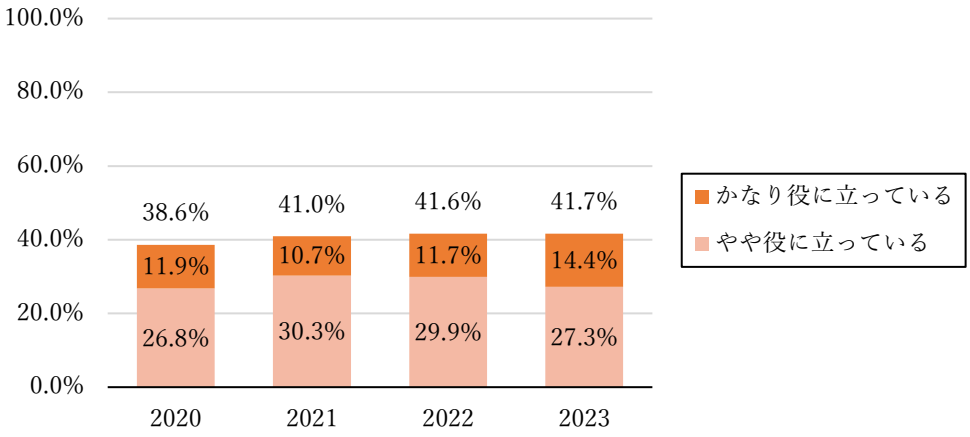


図２－50　大学時の経験の役立ち度__ボランティア

・インターンシップ

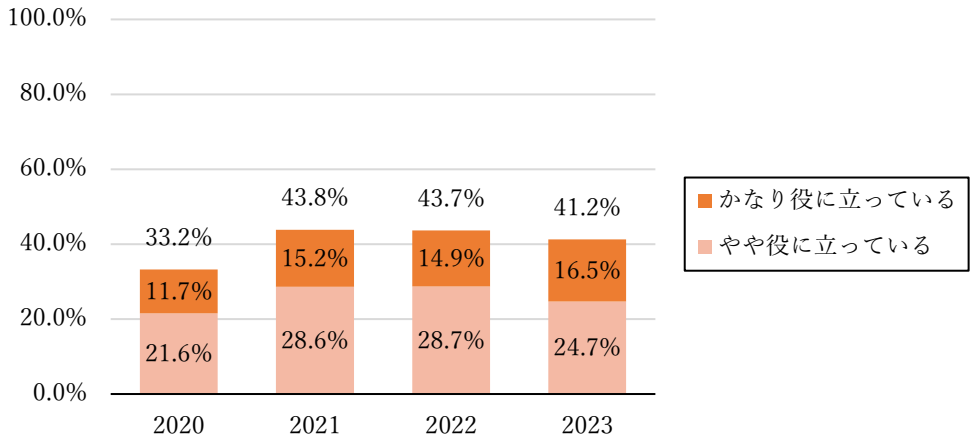


図２－51　大学時の経験の役立ち度＿インターンシップ

・早稲田大学以外での勉強

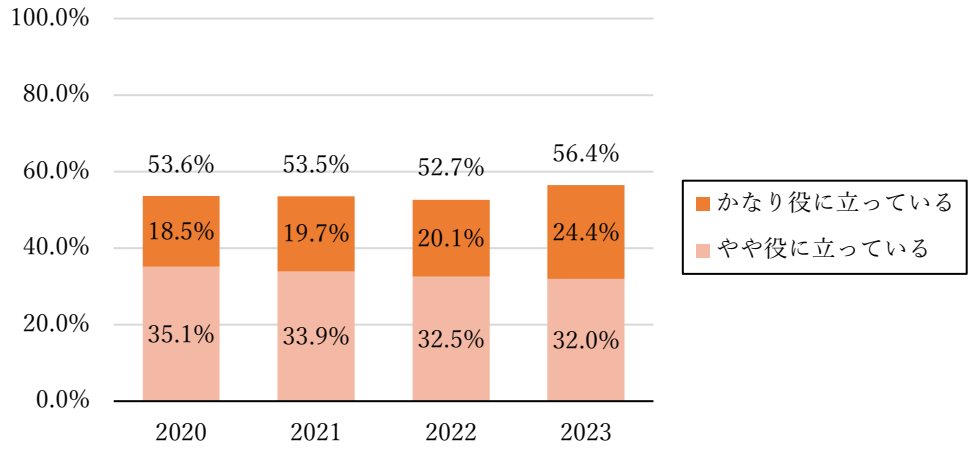


図２－52　大学時の経験の役立ち度＿早稲田大学以外での勉強

・資格取得や教職、国家試験勉強

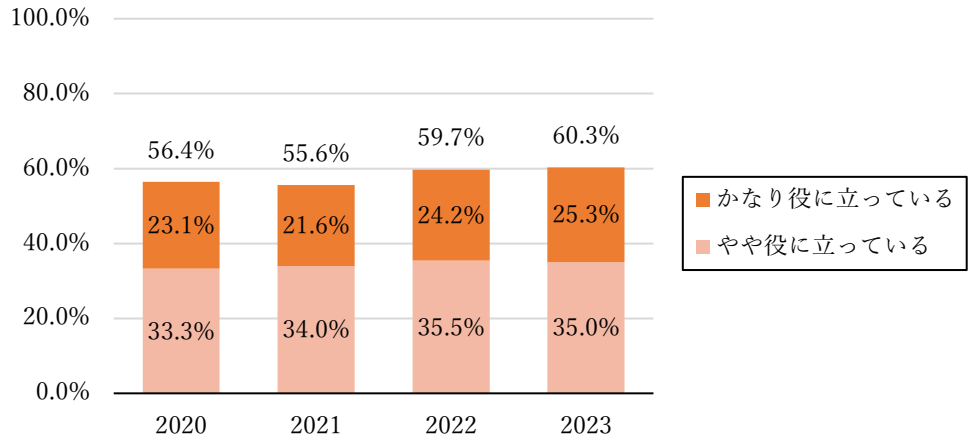


図２－53　大学時の経験の役立ち度＿資格取得や教職、国家試験勉強

第３章　離職関係の分析

３－１．本章の目的

本章では、卒業後の離職に関する分析を行う。本調査では離職に関する質問項目を設定しており、これらの項目と、入学時・在学時に関する質問項目や卒業後に関する質問項目との関連を探ることが本章の目的である。まず第２節で、離職関係の質問項目の整理をし、続いて第３節では入学・在学時に関する質問項目と離職関係の変数との関連を、第４節では卒業後に関する質問項目と離職関係の変数との関連を探り、第５節はまとめである。また本章における離職とは、退職や転職を含め、就職先を辞することとし、出向や転勤等などで異動している場合は、同じ会社・団体・組織とみなす。

３－２．勤続年数と離職時期の区分

卒業後の離職に関連して、本調査の回答者の年齢構成を確認する。年齢に関する質問項目に回答したのは、全回答者 $n = 1292$ のうち $n = 983$ であり、図３−１及び表３−１が年齢構成（2023 年１月１日時点）の分布である。調査対象者は 2010 年度に学部入学した 2014 年度卒業生であり、４年間で卒業した場合、2014 年３月卒業時に 22 歳、2023 年１月１日時点の年齢は 32 歳が最も多く、誕生日を迎えていない者は 31 歳、33 歳や 34 歳は浪人生や留年生と考えられ、それより年齢が上の回答者は、社会人入学などの理由が考えられる。本章の問題関心は、離職に関することなので、ある程度年齢が上の回答者は分析から省くことも検討できるが、年齢に関する質問には全体の 1/4 に当たる $n = 309$ が未回答であるため、年齢によるデータの除外は行わなかった。

図３−２及び表３−２は、「卒業後最初についたお仕事は、現在も継続されていますか。出向や転勤等などで異動している場合は、同じ会社・団体・組織としてください」という質問の回答であり、選択肢は「はい」「いいえ」の他に、「在学中に既に就職していており、現在も継続している」と「在学中に既に就職していたが、現在は継続していない」が設定された。本章では離職について分析をするため、このうち「はい」（１，$n = 571$）、「いいえ」（０，$n = 513$）のみをデータとして用い、それ以外の、在学時から働いていたという回答（$n = 29$）は分析から除外した。

図３−３及び表３−３は、最初の就職先の勤続年数であり、勤続年数 10 年という回答と 10 年以上という回答は、いずれも最初の就職先から離職していないとみなし、いずれも 10 年に含めて分析を進めることにした。また早期離職者に注目して分析をするために、離職の時期に基づいて区分を作成する。図３−３によると、本調査データの離職時期は、３年をピークにひとつめの山があり、６年で最も少なくなり、その後再度増加しているため、１年から５年で離職した者を、本データにおける早期離職者とみなし、「離職５年以内」（１，$n = 419$）とし、６年以上在職した者を「６年以上在職」（０，$n = 615$）とした（図３−４，表３−４）。また厚生労働省（2023 など）の調査では、３年以内での離職を早期離職の基準とする

ことが多いため[3]、１年から３年で離職した者を「離職３年以内」（１，$n=265$）とし、４年以上在職した者を「４年以上在職」（０，$n=769$）とした（図３−５，表３−５）。また労働政策研究・研修機構（2021）の調査では、１年で離職する者と３年以上で離職する者では、離職の理由が異なることが示されているため[4]、１年で離職した者を際立った早期離職者とみなし、「離職１年」（１，$n=80$）と区分し、２年以上在職した者を「２年以上在職」（０，$n=954$）とした（図３−６，表３−６）。

以降の分析では、離職の有無に関する「はい」（$n=571$）と「いいえ」（$n=513$）、５年以内の離職に関する「離職５年以内」（１，$n=419$）と「６年以上在職」（０，$n=615$）、３年以内の離職に関する「離職３年以内」（１，$n=265$）と「４年以上在職」（０，$n=769$）、１年での離職に関する「離職１年」（１，$n=80$）と「２年以上在職」（０，$n=954$）という区分を用いて、入学時や在学時の変数との関係の分析を実施する。本章の分析の関心は、入学時や在学時の変数は、離職の有無や、早期離職の有無の区分と関連するだろうか、である。

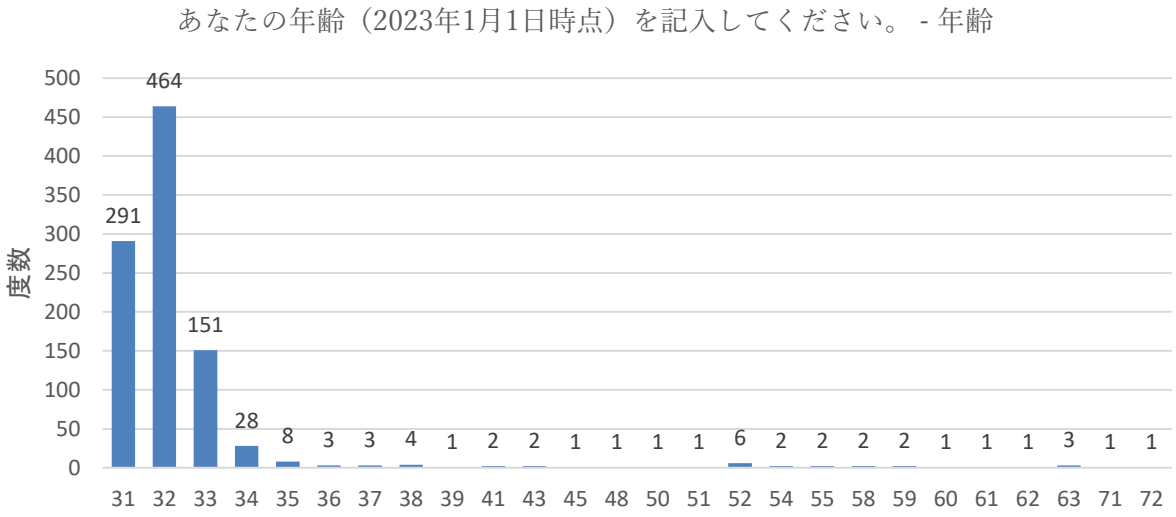


図３−１　回答者の年齢構成（2023 年１月１日時点）

[3] 厚生労働省（2023）『新規学卒就職者の離職状況（令和２年３月卒業者）』　https://www.mhlw.go.jp/content/11805001/001158687.pdf

[4] 労働政策研究・研修機構（2021）『若年者のキャリアと企業による雇用管理の現状「平成 30 年若年者雇用実態調査」より』　https://www.jil.go.jp/institute/siryo/2021/documents/236_05.pdf

表３−１　回答者の年齢構成（2023 年１月１日時点）

年齢	度数	有効パーセント	年齢	度数	有効パーセント
31	291	29.6%	52	6	0.6%
32	464	47.2%	54	2	0.2%
33	151	15.4%	55	2	0.2%
34	28	2.8%	58	2	0.2%
35	8	0.8%	59	2	0.2%
36	3	0.3%	60	1	0.1%
37	3	0.3%	61	1	0.1%
38	4	0.4%	62	1	0.1%
39	1	0.1%	63	3	0.3%
41	2	0.2%	71	1	0.1%
43	2	0.2%	72	1	0.1%
45	1	0.1%			
48	1	0.1%	合計	983	100%
50	1	0.1%	無回答	309	23.9%(全体の%)
51	1	0.1%	全体合計	1292	

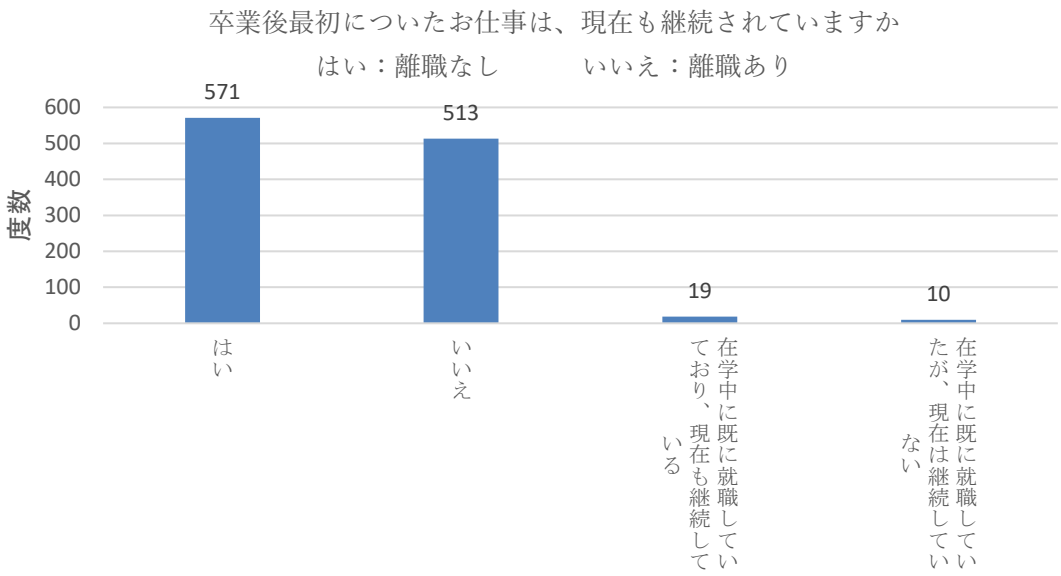


図３−２　離職の有無

表３−２　離職の有無

離職有無	度数	有効パーセント
はい（離職なし）	571	51.3%
いいえ（離職あり）	513	46.1%
在学中に既に就職していており、現在も継続している	19	1.7%
在学中に既に就職していたが、現在は継続していない	10	0.9%
合計	1113	100%
無回答	179	13.9%（全体の%）
合計	1292	

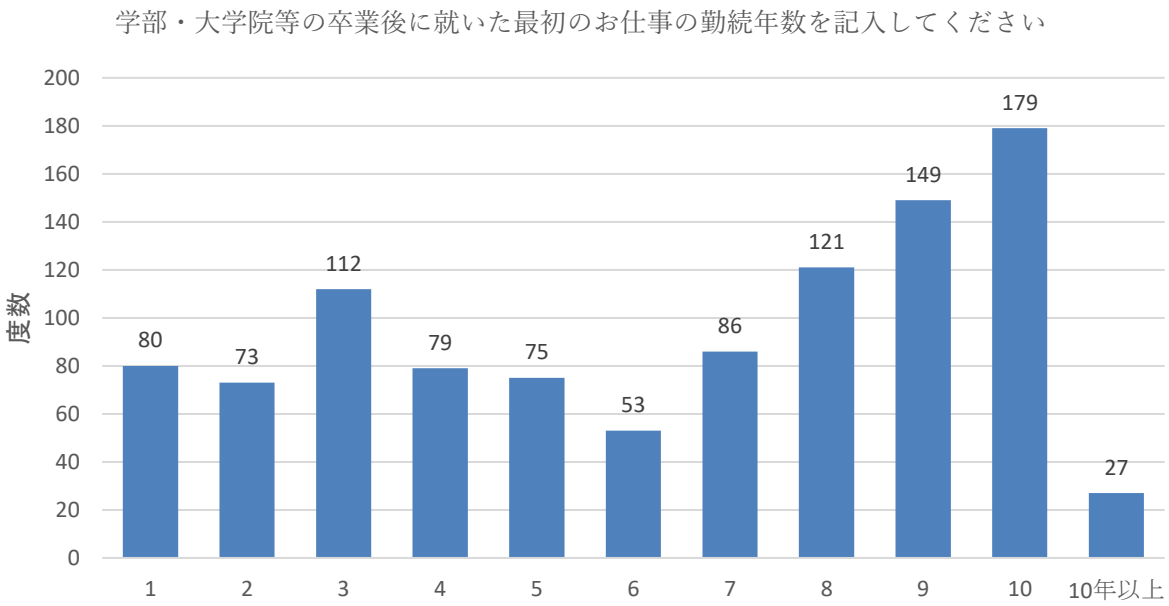


図３−３　最初の仕事の勤続年数

表３−３　最初の仕事の勤続年数

勤続年数	度数	有効パーセント	勤続年数	度数	有効パーセント
1	80	7.7%	8	121	11.7%
2	73	7.1%	9	149	14.4%
3	112	10.8%	10	179	17.3%
4	79	7.6%	10 年以上	27	2.6%
5	75	7.3%	合計	1034	100%
6	53	5.1%	無回答	258	20%（全体の%）
7	86	8.3%	全合計	1292	

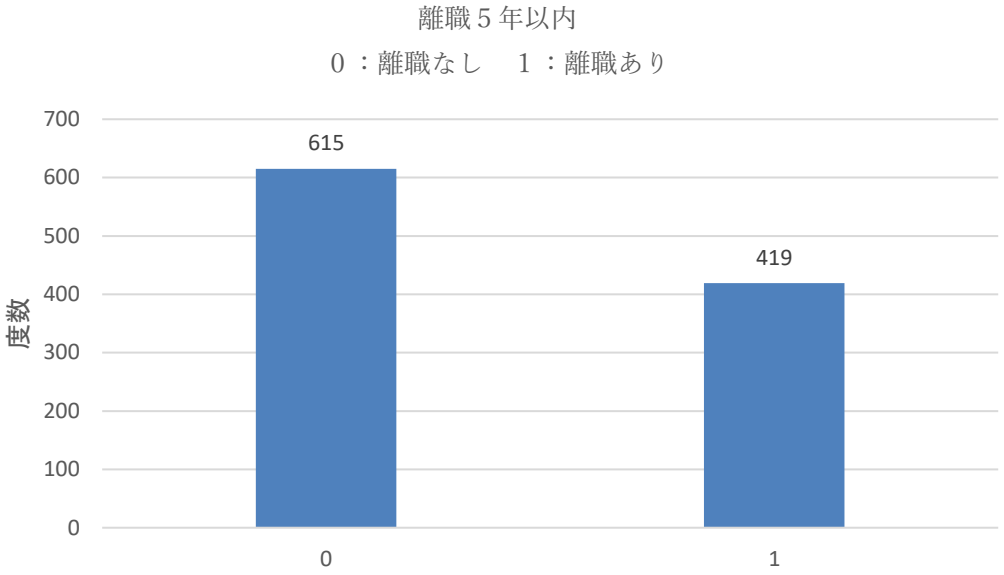


図３−４　離職５年以内 or ６年以上在職

表３−４　離職５年以内 or ６年以上在職

離職５年以内	度数	有効パーセント
0（離職なし）	615	59.5%
1（離職あり）	419	40.5%
合計	1034	100%
無回答	50	4.6%（全体の%）
全合計	1084	

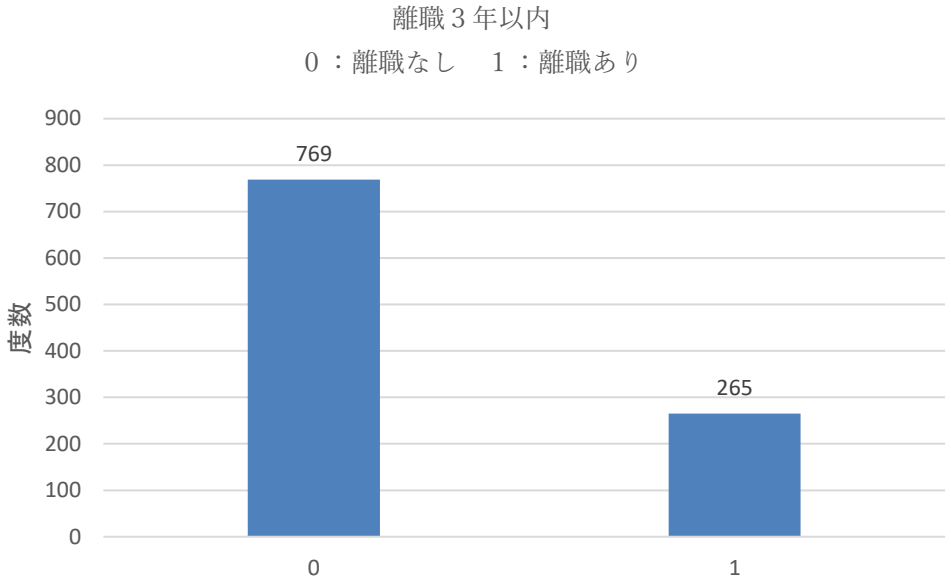


図３−５　離職３年以内 or ４年以上在職

表３−５　離職３年以内 or ４年以上在職

離職３年以内	度数	有効パーセント
0（離職なし）	769	74.4%
1（離職あり）	265	25.6%
合計	1034	100%
無回答	50	4.6%（全体の%）
全合計	1084	

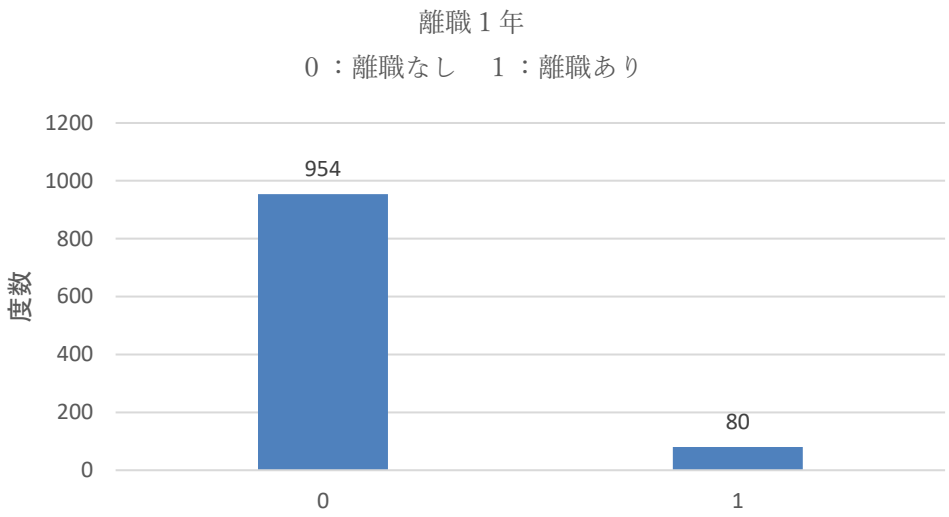


図３−６　離職１年 or ２年以上在職

表３−６　離職１年 or ２年以上在職

離職１年	度数	有効パーセント
０（離職なし）	954	92.3%
１（離職あり）	80	7.7%
合計	1034	100%
無回答	50	4.6%（全体の%）
全合計	1084	

３－３．離職と在学・入学時の項目との関係

①　大学・学部第一志望

離職や早期離職の有無の区分と、入学時や在学時に関する質問項目との関係をみていく。本章の関心は、離職の有無や離職時期の区分と、調査項目との関連の傾向を把握することであるため、離職の有無や離職時期区分ごとに、グラフにより図示することにする。

まずは入学時点であるが、図３−７は「早稲田大学は第一志望でしたか」、図３−８は「入学した学部は第一志望でしたか」であり、回答方法は「第一志望であった」「第一志望でなかった」である。図３−７によると、全体的に「第一志望でなかった」が 31%前後であるが、「離職１年あり」の区分のみ 38.8%と大きくなっている。

図３−８の学部第一志望では、「離職あり」と「離職なし」の区分では、「離職あり」（36.8%）の方が「離職なし」（30.0%）より「第一志望でない」割合が大きい。つまり全体的には離職している者の方が、離職していない者よりも、学部は第一志望でないことが多いようである。特に「離職１年」でこの傾向が顕著であり、学部が「第一志望でなかった」割合は、「離職１年なし」（32.8%）に比べて、「離職１年あり」（43.0%）は大きかった。

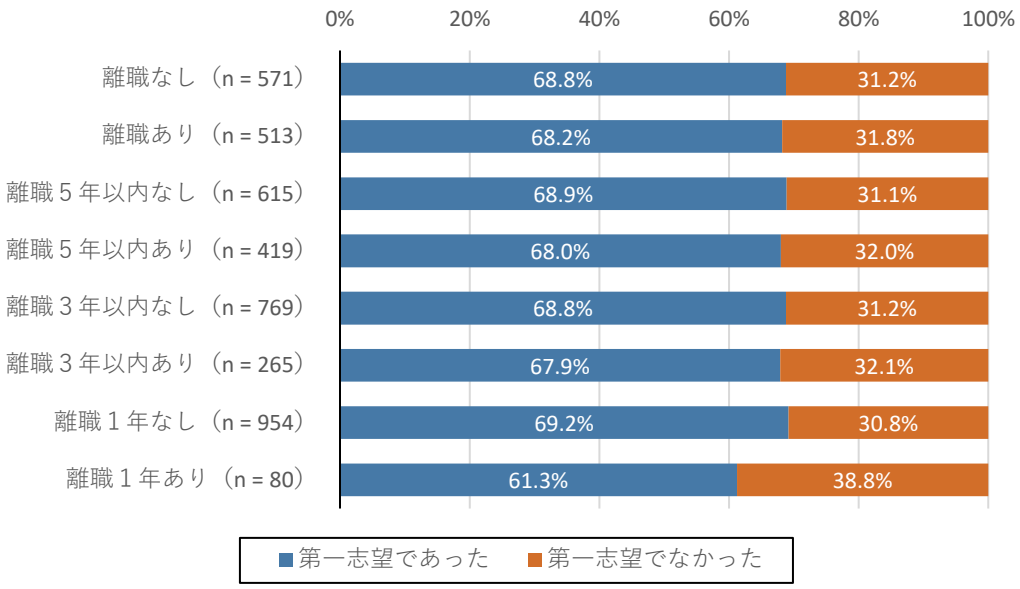


図３−７　早稲田大学は第一志望か

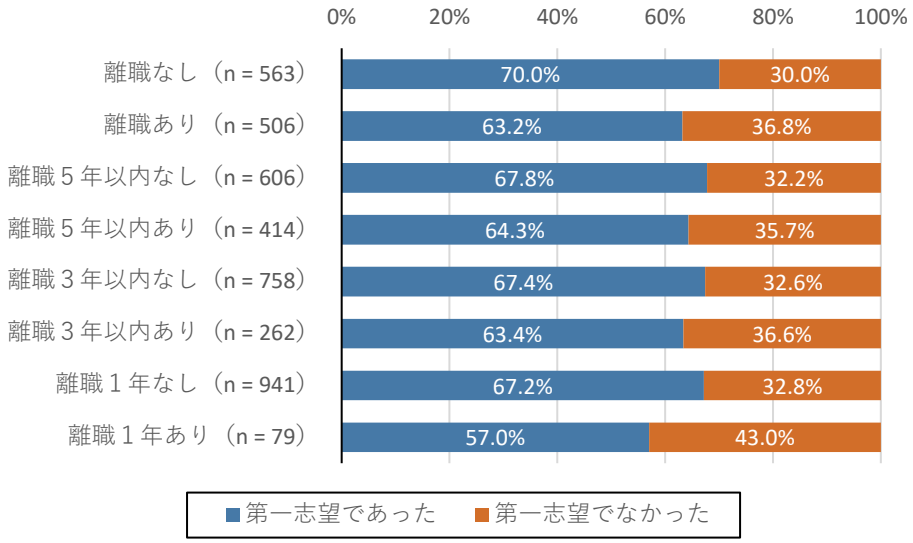


図３−８　入学した学部は第一志望か

② 早稲田大学の受験を決めた理由

離職や早期離職の有無の区分と、早稲田大学の受験を決めた理由との関連をみていく。図３−９は、「本学の受験を決めた理由として、次の項目はそれぞれどのくらいあてはまりますか。　−勉強したい分野がその学部にあったから」の回答であり、回答方法は「１．まったくあてはまらない」から「４．とてもあてはまる」の４件法であった。この受験理由に関して、「離職あり」（54.4%）の方が、「離職なし」（50.5%）よりも、「とてもあてはまる」の割合が大きかった。しかし１年で離職したものの場合は逆の傾向であり、「離職１年なし」（53.1%）の方が、「離職１年あり」（45.0%）よりも大きい割合であった。

図３−10 は、受験理由に関する「就職に有利であると思ったから」の回答であり、この受験理由に関して、「離職なし」（37.5%）の方が、「離職あり」（33.2%）よりも「とてもあてはまる」の割合が大きく、離職時期の区分によらず全体的な傾向であり、最も顕著なのは１年で離職した者の、「離職１年なし」（37.0%）と「離職１年あり」（27.5%）であった。

図３−11 は、受験理由に関する「将来の希望する職業分野を勉強できるから」の回答であり、この受験理由に関して、「離職なし」（30.8%）の方が、「離職あり」（25.4%）よりも「とてもあてはまる」の割合が大きく、離職時期の区分によらず全体的な傾向であった。図３−10 の「就職に有利であると思ったから」や、図３−11 の「将来の希望する職業分野を勉強できるから」という理由で受験を決めた者の方が、離職しない傾向にあるというのは、直感に合う傾向である。

図３−12 は、受験理由に関する「学力（偏差値など）が適当であったから」の回答であり、この受験理由に関して、「離職なし」（36.7%）と「離職あり」（37.3%）では、「とてもあてはまる」の割合に大きな違いはなかった。一方で離職時期の区分では、「離職３年以内なし」（35.9%）に比べて「離職３年以内あり」（40.7%）の方が割合が大きく、逆に「離職１年なし」（37.3%）よりも「離職１年あり」（35.0%）の方が大きく、離職時期の区分により異なる傾向がみられた。

図３−13 は、受験理由に関する「高校の先生や家族または塾などで勧められたから」の回答であり、この受験理由に関して、「離職なし」（18.0%）と「離職あり」（19.3%）では、「とてもあてはまる」の割合に大きな違いはみられないが、離職時期の区分では、「離職１年なし」（18.1%）よりも「離職１年あり」（23.8%）の方が割合が大きかった。

図３−14 は、受験理由に関する「伝統・校風が好きだから」の回答であり、この受験理由に関して、「離職なし」（35.5%）と「離職あり」（33.6%）では、「とてもあてはまる」の割合に大きな違いはみられず、また離職時期の区分でも同様の傾向であった。

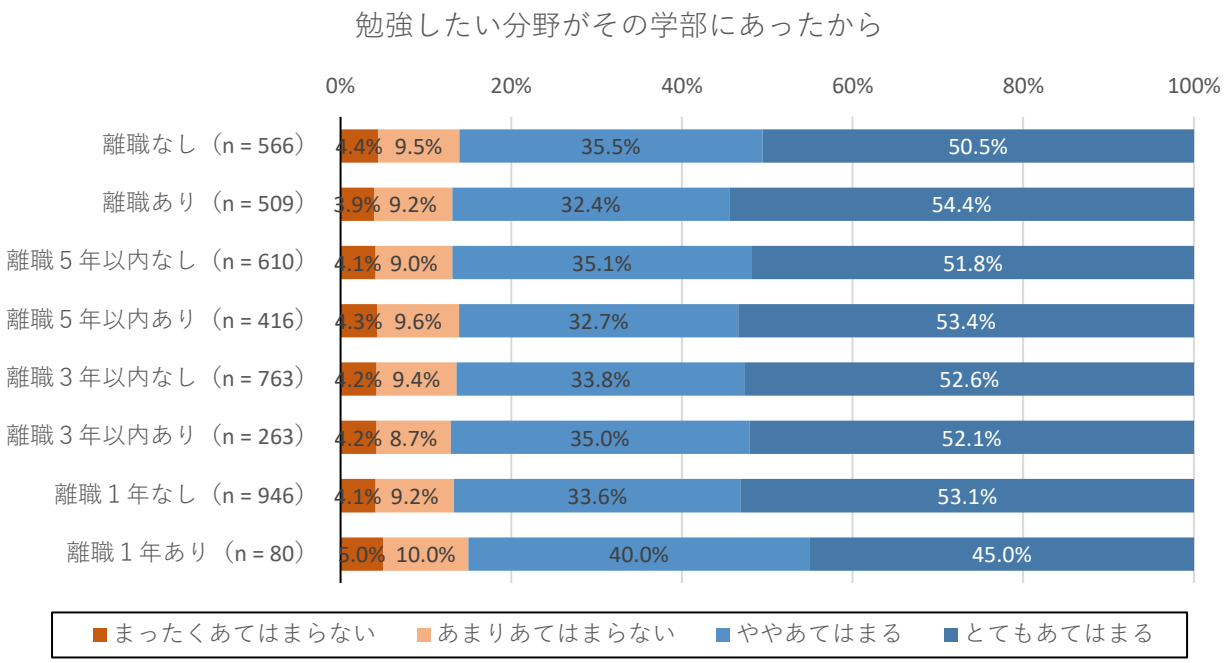


図３−９　受験理由：勉強したい分野がその学部にあったから

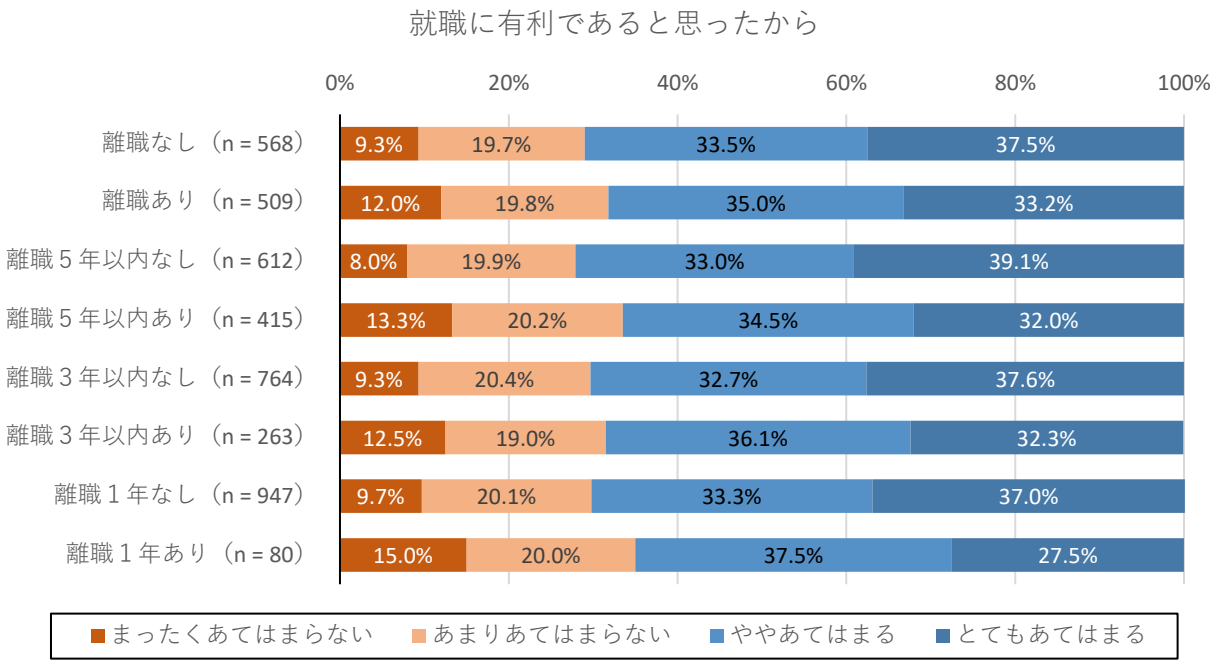


図３−10　受験理由：就職に有利であると思ったから

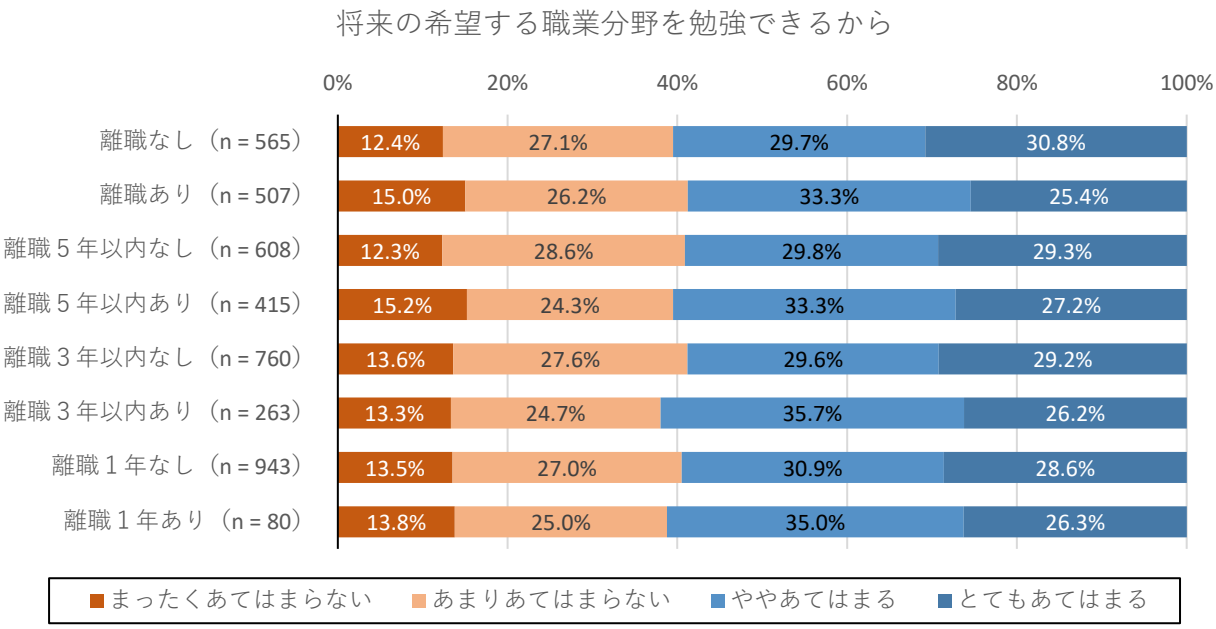


図３−11　受験理由：将来の希望する職業分野を勉強できるから

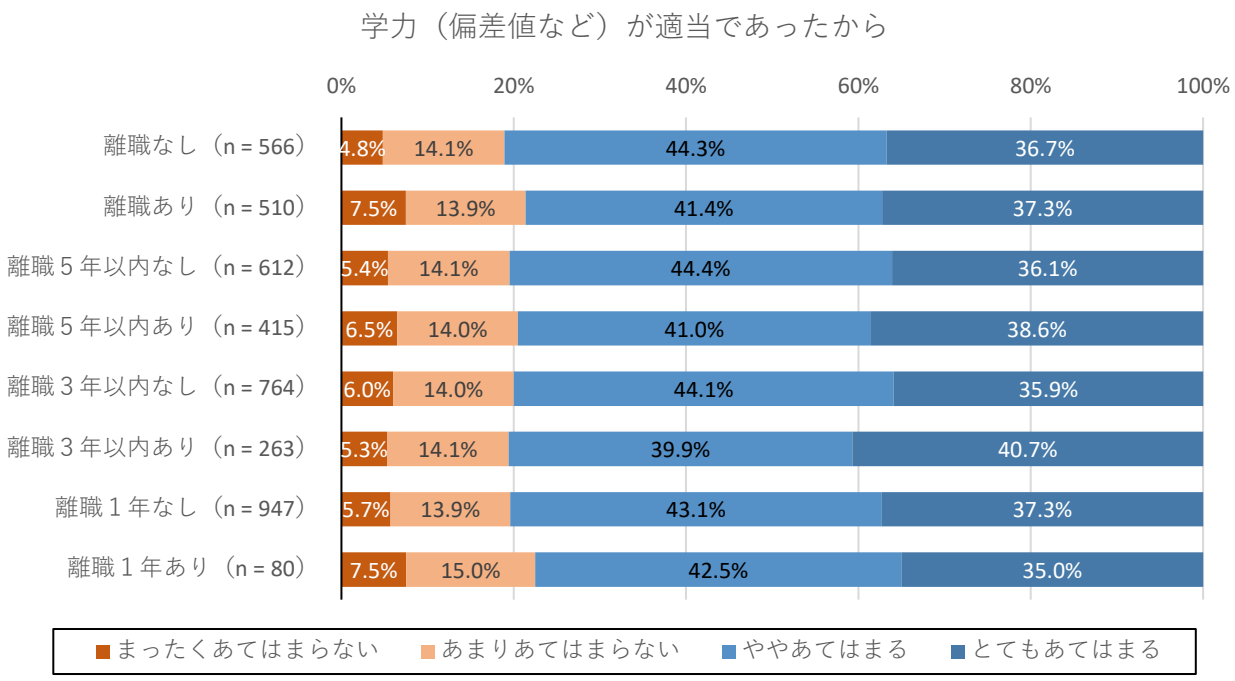


図３−12　受験理由：学力（偏差値など）が適当であったから

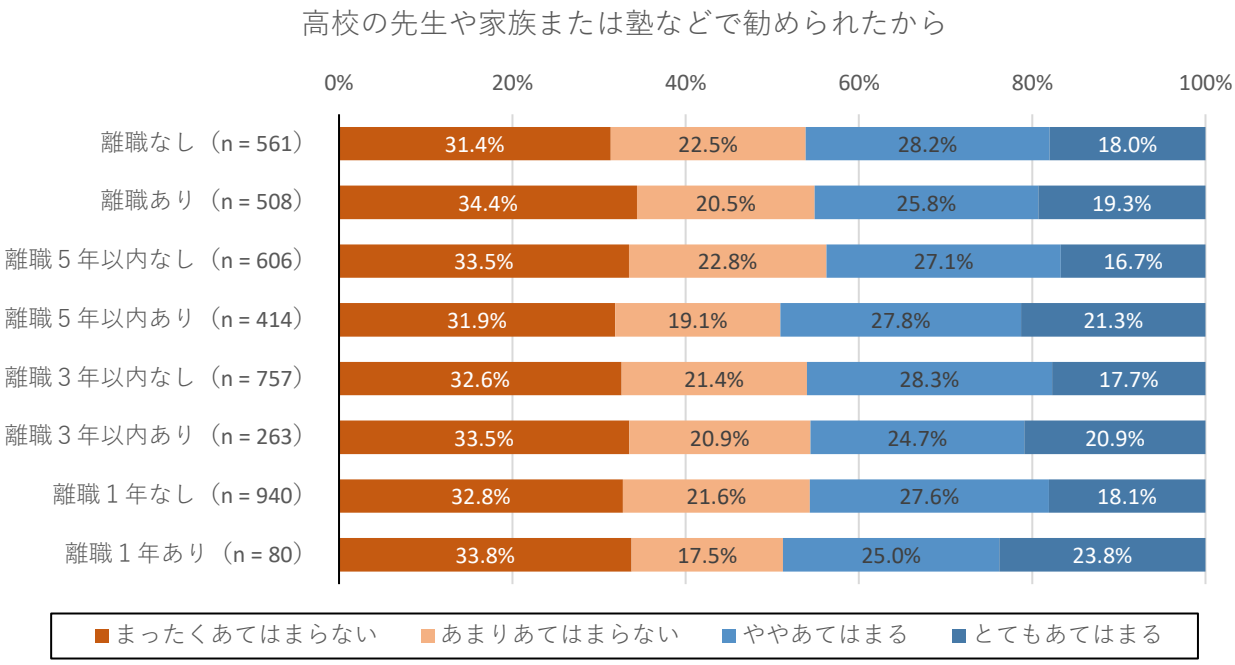


図３−13　受験理由：高校の先生や家族または塾などで勧められたから

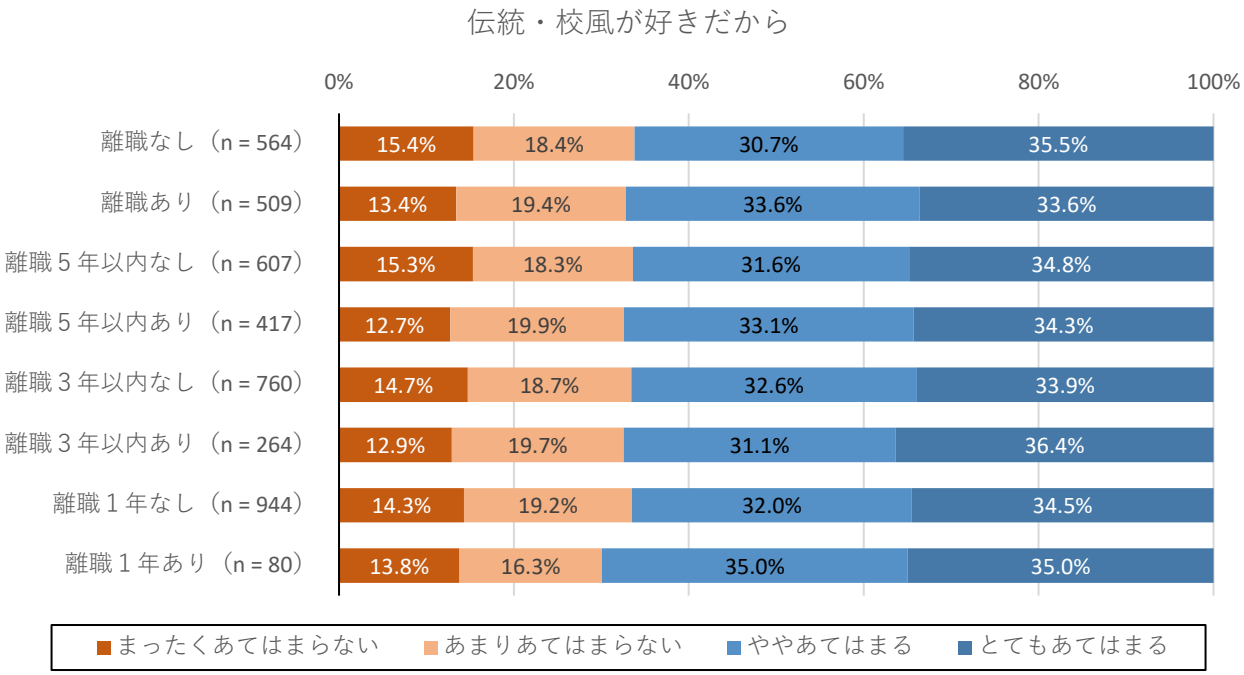


図３−14　受験理由：伝統・校風が好きだから

③ 大学入学前の成績や学習行動

離職や早期離職の有無の区分と、大学入学前の成績や学習行動との関連をみていく。図３−15 は、「中学３年の時と高校３年の時の成績は、あなたの通っていた学校のなかでどのあたりでしたか。 − 中学３年の時」の回答であり、回答方法は「１．下のほう」から「５．上のほう」の５件法であった。中学の成績に関しては、「離職なし」（61.1%）の方が、「離職あり」（54.8%）よりも、成績が「上の方」の割合が大きかった。しかし１年で離職したものの場合は逆の傾向であり、「離職１年あり」（61.3%）の方が、「離職１年なし」（57.8%）よりも大きい割合であった。

図３−16 は成績に関する、「高校３年の時の成績」の回答であり、「離職なし」（36.1%）の方が、「離職あり」（31.4%）よりも、成績が「上の方」の割合が大きかった。しかし１年で離職したものの場合は逆の傾向であり、「離職１年あり」（38.8%）の方が、「離職１年なし」（33.8%）よりも大きい割合であった。図３−15 や図３−16 から、１年で早期離職する者の方が、中学や高校で良い成績だったようである。

次の図３−17 から図３−19 の３つのグラフは、「あなたが高校生の頃、次のようなことは、どのくらいあてはまりましたか」という、高校時代の学習行動に関する質問であり、離職した者としなかった者で、顕著な傾向がみられた。回答方法は「１．少なかった」から「４．多かった」の４件法であった。図３−17 は、高校の学習行動の「少し体調が悪かったり、休んでよい理由があっても、できるだけ毎日学校に通うよう努力した」の回答であり、「離職なし」（51.6%）に比べて「離職あり」（47.5%）が「多かった」の割合が小さかった。またこの傾向は離職時期の区分によらず全体的な傾向であり、特に「離職１年なし」（50.1%）と「離職１年あり」（36.3%）では、この傾向が顕著であった。

図３−18 は、高校の学習行動の「学校で、自分が好きではない勉強にも全力で取り組んだ」の回答であり、「離職なし」（28.4%）に比べて「離職あり」（23.5%）が「多かった」の割合が小さかった。またこの傾向は離職時期の区分によらず全体的な傾向であり、特に「離職１年なし」（27.6%）と「離職１年あり」（12.5%）では、この傾向が顕著であった。

図３−19 は、高校の学習行動の「なかなか成果が出なくてもあきらめずに、しっかり勉強を続けた」の回答であり、「離職なし」（37.9%）に比べて「離職あり」（34.0%）が「多かった」の割合が小さかった。またこの傾向は離職時期の区分によらず全体的な傾向であり、特に「離職３年以内なし」（38.3%）と「離職３年以内あり」（30.6%）では、この傾向が顕著であった。これらの高校の学習行動では、粘り強くやるべきことに取り組むという行動に関して、離職した者の方がその傾向が少なく、特に１年で離職した者に顕著であり、離職行動との関連が直感に合っているといえる。

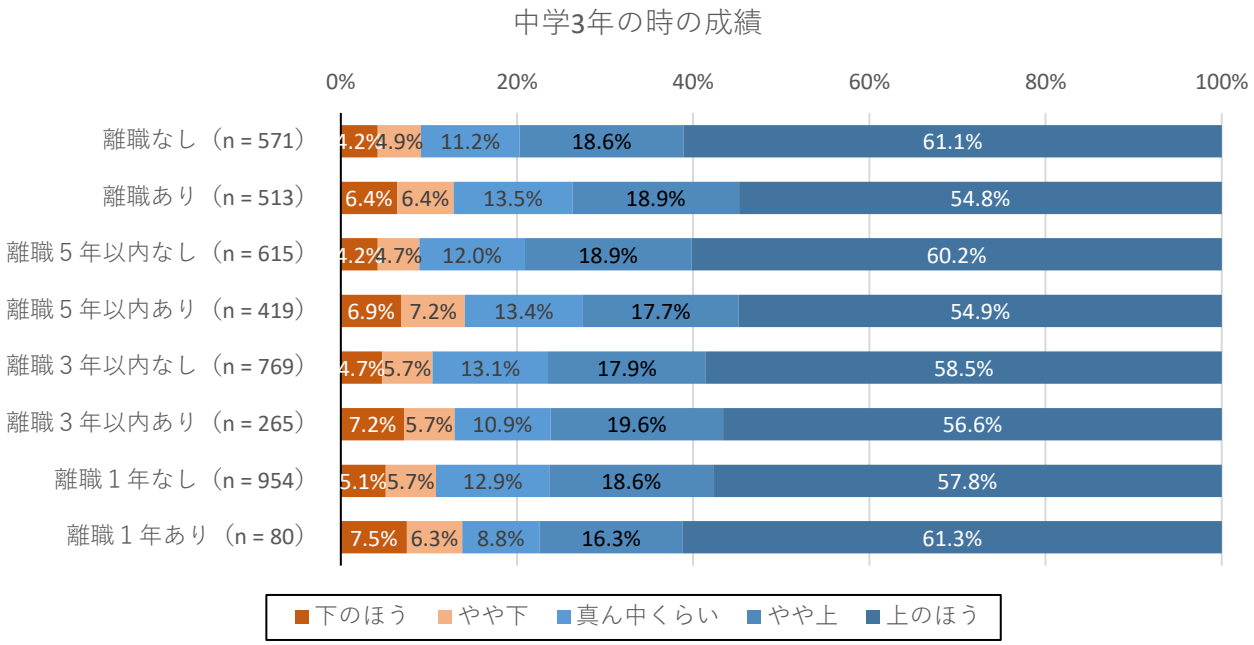


図３−15　中学３年の時の成績

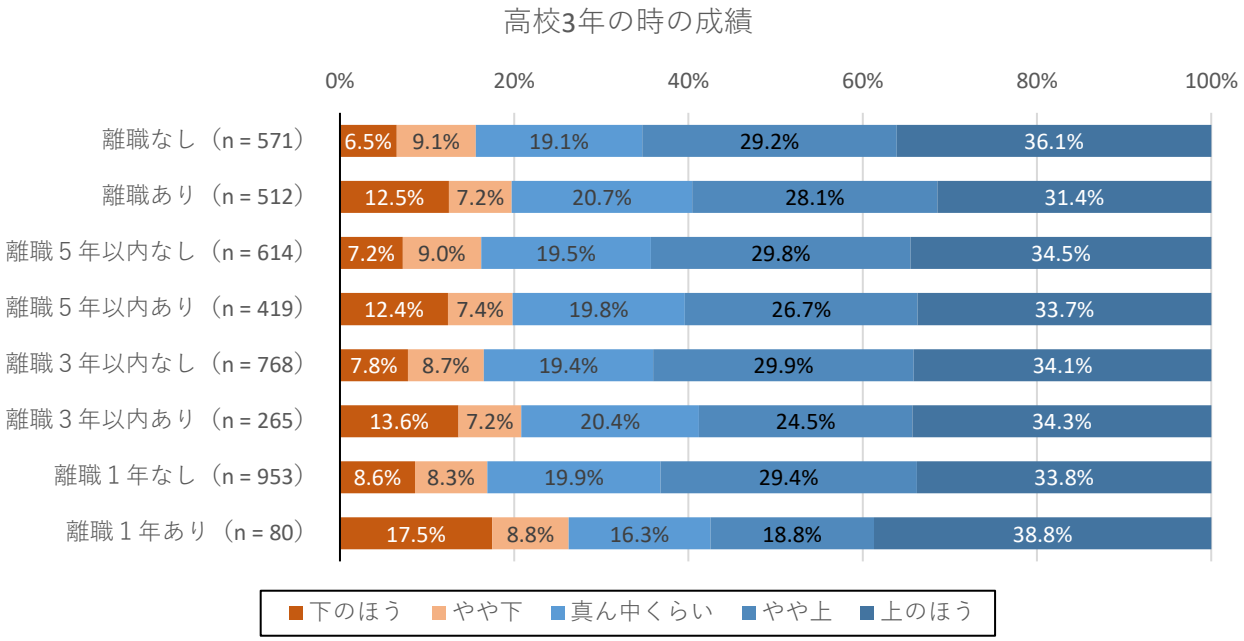


図３−16　高校３年の時の成績

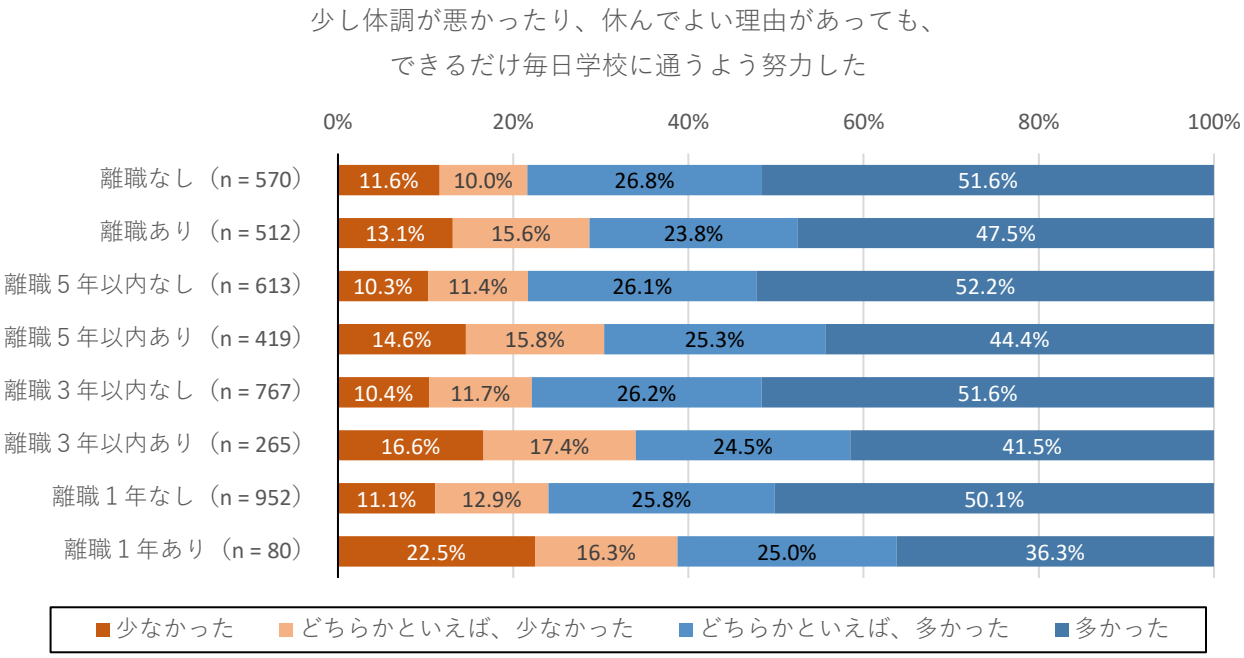


図３−17　高校学習行動：少し体調が悪かったり、休んでよい理由があっても、できるだけ毎日学校に通うよう努力した

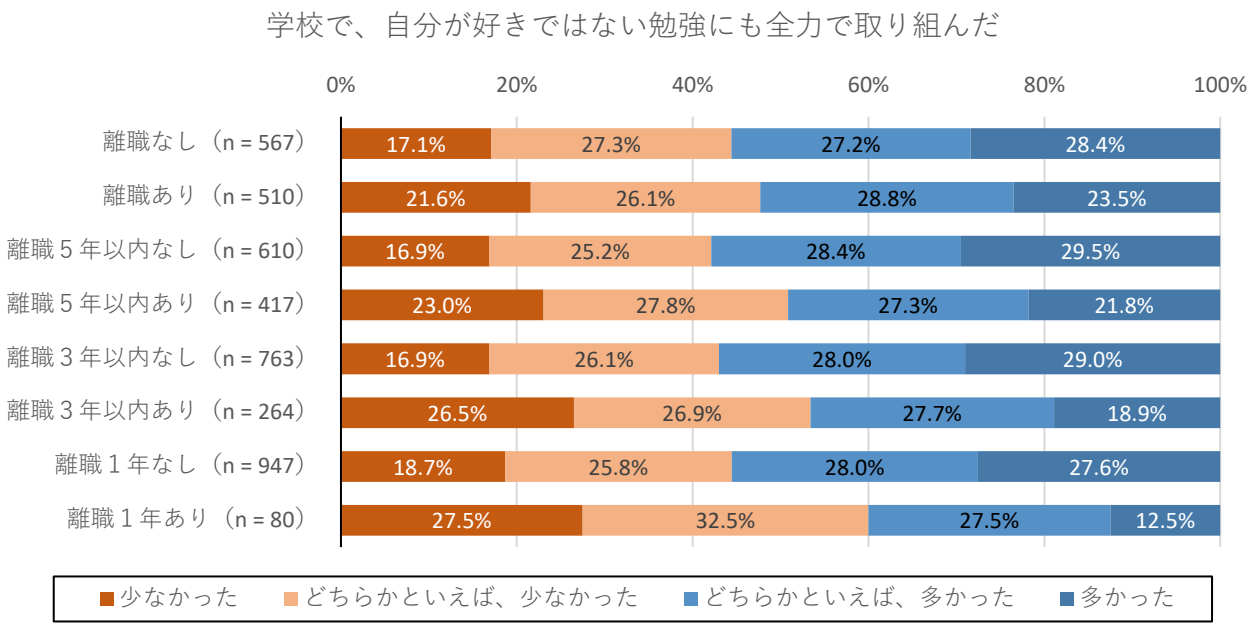


図３−18　高校学習行動：学校で、自分が好きではない勉強にも全力で取り組んだ

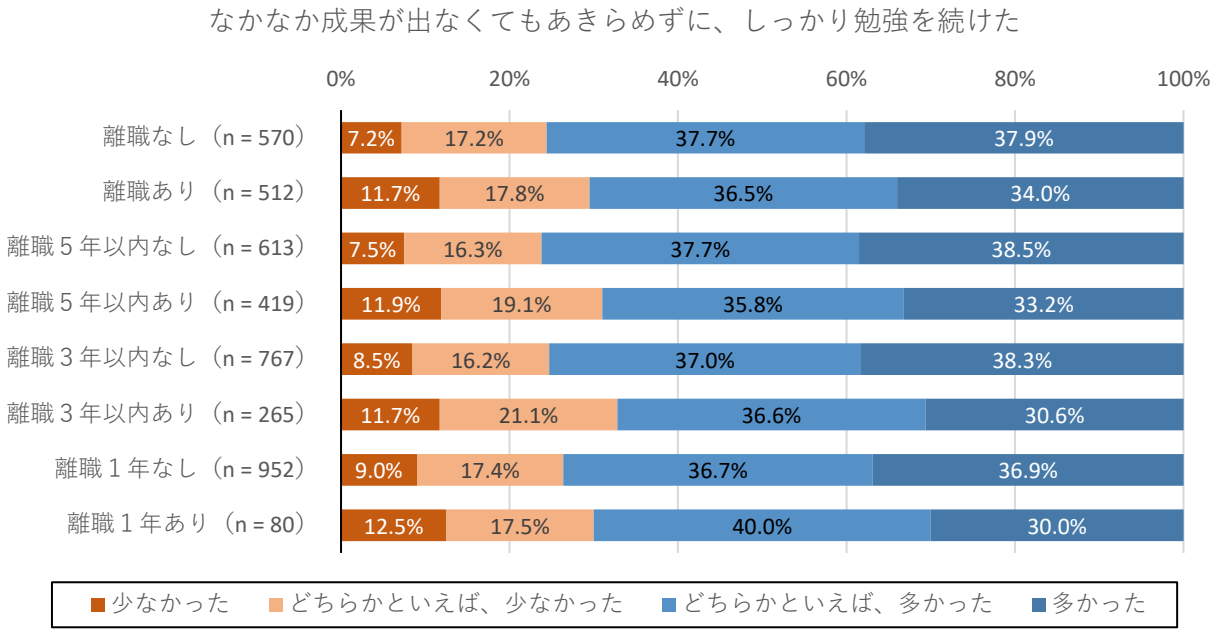


図３−19　高校学習行動：なかなか成果が出なくてもあきらめずに、しっかり勉強を続けた

④ 在学時の学修行動や成績

離職や早期離職の有無の区分と、大学入在学時の学修行動や成績との関連をみていく。図３−20 から図３−24 は、「あなたは学部在学中において、次のような活動にどのくらい熱心に取り組んでいましたか」という質問の回答であり、回答方法は「０．経験しなかった」及び「１．不熱心」から「４．熱心」であったが、「経験しなかった」をグラフに含めずに、４件法として割合を表示した。図３−20 は、「在学時熱心：専門科目」の回答であり、「離職なし」（37.5%）の方が、「離職あり」（28.6%）よりも、「熱心」の割合が大きかった。またこの傾向は、離職時期の区分においても同様であった。図３−21 は、「在学時熱心：一般教育」に関する回答であり、「離職なし」（19.3%）と「離職あり」（18.0%）の「熱心」の割合に、大きな違いはみられなかった。

図３−22 は、「在学時熱心：ゼミ」に関する回答であり、「離職なし」（46.4%）の方が、「離職あり」（34.7%）よりも、「熱心」の割合が大きかった。この傾向は離職時期の違いの区分でもほぼ同様であった。またグラフには表示していないが、ゼミを「経験しなかった」という回答は、特に「離職１年あり」（全体の 16.3%）は、「離職１年なし」（全体の 5.2%）に比べて大きかった。図３−23 は、「在学時熱心：卒業論文作成」に関する回答であり、「離職なし」（40.6%）の方が、「離職あり」（31.9%）よりも、「熱心」の割合が大きく、離職時期の違いの区分でもほぼ同様の傾向であった。

図３−24 は、「在学時熱心：部活動、サークル活動」に関する回答であり、「離職なし」（50.7%）の方が、「離職あり」（44.2%）よりも、「熱心」の割合が大きかった。またグラフには表示していないが、部活やサークルを「経験しなかった」という回答は、特に「離職１年あり」（全体の 20.0%）は、「離職１年なし」（全体の 13.5%）よりも大きかった。つまり１年で離職する者は、ゼミだけでなく、部活やサークルの経験も比較的少ないようである。

図３−25 から図３−29 は、「学部在学中の早稲田大学におけるあなたの経験をお聞きします。以下のような経験はどのくらいありましたか」という質問の回答であり、回答方法は「１．まったくあてはまらない」から「４．あてはまる」の４件法であった。図３−25 は、「学部経験：自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表した」の回答であり、「あてはまる」の割合は、「離職なし」（35.4%）と「離職あり」（35.8%）には違いはみられなかったが、１年で離職した者に関しては、「離職１年なし」（35.7%）は、「離職１年あり」（30.0%）よりも割合が大きかった。

図３−26 は、「学部経験：授業内容について、他の学生と議論した」の回答であり、「あてはまる」の割合は、全体的に 28%前後であるが、「ややあてはまる」までを含めた場合、「離職１年なし」（62.9%）は、「離職１年あり」（47.5%）よりも割合が大きかった。

図３−27 は、「学部経験：授業内容について、教員と議論した」の回答であり、「離職なし」（16.8%）よりも、「離職あり」（19.3%）の方が、「あてはまる」の割合が大きく、５年以内の離職でも同様の傾向であったが、「離職１年なし」（18.1%）は、「離職１年あり」（16.3%）よりも割合が大きく、離職時期区分により傾向が逆転していた。

図３−28 は、「学部経験：よい教員に巡り合えた」の回答であり、「あてはまる」の割合は、全体的に 42%前後で大きな違いはみられないが、１年での離職者に関しては、「離職１年なし」（43.4%）に比べて、「離

職１年あり」（36.3%）は割合が小さく、特徴的がみられた。

図３−29 は、「学部経験：できるだけ授業を休まないようにした」の回答であり、「あてはまる」の割合は、「離職なし」（43.4%）は、「離職あり」（30.9%）よりも顕著に割合が大きく、離職時期によらず同様の傾向であった。

図３−30 は、「学部在学中において、あなたの成績は、全体的に学部の中でどのあたりでしたか。－１～２年」の回答であり、回答方法は「１．下のほう」から「４．上のほう」の４件法であった。１～２年次の成績に関して、「離職あり」（11.2%）の方が、「離職なし」（15.5%）よりも「上のほう」の割合が小さく、いずれの離職時期の区分でも同様の傾向がみられた。図３−31 は「３～４年」に関する回答であり、「離職あり」（10.8%）の方が、「離職なし」（16.8%）よりも「上のほう」の割合は小さく、離職時期の区分によらず全体的な傾向であった。また「下のほう」の割合は、「１～２年」の成績では離職時期の区分の大きな違いはみられないが、「３～４年」では、「離職１年あり」（16.3%）と「離職１年なし」（7.6%）の割合の違いが大きくなっている。したがって１年で離職した者は、大学の後半（３～４年）では、特に相対的に成績が低くなった可能性が示唆される。

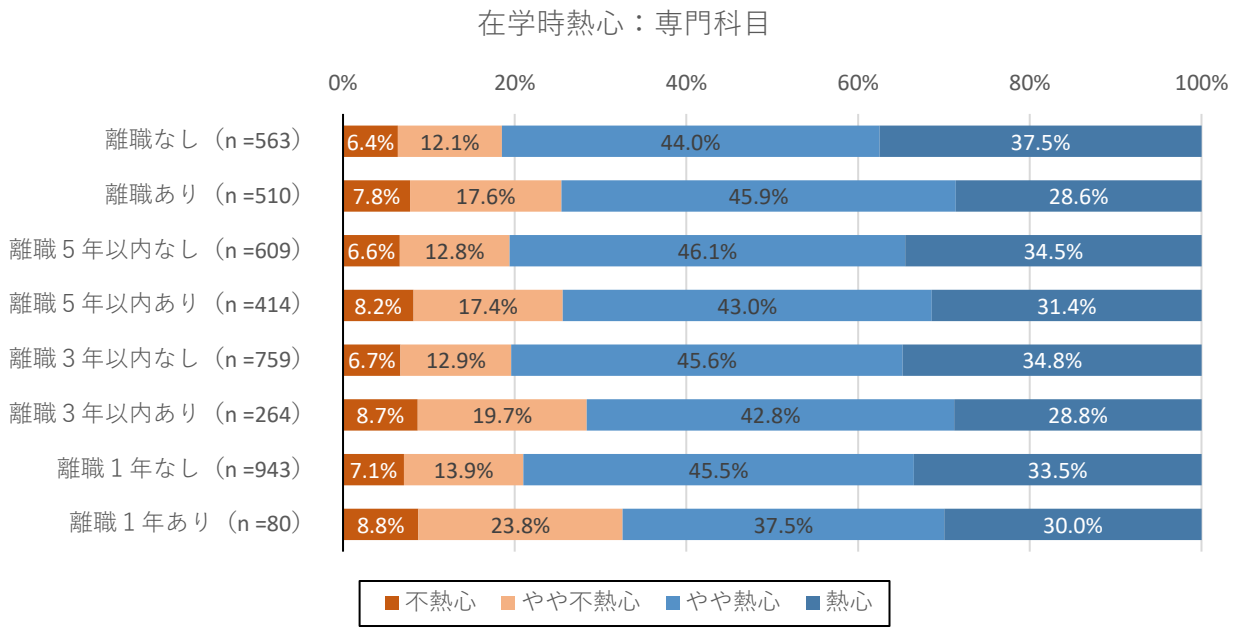


図３−20　在学時熱心：専門科目

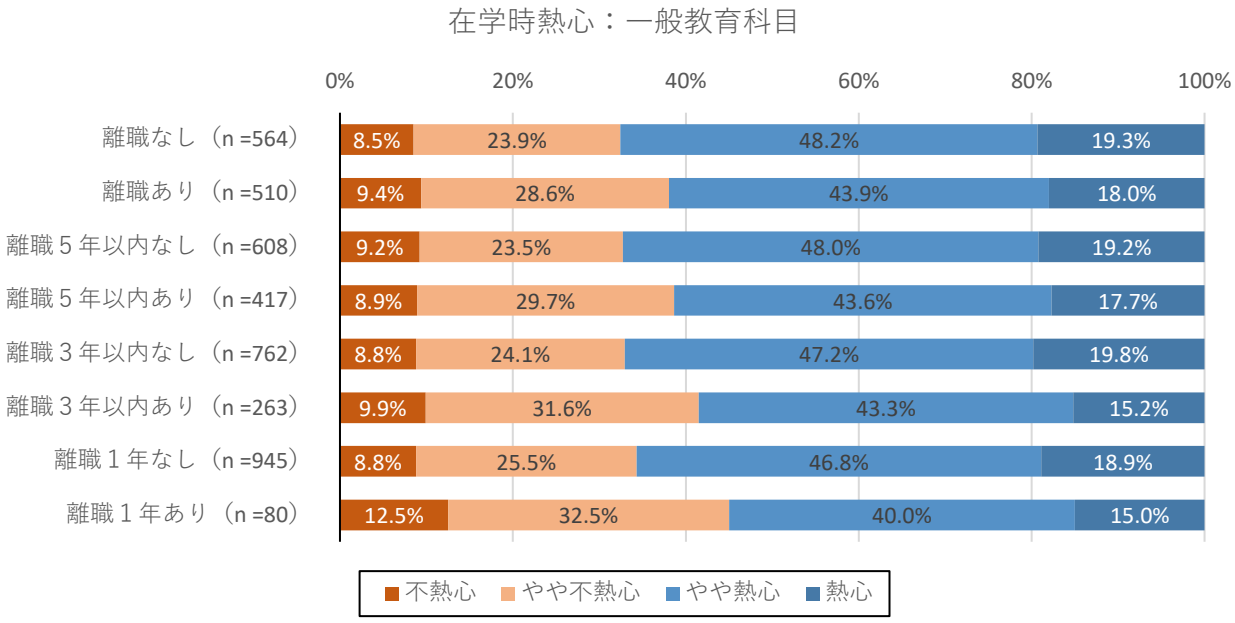


図３−21　在学時熱心：一般教育科目

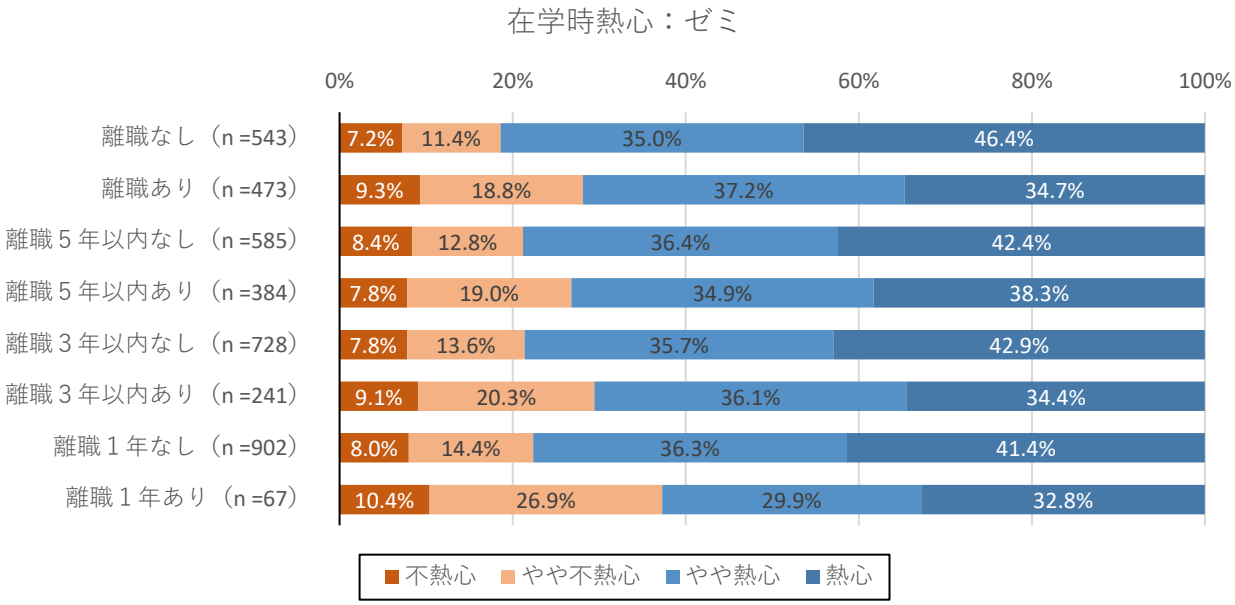


図３−22　在学時熱心：ゼミ

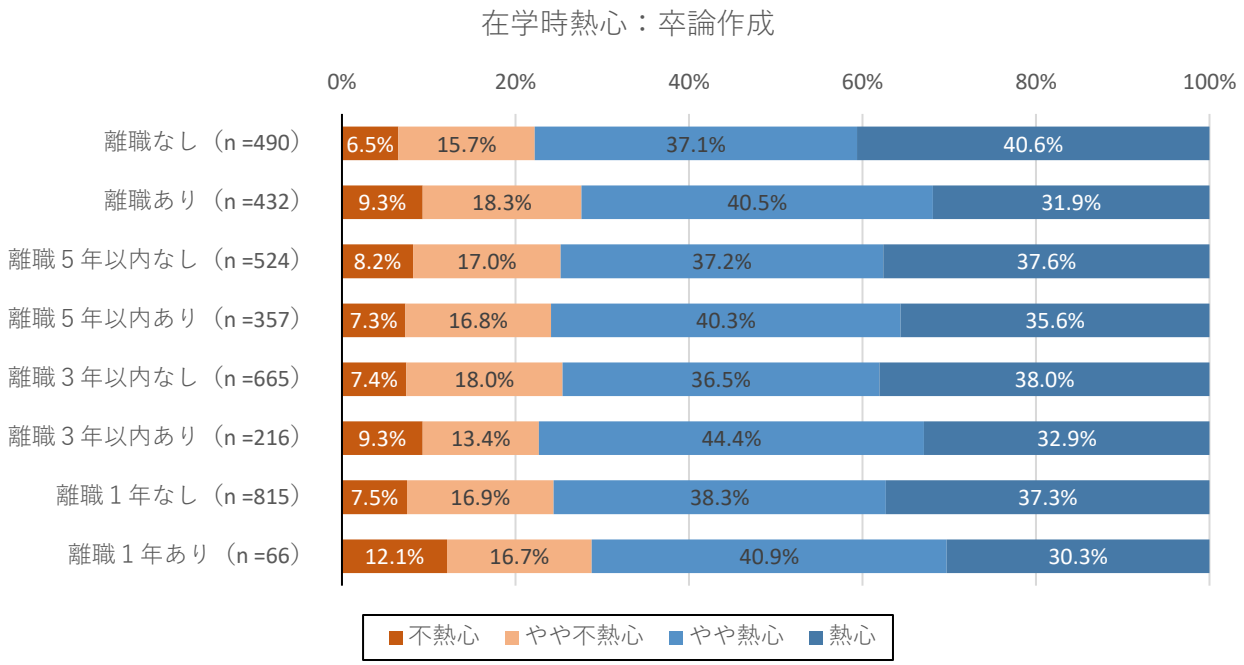


図３−23　在学時熱心：卒論作成

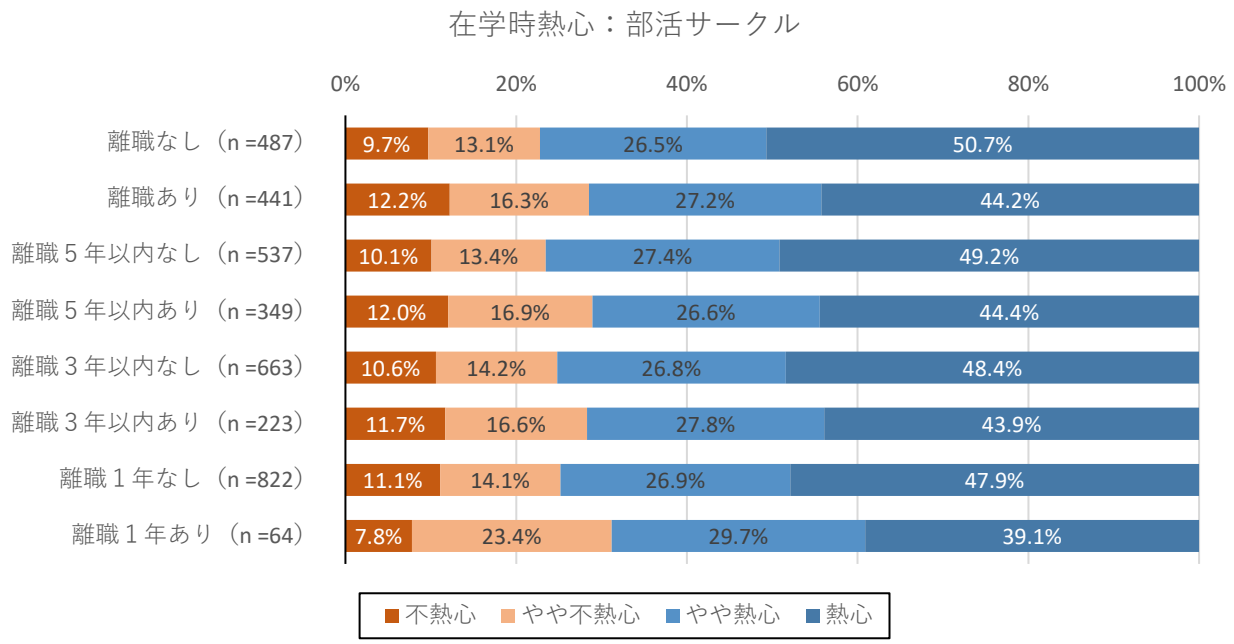


図３−24　在学時熱心：部活サークル

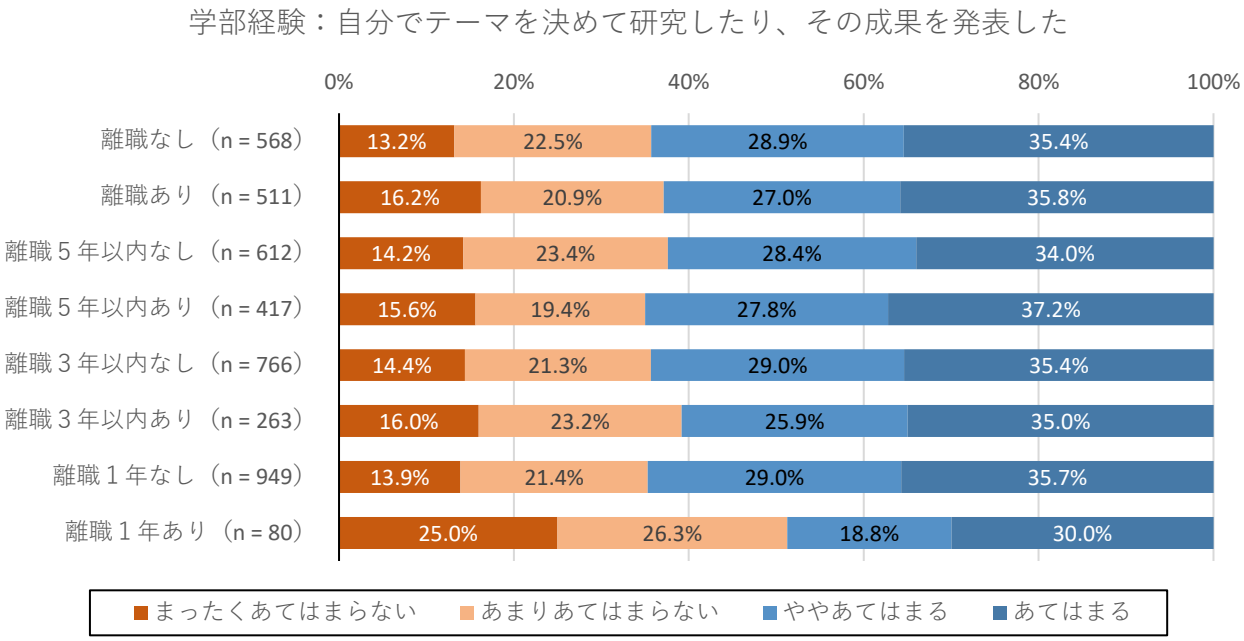


図３-25　学部経験：自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表した

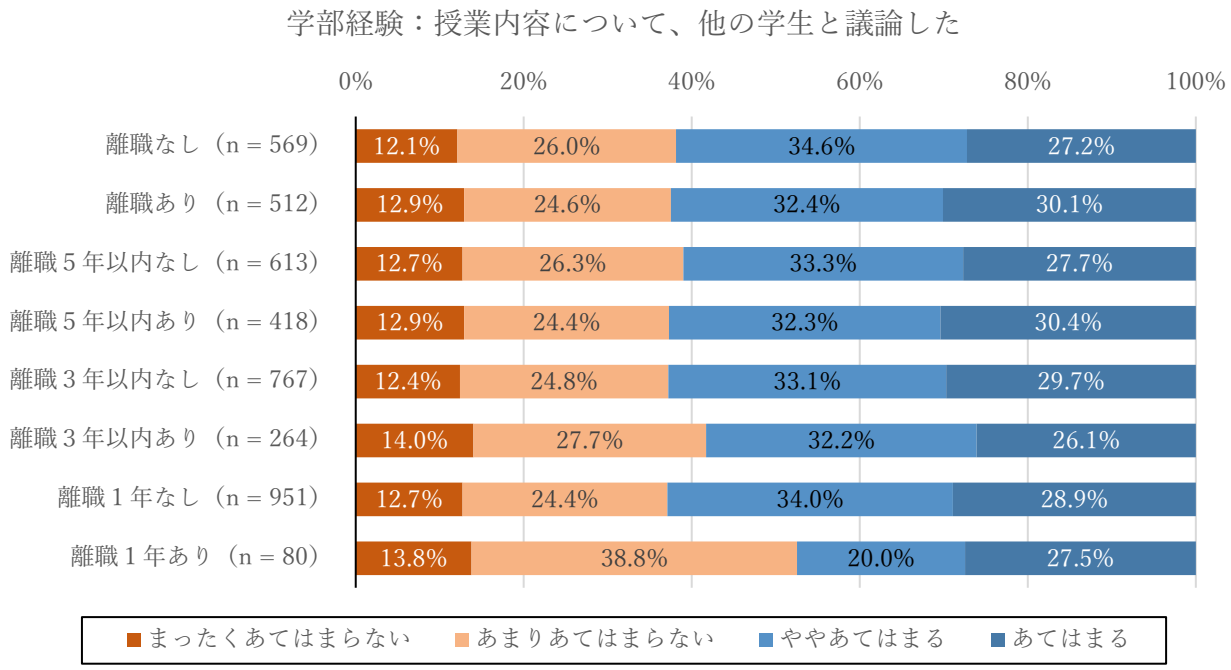


図３-26　学部経験：授業内容について、他の学生と議論した

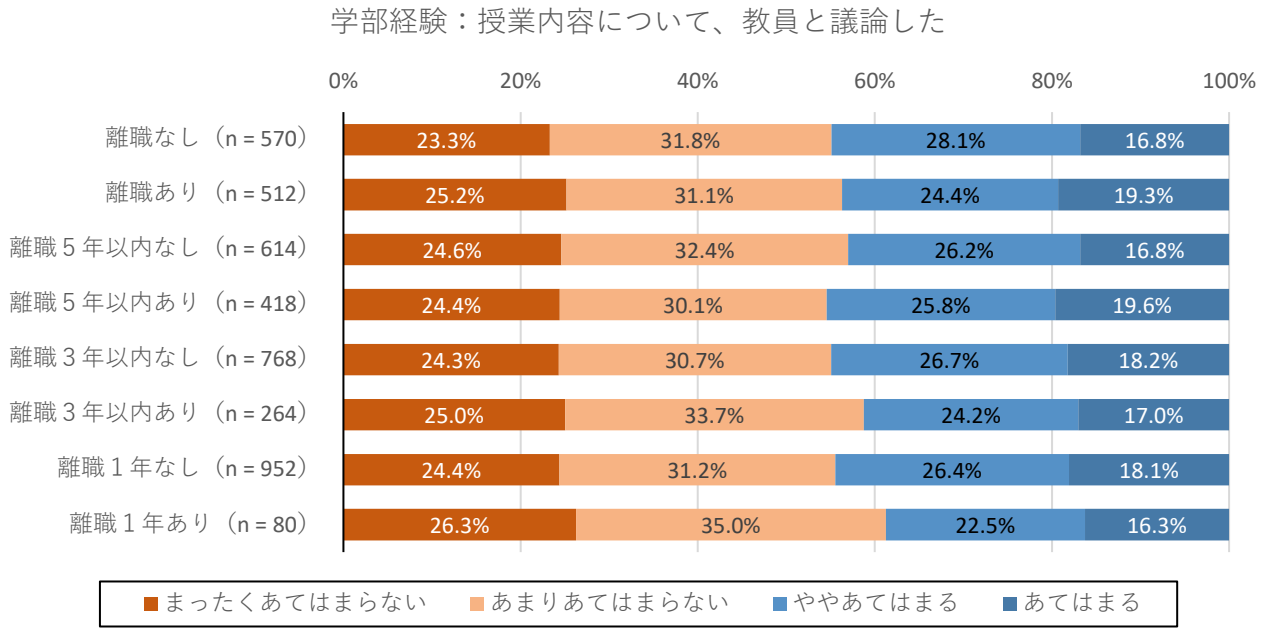


図３−27　学部経験：授業内容について、教員と議論した

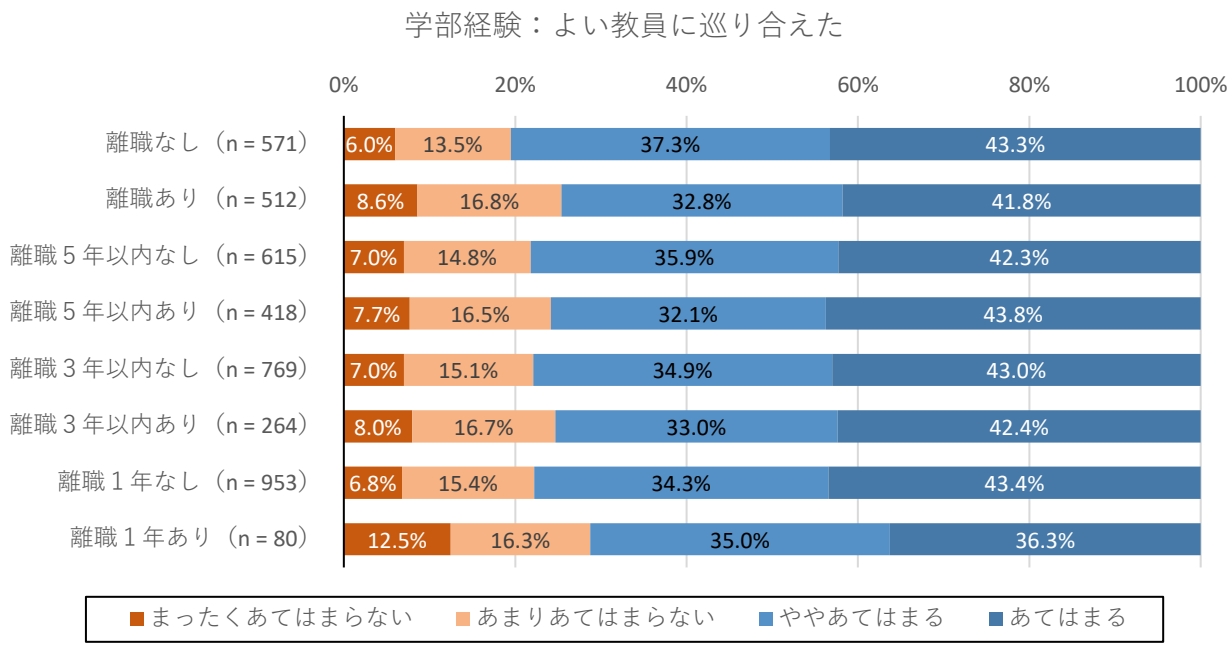


図３−28　学部経験：よい教員に巡り合えた

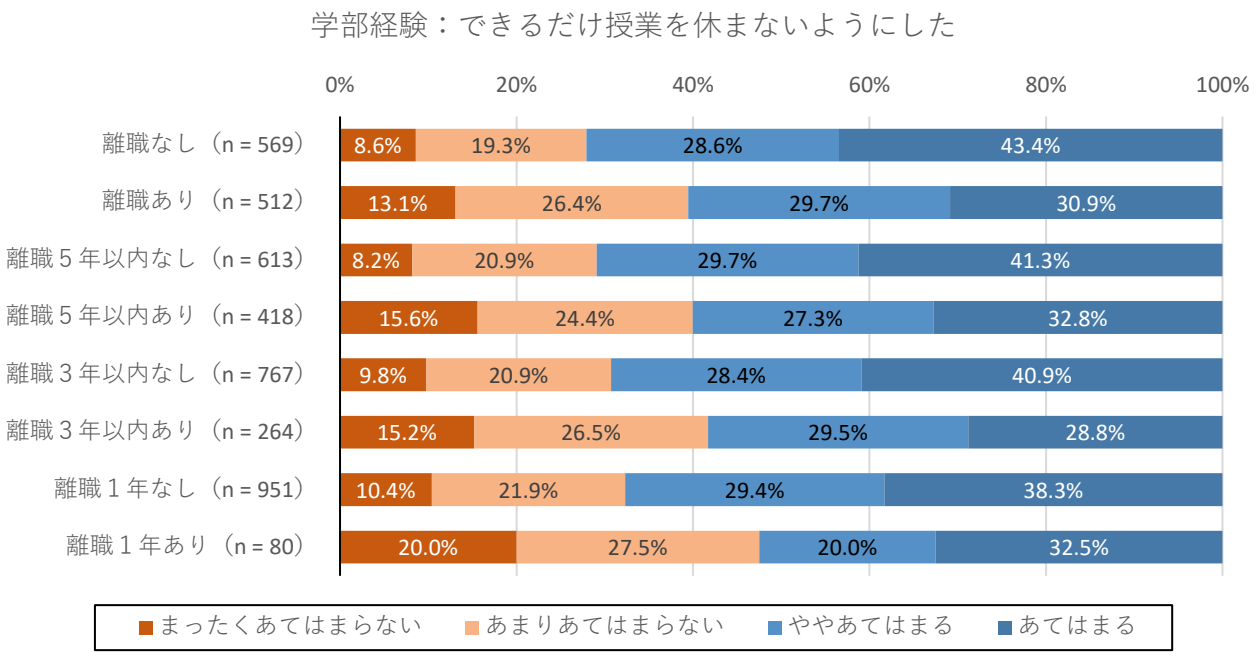


図３−29　学部経験：できるだけ授業を休まないようにした

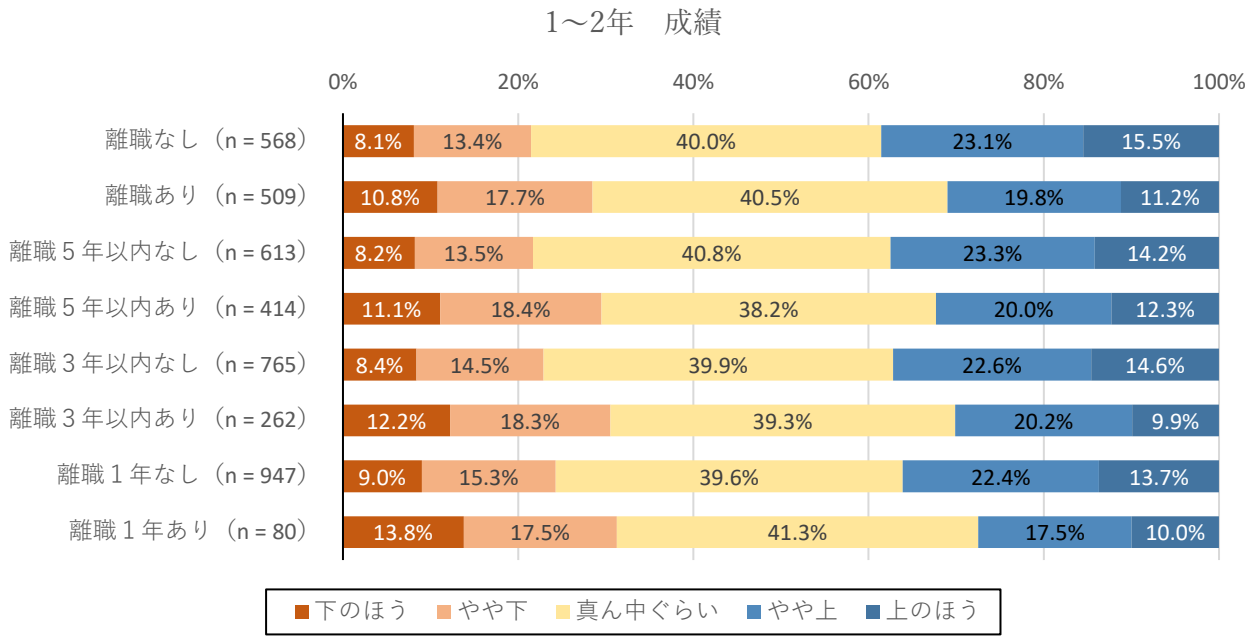


図３−30　在学時成績：１〜２年次

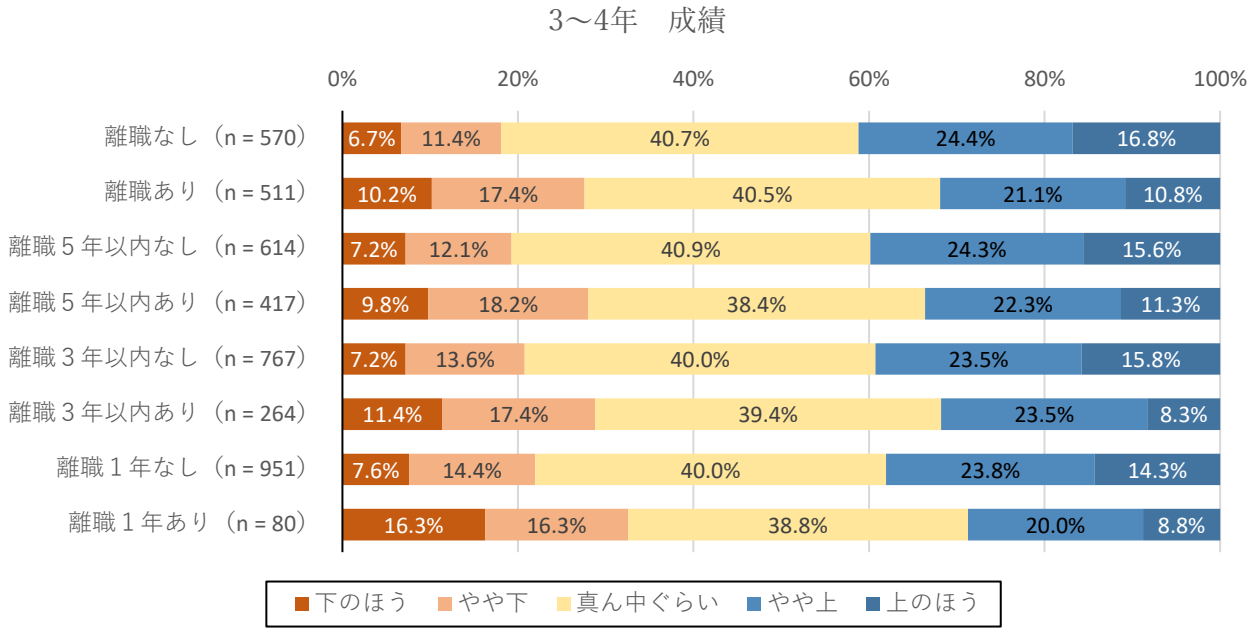


図３−31　在学時成績：３～４年次

⑤ DP 関連の項目

離職や早期離職の有無の区分と、早稲田大学の DP に関する項目との関連をみていく。図３−32 から図３−42 は早稲田大学の DP に関する、「早稲田大学の学部で次のようなことをどの程度身につけましたか。」という質問項目の回答であり、回答方法は「１．身についてない」から「４．身についた」の４件法であった。

離職の有無の間で、特に違いが見られたのは、「自分の考えを分かりやすく表現できる」（図３−35）、「相手の状況や考え方を尊重できる」（図３−36）、「物事を多面的に考えることができる」（図３−37）、「健全に批判することができる」（図３−38）、「多様性を受け入れられる」（図３−39）、「異文化を理解できる」（図３−40）、「外国語を理解し、話せる」（図３−41）であり、「離職あり」の方が「離職なし」よりも、「身についた」の割合が大きい傾向であった。特に顕著な項目として、「自分の考えをわかりやすく表現できる」では、「離職なし」（23.6%）に対して、「離職あり」（29.7%）の割合が大きく、また「多様性を受け入れられる」でも、「離職なし」（45.7%）に対して、「離職あり」（53.2%）の割合が大きかった。

一方で、離職の有無の間で特に大きな違いが見られなかったのは、「既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる」（図３−32）、「物事を論理的に考えることができる」（図３−33）、「課題の解決方法を提案できる」（図３−34）であった。ただし「課題の解決方法を提案できる」では、「離職３年以内あり」（22.4%）が、「離職３年以内なし」（26.2%）に比べて、「身についた」の割合が小さく、この点は特徴的といえる。

また「自身の専門に関する知識」（図３−37）は、それほど大きな違いではないが、「離職なし」（30.9%）の方が、「離職あり」（28.1%）に比べて、「身についた」の割合は少し大きかった。この傾向は他の DP 関連の項目と逆であり、この項目の特徴的な点である。

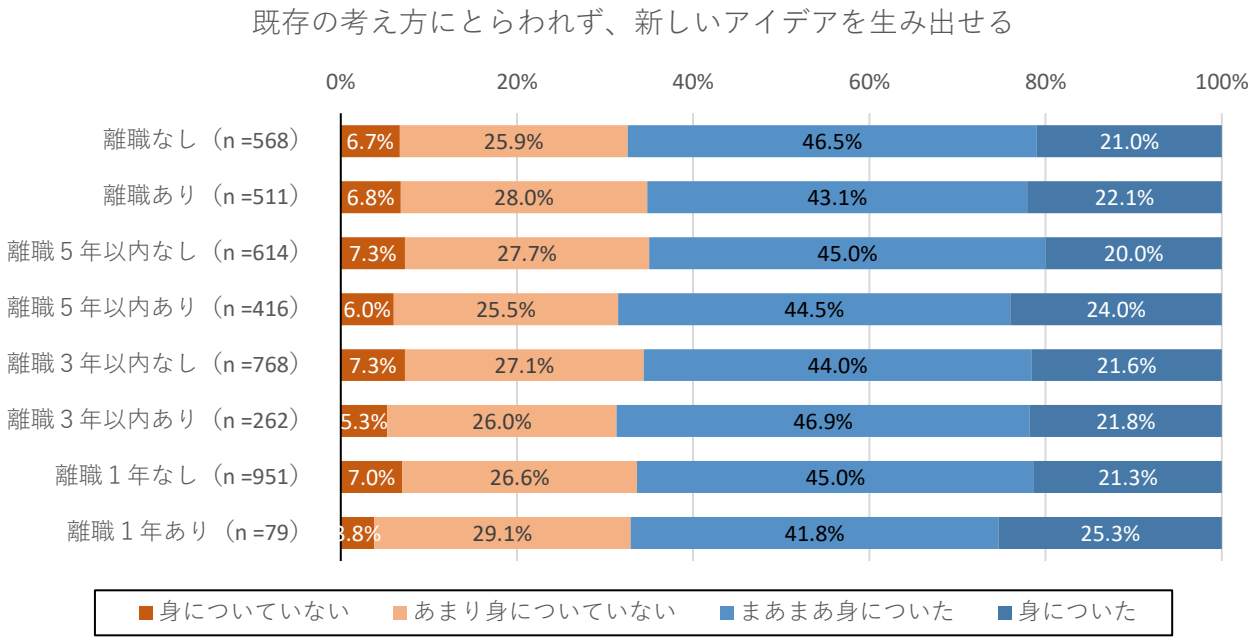


図３-32　DP 関連項目：既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる

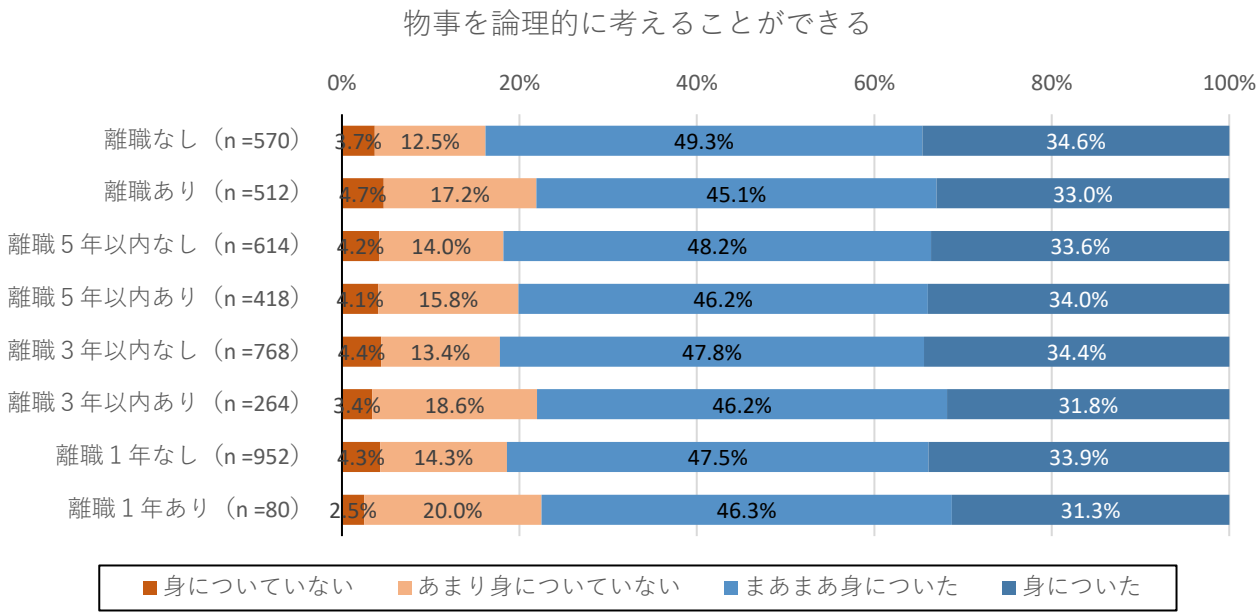


図３-33　DP 関連項目：物事を論理的に考えることができる

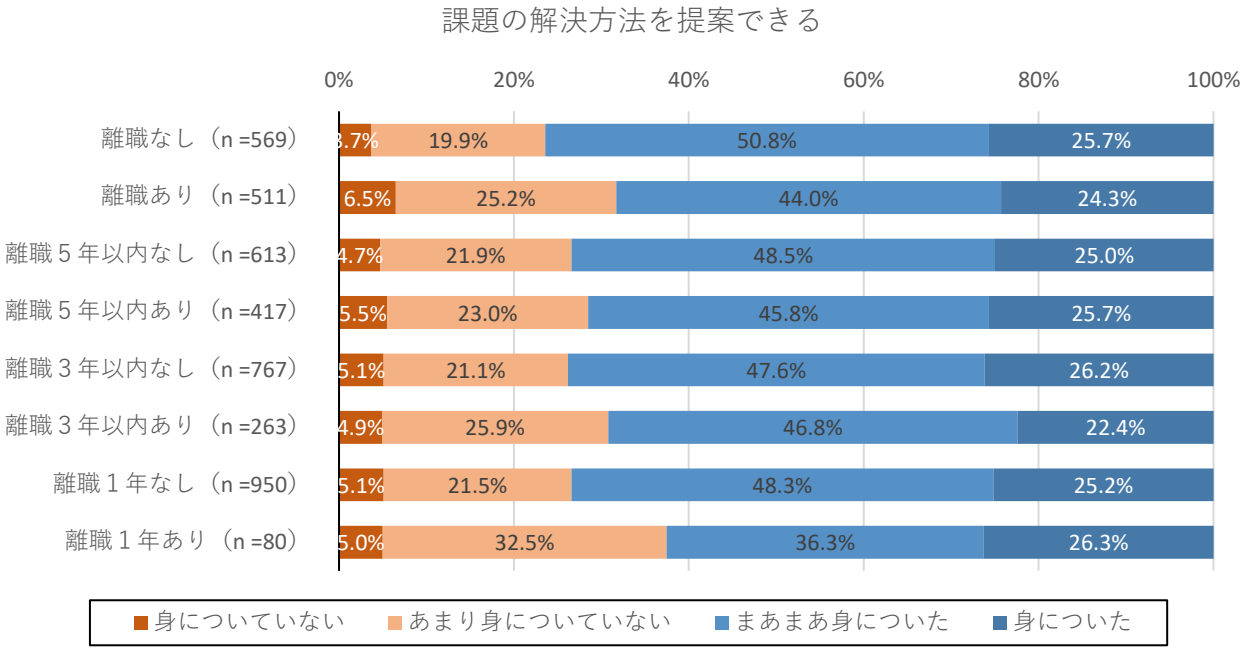


図３−34　DP 関連項目：課題の解決方法を提案できる

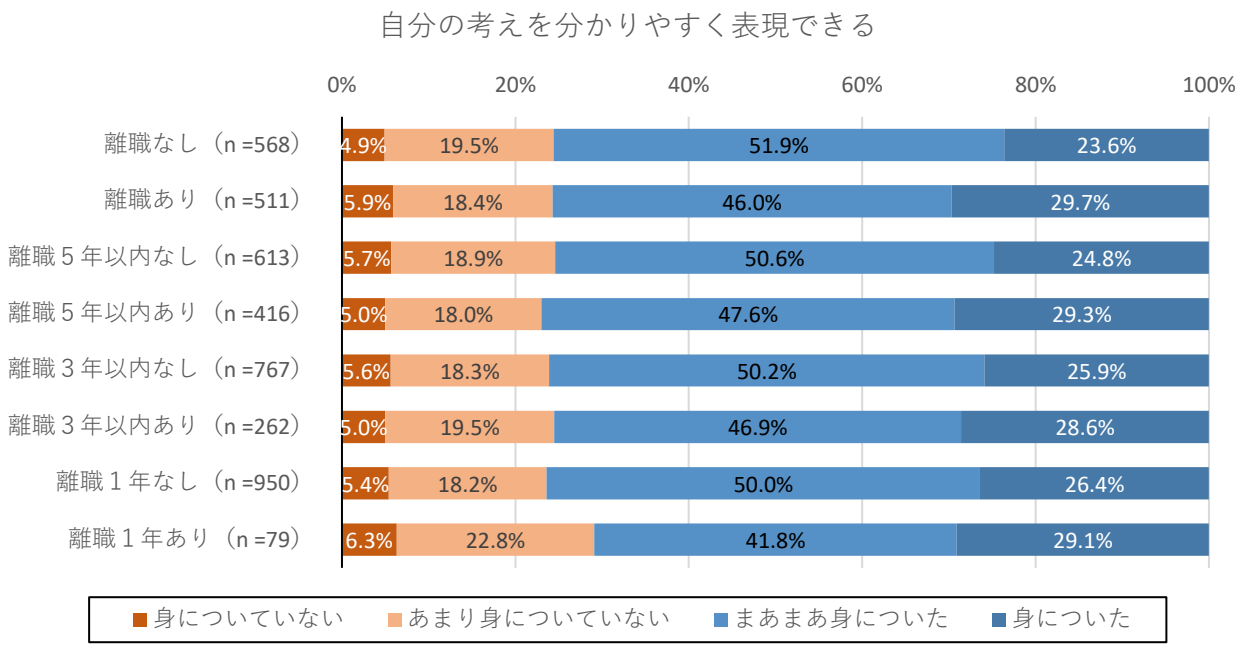


図３−35　DP 関連項目：自分の考えを分かりやすく表現できる

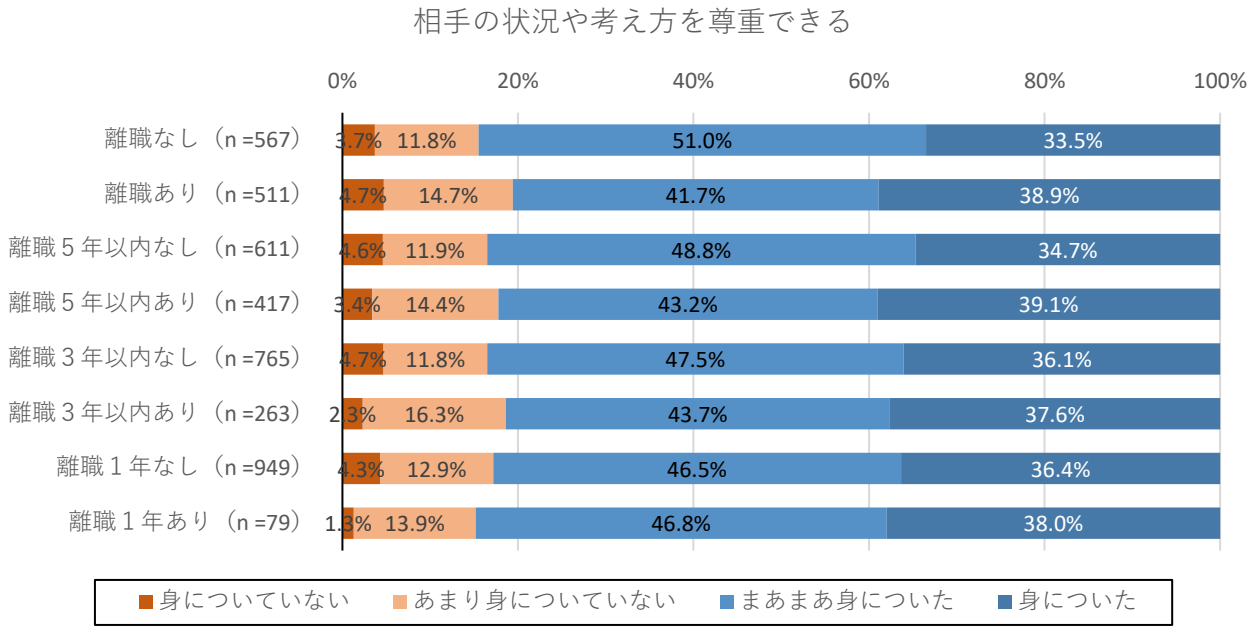


図３-36　DP 関連項目：相手の状況や考え方を尊重できる

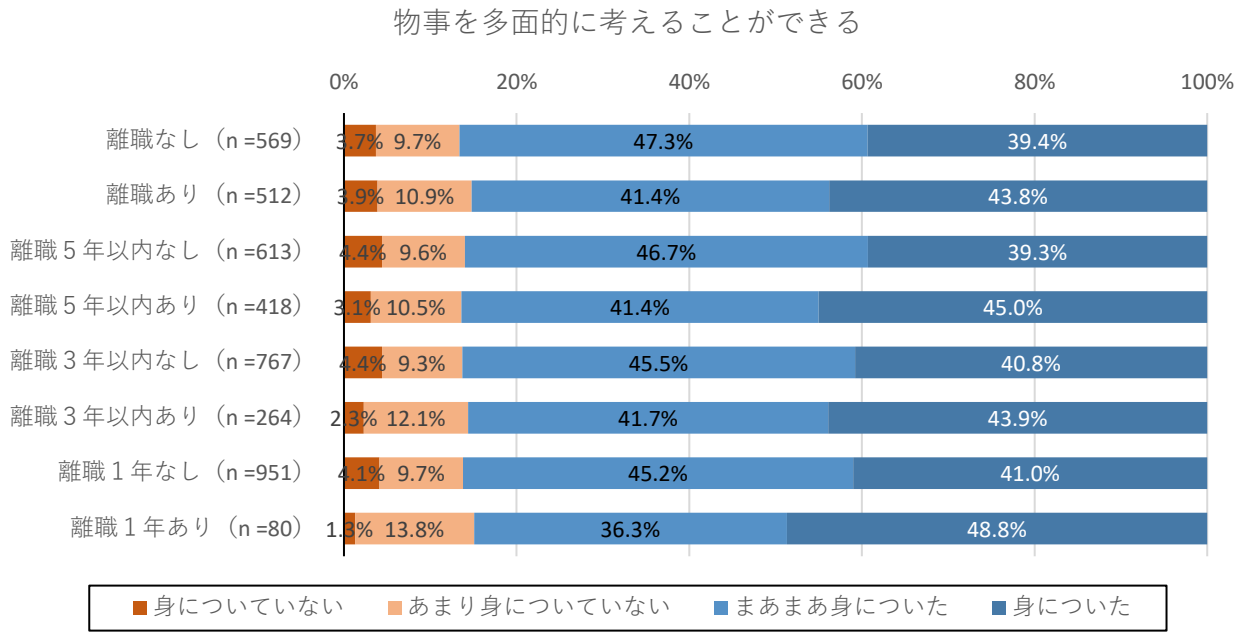


図３-37　DP 関連項目：物事を多面的に考えることができる

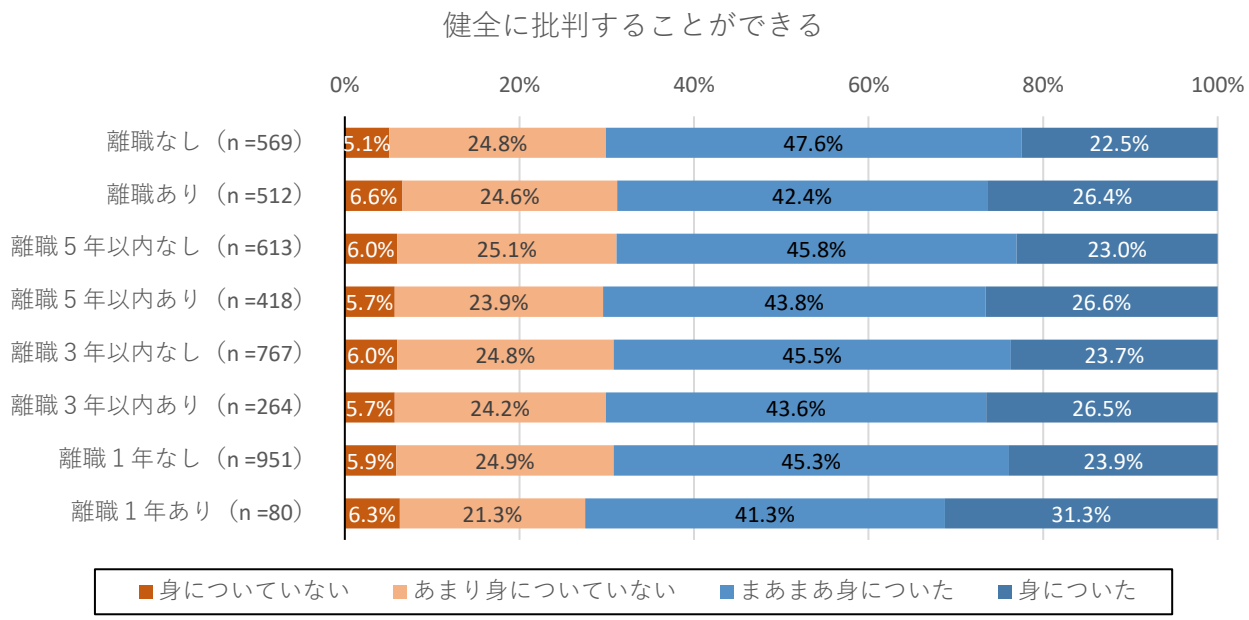


図３−38　DP 関連項目：健全に批判することができる

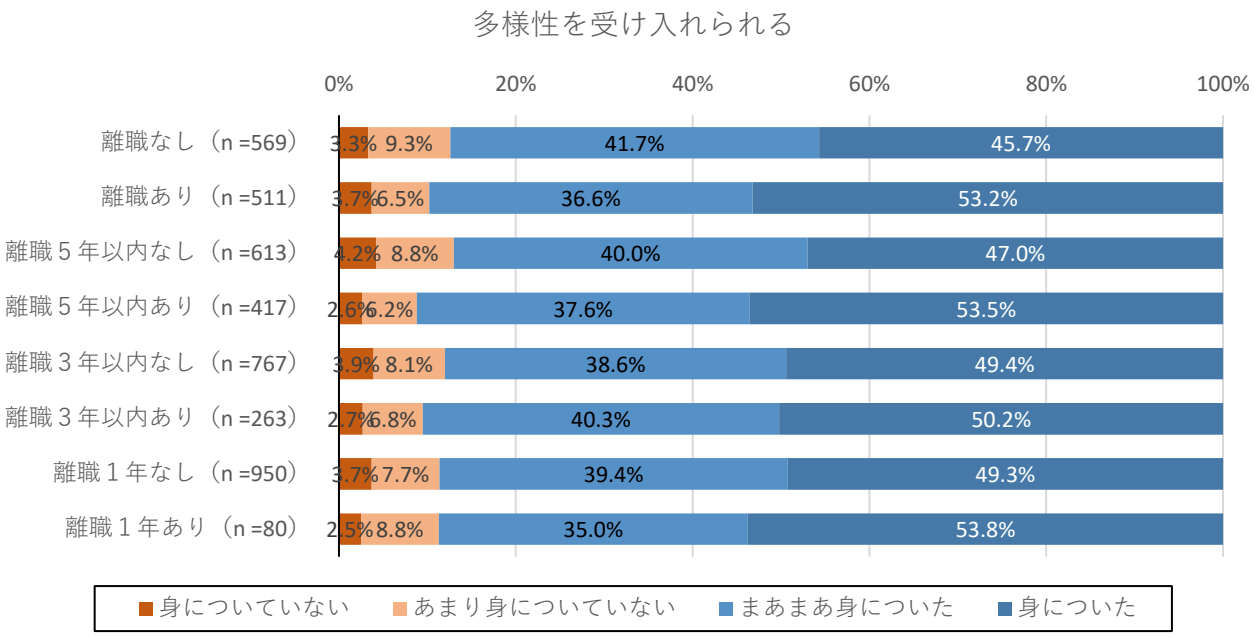


図３−39　DP 関連項目：多様性を受け入れられる

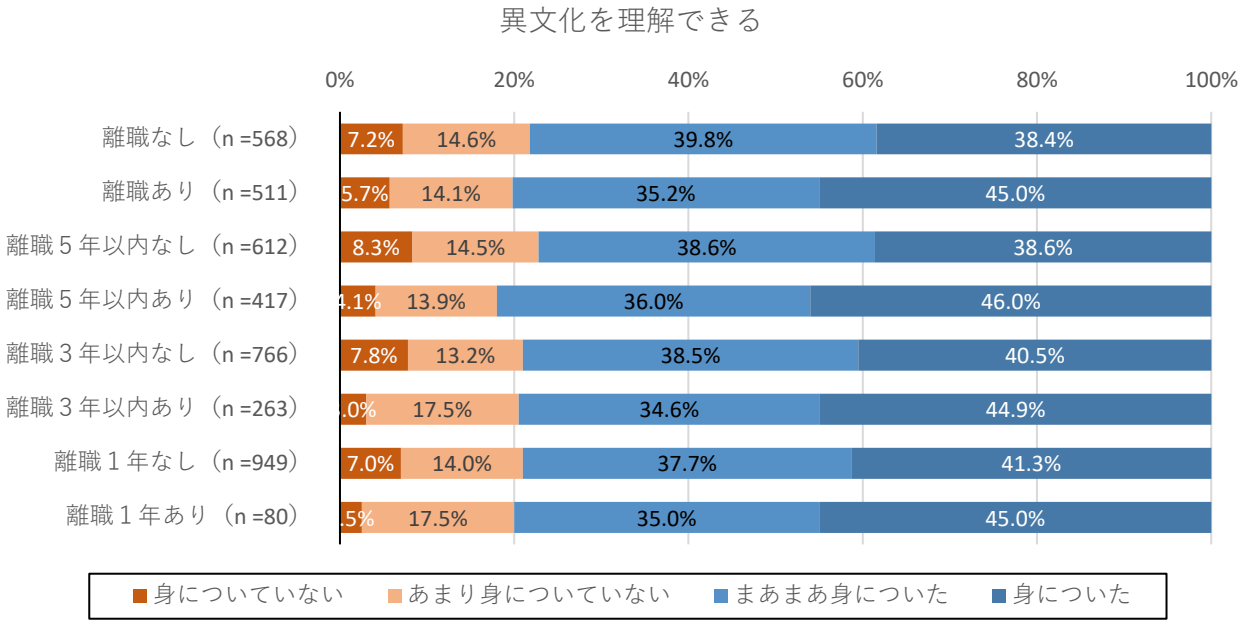


図３-40　DP 関連項目：異文化を理解できる

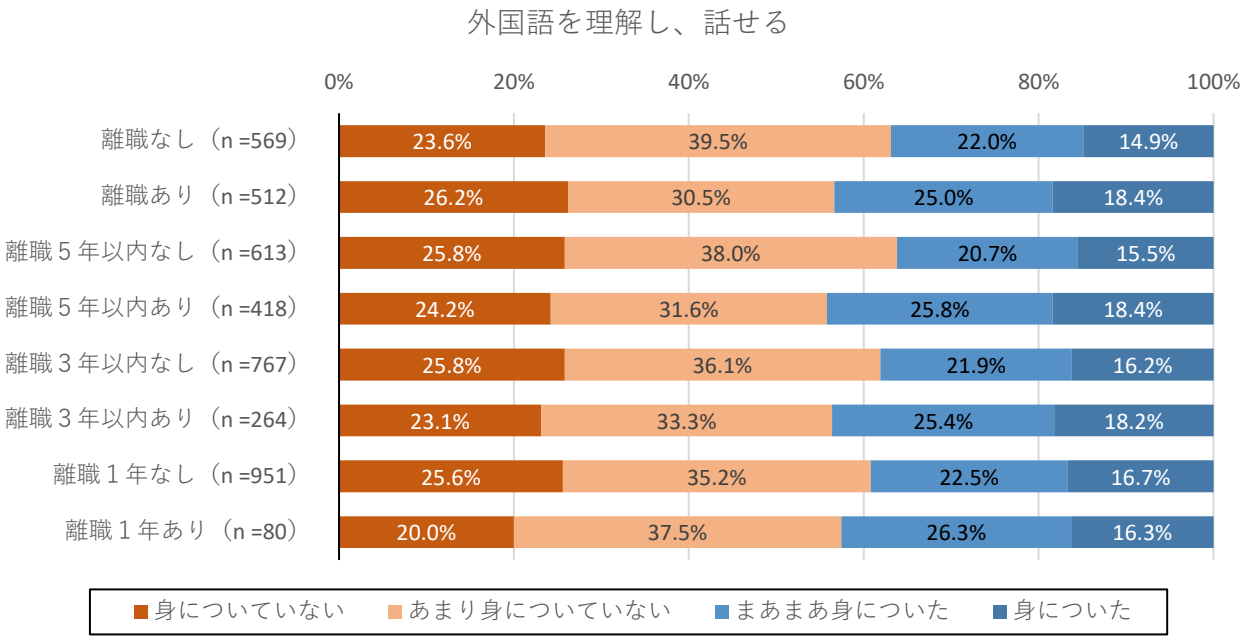


図３-41　DP 関連項目：外国語を理解し、話せる

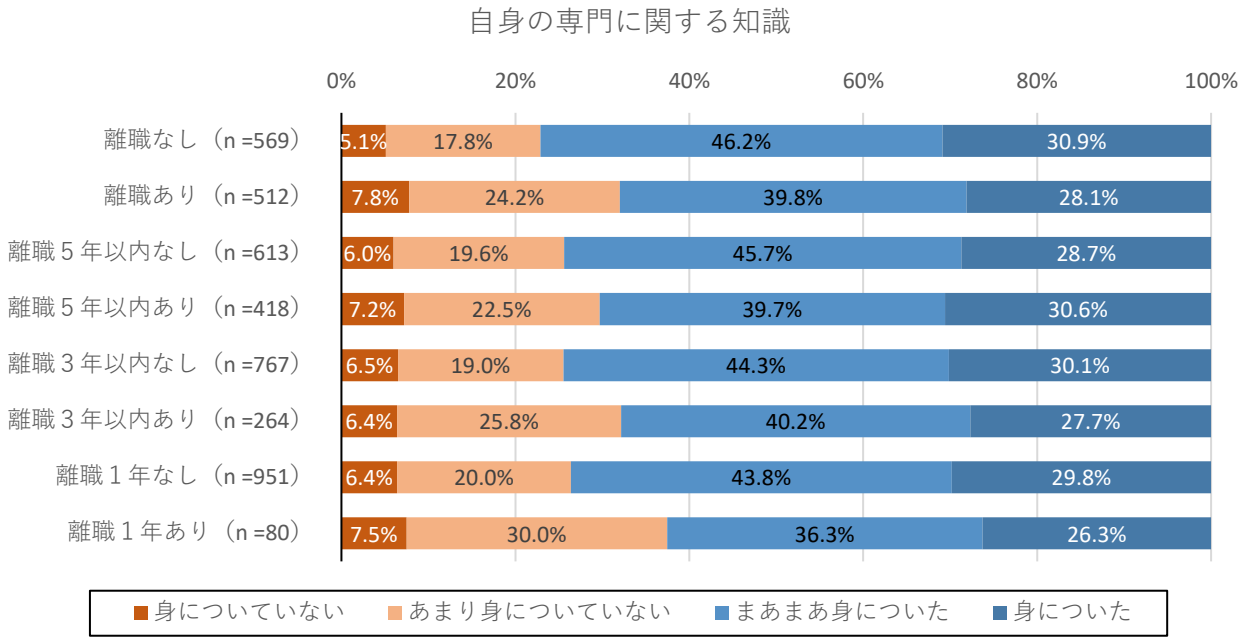


図３−42　DP 関連項目：自身の専門に関する知識

３－４．離職と現在の仕事や生活との関係

①　大学で学んだことの仕事への役立ち

離職や早期離職の有無の区分と、大学で学んだことの仕事への役立ちとの関係をみていく。図３−43 は、「あなたの学部時代の経験は、現在の仕事にどの程度役立っていますか。該当するものをお選びください。 − 専門科目」の回答である。回答方法は「０．経験しなかった」及び「１．まったく役に立っていない」から「４．かなり役に立っている」であったが、「経験しなかった」をグラフに含めずに、４件法として割合を表示した。また「かなり役立っている」の割合が低い項目では、「やや役立っている」も含めて、傾向をみていくことにする。「学部経験仕事役立ち：専門科目」に関して、「離職なし」（25.7%）の方が、「離職あり」（19.6%）よりも、「かなり役に立っている」の割合が大きかった。またこの傾向は、１年での離職の有無の区分において、同様にみられた。

図３−44 は、「学部経験仕事役立ち：一般教育科目」に関する回答であり、「かなり役立っている」はいずれも 13%前後と、低い水準でほぼ違いはないが、「やや役に立っている」を含めた場合、「離職なし」（56.5%）の方が、「離職あり」（51.9%）より割合が大きく、離職時期の区分では、特に「離職１年なし」（55.3%）と「離職１年あり」（40.5%）の間に、顕著な違いがみられた。

図３−45 は、「学部経験仕事役立ち：ゼミ」に関する回答であり、「かなり役立っている」の割合は、「離職なし」（26.3%）の方が、「離職あり」（20.2%）よりも割合が大きく、また「やや役に立っている」を含めた場合、「離職１年なし」（60.0%）と「離職１年あり」（46.3%）の違いが顕著であった。図３−46 は、「学部経験仕事役立ち：卒業論文作成」に関する回答であり、「かなり役立っている」はいずれも 20%前

後であるが、「やや役に立っている」を含めた場合、「離職なし」（54.9%）の方が、「離職あり」（44.5%）より割合が大きかった。

図３−47 は、「学部経験仕事役立ち：部活・サークル」に関する回答であり、「かなり役立っている」の割合は、「離職なし」（27.2%）と「離職あり」（24.9%）であり、わずかに違いがみられた。

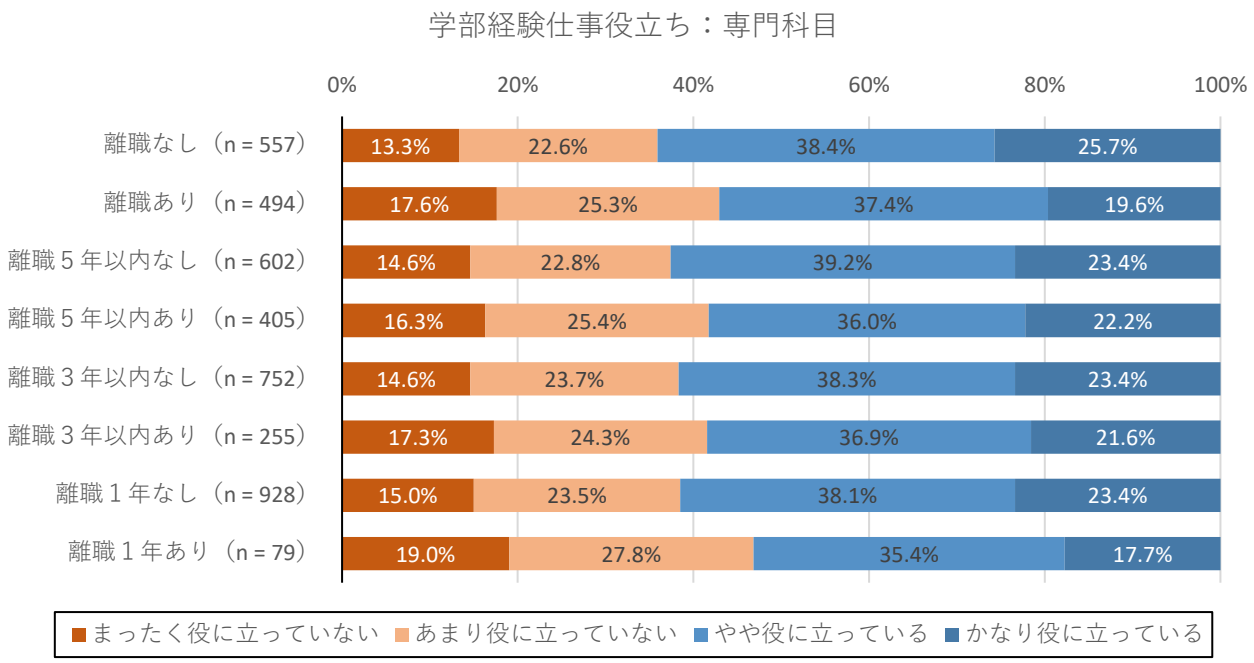


図３−43　学部経験仕事役立ち：専門科目

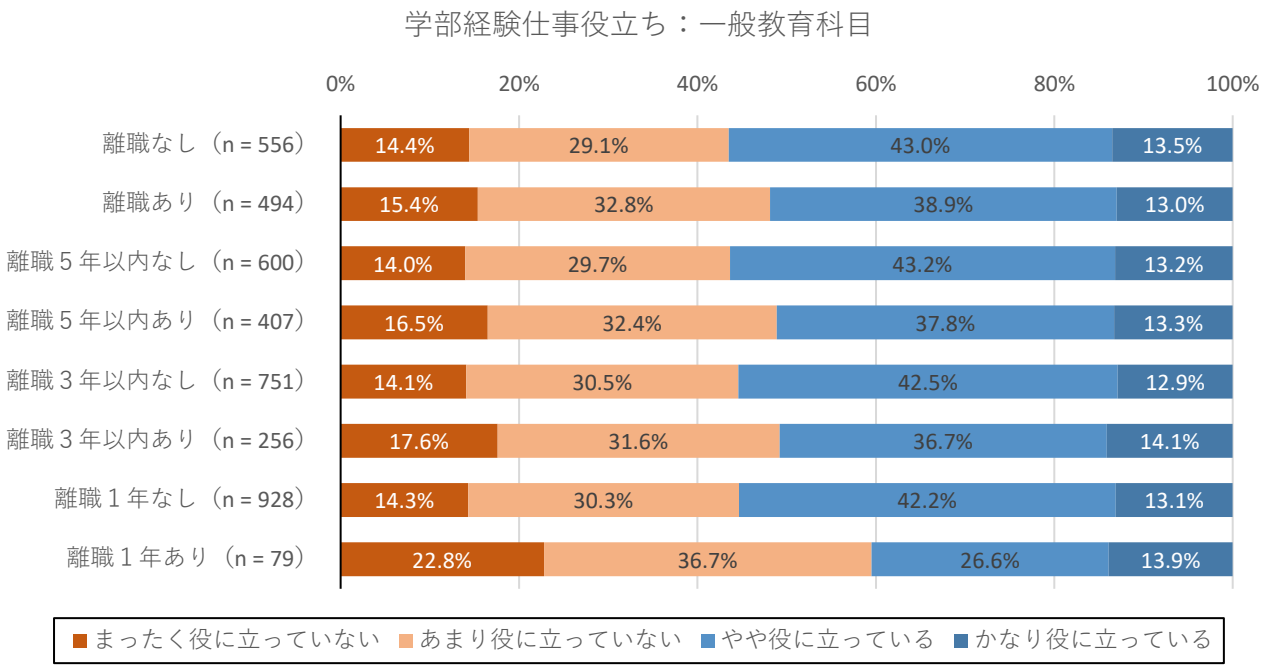


図３−44　学部経験仕事役立ち：一般教育科目

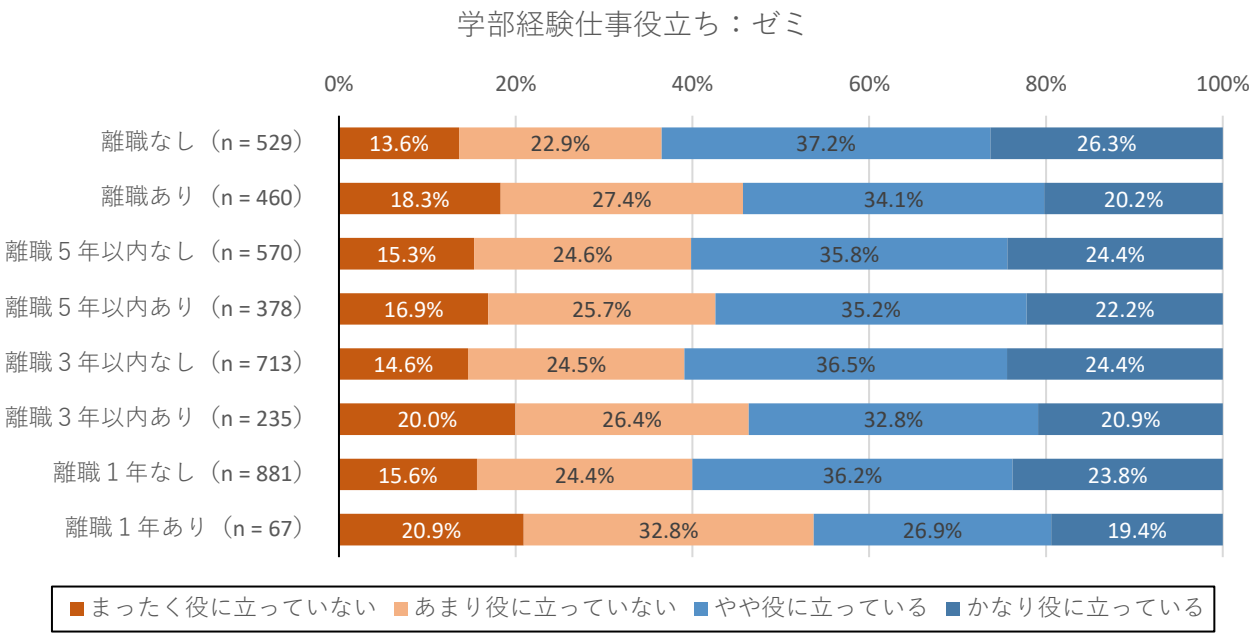


図３−45　学部経験仕事役立ち：ゼミ

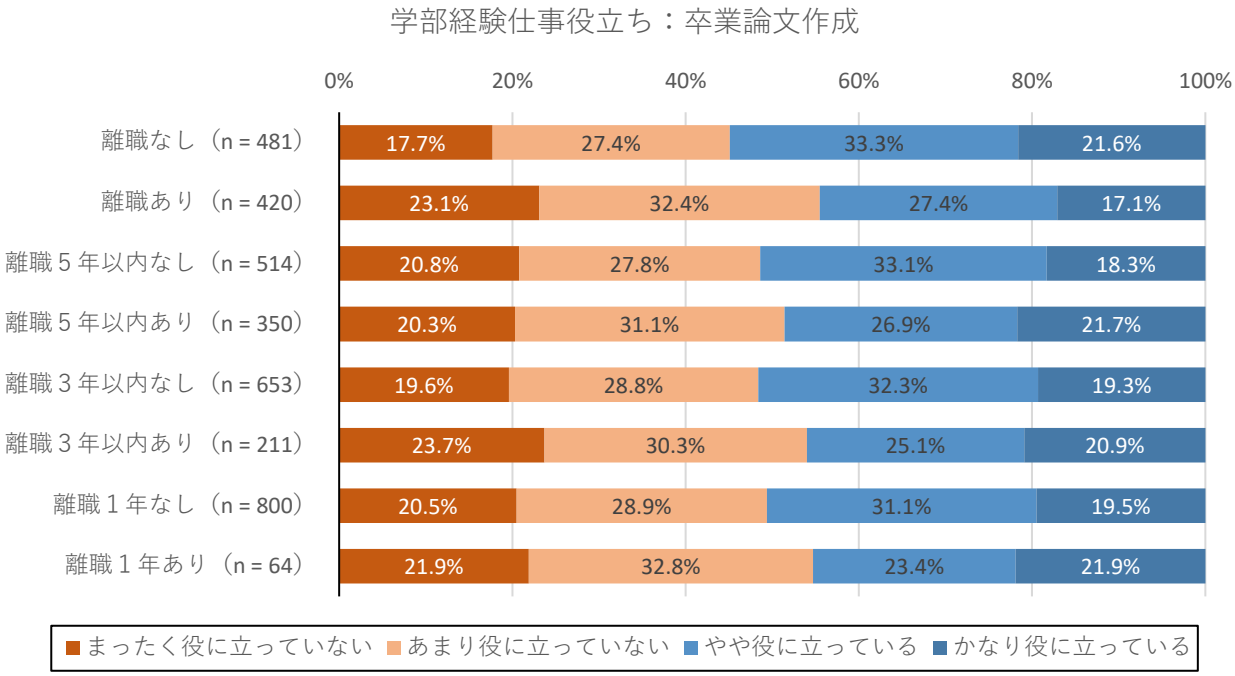


図３−46　学部経験仕事役立ち：卒業論文作成

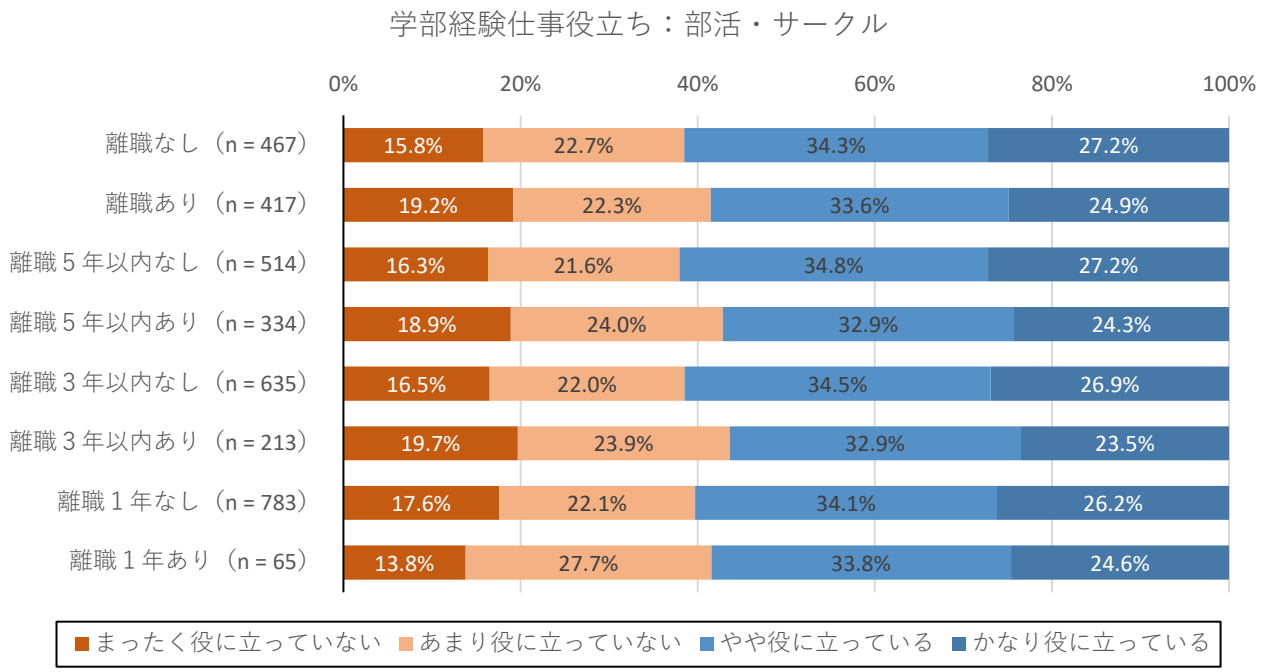


図３−47　学部経験仕事役立ち：部活・サークル

②　仕事や生活の満足

最後に、離職や早期離職の有無の区分と、仕事や生活の満足との関係をみていく。図３−48 は、「あなたの現在の仕事の満足度はどの程度ですか」に関する回答であり、「１．かなり不満である」から「10. 非常に満足している」の、10 段階での回答方法であった。「非常に満足している」の割合は、「離職あり」（13.6%）の方が、「離職なし」（11.3%）よりもわずかに大きく、全体的にこのような傾向であった。しかし１年での離職者に関しては逆の傾向となり、「離職なし」（12.8%）の方が、「離職あり」（6.7%）よりもはっきりと大きかった。したがって現在の仕事の満足度は、１年で離職した者は、１年で離職しなかった者に比べて、顕著に低いといえる。

図３−49 は、「あなたの生活（仕事を除く）の満足度はどの程度ですか」に関する回答であり、「非常に満足している」の割合は、「離職なし」（20.7%）と「離職あり」（20.9%）は同程度であり、またほとんどの離職時期の区分でも 20%前後と大差がなかった。しかし１年で離職した者においてのみ顕著な違いがみられ、「離職１年あり」（10.9%）は「離職１年なし」（21.9%）に比べて、「非常に満足している」の割合ははっきりと小さかった。したがって現在の生活の満足度に関しても、１年で離職した者は、１年で離職しなかった者に比べて、顕著に低いといえる。

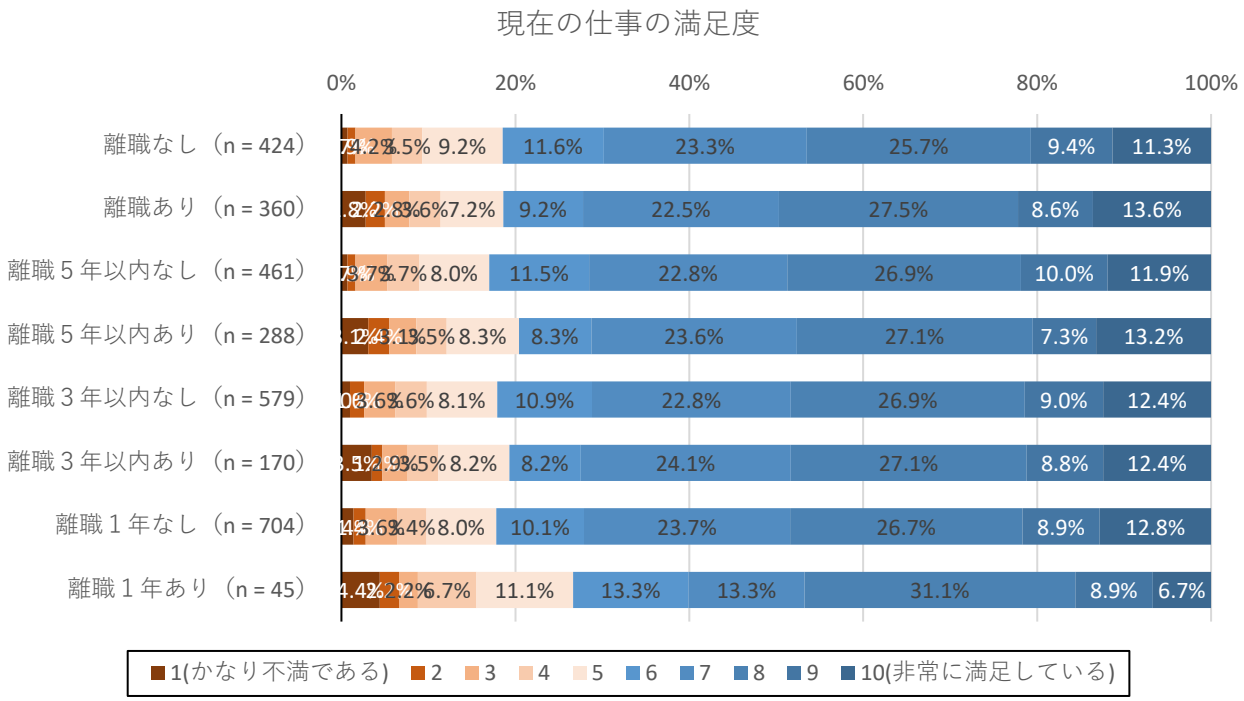


図３−48　現在の仕事の満足度

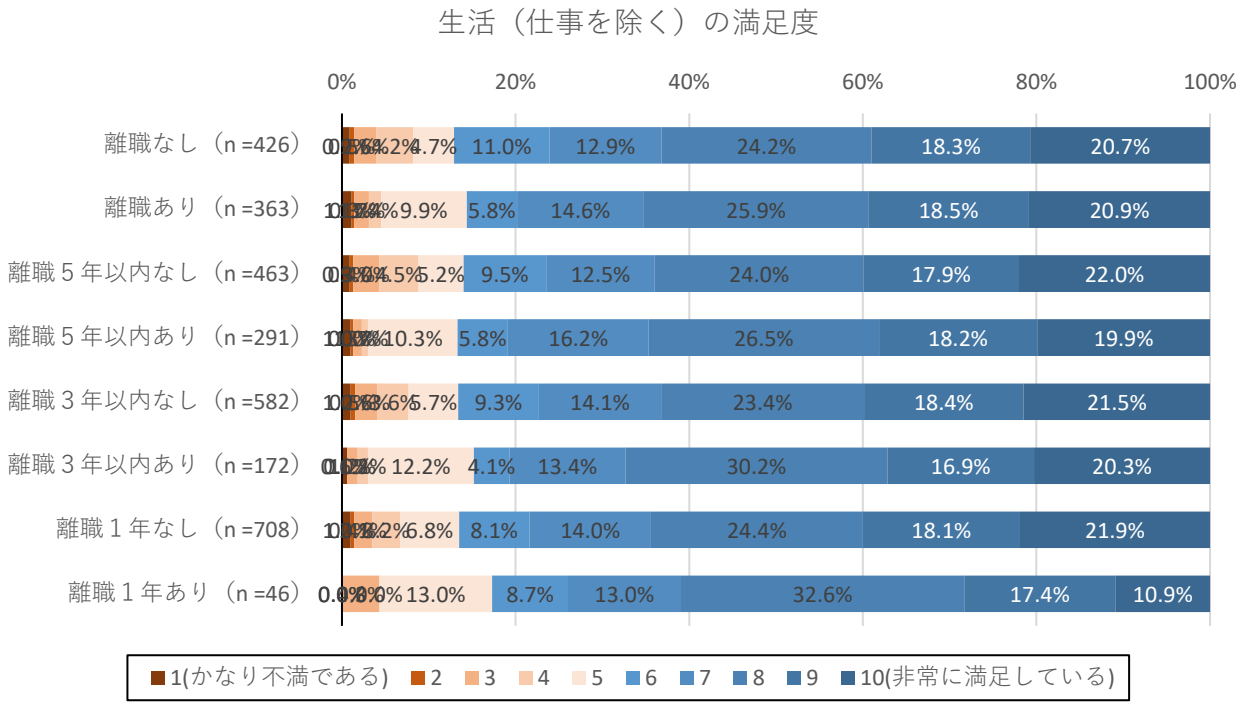


図３−49　生活（仕事を除く）の満足度

３－５．まとめ

本章では、卒業後の離職に関する分析を行った。第２節で離職関係の質問項目を整理し、第３節では入学・在学時に関する質問項目と離職・早期離職との関連を、第４節では卒業後に関する質問項目と離職・早期離職期間との関連を分析した。調査対象者は 2010 年度に学部入学した 2014 年度卒業生であり、2023 年１月１日時点の年齢は 32 歳が最も多かった。離職の有無や離職時期の質問項目を基に、離職の有無、卒業後５年以内の離職の有無、卒業後３年以内の離職の有無、卒業後１年での離職の有無、という区分を作成した。

在学・入学時の項目との関係として、大学の第一志望度では、１年で離職した者のみ、第一志望ではない割合が大きかった。学部第一志望度では、離職した者の方が、第一志望でない割合が大きく、特に１年で離職した者にこの傾向が顕著であった。本学の受験理由と関連して、特に顕著な傾向がみられたものとして、「勉強したい分野がその学部にあったから」は、１年で離職した者の場合は、この理由の割合が小さかった。また「就職に有利であると思ったから」や「将来の希望する職業分野を勉強できるから」という理由で受験を決めた者の方が、離職しない傾向にあった。そして「高校の先生や家族または塾などで勧められたから」は、特に１年で離職した者の方が、この理由の割合が大きかった。

中学３年や高校３年の成績は、全体的には「離職なし」の者の方が、成績が上の方の割合が大きかった。さらに高校時の学習行動には顕著な違いがみられた。「少し体調が悪かったり、休んでよい理由があっても、できるだけ毎日学校に通うよう努力した」、「学校で、自分が好きではない勉強にも全力で取り組んだ」、「なかなか成果が出なくてもあきらめずに、しっかり勉強を続けた」のいずれも、卒業後１年で離職した者は、「多かった」の割合がはっきりと小さかった。

在学時の学修行動では、専門科目、一般教育科目、ゼミ、卒論作成、部活・サークル、これらの主要な学修行動や活動について、１年で離職した者は、これらの活動に熱心に取り組んだ割合が、はっきりと小さかった。また１年で離職したものは、授業内容について、他の学生や教員と議論した経験があると回答した割合が小さく、また良い教員に巡り合えたという回答の割合も小さかった。全体的には「離職なし」の者の方が、できるだけ授業を休まないようにした、という割合が大きかった。

また特に１年で離職した者は、大学の後半（３～４年）では、特に相対的に成績が低かった。DP 関連の項目では、特に「自分の考えをわかりやすく表現できる」や「多様性を受け入れられる」では、離職した者の方が離職しない者よりも、身についた割合が大きかった。

一般教育科目の仕事への役立ちでは、離職しなかった者の方が、離職した者よりも、役立っている割合が大きく、特に卒業後１年で離職した者と、そうでない者の間に、顕著な違いがみられた。ゼミの仕事への役立ちでは、離職していない者の方が、離職した者よりも役立っている割合が大きく、また特に卒業後１年で離職しなかった者と、離職した者の違いが顕著であった。また現在の仕事の満足度は、１年で離職した者は、１年で離職しなかった者に比べて、顕著に低かった。そして仕事以外の現在の生活の満足度に関しても、１年で離職した者は、１年で離職しなかった者に比べて、顕著に低かった。

第４章　ゼミ・卒論についての在学時及び卒業後に関する分析

４―１．分析対象と概要

本章では、質問項目の特に「ゼミ」「卒業論文作成」に関する項目に着目し、その在学時の経験や卒業後の役立ち度に関する分析の結果を示していく。

2023 年度調査では、「ゼミ」「卒業論文作成」に関して次の二つの質問を設定している。第一に、「あなたは学部在学中において、次のような活動にどのくらい熱心に取り組んでいましたか」という質問に「１.経験しなかった　２.不熱心　３.やや不熱心　４.やや熱心　５.熱心」のリッカート式の５件法で回答する、在学時の取り組みに関する設問である。第二に、「あなたの学部時代の経験は、現在の仕事にどの程度役立っていますか。該当するものをお選びください。」という質問に、同様にリッカート式で「１.経験しなかった　２.まったく役に立っていない　３.あまり役に立っていない　４.やや役に立っている　５.かなり役に立っている」で回答する、卒業後の役立ち度に関する設問である。以上の設問によって、卒業後 10 年以上が経過した卒業生の、「ゼミ」「卒業論文作成」に関する、①当時の在学時の取り組みと②現在の役立ち度、という二つの観点からの回答を収集することができる。

本章では、この二つの「ゼミ」「卒業論文作成」に関する回答結果をもとに、「ゼミ」「卒業論文作成」の経験の有無や熱心な取り組みは在学時のどのような経験と関連しているのか、どのような回答者が現在の仕事に役に立っていると感じているのかなどについて明らかにしていく。この二つのテーマは、大学における学修成果や教育課程を捉える上でも重要なテーマである。例えば卒業論文については、学習院大学人文科学研究所の共同研究プロジェクト「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」[5]に代表されるように、大学教育の効果をめぐる議論の中で、その実証的な検証の必要性が提起されている。卒業論文の作成や、その基盤であり大学での特徴的な学修であるゼミという場での経験の有無の効果、その将来への役立ち度に着目することは、大学における教育課程やその意義を捉える上で重要なテーマであるといえるだろう。もっとも、本調査は卒業時点での調査ではないため回答の解釈には留意が必要であるが、「在学当時の取り組み」と「卒業後の現在の仕事への役立ち」という二つの観点から卒業生に尋ねることで、より多面的な観点から「ゼミ」「卒業論文作成」の分析を行うことができる。

前提として、上述した「ゼミ」「卒業論文作成」に関する二つの設問に対する 2023 年度調査での回答の傾向を確認しておくと、以下のような結果となった。

---

[5] 神田龍身・鶴間和幸・佐藤学・小島和男・篠田雅人・日下田岳史・谷村英洋・中世古貴彦・中野啓太（2015）「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習成果の検証」『学習院大学人文科学研究所人文叢書５』

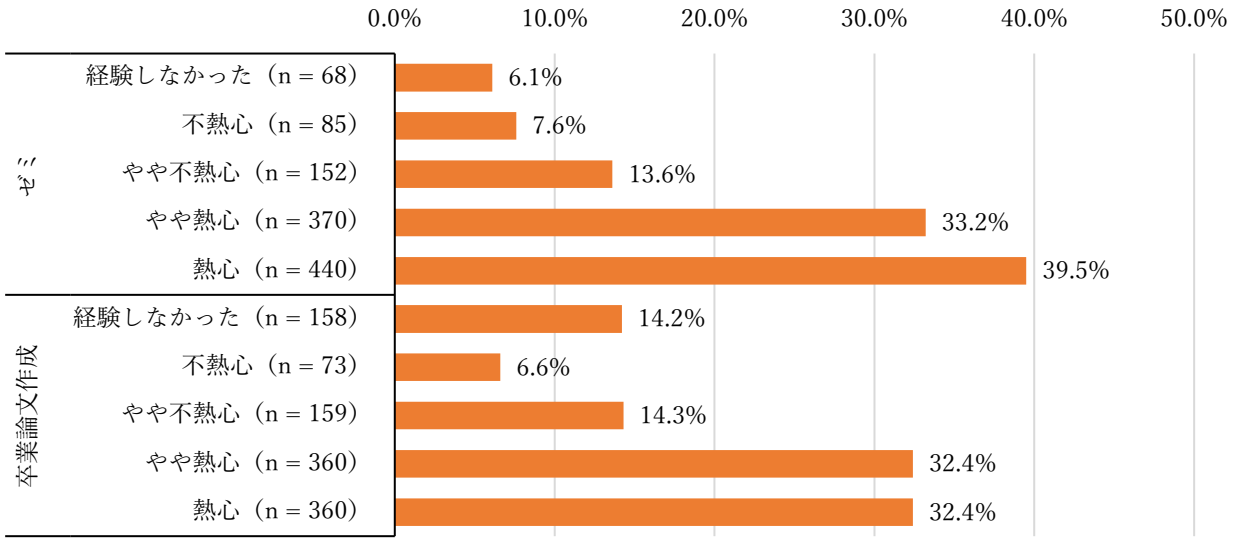


図４―１　在学中熱心な取り組み － ゼミ・卒業論文作成

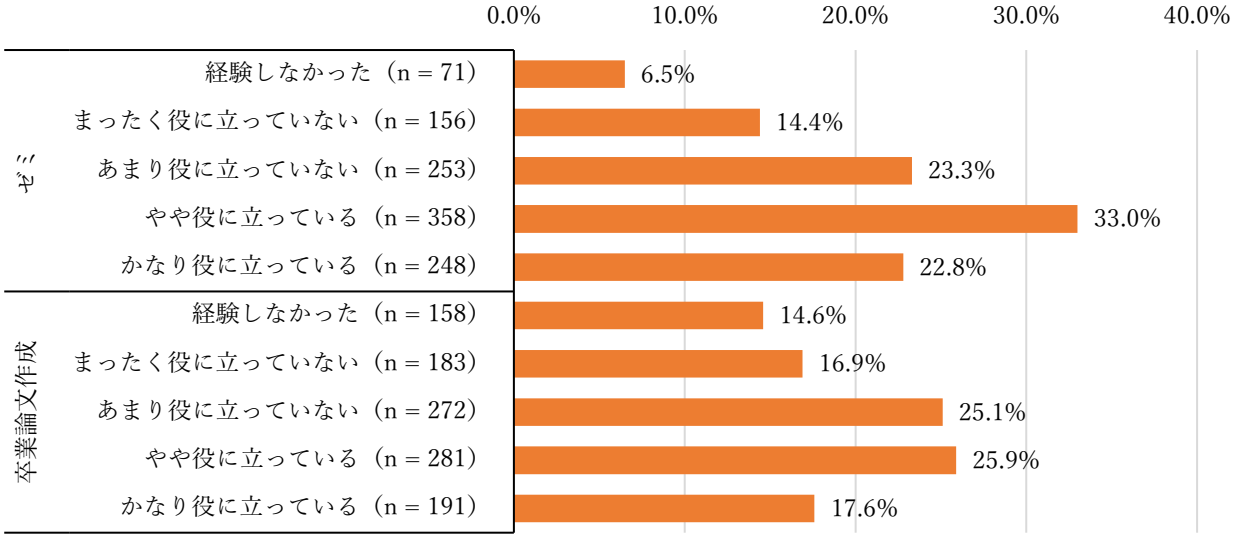


図４―２　現在の仕事への役立ち － ゼミ・卒業論文作成

全体の傾向としては、まず「経験しなかった」群は「ゼミ」でおおよそ６％程度、「卒業論文作成」では 14%程度となっており、９割程度の卒業生が「ゼミ」「卒業論文作成」を経験している。また、双方ともに、在学時の熱心な取り組みについて肯定的な回答は６割程度、否定的な回答は３割程度という結果となった。一方で、「現在の仕事への役立ち」という点については、肯定的な回答の割合はゼミで 55.8%、卒業論文作成で 43.5%であり、否定的な回答の割合とほぼ同値という結果となっている。在学時の取り組みの熱心度の差、そして現在の仕事への役立ちの差といった点は、肯定的な回答を示した群と、そうでない群で学修経験や学修成果を比較することで、さらなる理解が得られる可能性がある。また、そもそも「経験しなかった」回答者についても検討することも重要であるだろう。

以上の結果をふまえ、本章では大きく三つの観点から、「ゼミ」「卒業論文作成」に関する分析を行っていく。第一に、「ゼミ」「卒業論文作成」の「経験の有無」に基づく分析である（４―２）。すなわち、在学時に「ゼミ」「卒業論文作成」を経験したか否かという点は、在学時のどのような学修経験と関連しているのかについて確認する。次に、在学時における「熱心さ」に基づく分析を行う（４―３）。具体的には、在学時の「ゼミ」「卒業論文作成」の「熱心さ」別の「身についた資質・能力」（DP）の回答を示す。そして第三に、在学時から卒業後に目を向け、「ゼミ」「卒業論文作成」の「現在の仕事への役立ち度」に基づく分析を行う（４―４）。後述するように、この回答項目は回答者の「現在の仕事」と結びついた項目である。そこで、本調査で尋ねている回答者の「現在の業種」などの項目との関連性にも着目しながら、「ゼミ」や「卒業論文作成」が「現在の仕事に役立っている」と回答している回答者の傾向を示す。

以上の分析を通して、卒業生の在学時・卒業後におけるゼミ・卒業論文作成の経験とその関連について、多面的な観点から検討することを試みる。なお、卒業後 10 年以上を経た上での調査に回答している学生であるため、回答傾向の解釈には留意する必要がある。

４―２．ゼミ・卒業論文作成と学修経験

まず本節では、ゼミ・卒業論文作成の経験の有無による、在学時の学修経験の傾向の差を示していく[6]。なお、「在学時に熱心に取り組んだこと―ゼミ」の項目において、「経験あり」の合計は 93.9%（n = 1047）、「経験しなかった」は 6.1%（n = 68）であった。また、同じ項目の「卒業論文作成」では「経験あり」の合計は 85.7%（n = 952）、「経験しなかった」は 14.6%（n = 158）となった。以下、在学時の学修経験ごとのクロス表を参照し、各回答の傾向を確認する。

まず、在学時の経験として「図書館を利用した」「読書（漫画や雑誌を除く）をした」について確認すると（図４―３・４―４）、「読書（漫画や雑誌を除く）をした」では「ゼミ」の経験の有無によってやや差はあったものの（61.8%＜79.8%）、それ以外の項目についてはさほど大きな差はみられなかった。

一方で、明確に差がみられた項目も存在した。まず、授業中の具体的な行動について、「自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表したりした」「授業内容について、他の学生と議論した」「授業内容について、教員と議論した」の３つの学修経験は顕著に差がみられた（図４―５・４―６・４―７）。特に、「自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表したりした」「授業内容について、他の学生と議論した」については、ゼミ・卒業論文作成ともに「経験なし」群の肯定的な回答は３割から４割程度である一方で、「経験あり」群は６割ほどが肯定的な回答を示すという結果となった。特に前者はゼミで 31.7%（34.3%＜66.0%）、卒業論文作成で 37.5%（31.9%＜69.4%）の差がみられた。また、「授業内容について、教員と議論した」についても、特にゼミの経験の有無において 26.3%（20.6%＜46.9%）の差がみられた。これらの項目では「あてはまる」単独の差が顕著に大きい点も特徴的である。

また、国際性に関する学修経験（図４―８・４―９）では、「語学の授業以外で、外国語で議論や発表

[6] 本節では、「在学時に熱心に取り組んだこと―ゼミ／卒業論文作成」の項目で「経験しなかった」と回答した回答者を「経験なし」群として対象とした。

をした」において、ゼミの「経験あり」群は「なし」群と比較して肯定的な回答の割合が 15.8%高かった（7.5%＜23.3%）。「留学生と一緒に学んだ」については、他の項目と比較するとさほど差はみられない。

「授業の一環として大学外で学んだ（フィールドワーク等）」（図４―10）については、ゼミ・卒業論文作成ともに「経験あり」群の方が「なし」群よりも肯定的な回答が 20%程度高いという結果となった。早稲田大学ではカリキュラム・ポリシーとして「演習・ゼミや双方向型の授業を主体とする学生参画型対話型教育」に加えて「フィールドワークも活用したプロジェクト型教育」などの推進を掲げているが、こうした座学とは異なる授業経験の有無についての関連も示唆される。

授業への姿勢については、「できるだけ授業を休まないようにした」（図４―11）はゼミ・卒業論文作成ともに「経験あり」群が「なし」群よりも肯定的な回答が 20%～25%程度高かった。また、「よい教員に巡り合えた」（図４―12）はとりわけ顕著な傾向な傾向を示した。「ゼミ」では「経験なし」群が 48.6%に対し「経験あり」群は 80%が肯定的な回答をしており、また「あてはまる」単独の割合の差も顕著に大きい（16.2%＜44.9%）。「ゼミ」という場が学生にとって「よい教員」と感じられる教員と学ぶ機会に寄与している可能性が示唆される。「卒業論文作成」でも「経験あり」群が 22.1%高い（58.9%＜81.0%）という結果となった。

以上の結果をふまえると、「ゼミ」「卒業論文作成」は、「自身でテーマを決め研究」し、それを他者と「議論」し「発表する」といった、双方向的な学修経験と結びついていることがうかがえる。また、そうした経験と関連して、大学外で学ぶ経験や、よい教員と巡り合うといった経験についても関連が大きいと推測できる。

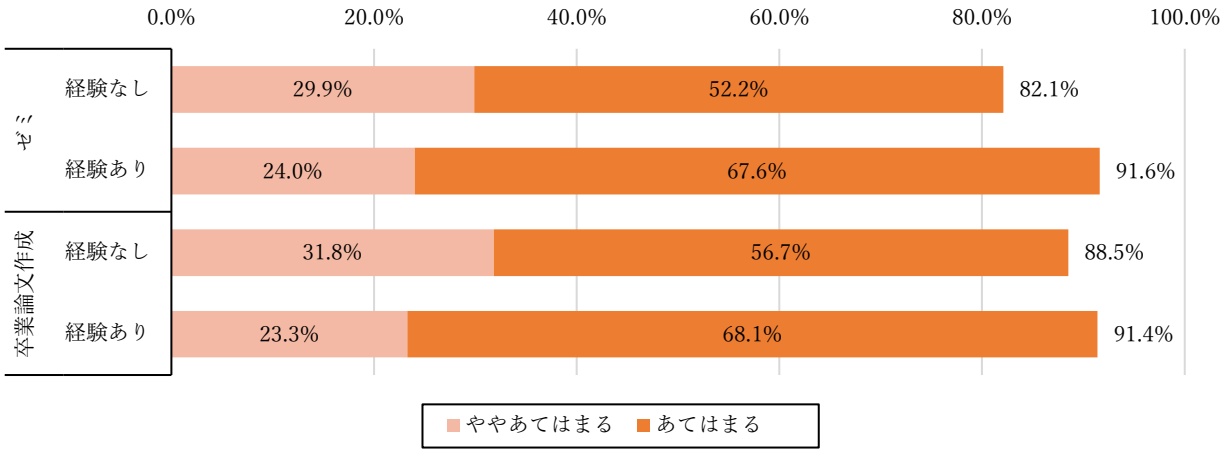


図４―３　在学時経験有無別―図書館を利用した

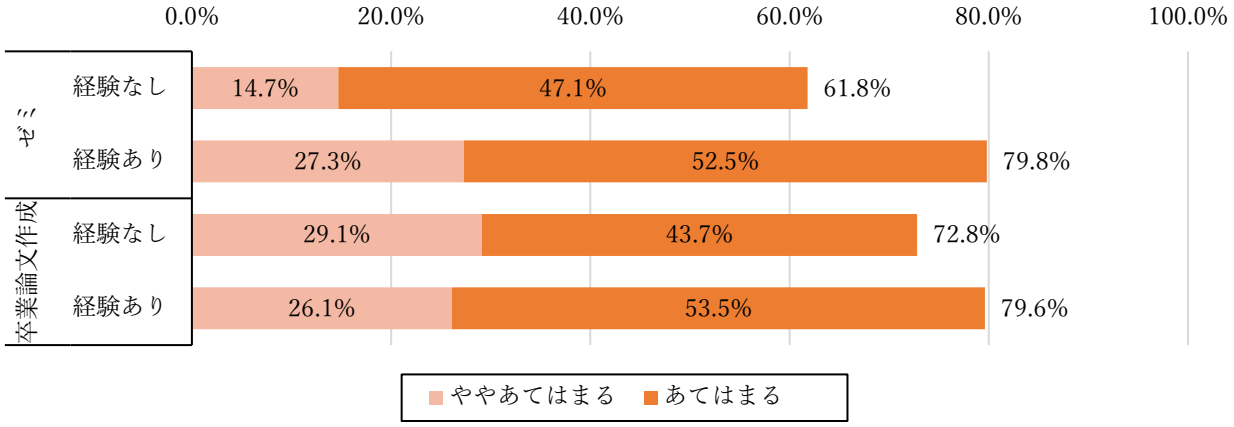


図４―４　在学時経験有無別―読書（漫画や雑誌を除く）をした

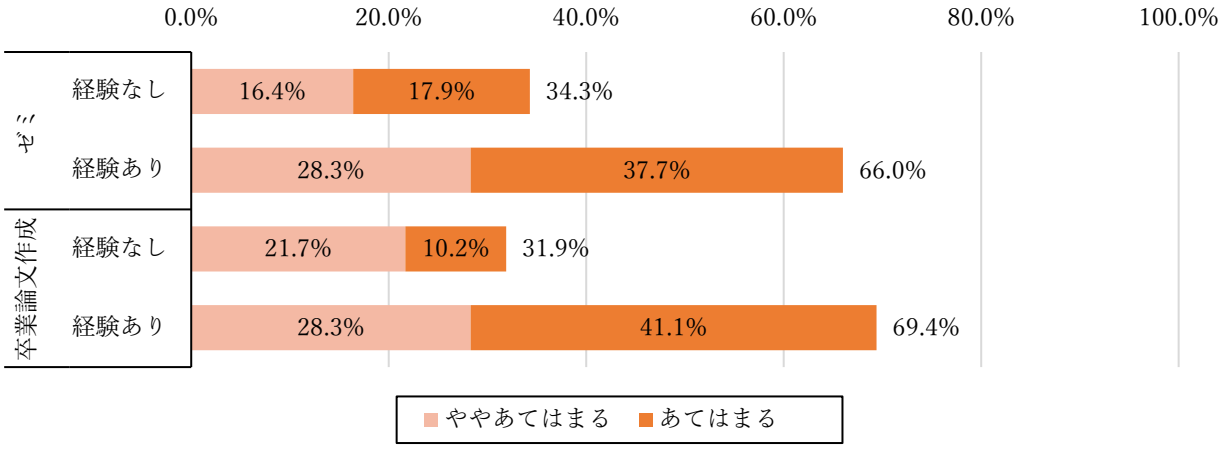


図４―５　在学時経験有無別―自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表したりした

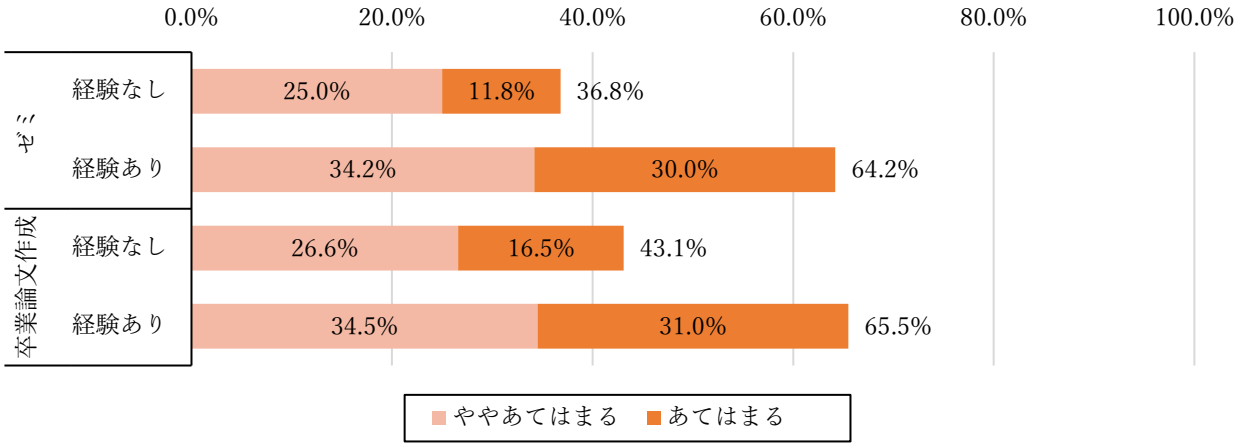


図４―６　在学時経験有無別―授業内容について、他の学生と議論した

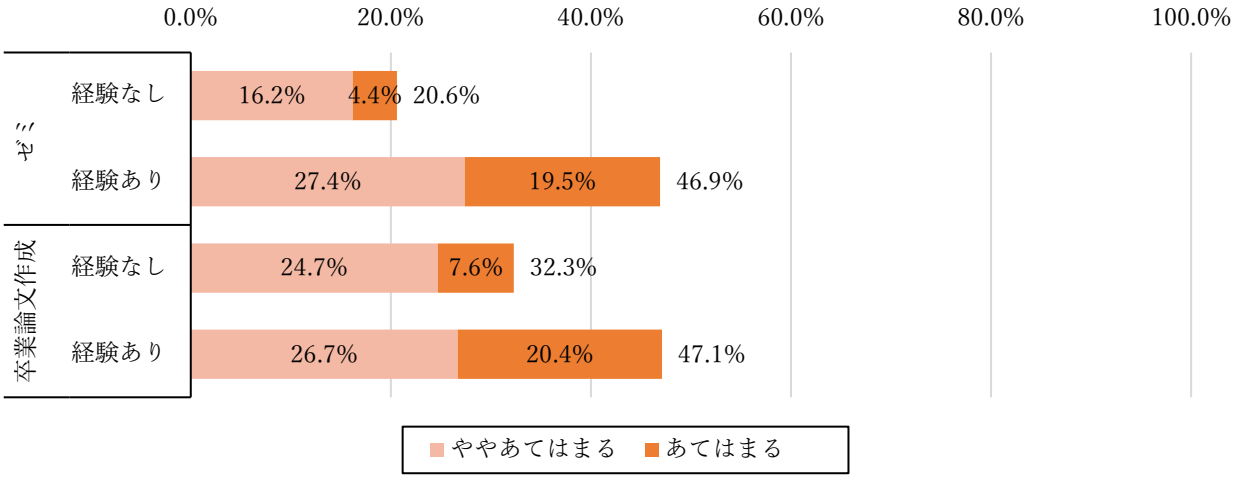


図４―７　在学時経験有無別―授業内容について、教員と議論した

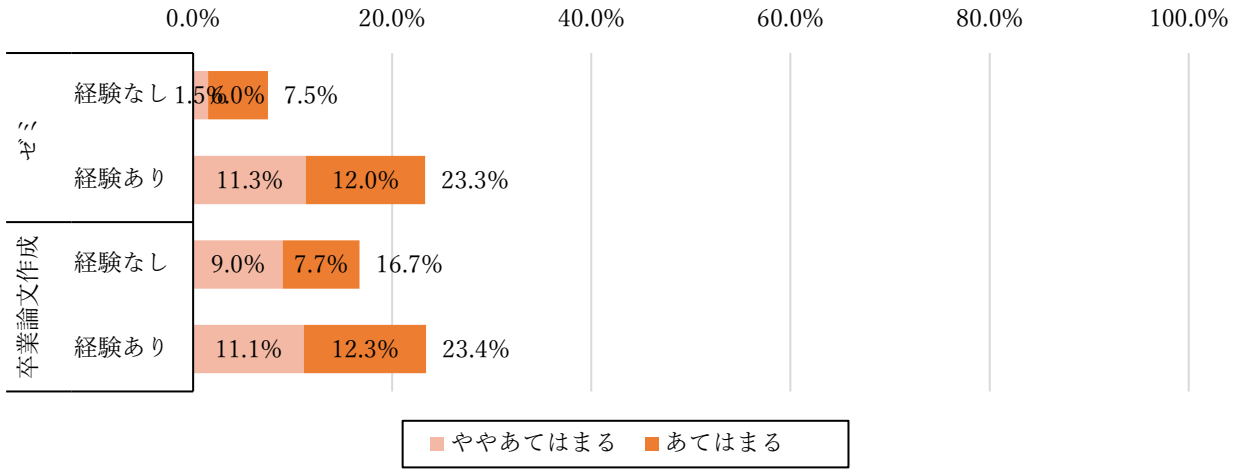


図４―８　在学時経験有無別―語学の授業以外で、外国語で議論や発表をした

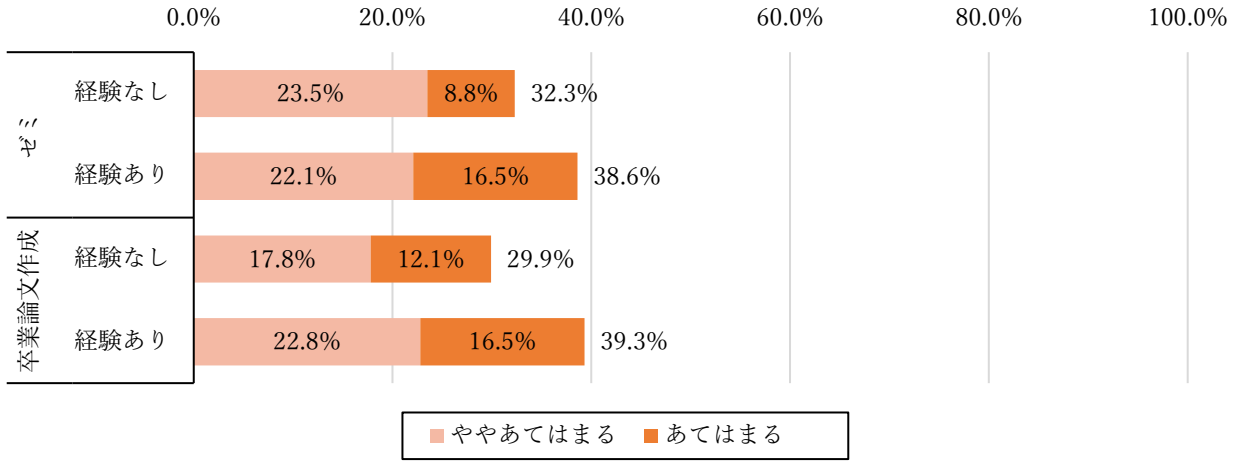


図４―９　在学時経験有無別―留学生と一緒に学んだ

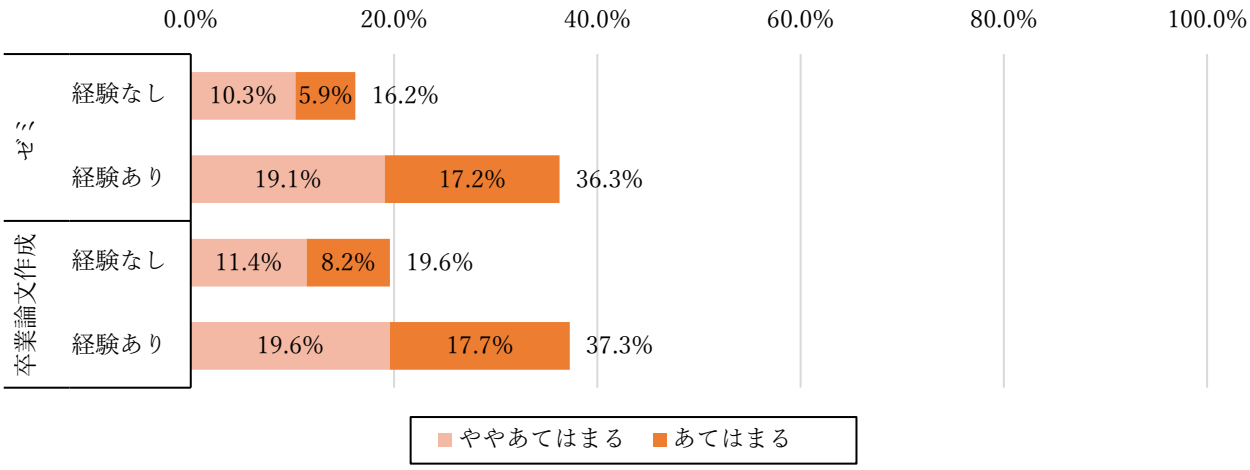


図４―10　在学時経験有無別―授業の一環として大学外で学んだ（フィールドワーク等）

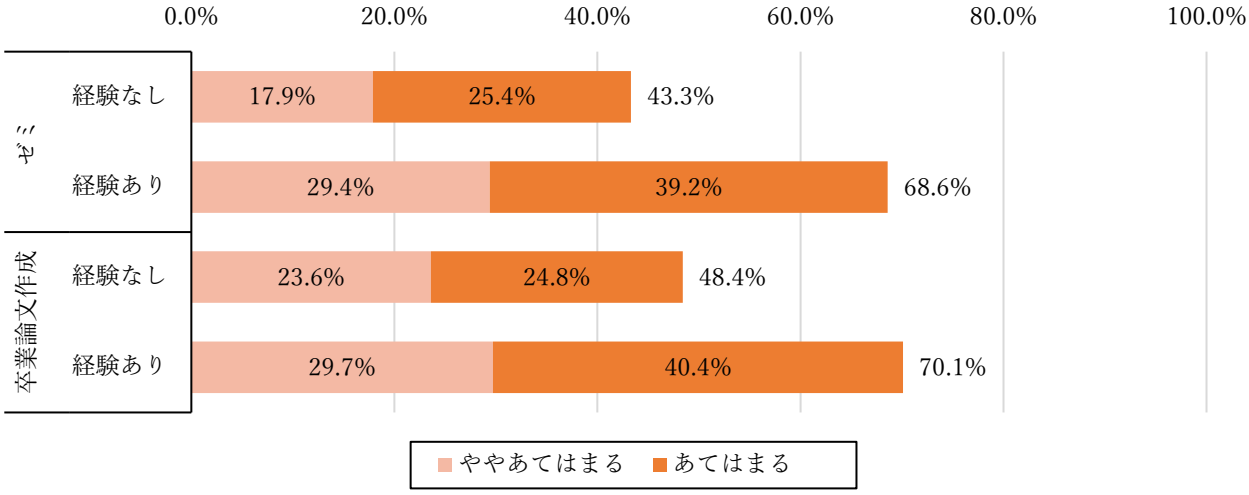


図４―11　在学時経験有無別―できるだけ授業を休まないようにした

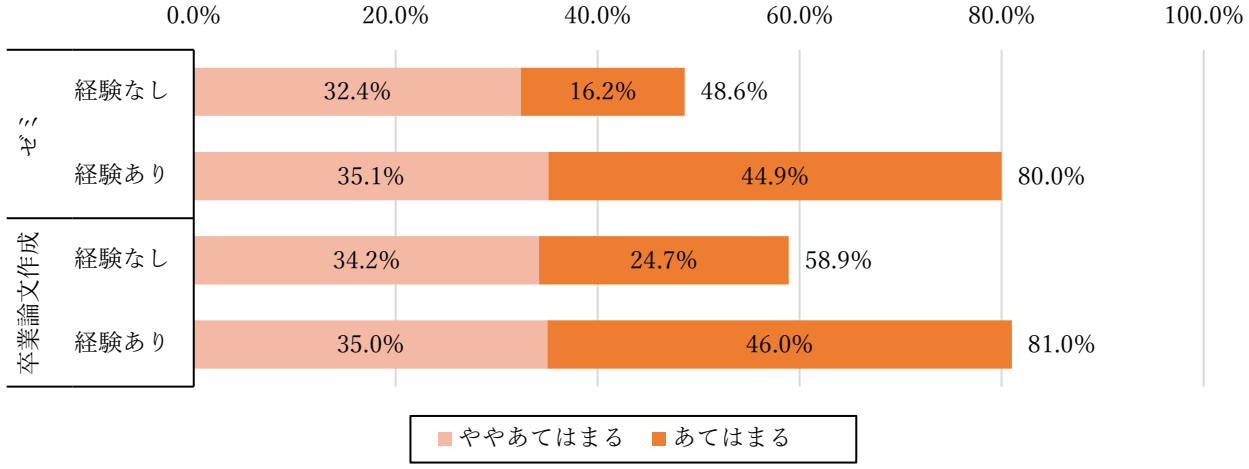


図４―12　在学時経験有無別―よい教員に巡り合えた

４―３．在学時の熱心度と学修成果

前節では、ゼミ・卒業論文作成の経験の有無によって、在学時の「学修経験」はどのように異なるのかについて確認した。次節ではこの結果をふまえ、上述したような学修経験の関連が示唆されるゼミ・卒業論文作成への「在学時の取り組みへの熱心さ」によって、卒業時に身についたと感じる「学修成果」はどのように異なるのかについて確認していく。

早稲田大学では、ディプロマ・ポリシーにおける「本学で学ぶ学生が身につける能力や素養」として「構想・構築力」「問題発見・解決力」「コミュニケーション力」「健全な批判精神」「自律と寛容の精神」「国際性」の６つの学位授与方針を掲げている。前節のような学修経験を特徴とする「ゼミ」「卒業論文作成」に在学時に熱心に取り組んだ経験は、卒業時のこうした能力や素養の修得とどのような関連があるのだろうか。

本調査では、「あなたは学部在学中において、次のような活動にどのくらい熱心に取り組んでいましたか。」という質問項目を設定しており、「１.経験しなかった　２.不熱心　３.やや不熱心　４.やや熱心　５.熱心」の５件法で回答する形式となっている。以下、「ゼミ」「卒業論文作成」のそれぞれにおいて、この項目に対する回答ごとに群を分け、学修成果に関する質問項目である「早稲田大学の学部で次のようなことをどの程度身につけましたか」に対する回答傾向を示す。

まず、「既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる」（図４―13、４―14）を確認すると、ゼミ・卒業論文作成ともに「熱心」と回答した群において、「まあまあ身についた」「身についた」の肯定的な回答の割合が 80.3％と相対的に高い。回答傾向としては熱心度が上がるにつれて肯定的な回答は少しずつ上昇していく。ただし、「やや熱心」の回答群では、「やや不熱心」や「経験しなかった」群と肯定的な回答の割合にさほど大きな差はない。

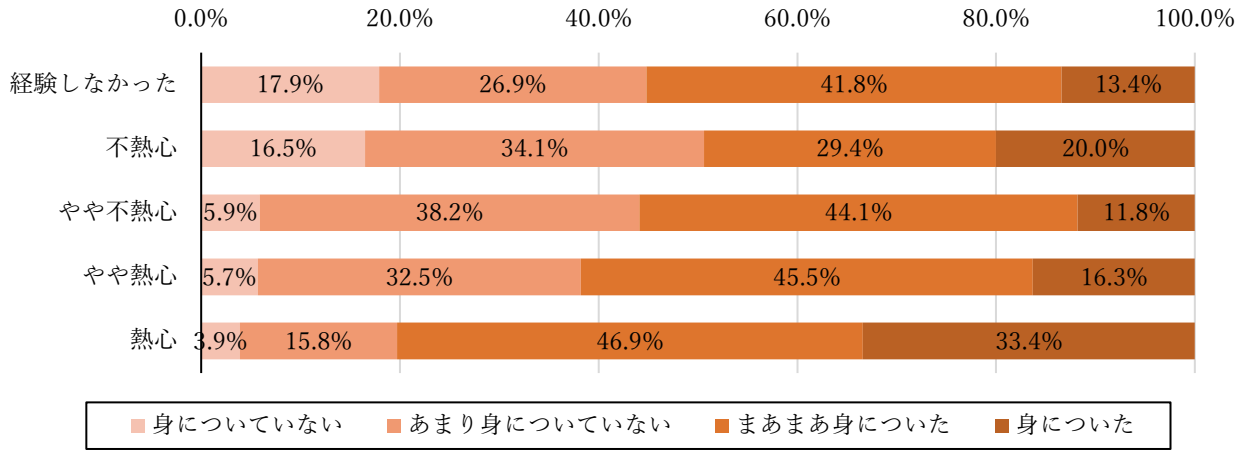


図４―13　「ゼミ」熱心度別：学部で身につけたもの＿既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる

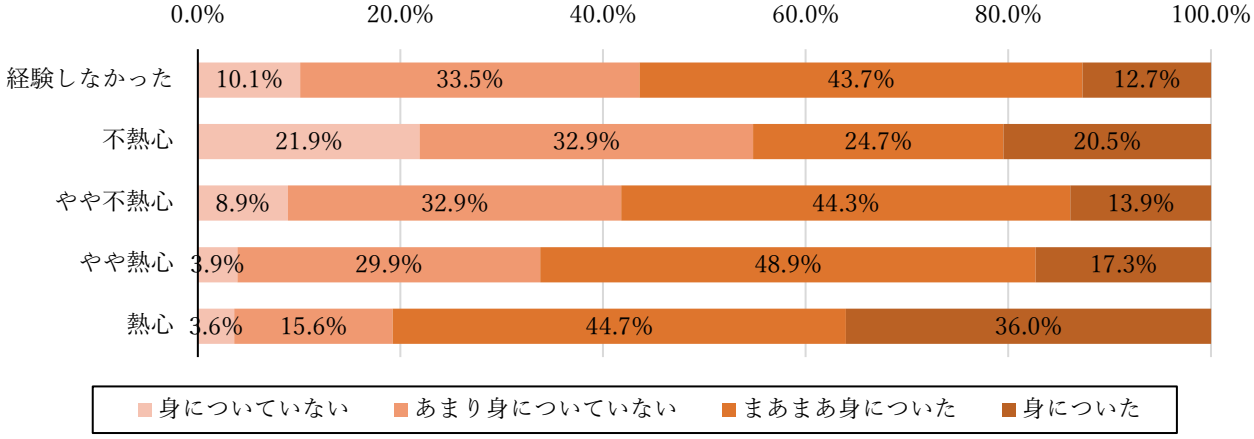


図４―14　「卒業論文作成」熱心度別：学部で身につけたもの＿既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる

次に、「問題発見・解決力」の項目として「物事を論理的に考えることができる」（図４―15、４―16）、「課題の解決方法を提案できる」（図４―17、４―18）の二つの項目をみると、ゼミ・卒業論文作成ともに前項と同様に熱心度が上がるにつれ少しずつ上昇している。また、「身についた」単独の割合は、「熱心」と回答した群がそれぞれ相対的に顕著に高い傾向を示し、それ以外はほぼ横並びという結果となった。

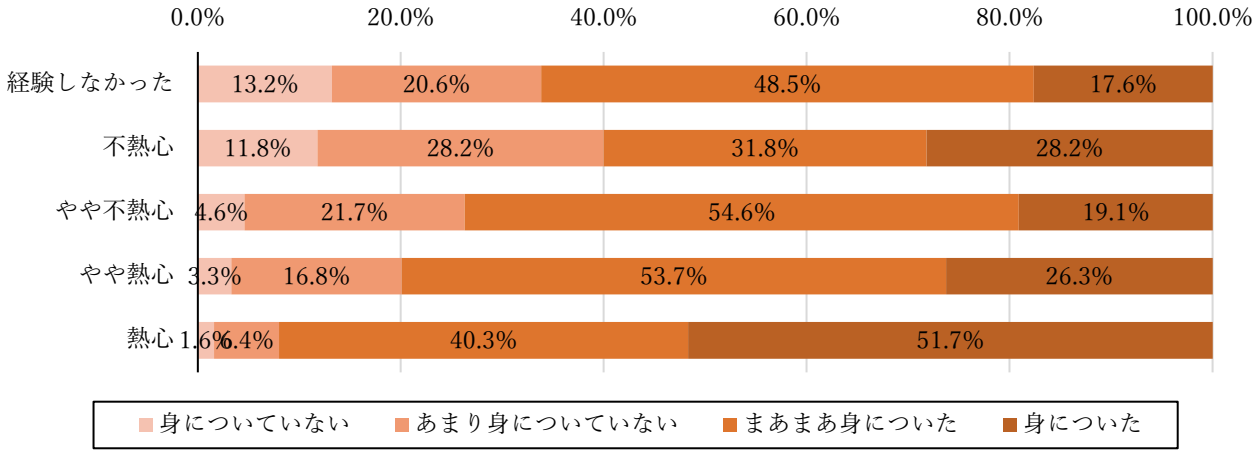


図４―15　「ゼミ」熱心度別：学部で身につけたもの＿物事を論理的に考えることができる

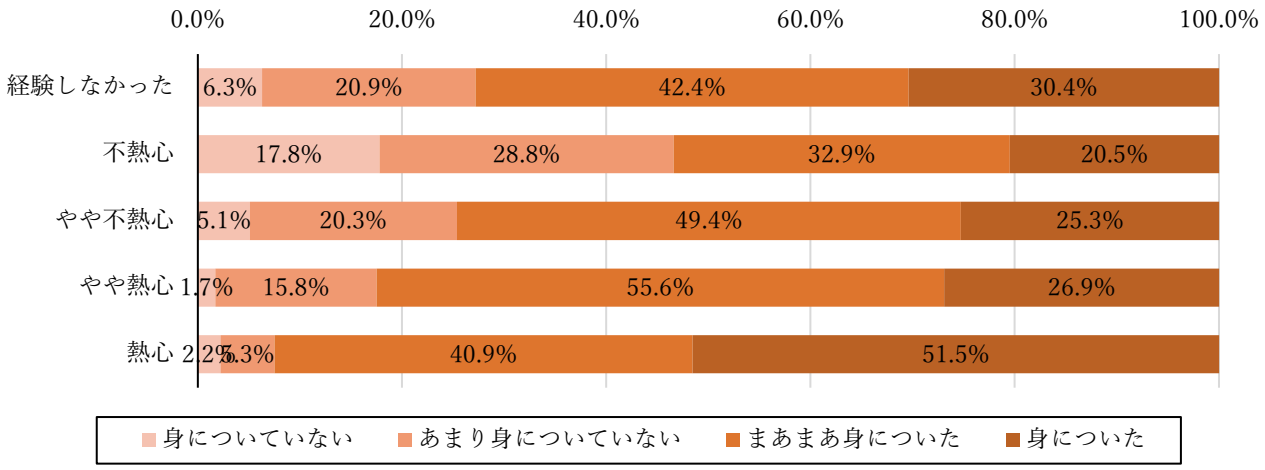


図４―16　「卒業論文作成」熱心度別：学部で身につけたもの＿物事を論理的に考えることができる

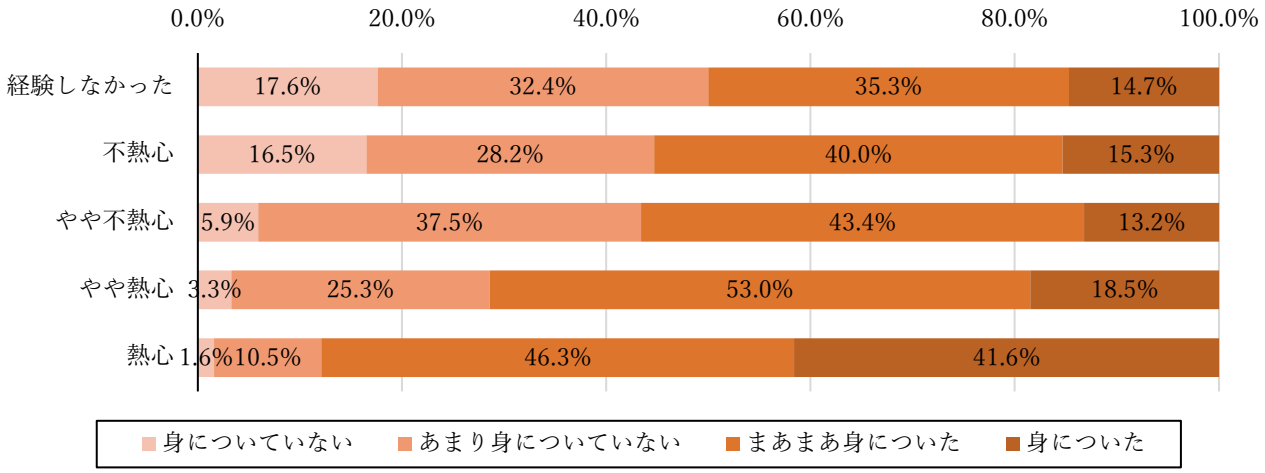


図４―17　「ゼミ」熱心度別：学部で身につけたもの＿課題の解決方法を提案できる

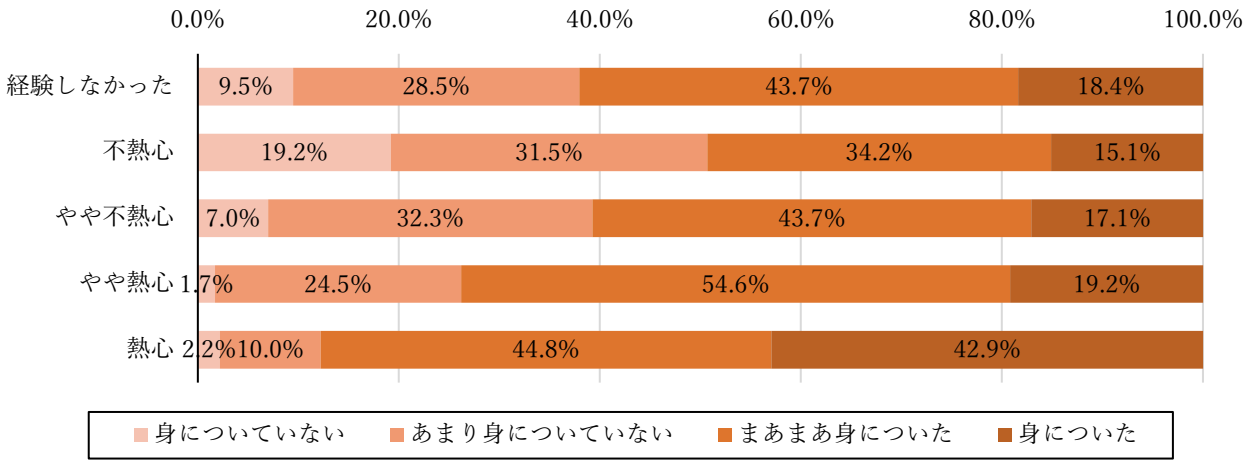


図４―18　「卒業論文作成」熱心度別：学部で身につけたもの＿課題の解決方法を提案できる

次に「コミュニケーション力」の項目として「自分の考えを分かりやすく表現できる」（図４―19、４―20）、「相手の状況や考え方を尊重できる」（図４―21、４―22）が挙げられる。これらの項目を確認すると、前項までと同様に、「熱心さ」に対する肯定的な回答になるにつれ、「まあまあ身についた」「身についた」の肯定的な回答の割合が上昇した。また、全体を通して、「身についた」単独の割合は「熱心」と回答した群が相対的に顕著に高い傾向を示した。

一方で、「相手の状況や考え方を尊重できる」は全体的に肯定的な回答の割合が高かった。「不熱心」「やや不熱心」群においても肯定的な回答の割合は７割～８割ほどを占めている。

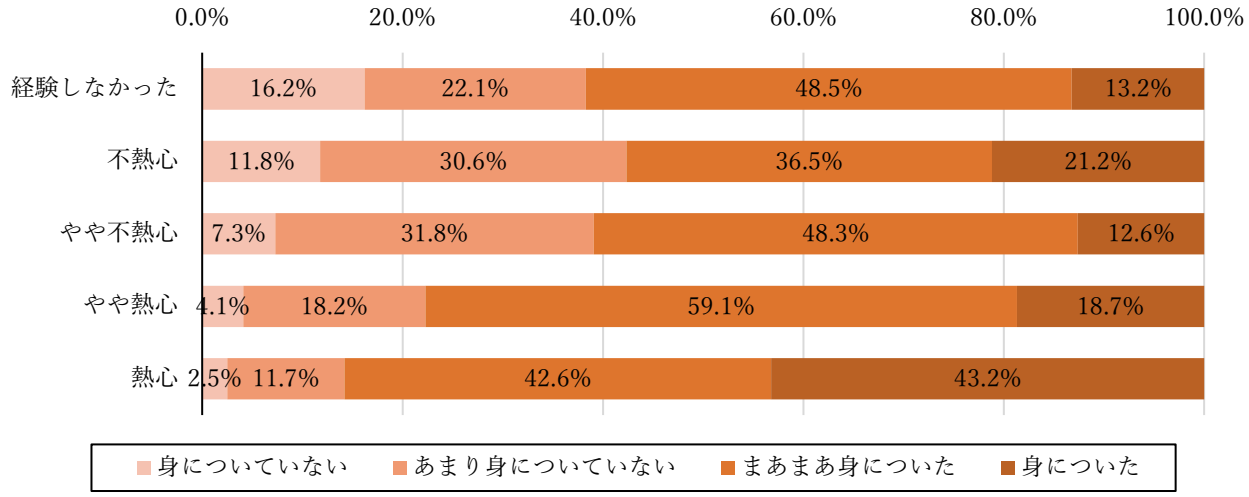


図４―19　「ゼミ」熱心度別：学部で身につけたもの＿自分の考えを分かりやすく表現できる

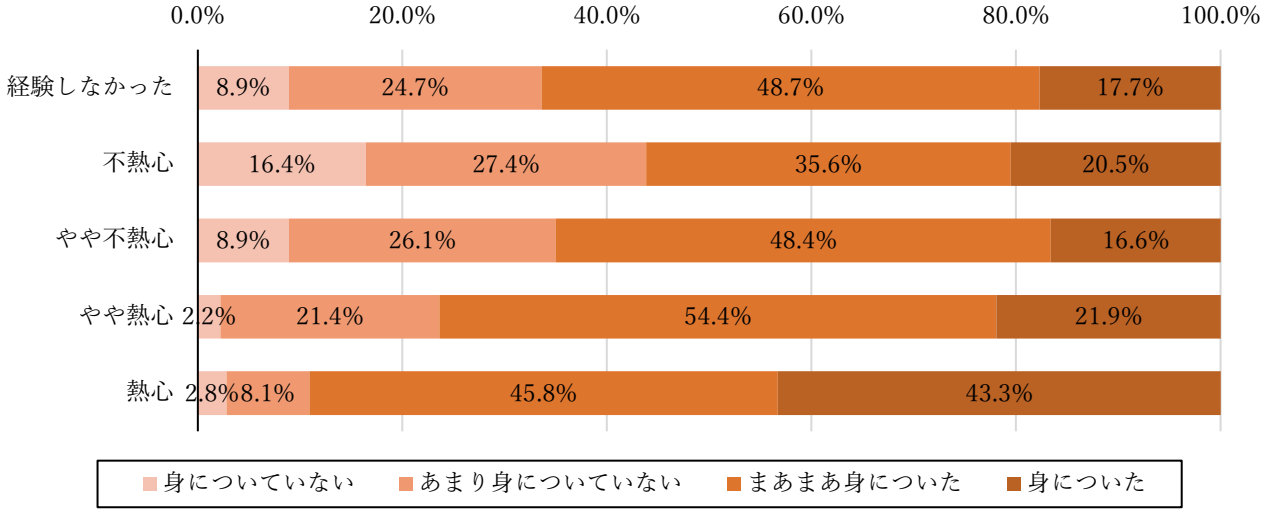


図４―20　「卒業論文作成」熱心度別：学部で身につけたもの＿自分の考えを分かりやすく表現できる

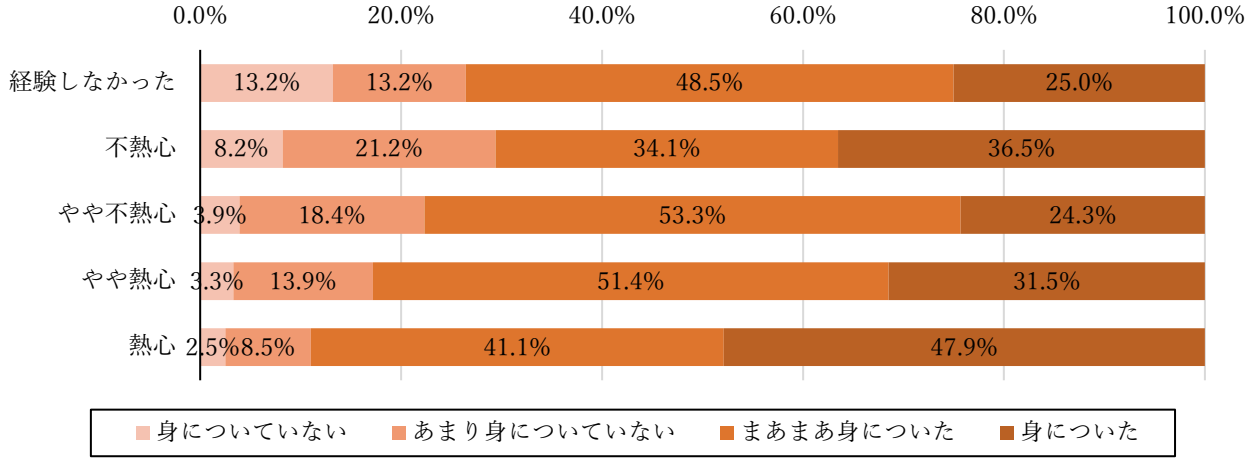


図４―21　「ゼミ」熱心度別：学部で身につけたもの＿相手の状況や考え方を尊重できる

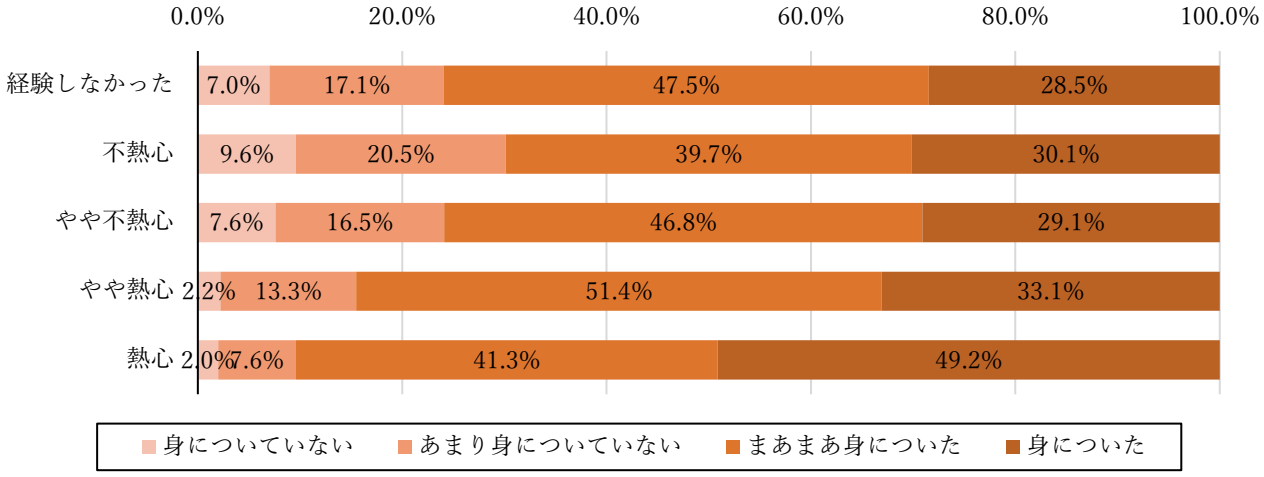


図４―22　「卒業論文作成」熱心度別：学部で身につけたもの＿相手の状況や考え方を尊重できる

次に「健全な批判精神」の項目として「物事を多面的に考えることができる」（図４―23、４―24）「健全に批判することができる」（図４―25、４―26）の二つの項目を確認すると、双方ともに「熱心」の度合いが高まるにつれ、修得度についても肯定的な回答の割合が高い傾向にあった。

とりわけ、「物事を多面的に考えることができる」では「熱心」と回答した群の肯定的な回答の割合はゼミで 92.2%、卒業論文作成で 93.8%であり、「身についた」単独の割合もそれぞれ相対的に高い傾向を示した（ゼミ 55.9%・卒業論文作成 56.8%）。

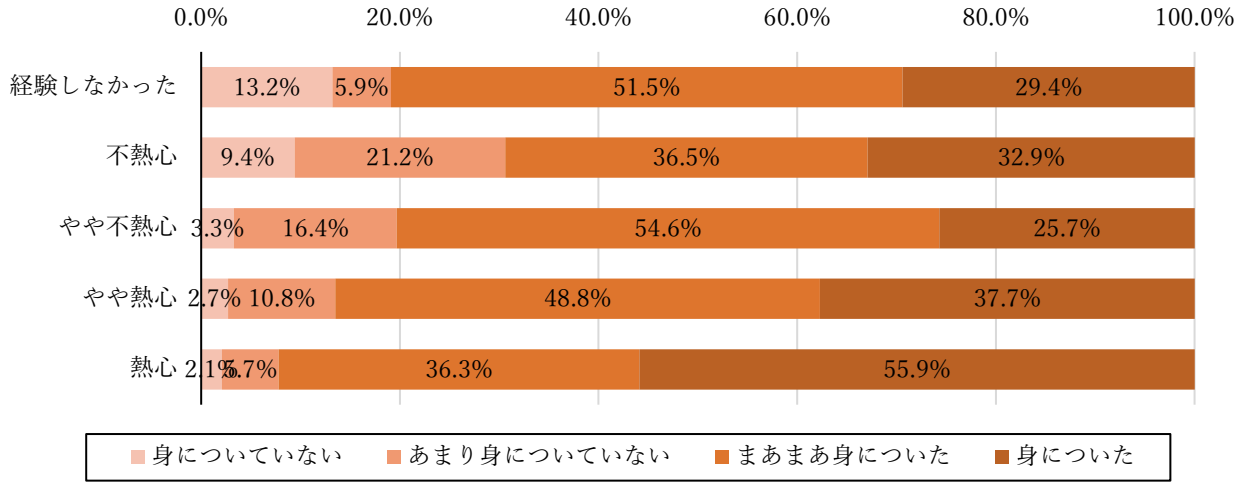


図４―23　「ゼミ」熱心度別：学部で身につけたもの＿物事を多面的に考えることができる

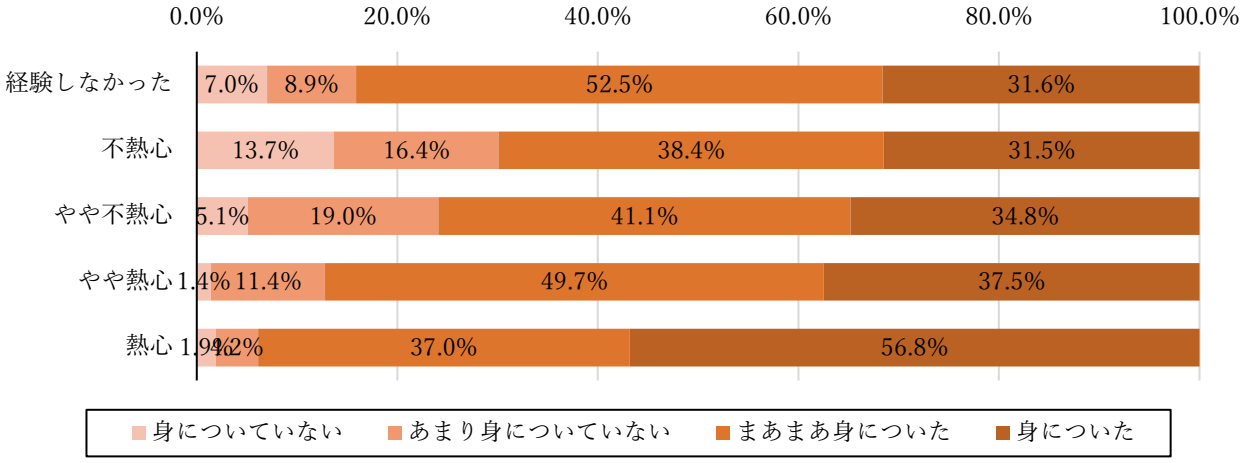


図４―24　「卒業論文作成」熱心度別：学部で身につけたもの＿物事を多面的に考えることができる

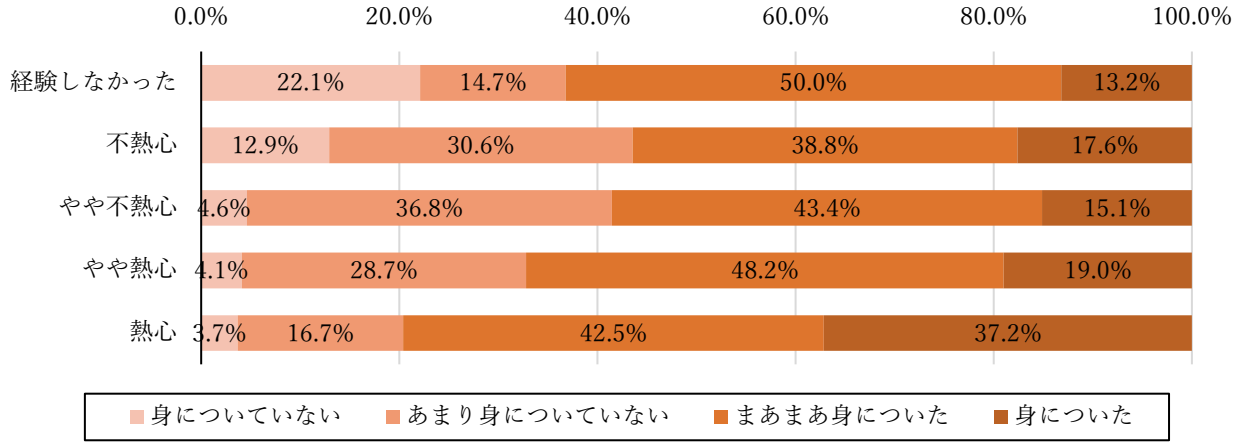


図４―25　「ゼミ」熱心度別：学部で身につけたもの＿健全に批判することができる

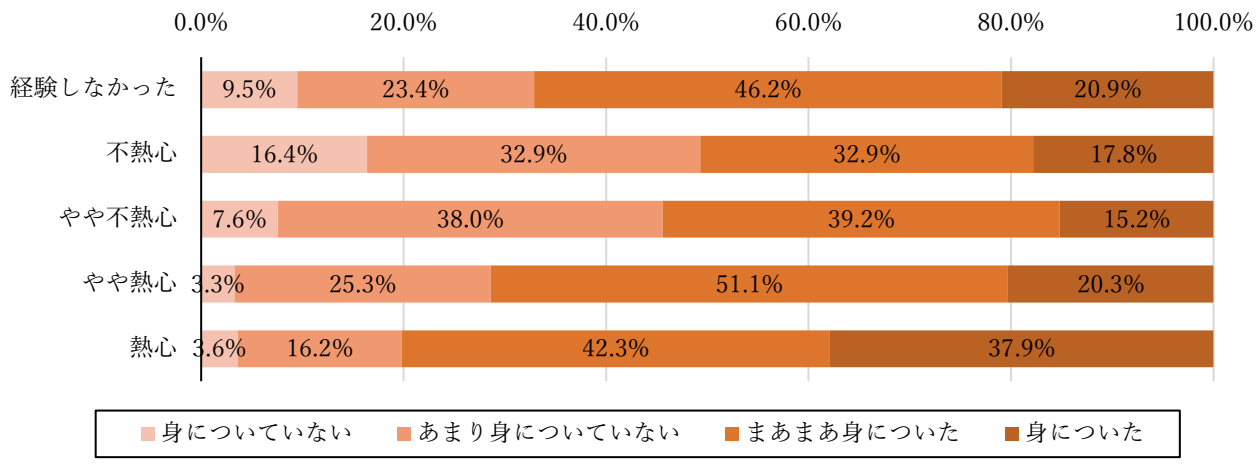


図４―26　「卒業論文作成」熱心度別：学部で身につけたもの＿健全に批判することができる

一方で、「自律と寛容の精神」「国際性」の項目についてみると、これまでの傾向と比較すると、相対的に「熱心さ」別にさほど大きな差はみられない。「多様性を受け入れられる」（図４―27、４―28）、「異文化を理解できる」（図４―29、４―30）については、そもそも回答者全体を通して肯定的な回答の割合が高いこともあり、大きな差はみられなかった。「外国語を理解し、話せる」（図４―31、４―32）については全体的に肯定的な回答の割合が低く、「身についた」の割合にやや差はあるものの、これまでの傾向と比較すると全体でさほど大きな差はみられない。

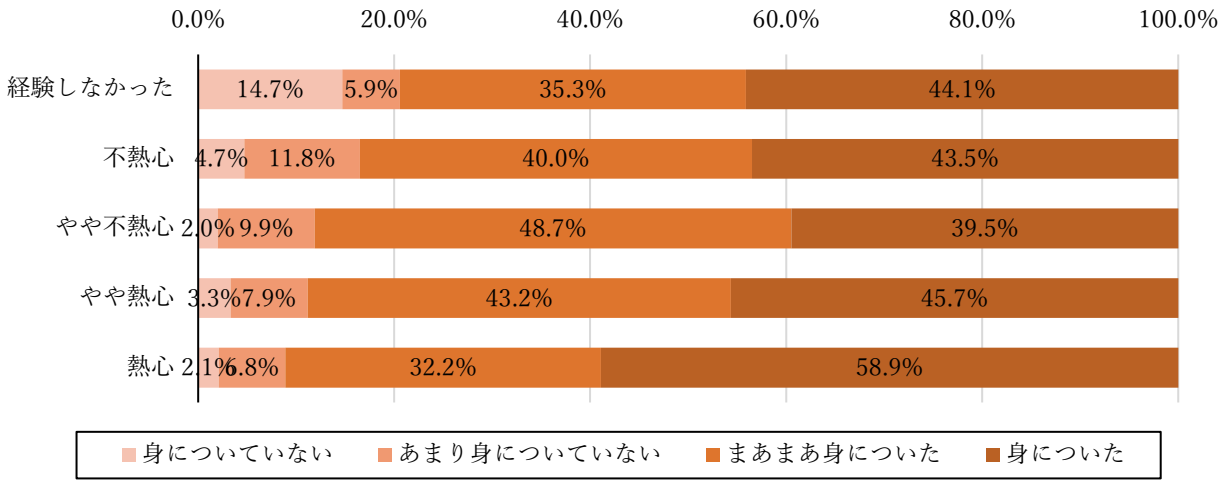


図４―27　「ゼミ」熱心度別：学部で身につけたもの＿多様性を受け入れられる

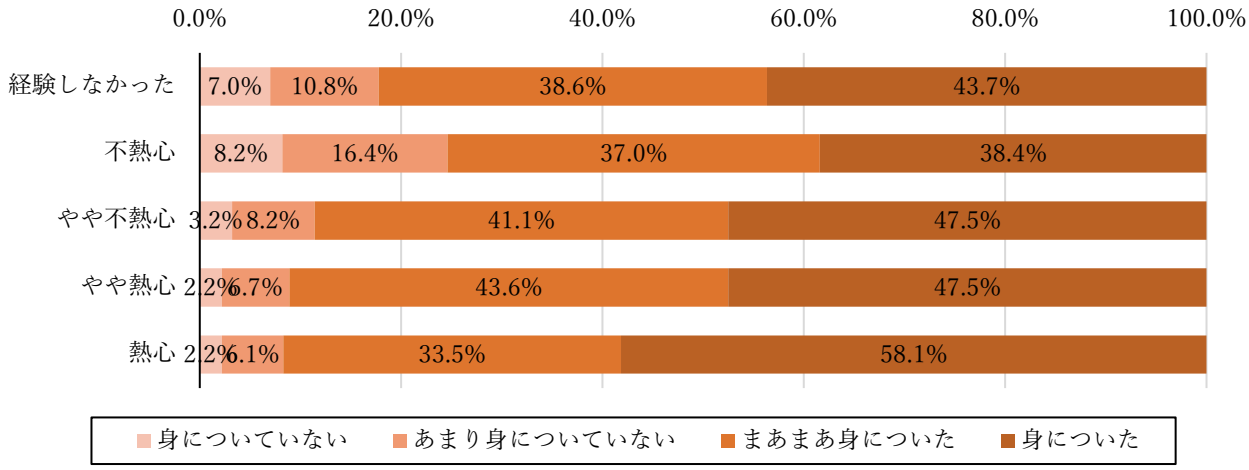


図４—28　「卒業論文作成」熱心度別：学部で身につけたもの__多様性を受け入れられる

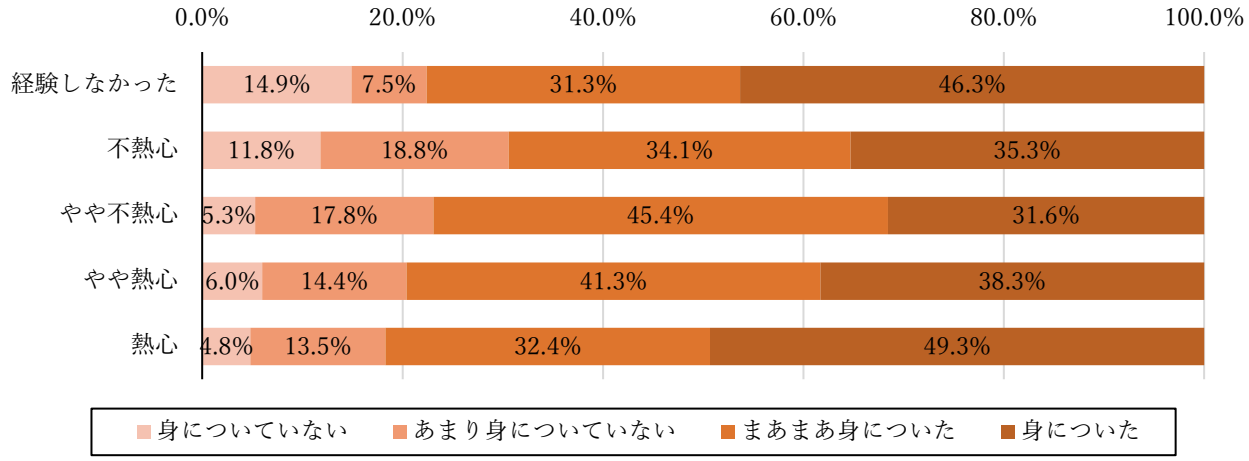


図４—29　「ゼミ」熱心度別：学部で身につけたもの__異文化を理解できる

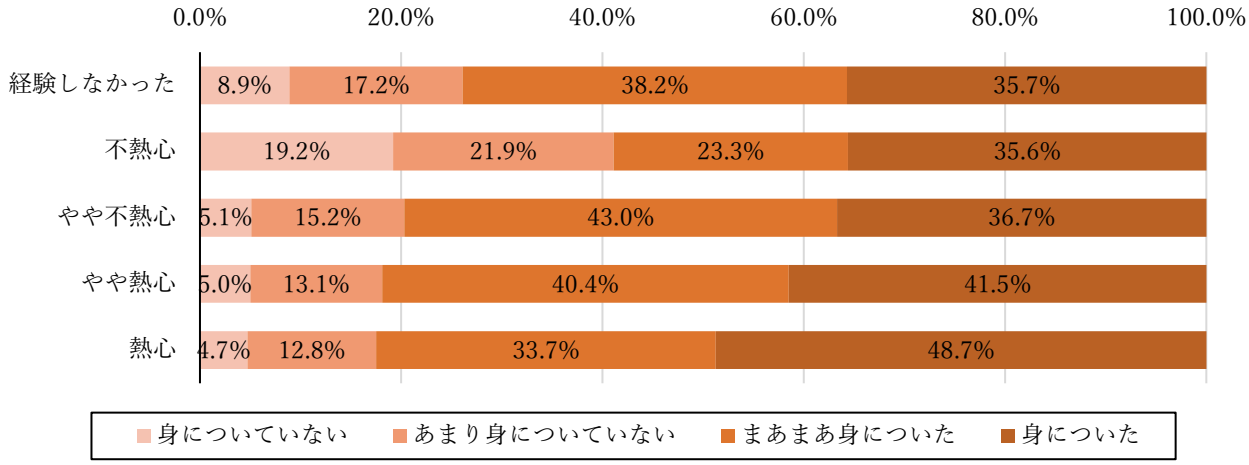


図４—30　「卒業論文作成」熱心度別：学部で身につけたもの__異文化を理解できる

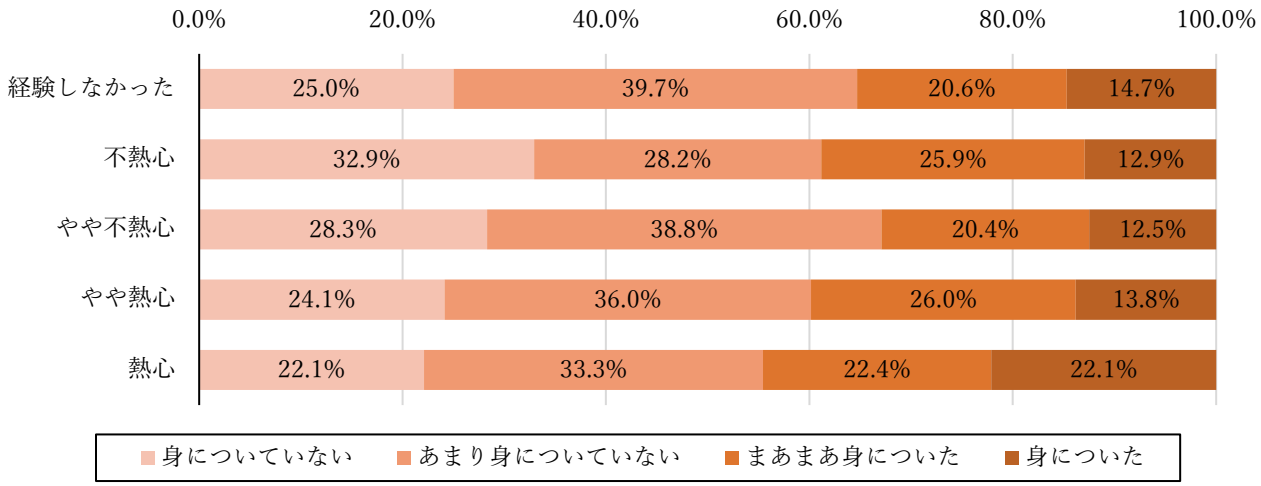


図４―31　ゼミ熱心度別：学部で身につけたもの＿外国語を理解し、話せる

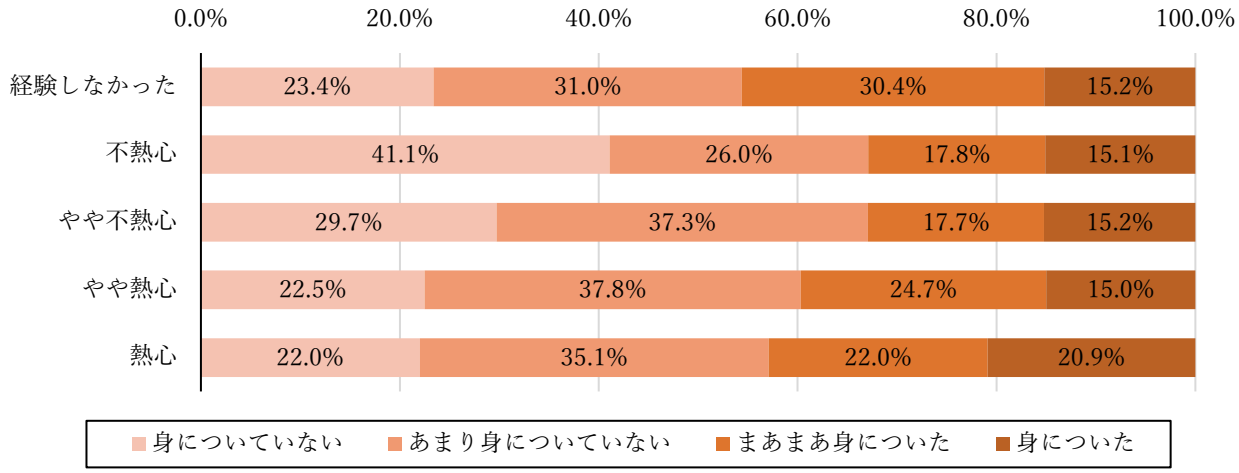


図４―32　「卒業論文作成」熱心度別：学部で身につけたもの＿外国語を理解し、話せる

最後に「専門性」について、「自身の専門に関する知識」への回答を確認すると（図４―33、４―34）、顕著な傾向がみられた。特に「不熱心」と回答した群と「熱心」と回答した群の差が大きく、肯定的な回答の割合は、ゼミで 46.9%（43.5%＜90.4%）、卒業論文作成で 51.9%（39.7%＜91.6%）という大きな差があった。このように、「熱心」と回答した群の肯定的な割合が非常に高く、一方で「不熱心」と回答した群の肯定的な回答の割合が顕著に低い。また、「身についた」単独の割合も「熱心」と回答した群ではゼミで 50.1%、卒業論文作成で 52.5%と他の熱心度と比較して相対的に顕著に大きく、ゼミの経験が専門性の修得と関連していることがうかがえる。

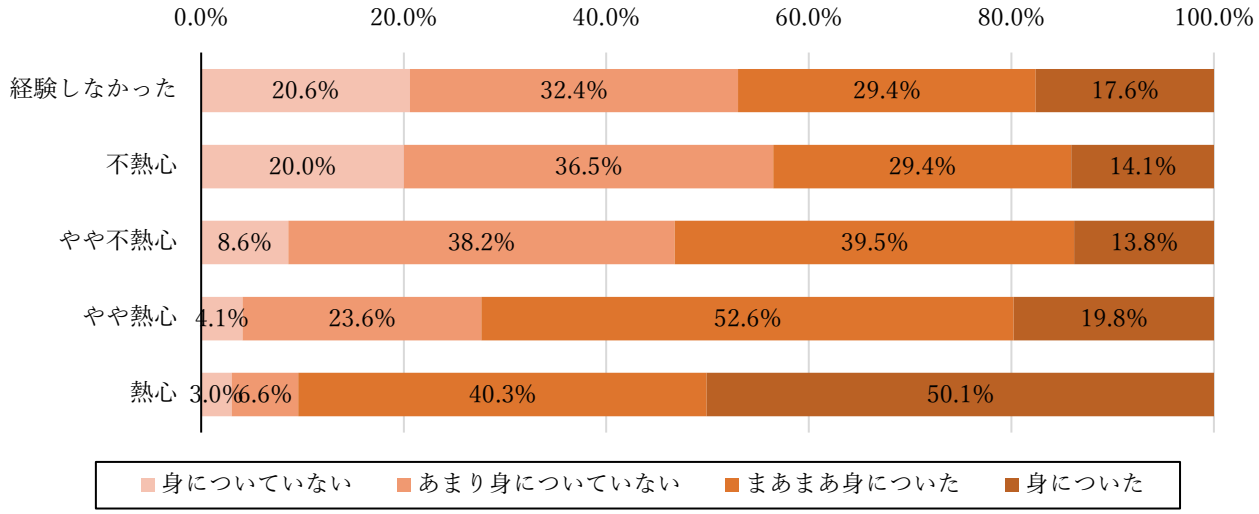


図４―33　「ゼミ」熱心度別：学部で身につけたもの＿自身の専門に関する知識

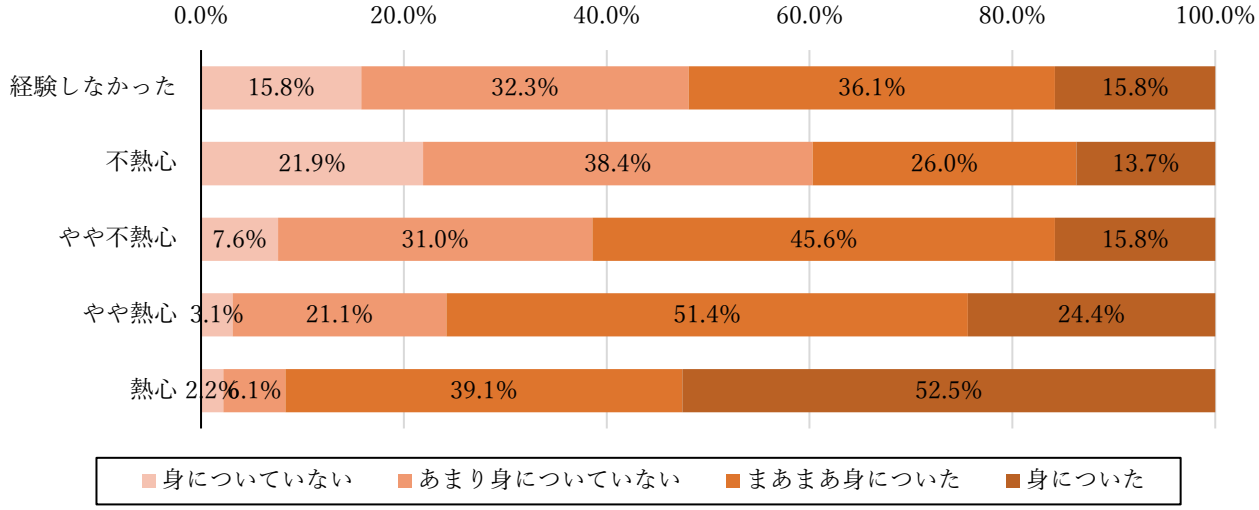


図４―34　「卒業論文作成」熱心度別：学部で身につけたもの＿自身の専門に関する知識

以上の結果をふまえると、「ゼミ」「卒業論文作成」に熱心に取り組んだ経験をした卒業生の回答傾向として、特に「問題発見・解決力」「コミュニケーション力」「健全な批判精神」「自身の専門に関する知識」といった学修成果において、とりわけ「熱心」群とそうではない群とのあいだに差がみられた。こうした結果は、前節でみたようなゼミ・卒業論文作成に関連が示唆された、問題や課題を発見し、そのテーマを批判的に検討して他者に発信する、といった双方向的な学修経験と関連があるのかもしれない。一方で、「自律と寛容の精神」「国際性」に関連する項目は、全体的に肯定的な回答の割合が高く、熱心度による差はさほどみられなかった。

４―４．ゼミ・卒業論文作成と現在の仕事への役立ち度

４―４―１．分析の概要と基礎的な分析結果

前節までの検討を通して、ゼミ・卒業論文作成の経験の有無別の在学時の学修経験（第２節）、ゼミ・卒業論文作成への在学時の熱心度別の学修成果（第３節）を示してきた。ここまでの在学時の経験に関する検討をふまえ、本節では、卒業後の「現在」に焦点を当てた検討を行う。

以下、「あなたの学部時代の経験は、現在の仕事にどの程度役立っていますか。該当するものをお選びください。－ ゼミ／卒業論文作成」の質問項目への回答結果をもとに分析を行っていく。なお、本節では、ゼミ・卒業論文作成の「現在の仕事への役立ち度」の検討にあたって、この回答に影響を与えることが予測される二つの項目をふまえて分析を行う。第一に、在学時に行った「進路選択で重視したこと」（４―４―２）、そして第二に回答者の「現在の職種」（４―４―３）である。これらの項目は回答者の「現在の仕事」に関連する項目であるため、分析の前提として確認しておく。この前提をふまえ、在学時にどのような進路選択を行い、卒業後にどのような進路に進んだ卒業生が、ゼミや卒業論文作成の役立ち度に肯定的な回答をしているのかについて示す。

まず基礎的な集計結果として、p.64 にて示した「ゼミ」「卒業論文作成」の「現在の仕事への役立ち」に対する回答結果を再掲した（図４―35）。「やや役に立っている」「役に立っている」の肯定的な回答の割合はゼミで 55.8%、卒業論文作成で 43.5%であった。およそ半数の回答者が「役に立っている」と回答する一方で、否定的な回答の割合もゼミで 37.7%、卒業論文作成で 42.0%みられるなど、回答傾向にはばらつきがみえる。

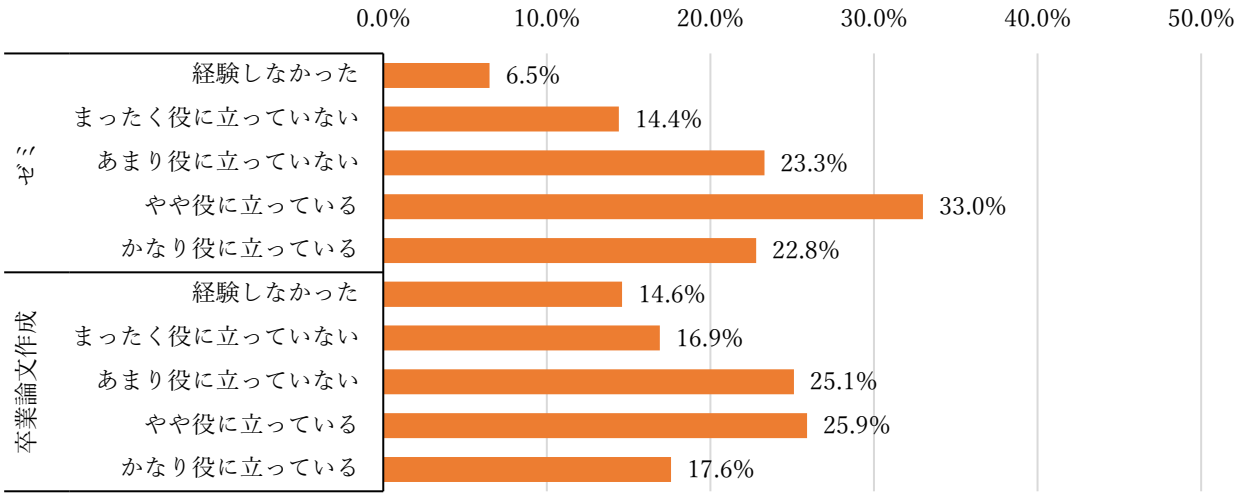


図４―35 現在の仕事への役立ち － ゼミ・卒業論文作成（図４―２を再掲）

次に、２節で検討してきたゼミと卒業論文作成の「在学時の熱心度」別に、それぞれにおける「現在の仕事への役立ち度」について肯定的な回答の割合の比較を行うと、以下のようになった（図４―36、４―37）。ゼミでは「熱心」と回答した群の肯定的な回答の割合は 80.1%、卒業論文作成で 73.6%となり、「不熱心」「やや不熱心」群とは大きく差がひらくという結果となった。

とりわけ顕著な特徴として、ゼミ・卒業論文作成ともに「不熱心」「やや不熱心」群の「かなり役に立っている」の回答割合がきわめて低い。「熱心」群の「かなり役に立っている」の割合の高さ（ゼミ：46.4%、卒業論文作成：41.5%）と比較すると、相対的に顕著な傾向が見て取れる。

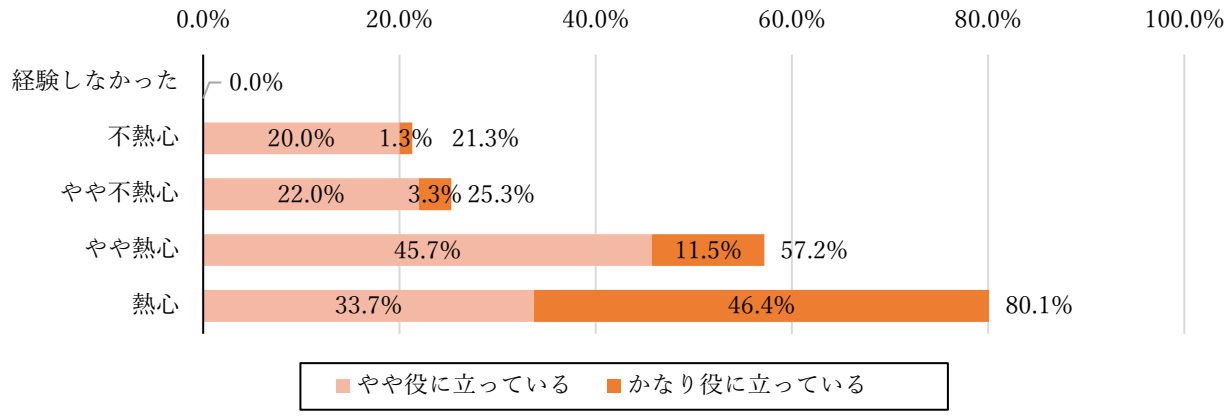


図４―36 「ゼミ」熱心度別：現在の仕事への役立ち（ゼミ）

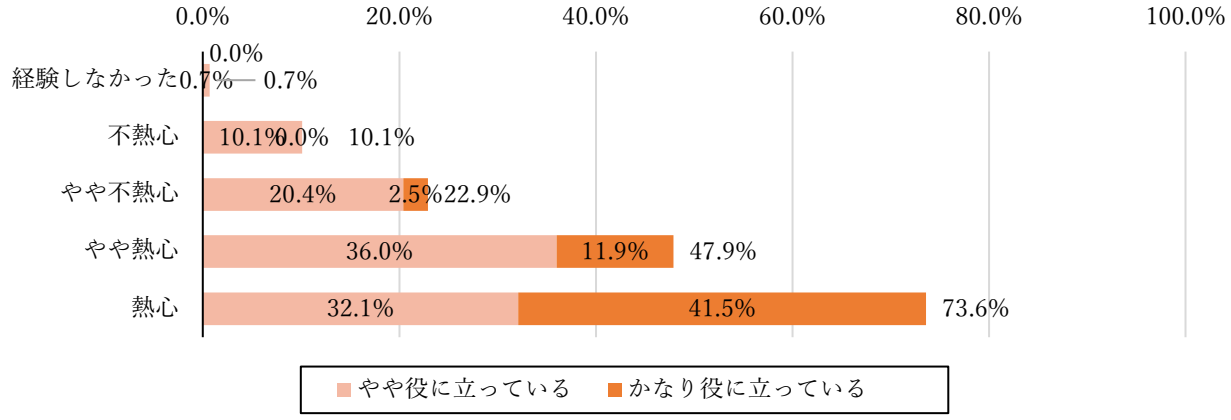


図４―37 「卒業論文作成」熱心度別：現在の仕事への役立ち（卒業論文作成）

４―４―２．進路選択時重視したこと別：現在の仕事への役立ち度

次に、回答した卒業生の「進路選択時に重視したこと」と現在の仕事への役立ち度について検討していく。本調査では「就職先を決定するに当たって最も重視したことは何ですか。該当するものを一つだけお選びください」という教示文のもと、12 の選択項目を設定し回答する質問項目を設定している。各項目の度数を図４―38 に示した。回答者数にばらつきがあるため、本節では母数の関係上、「大学での専門分野との関連」（$n=168$）、「業種」（$n=380$）、「地域条件（勤務地・転勤の有無など）」（$n=60$）、「知名度やイメージ」（$n=111$）、「安定性」（$n=96$）、「給与」（$n=63$）、「その他」（$n=59$）に着目し分析する。

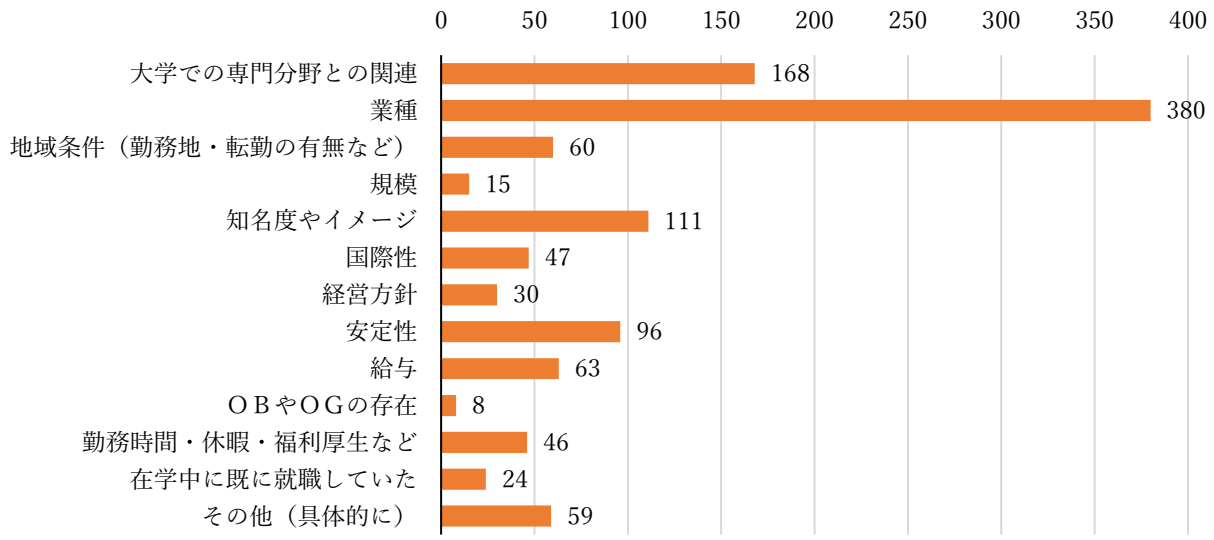


図４―38　就職先を決定するに当たって最も重視したこと：回答者数

この項目ごとに「ゼミ」「卒業論文作成」の回答結果の傾向を確認すると（図４―39、４―40）、「ゼミ」「卒業論文作成」ともに、「大学での専門分野との関連」を選択している回答者の「やや役に立っている」「役に立っている」の回答割合が顕著に高い傾向にある（ゼミ：86.4%、卒業論文作成：69.5%）。とりわけ、「役に立っている」単独の回答割合は他の項目と比較しても顕著に高い結果となった。

一方で、他の項目については、相対的にさほど大きな差はみられなかった。「卒業論文作成」において「給与」における肯定的な回答の割合がやや低いものの、その他には顕著な差はなかった。

以上の結果から、進路選択にあたって、大学での専門分野との関連を重視したと回答した卒業生において、相対的に「ゼミ」「卒業論文作成」が現在の仕事に役に立っていると回答する割合が高い。

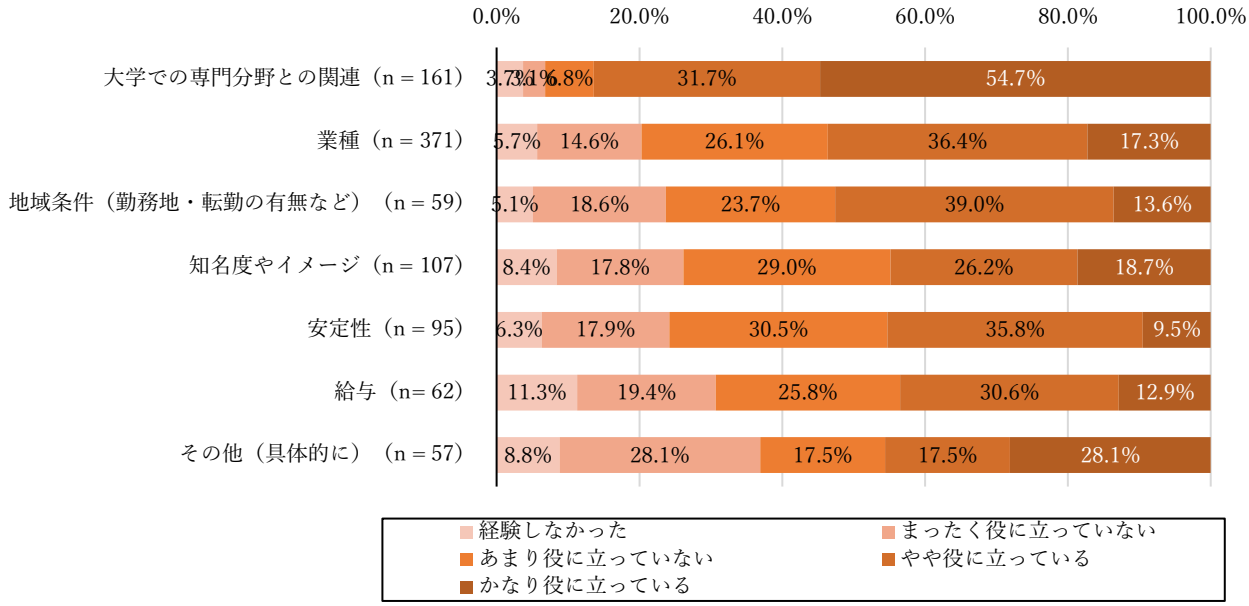


図４―39　「就職先を決定するに当たって最も重視したこと」別：現在の仕事への役立ち度（ゼミ）

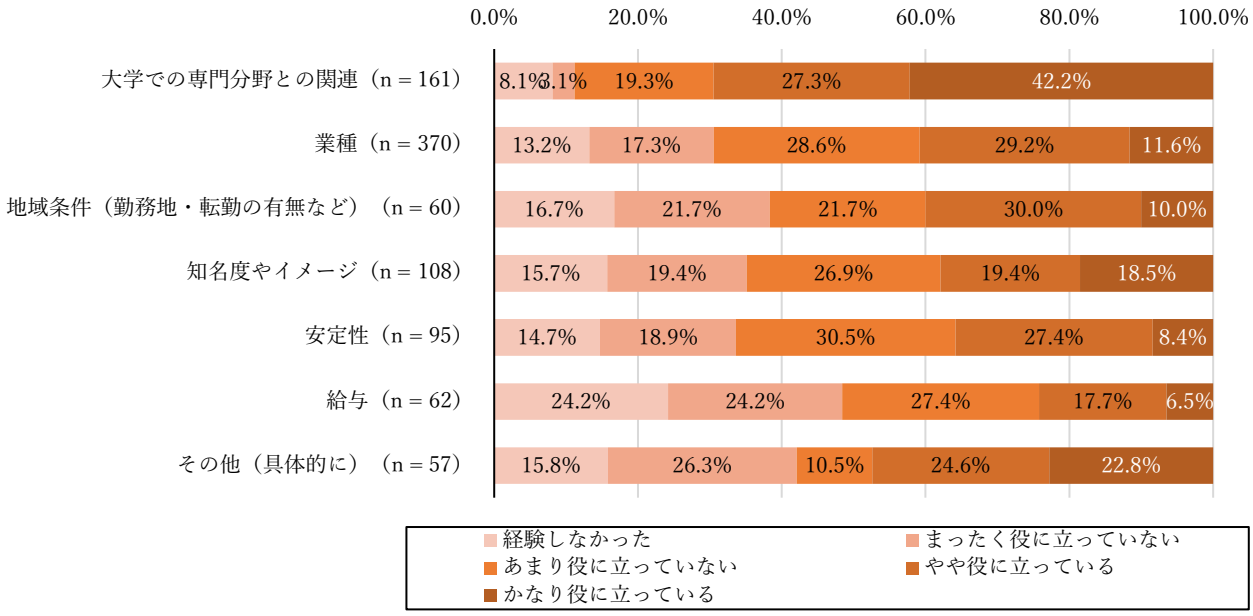


図４―40　「就職先を決定するに当たって最も重視したこと」別：
現在の仕事への役立ち度（卒業論文作成）

４―４―３．現在の業種別：現在の仕事への役立ち度

次に、回答した卒業生の「現在」の状況をふまえた「ゼミ」「卒業論文作成」の役立ち度を分析していく。分析に入る前に、卒業生の「現在」について尋ねた、「現在の業種」の回答に関する前提を確認しておく。

図４―41 は、回答者の現在働いている企業・団体の業種である。回答者数にばらつきがあるため、本節では母数の関係上、「製造業」（$n = 162$）、「情報通信業」（$n = 174$）、「金融保険業」（$n = 111$）、「学術研究・専門・技術サービス業」（$n = 78$）、「教育・学習支援業」（$n = 93$）、「公務員」（$n = 122$）に着目して分析を行っていく。

なお、前提として、前節で確認した「就職先を決定するに当たって最も重視したこと」と「現在の職種」のクロス表を図４―42 に示した。「大学での専門分野との関連」という点では、「学術研究・専門・技術サービス業」（28.6%）、「教育・学習支援業」（39.6%）が相対的に高い。一方で、「業種」という点では、情報通信業が 43.1%とやや高い傾向にあるが、全体的としてはおおよそ２割～３割程度という結果であった。もっとも、転職などの契機を通して、卒業時に行った進路選択と現在の職種は異なる可能性があり、この点は解釈を行うにあたって留意する必要がある。

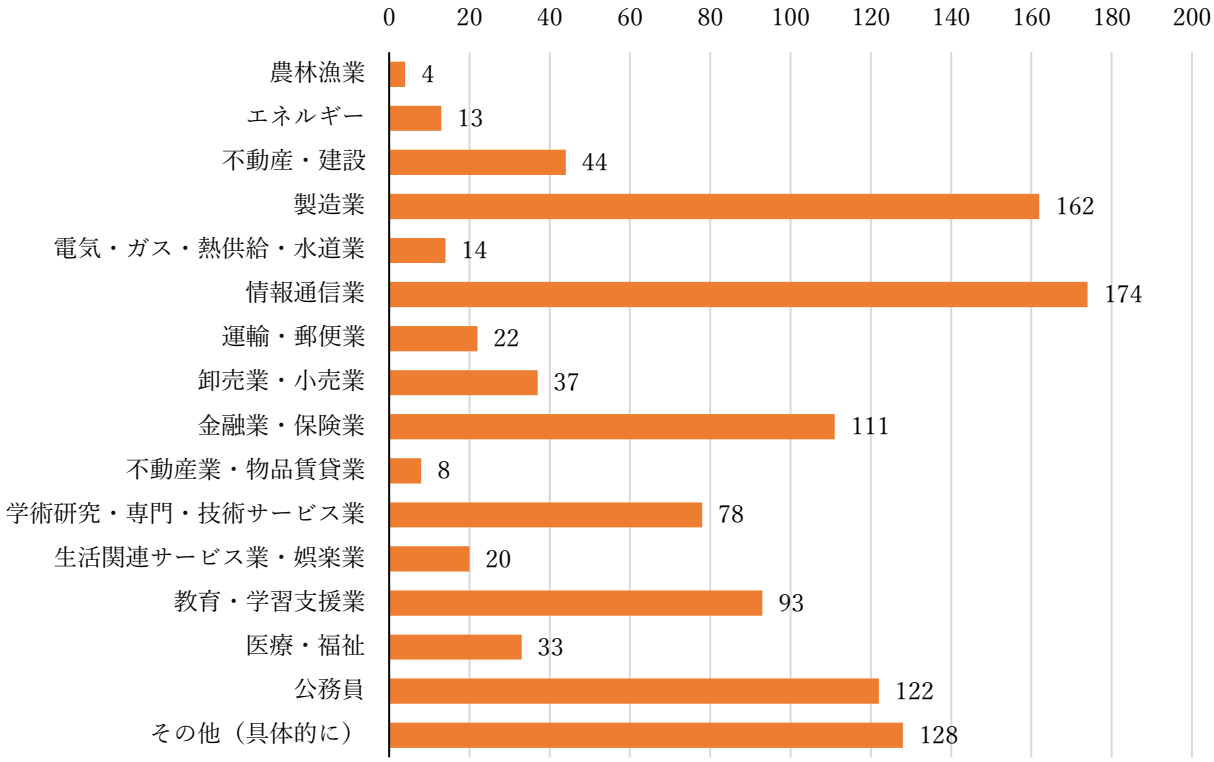


図４―41　現在働いている企業・団体等の業種

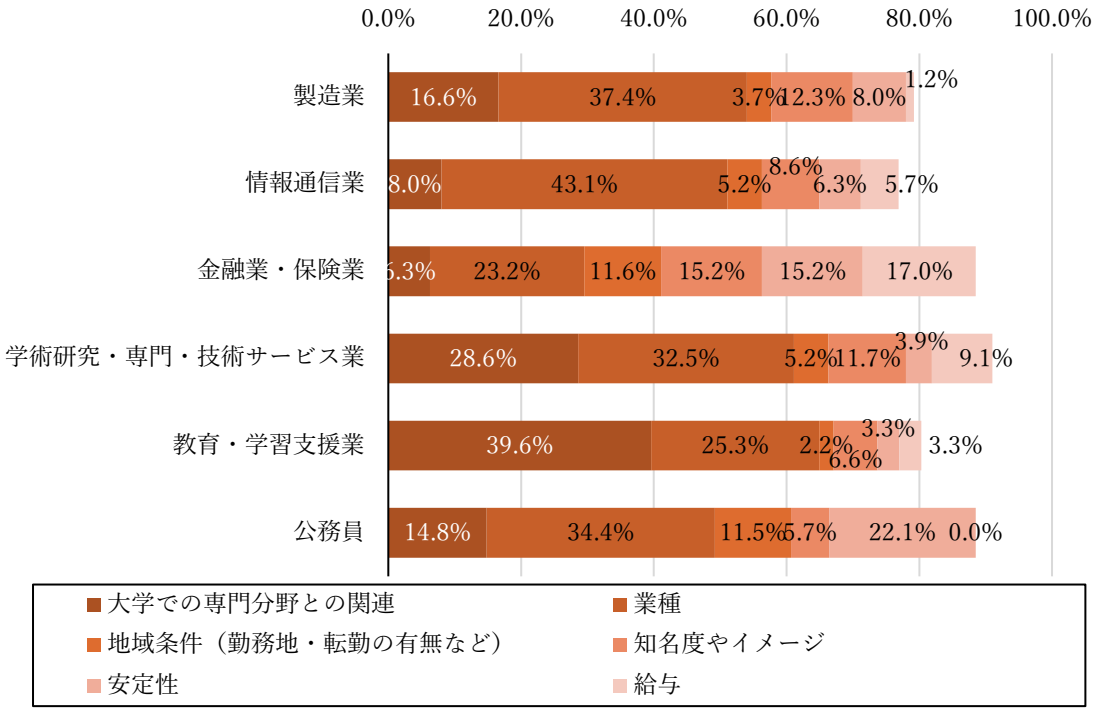


図４―42　現在の職種別：「就職先を決定するに当たって最も重視したこと」

以上の傾向をふまえ、現在の業種別に、それぞれの業種における「ゼミ」「卒業論文作成」の現在への役立ち度の分析を行った（図４―43、４―44）。

特徴的なのは、「教育・学習支援業」に現在従事している卒業生において、「やや役に立っている」「かなり役に立っている」の肯定的な回答の割合が相対的に高い点である。肯定的な回答の割合はゼミで77.5%、卒業論文作成で63.4%であり、他の業種と比較しても高い。これは図４―42でみられるように、現在の職種において「教育・学習支援業」を選択している回答者が、「大学での専門分野との関連」を職業選択にあたって重視している割合が相対的に高いことも関連している可能性がある。同様に「大学での専門分野との関連」の割合が相対的に高かった「学術研究・専門・技術サービス業」も肯定的な回答の割合が高い傾向にあり、ゼミで64.1%、卒業論文作成で50.0%であった。

一方で、ゼミの役立ち度においては「情報通信業」（48.3%）が、卒業論文作成では「金融業・保険業」（28.8%）が、肯定的な回答の割合が相対的に低い結果となった。この二つの業種は進路選択にあたって重視したことについて「大学での専門分野との関連」が相対的に低い割合を示した業種でもあることから、ゼミ・卒業論文作成の現在の仕事への役立ち度と、進路選択において専門分野との関連性を重視したことの関係性がうかがえる。

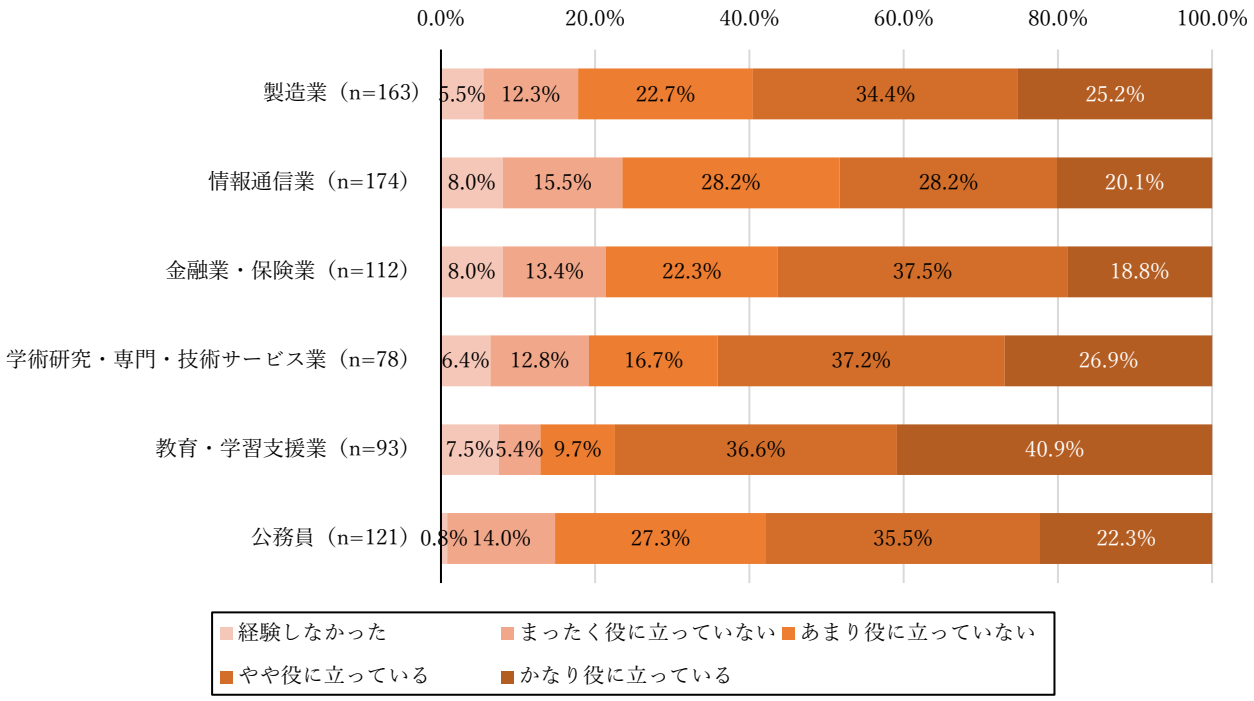


図４―43　現在の職種別：現在の仕事への役立ち度（ゼミ）

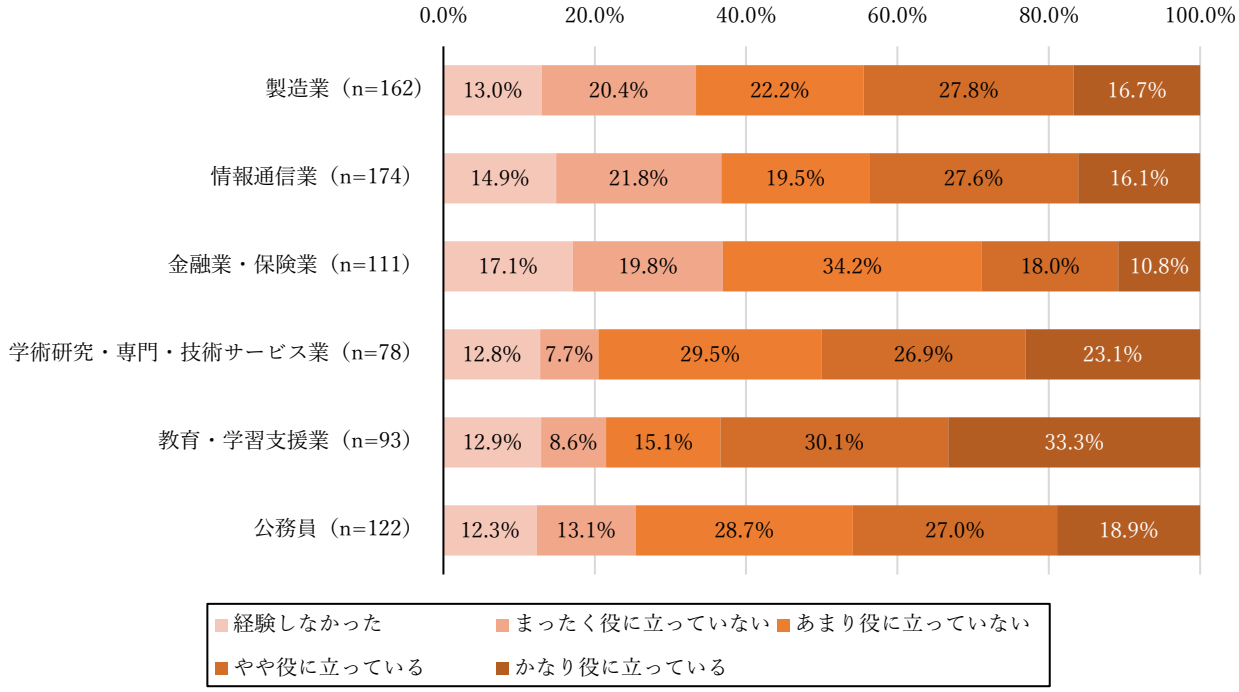


図４―44　現在の職種別：現在の仕事への役立ち度（卒業論文作成）

４―５．まとめ

本章では、質問項目の特に「ゼミ」「卒業論文作成」に着目し、その在学時の経験や卒業後の役立ち度に関する分析を行った。

１節では、「ゼミ」「卒業論文作成」の「経験の有無」に基づく分析を行った。それぞれの経験の有無ごとに在学時の学修経験を比較すると、いくつか大きく差が現れる項目がみられた。例えば、「自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表したりした」「授業内容について、他の学生と議論した」「授業内容について、教員と議論した」といった、双方向的な学修経験の項目では、ゼミ・卒業論文作成の経験の有無で差がみられた。また、「授業の一環として大学外で学んだ（フィールドワーク等）」「よい教員に巡り合えた」などの項目でも経験の有無によって特徴的な差がみられた。

こうした学修経験との関連をふまえ、２節では、在学時における「熱心さ」に基づく分析を行った。在学時のゼミ・卒業論文作成への熱心度ごとに在学時の学修成果を比較すると、全体的に肯定的な回答の割合が高かった「自律と寛容の精神」に関する項目や、全体的に肯定的な回答の割合が低かった「外国語を理解し、話せる」の項目を除いて、全体的に熱心度が高くなるほど学修成果が高くなる傾向にあった。特に「問題発見・解決力」「コミュニケーション力」「健全な批判精神」「自身の専門に関する知識」といった学修成果において顕著な傾向があり、「熱心」群の「身についた」単独の割合も他の熱心度と比べて顕著に高かった。

１節・２節で検討した「在学時のゼミ・卒業論文作成と在学時の学修経験・学修成果」の分析をふまえて、３節では「卒業後の現在」に着目し、「ゼミ」「卒業論文作成」の「現在の仕事への役立ち度」に基づ

く分析を行った。その際、①卒業生の進路選択で重視したこと、②現在の職種という二つの観点から、ゼミ・卒業論文作成の役立ち度の傾向を確認した。分析の結果、ゼミ・卒業論文作成ともに、進路選択にあたって「大学での専門分野との関連」を重視した回答者において、役立ち度に対する肯定的な回答の割合が高かった。そして、「現在の業種」ごとの分析では、ゼミ・卒業論文作成ともに「教育・学習支援業」「学術研究・専門・技術サービス業」において肯定的な回答の割合が高かった。一方で、ゼミの役立ち度においては「情報通信業」が、卒業論文作成では「金融業・保険業」が相対的に低かった。これらの業種は進路選択にあたって「大学での専門分野との関連」を重視した割合にも差があり、ゼミ・卒業論文作成の現在の仕事への役立ち度と、進路選択において専門分野との関連性を重視したことの関係性がうかがえた。

ここまで、卒業生にとっての「ゼミ」「卒業論文作成」の経験と、在学時・卒業後の関係性について、様々な観点から検討してきた。全体の議論をまとめると、早稲田大学におけるゼミや卒業論文作成の経験は、双方向的な学修や良い教員との巡り合いとの関係が示唆された。また、取り組みへの熱心度という点では、ゼミ・卒業論文作成に熱心に取り組んだと回答した群において、問題や課題を発見し、そのテーマを批判的に検討して他者に発信する、といった双方向的な学修成果の相対的な高さがみられた。そして、こうした特徴のあるゼミ・卒業論文作成が「現在の仕事に役に立っている」と回答していたのは、「教育・学習支援業」「学術研究・専門・技術サービス業」といった、進路選択時における「在学中の専門の重視」が高い層であった。

以上の分析を通して、「ゼミ」「卒業論文作成」という経験が卒業生にとってどのような意味を持つのかについての一端を探ることができた。もっとも、本稿ではゼミ・卒業論文作成が影響を与えている学修の直接的な因果関係を明らかにしたものではなく、また母数の関係から「現在の職種」についても限られた職種のみの分析となった。本稿の示唆をふまえ、今後ゼミ・卒業論文作成の影響についてさらに深く検討していく必要がある。

付録. 全体の集計データ

2023 年度 卒業生調査 集計表

目次

Ⅰ. 調査概要

Ⅱ. 調査項目（グレー部分の自由記述は省略）

１. 基本情報

Q01. あなたの年齢（2023 年１月１日現在）を記入してください。

Q02. あなたの性別について、あてはまるものをお選びください。

Q03. あなたが卒業した早稲田大学の学部名をお選びください。

Q04. あなたの高校卒業時の居住地について都道府県名をお選びください（海外の場合は海外をお選びください)。

Q05. あなたの現在の居住地について都道府県名をお選びください（海外の場合は海外をお選びください)。

Q06. あなたが早稲田大学を卒業した年（西暦）・月を記入してください。※大学院等へ進学し、修了した方も「学部」の卒業年月をお答えください。

Q07. あなたのご両親の最終学歴をお選びください。

２. 入学時について

Q08. あなたが大学に入学した試験の形態を、次の選択肢の中から一つだけお選びください。

Q09. 早稲田大学は第一志望でしたか。また、入学した学部は第一志望でしたか。それぞれお選びください。

Q10. あなたは現役で入学しましたか。あてはまるものを一つだけお選びください。

Q11. 本学の受験を決めた理由として、次の項目はそれぞれどのくらいあてはまりますか。

Q12. 中学 3 年の時と高校 3 年の時の成績は､あなたの通っていた学校のなかでどのあたりでしたか。

Q13. あなたが中学生の頃、次のようなことは、どのくらいあてはまりましたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。

Q14. 高校卒業までに留学したこと、海外に住んでいたことはありますか。

３. 在学時の経験

Q15. あなたは学部在学中において、次のような活動にどのくらい熱心に取り組んでいましたか。

Q16. 学部在学中の早稲田大学におけるあなたの経験をお聞きします。以下のような経験はどのくらいありましたか。

Q17. 大学（学部）在学中に留学をしたことはありますか。複数ある場合には、より長い期間を選んでください。

Q18. 学部在学中において、あなたの成績は、全体的に学部の中でどのあたりでしたか。

Q19. 早稲田大学の学部で次のようなことをどの程度身につけましたか。

４．卒業後の経験・生活

Q20. あなたは学部を 4 年間で卒業しましたか。

Q21. あなたは学部卒業時にどのような進路選択をしましたか。該当するものを一つだけお選びください。

Q22. 就職先を決定するに当たって最も重視したことは何ですか。該当するものを一つだけお選びください。

Q23. あなたの最終学歴について、あてはまるものを一つだけお選びください。

Q24. あなたの学部卒業直後の居住地について都道府県名をお選びください（海外の場合は海外をお選びください）。

Q25. 卒業後最初についたお仕事は、現在も継続されていますか。出向や転勤等などで異動している場合は、同じ会社・団体・組織としてください。

Q26. 学部・大学院等の卒業後に就いた最初のお仕事の勤続年数を記入してください。

Q27. あなたの現在の就業形態について、該当するものを一つだけお選びください。　※現在、就業していない方は、「就業していない」を選択してください。

Q28. 転職または辞職された理由は何ですか。最も大きい理由を一つだけお選びください。

Q29. 現在働いている企業・団体等の業種について、該当するものを一つだけお選びください。

Q30. 現在働いている企業・団体等の従業員規模について、該当するものを一つだけお選びください。

Q31. 現在のお仕事の勤続年数を記入してください。

Q32. 現在の学習活動について、最もあてはまるものをお選びください。

Q33. あなたの現在の年収（税込）について、該当するものを一つだけお選びください。

Q34. あなたの学部時代の経験は、現在の仕事にどの程度役立っていますか。該当するものをお選びください。

Q35. （仕事上の難しい問題に直面したときに、個人的に相談できる）友人は、どのような関係にある方ですか。あてはまるものすべてをお選びください。

Q36. あなたの現在の仕事の満足度はどの程度ですか。 それぞれ一つずつお選びください。

Q37. あなたの生活（仕事を除く）の満足度はどの程度ですか。 それぞれ一つずつお選びください。

５．校友関連・自由記述

Q38. あなたは早稲田大学の校友として、現在、早稲田大学とどのように関わっていますか。あてはまるものすべてを選んでください。

Q39. 早稲田大学の校友（卒業生）であることを誇りに思う時はどのような時ですか。あてはまるものすべてを選んでください。

Q40. あなたが早稲田大学に関する情報に触れる機会・手段として、どのようなものがありますか。あてはまるものすべてを選んでください。

調査概要

◆ **調査方法：**ダイレクトメールの送付とメール配信を通じた「Qualtrics」を用いたオンライン調査

◆ **調査時期：**2023 年 12 月 25 日～2024 年 1 月 22 日

◆ **調査対象者：**早稲田大学の 2010 年度学部入学者　9,897 名

◆ **回収状況：**1,292 件　回収率（13.0%）

◆ **調査結果引用に関するお願い**

本調査結果を引用される際には、下記の出典を明記くださいますようお願いいたします。

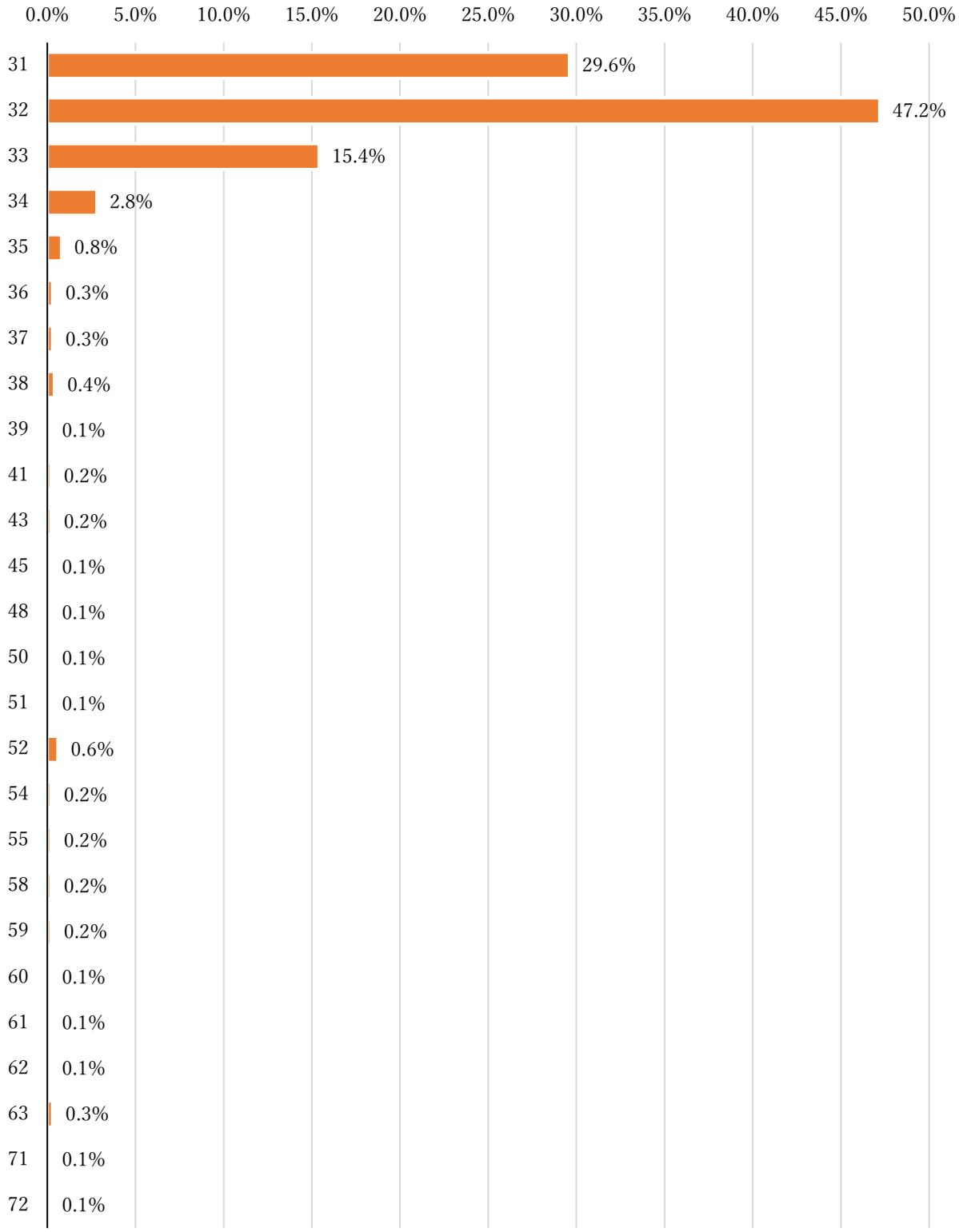
著者：早稲田大学大学総合研究センター

タイトル：2024 年度 早稲田大学卒業生調査報告書

Ⅱ．調査項目

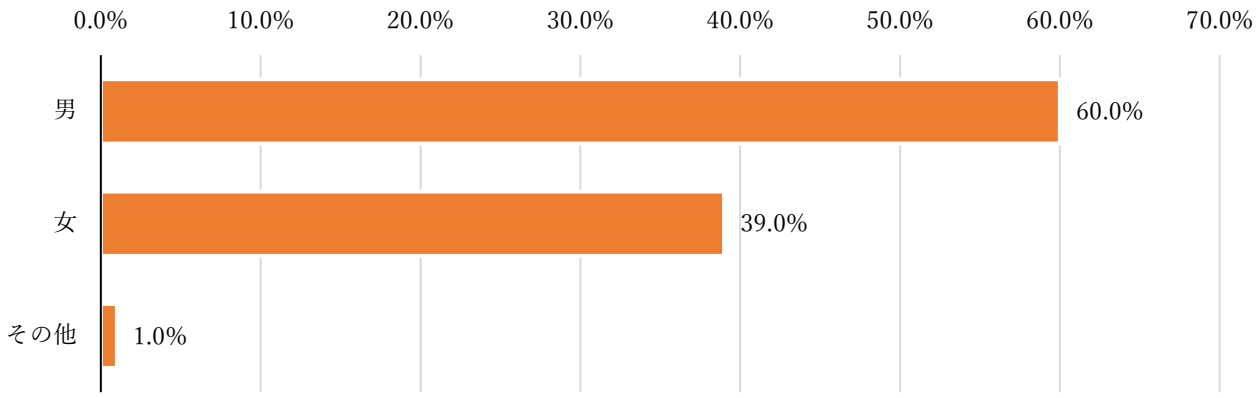
１．基本情報

Q01．あなたの年齢（2023 年１月１日現在）を記入してください。



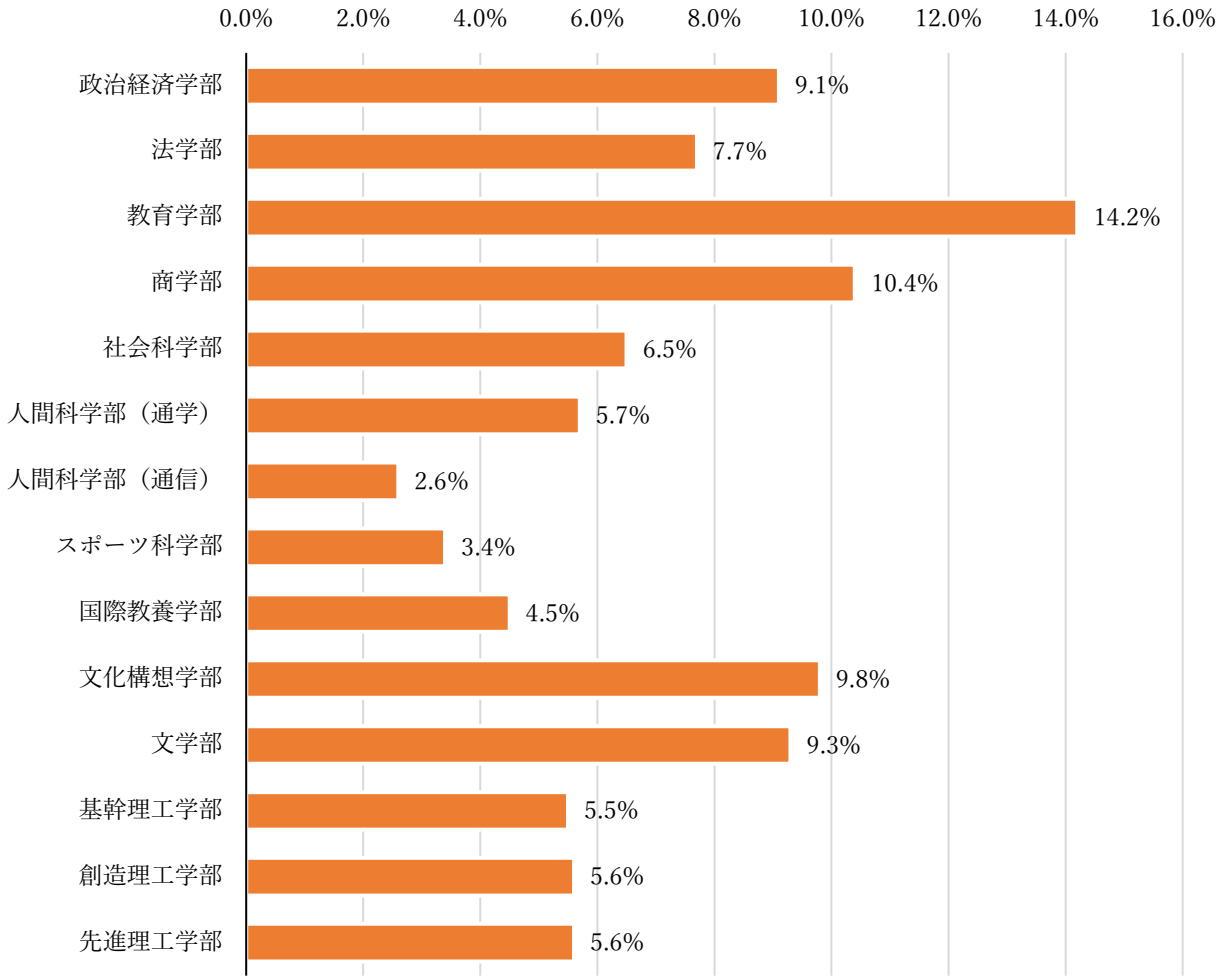
31	291	60	1
32	464	61	1
33	151	62	1
34	28	63	3
35	8	71	1
36	3	72	1
37	3		
38	4		
39	1		
41	2		
43	2		
51	1		
52	1		
54	1		
55	1		
58	6		
59	2		

Q02. あなたの性別について、あてはまるものをお選びください。



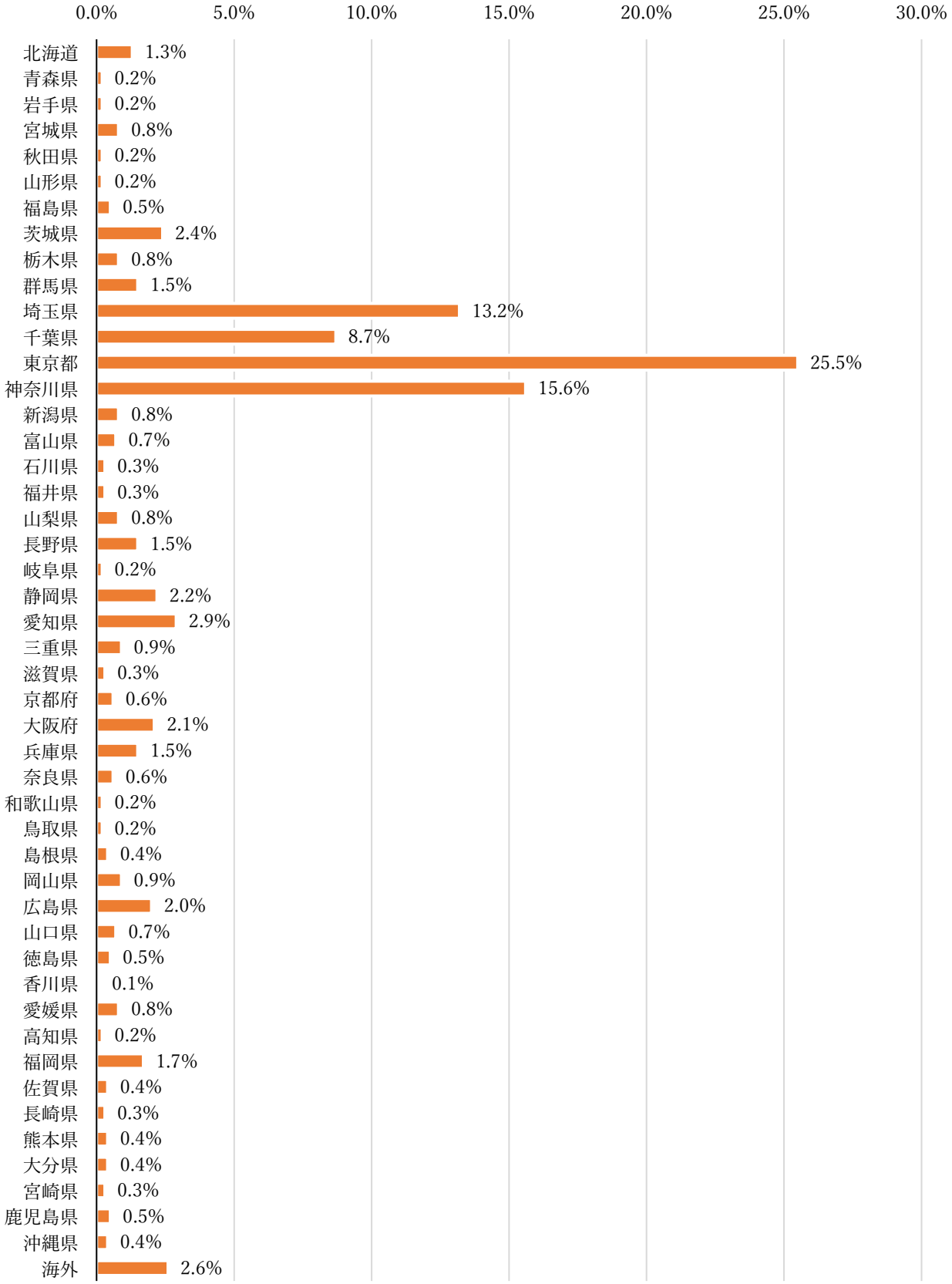
男	726
女	472
その他	12

Q03. あなたが卒業した早稲田大学の学部名をお選びください。



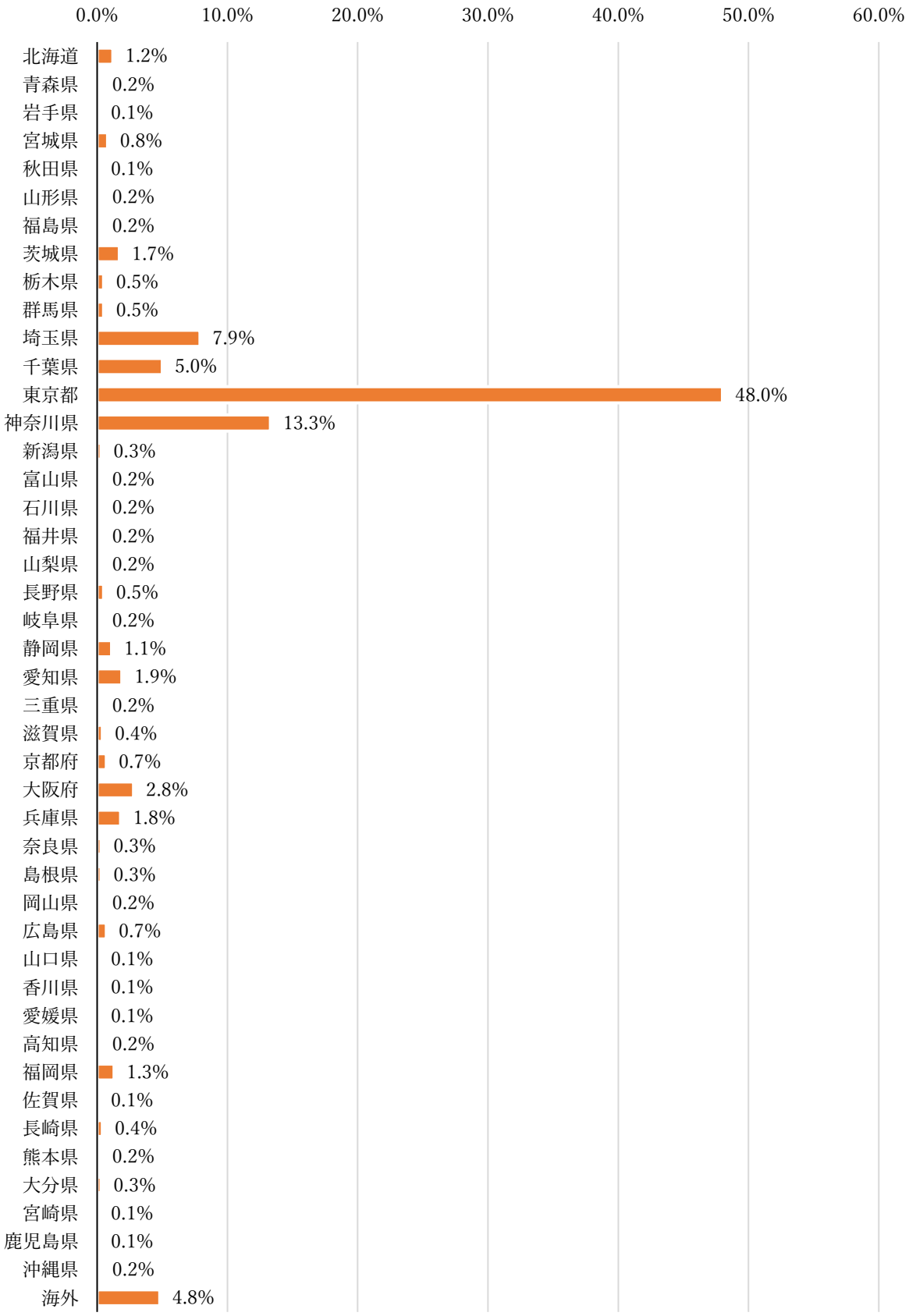
政治経済学部	110	文化構想学部	119
法学部	93	文学部	113
教育学部	172	基幹理工学部	66
商学部	126	創造理工学部	68
社会科学部	79	先進理工学部	68
人間科学部（通学）	69		
人間科学部（通信）	31		
スポーツ科学部	41		
国際教養学部	55		

Q04. あなたの高校卒業時の居住地について都道府県名をお選びください（海外の場合は海外をお選びください）。



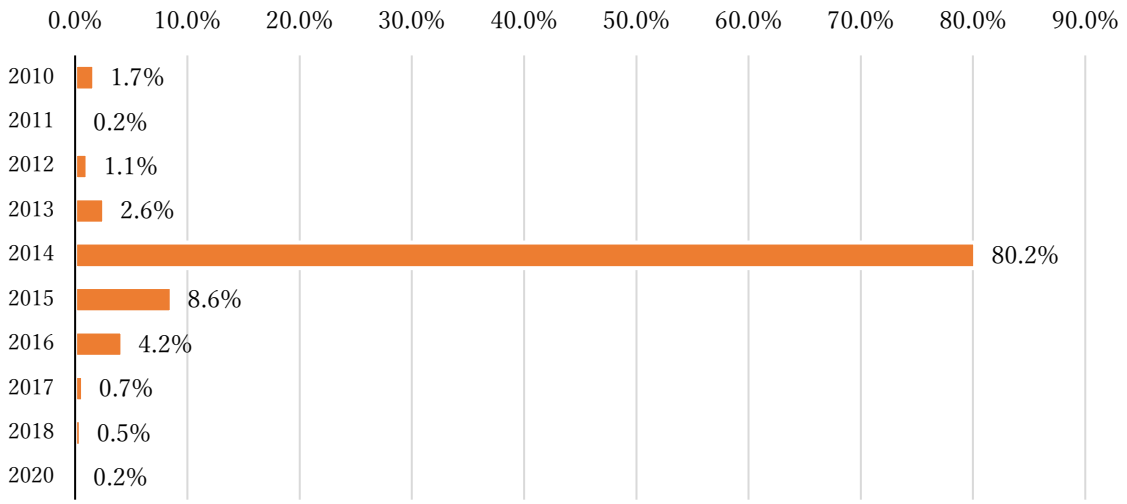
北海道	16	滋賀県	4
青森県	3	京都府	7
岩手県	3	大阪府	25
宮城県	10	兵庫県	18
秋田県	3	奈良県	7
山形県	3	和歌山県	2
福島県	6	鳥取県	3
茨城県	29	島根県	5
栃木県	10	岡山県	11
群馬県	18	広島県	24
埼玉県	159	山口県	8
千葉県	105	徳島県	6
東京都	308	香川県	1
神奈川県	188	愛媛県	10
新潟県	10	高知県	2
富山県	8	福岡県	20
石川県	4	佐賀県	5
福井県	4	長崎県	4
山梨県	10	熊本県	5
長野県	18	大分県	5
岐阜県	3	宮崎県	4
静岡県	27	鹿児島県	6
愛知県	35	沖縄県	5
三重県	11	海外	31

Q05. あなたの現在の居住地について都道府県名をお選びください（海外の場合は海外をお選びください）。

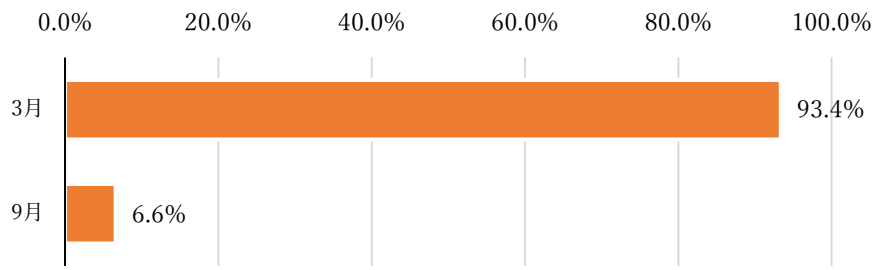


北海道	14	静岡県	13
青森県	2	愛知県	23
岩手県	1	三重県	3
宮城県	10	滋賀県	5
秋田県	1	京都府	9
山形県	3	大阪府	34
福島県	2	兵庫県	22
茨城県	21	奈良県	4
栃木県	6	島根県	4
群馬県	6	岡山県	3
埼玉県	95	広島県	9
千葉県	60	山口県	1
東京都	580	香川県	1
神奈川県	161	愛媛県	1
新潟県	4	高知県	2
富山県	2	福岡県	16
石川県	3	佐賀県	1
福井県	2	長崎県	5
山梨県	3	熊本県	3
長野県	6	大分県	4
岐阜県	2	宮崎県	1
		鹿児島県	1
		沖縄県	2
		海外	58

Q06. あなたが早稲田大学を卒業した年（西暦）・月を記入してください。※大学院等へ進学し、修了した方も「学部」の卒業年月をお答えください。

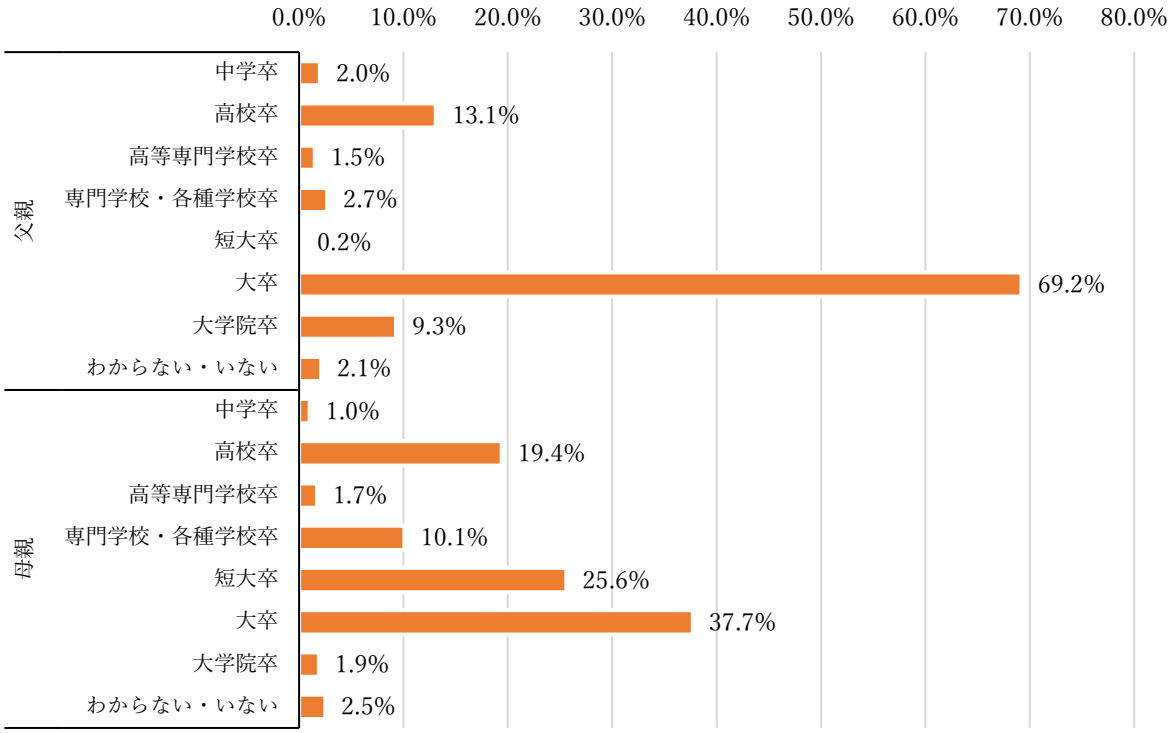


2010 年	21
2011 年	2
2012 年	13
2013 年	32
2014 年	971
2015 年	104
2016 年	51
2017 年	8
2018 年	6
2020 年	2



3 月	1120
9 月	79

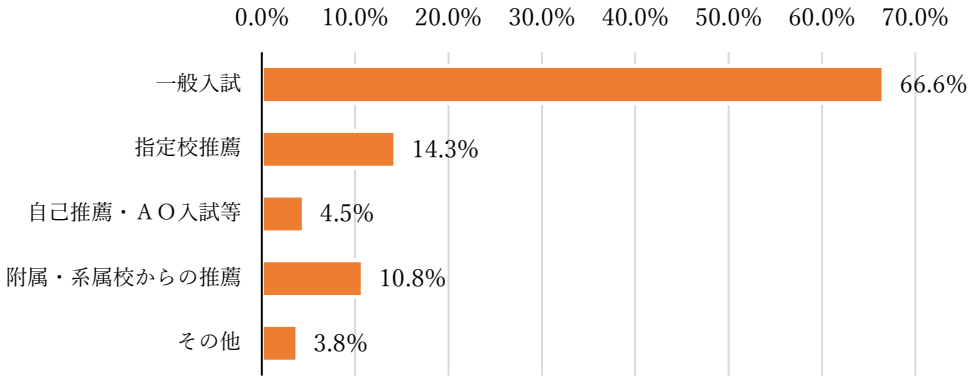
Q07. あなたのご両親の最終学歴をお選びください。



父親	中学卒	24
	高校卒	158
	高等専門学校卒	18
	専門学校･各種学校卒	33
	短大卒	2
	大卒	837
	大学院卒	112
	わからない･いない	25
母親	中学卒	12
	高校卒	233
	高等専門学校卒	21
	専門学校･各種学校卒	122
	短大卒	308
	大卒	454
	大学院卒	23
	わからない･いない	30

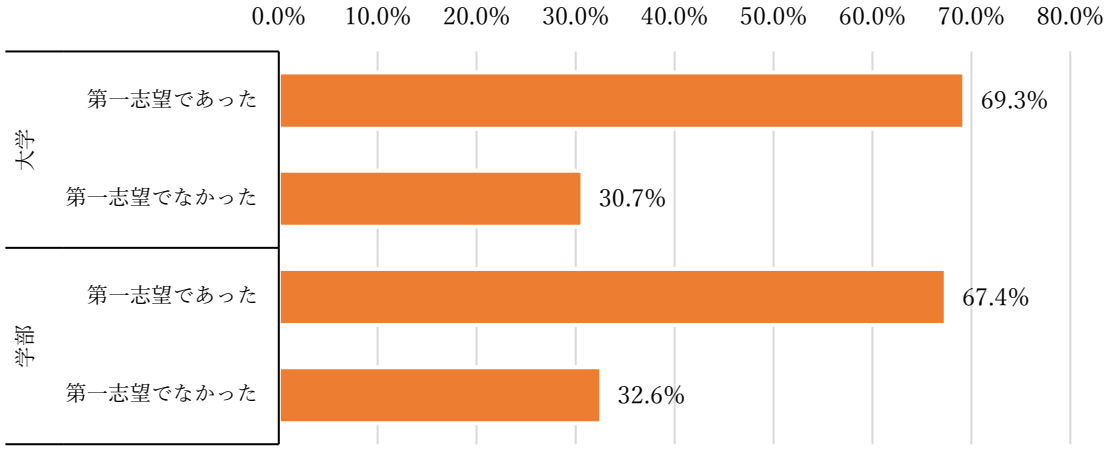
２．入学時について

Q08. あなたが大学に入学した試験の形態を、次の選択肢の中から一つだけお選びください。



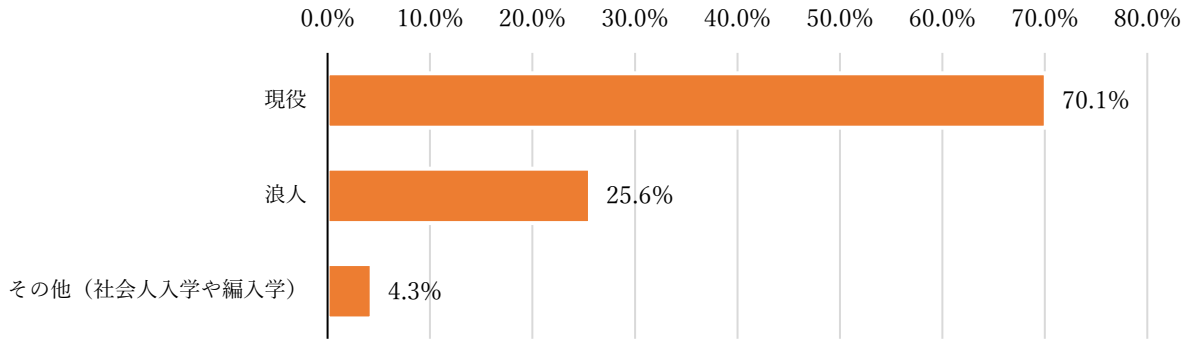
一般入試	781
指定校推薦	168
自己推薦・ＡＯ入試等	53
附属・系属校からの推薦	126
その他	44

Q09. 早稲田大学は第一志望でしたか。また、入学した学部は第一志望でしたか。それぞれお選びください。



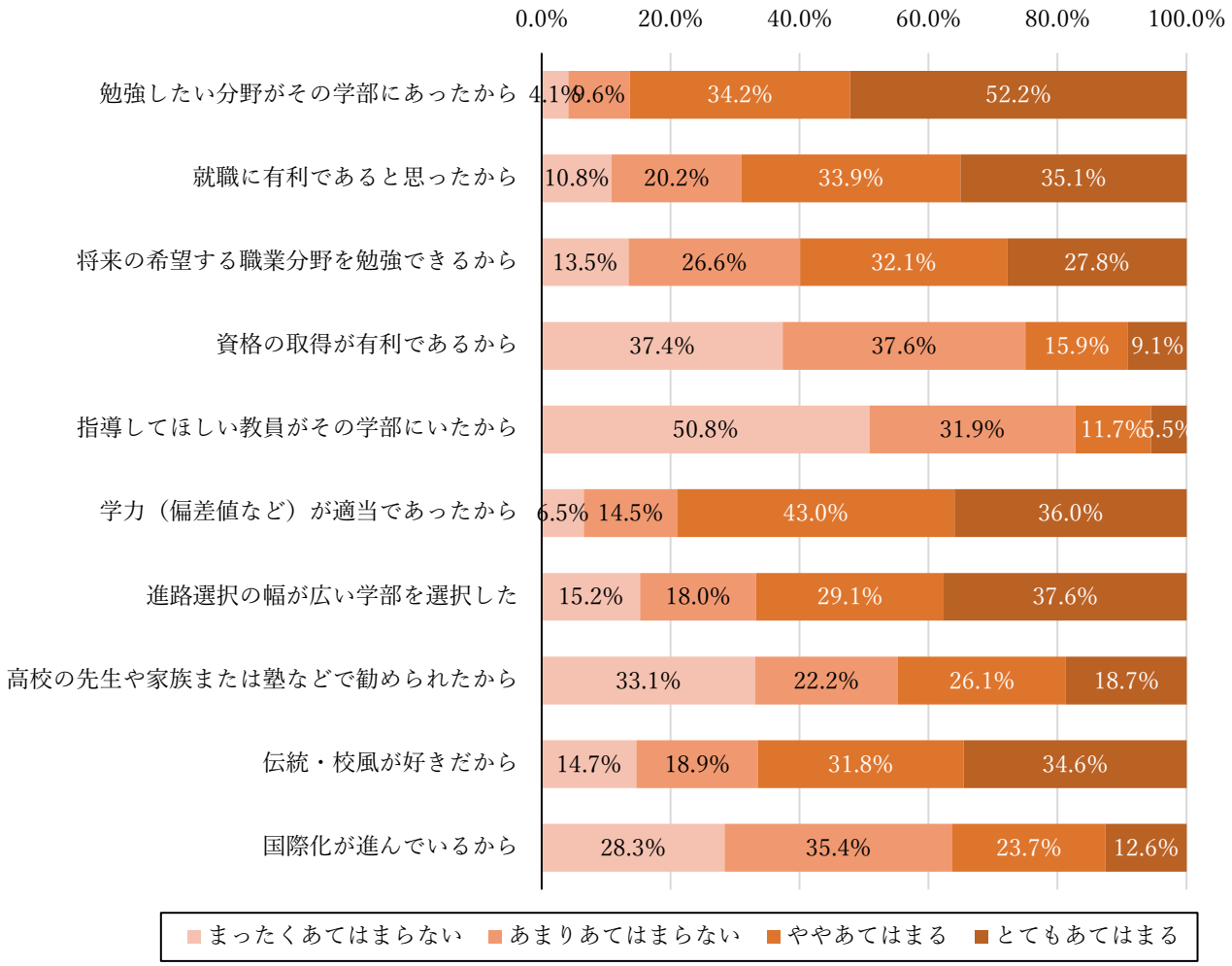
大学	第一志望であった	812
	第一志望でなかった	360
学部	第一志望であった	778
	第一志望でなかった	376

Q10. あなたは現役で入学しましたか。あてはまるものを一つだけお選びください。



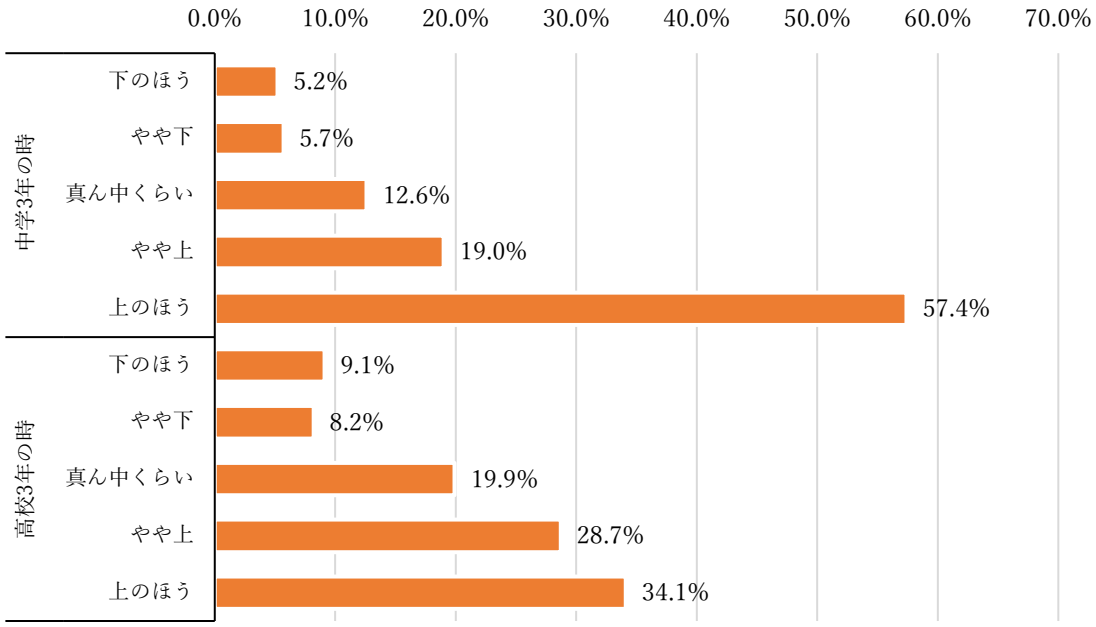
現役	822
浪人	300
その他（社会人入学や編入学）	50

Q11. 本学の受験を決めた理由として、次の項目はそれぞれどのくらいあてはまりますか。



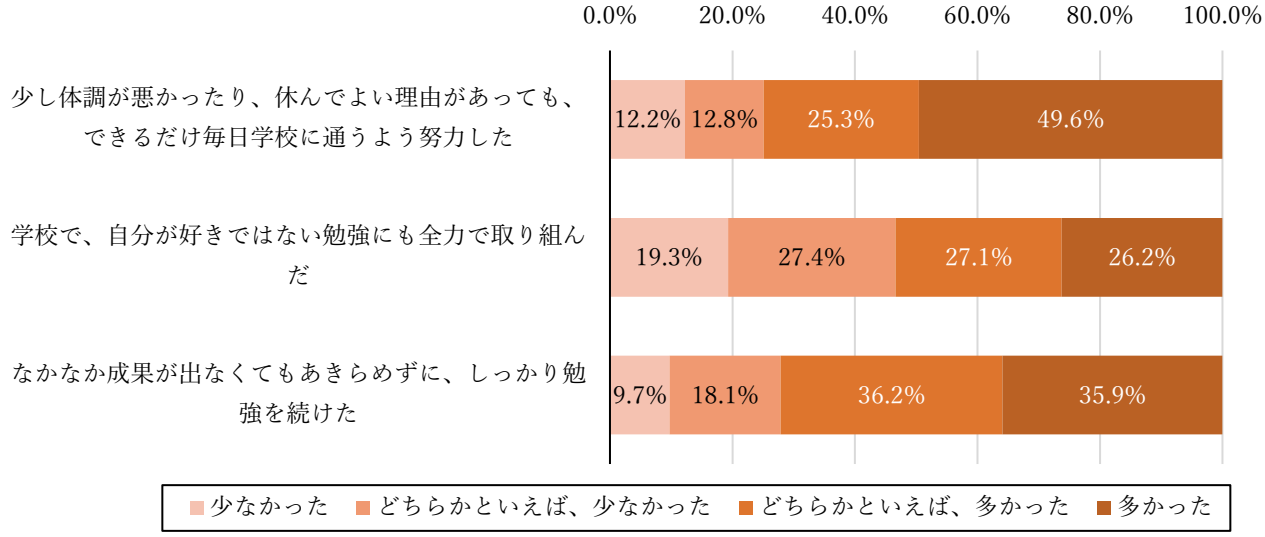
	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	とてもあてはまる
勉強したい分野がその学部にあったから	48	111	397	606
就職に有利であると思ったから	126	235	394	408
将来の希望する職業分野を勉強できるから	156	308	372	322
資格の取得が有利であるから	432	435	184	105
指導してほしい教員がその学部にいたから	587	369	135	64
学力（偏差値など）が適当であったから	76	168	500	418
進路選択の幅が広い学部を選択した	177	209	338	437
高校の先生や家族または塾などで勧められたから	382	256	301	216
伝統・校風が好きだから	170	219	369	401
国際化が進んでいるから	328	409	274	146

Q12. 中学 3 年の時と高校 3 年の時の成績は、あなたの通っていた学校のなかでどのあたりでしたか。



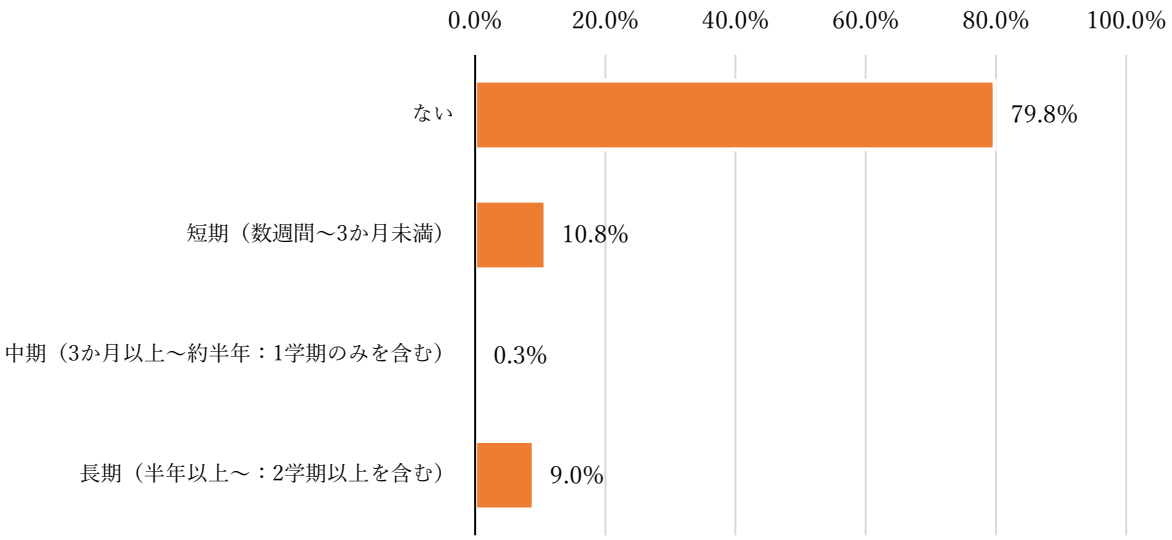
中学 3 年の時	下のほう	61
	やや下	67
	真ん中くらい	148
	やや上	223
	上のほう	673
高校 3 年の時	下のほう	107
	やや下	96
	真ん中くらい	233
	やや上	336
	上のほう	399

Q13. あなたが中学生の頃、次のようなことは、どのくらいあてはまりましたか。それぞれ最も当てはまるものを選択してください。



	少なかった	どちらかといえば、少なかった	どちらかといえば、多かった	多かった
少し体調が悪かったり、休んでよい理由があっても、できるだけ毎日学校に通うよう努力した	143	150	296	579
学校で、自分が好きではない勉強にも全力で取り組んだ	224	318	315	305
なかなか成果が出なくてもあきらめずに、しっかり勉強を続けた	114	212	424	420

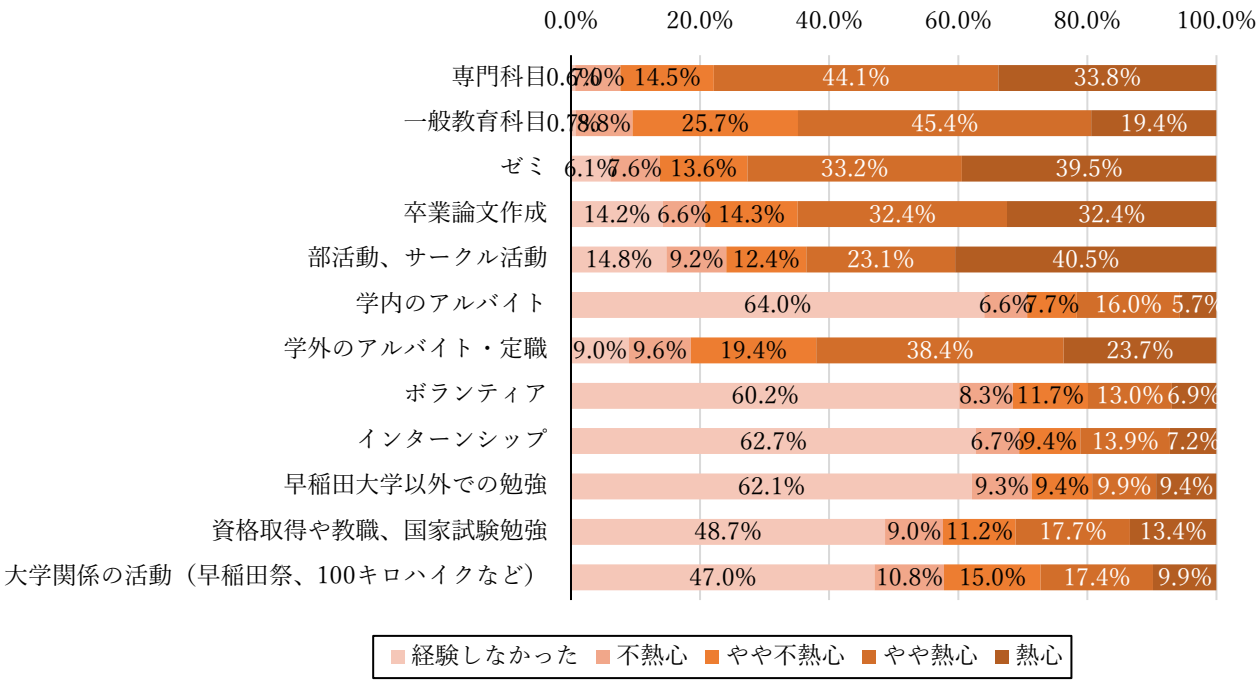
Q14. 高校卒業までに留学したこと、海外に住んでいたことはありますか。



ない	935
短期（数週間～3 か月未満）	127
中期（3 か月以上～約半年：1 学期のみを含む）	4
長期（半年以上～：2 学期以上を含む）	105

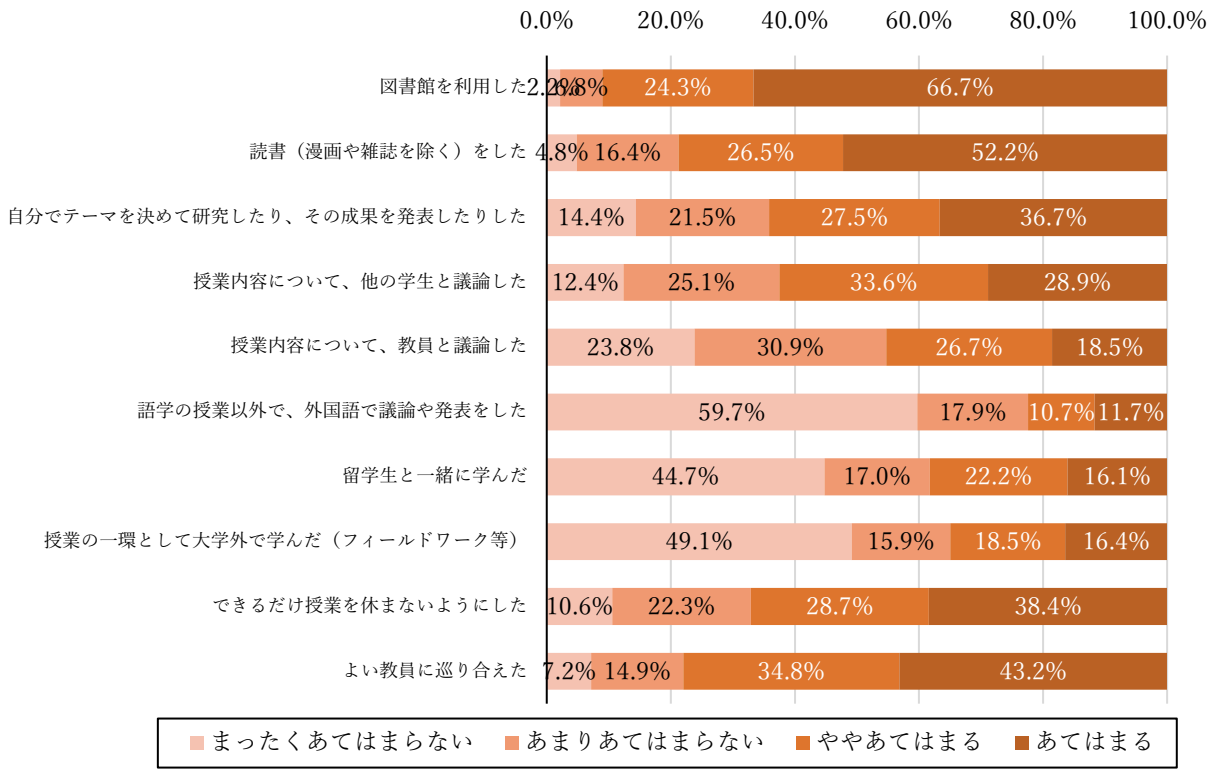
３．在学時の経験

Q15. あなたは学部在学中において、次のような活動にどのくらい熱心に取り組んでいましたか。



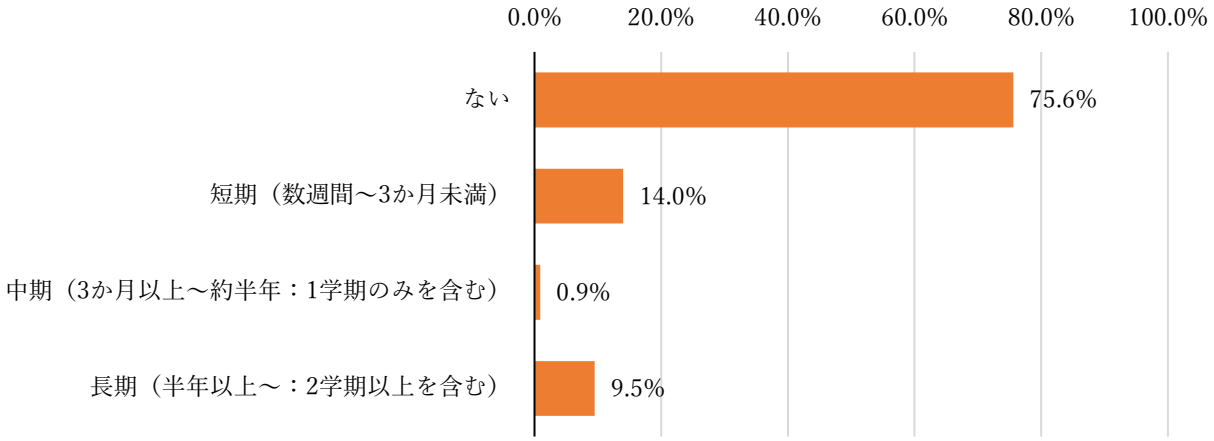
	経験しなかった	不熱心	やや不熱心	やや熱心	熱心
専門科目	7	78	161	490	376
一般教育科目	8	98	286	506	216
ゼミ	68	85	152	370	440
卒業論文作成	158	73	159	360	360
部活動、サークル活動	165	103	138	257	451
学内のアルバイト（TA、研究補助、入試監督、PC ルーム管理、図書貸出、キャンパスツアーガイドなど）	714	74	86	178	63
学外のアルバイト・定職	100	107	217	428	264
ボランティア	671	92	130	145	77
インターンシップ	698	75	105	155	80
早稲田大学以外での勉強	690	103	104	110	104
資格取得や教職、国家試験勉強	541	100	125	197	149
大学関係の活動（早稲田祭、100キロハイクなど）	525	120	167	194	110

Q16. 学部在学中の早稲田大学におけるあなたの経験をお聞きします。以下のような経験はどのくらいありましたか。



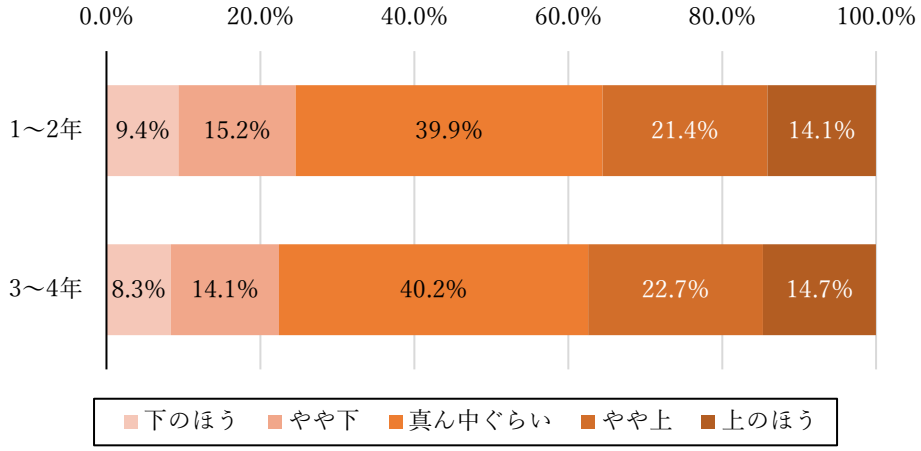
	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
図書館を利用した	24	76	271	743
読書（漫画や雑誌を除く）をした	54	183	296	583
自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表したりした	160	239	306	408
授業内容について、他の学生と議論した	138	280	375	322
授業内容について、教員と議論した	266	345	298	207
語学の授業以外で、外国語で議論や発表をした	664	199	119	130
留学生と一緒に学んだ	498	189	247	179
授業の一環として大学外で学んだ（フィールドワーク等）	547	177	206	183
できるだけ授業を休まないようにした	118	249	320	428
よい教員に巡り合えた	80	166	389	482

Q17. 大学（学部）在学中に留学をしたことはありますか。複数ある場合には、より長い期間を選んでください。



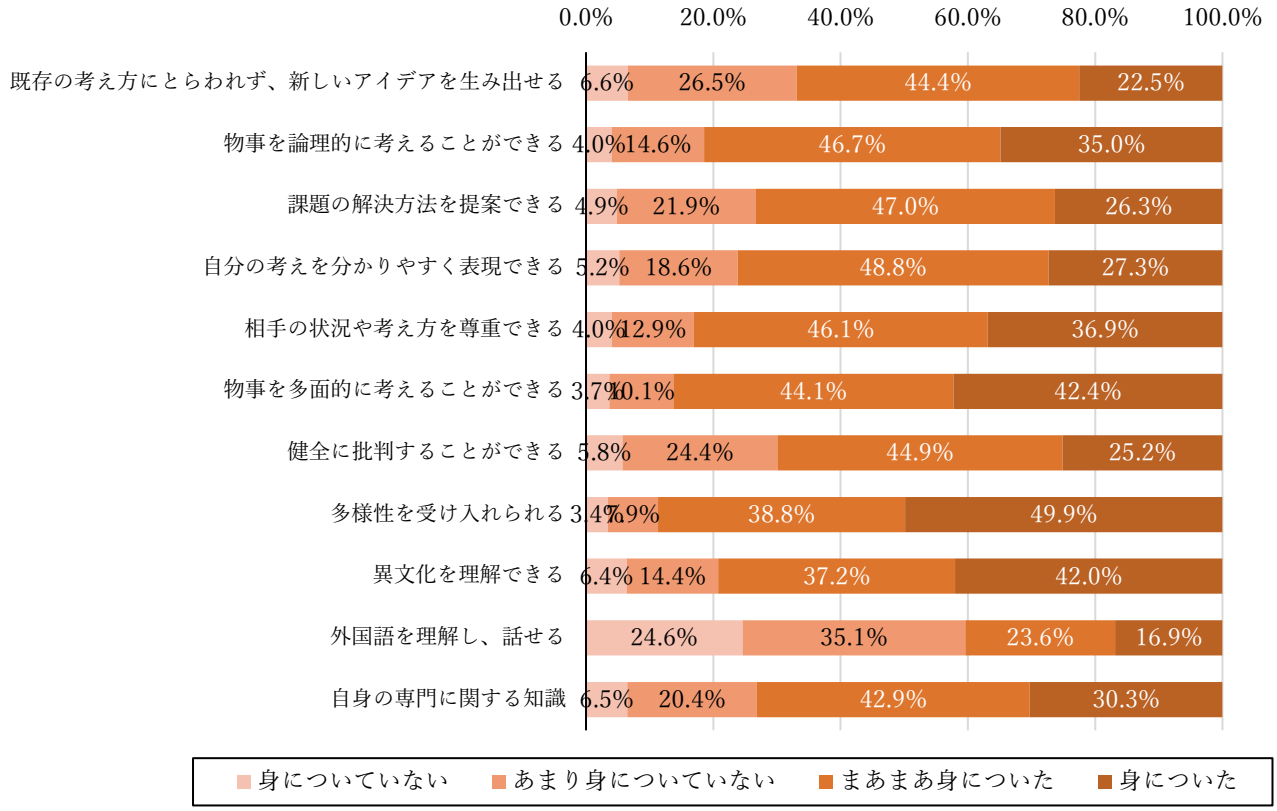
ない	845
短期（数週間～3 か月未満）	156
中期（3 か月以上～約半年：1 学期のみを含む）	10
長期（半年以上～：2 学期以上を含む）	106

Q18. 学部在学中において、あなたの成績は、全体的に学部の中でどのあたりでしたか。



	下のほう	やや下	真ん中ぐらい	やや上	上のほう
1～2 年	104	169	443	238	157
3～4 年	93	157	448	253	164

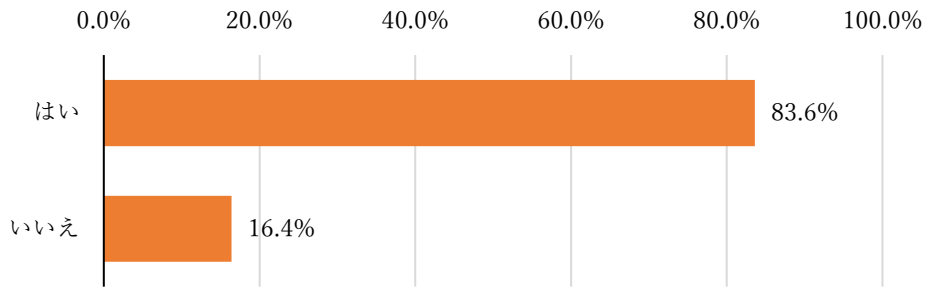
Q19. 早稲田大学の学部で次のようなことをどの程度身につけましたか。



	身についていない	あまり身についていない	まあまあ身についた	身についた
既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる	73	295	494	250
物事を論理的に考えることができる	45	162	519	389
課題の解決方法を提案できる	54	243	523	293
自分の考えを分かりやすく表現できる	58	207	543	304
相手の状況や考え方を尊重できる	45	143	513	410
物事を多面的に考えることができる	41	112	490	471
健全に批判することができる	64	271	499	280
多様性を受け入れられる	38	88	432	555
異文化を理解できる	71	160	414	467
外国語を理解し、話せる	274	390	262	188
自身の専門に関する知識	72	227	477	337

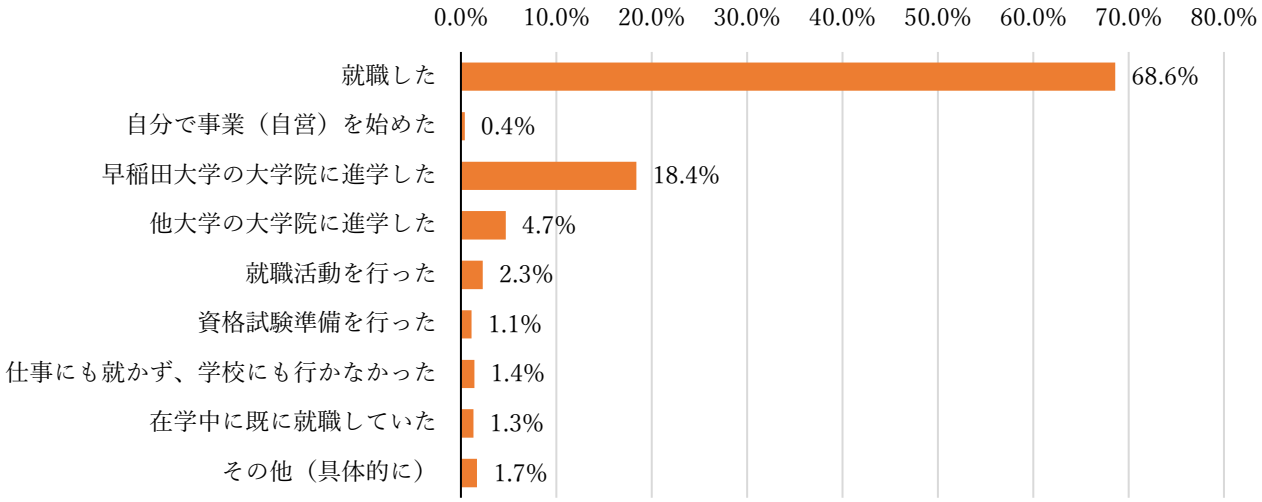
４．卒業後の経験・生活

Q20. あなたは学部を 4 年間で卒業しましたか。



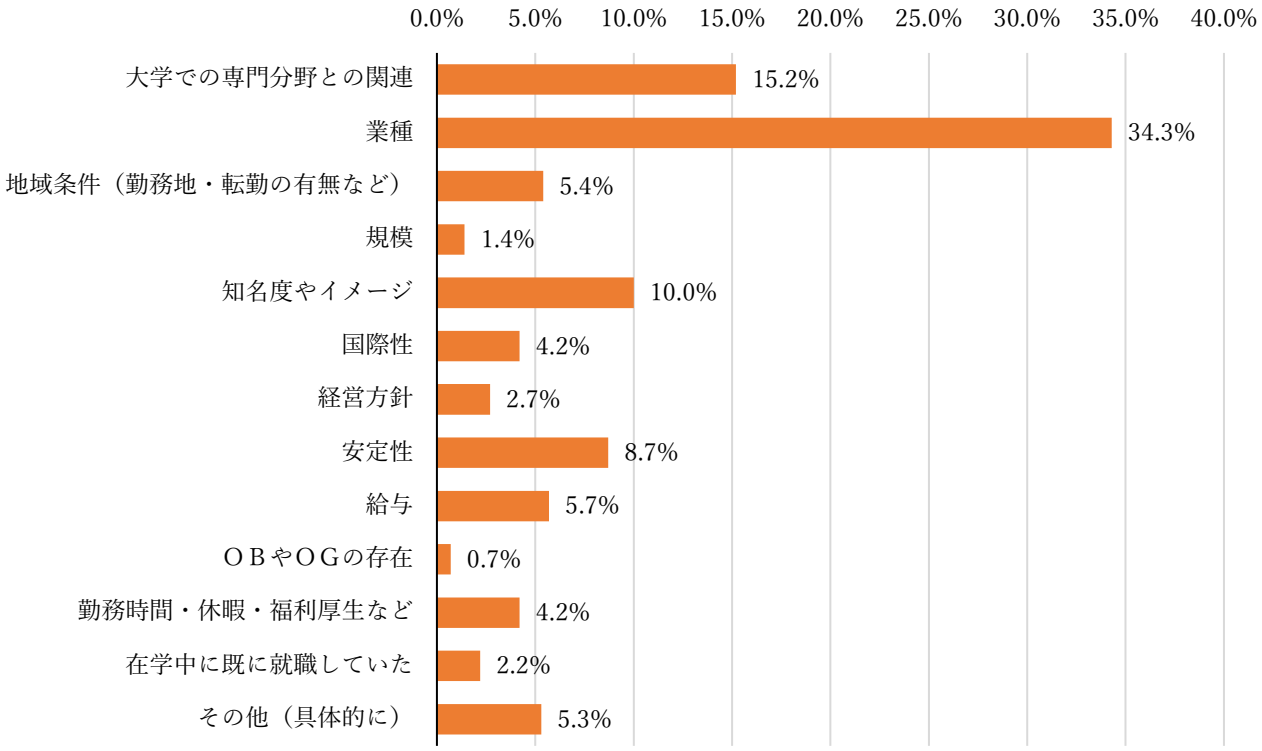
はい	927
いいえ	182

Q21. あなたは学部卒業時にどのような進路選択をしましたか。該当するものを一つだけお選びください。



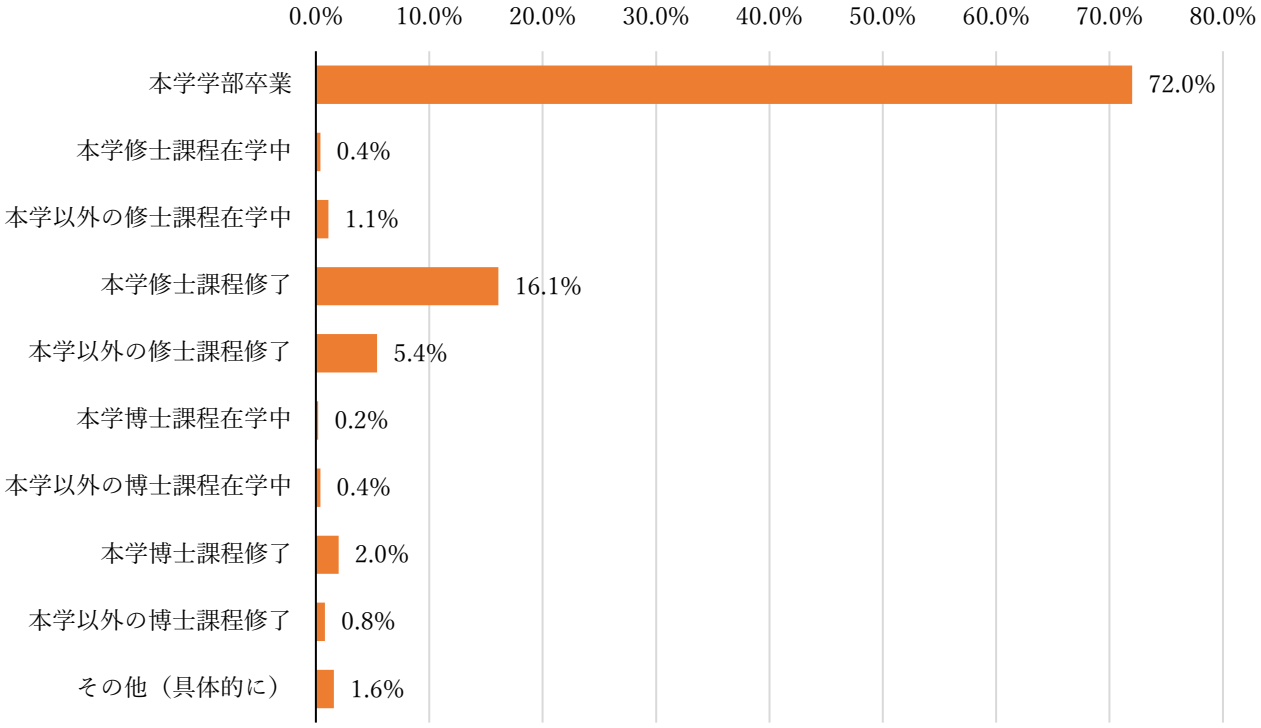
就職した	764
自分で事業（自営）を始めた	4
早稲田大学の大学院に進学した	205
他大学の大学院に進学した	52
就職活動を行った	26
資格試験準備を行った	12
仕事にも就かず、学校にも行かなかった	16
在学中に既に就職していた	15
その他（具体的に）	19

Q22. 就職先を決定するに当たって最も重視したことは何ですか。該当するものを一つだけお選びください。



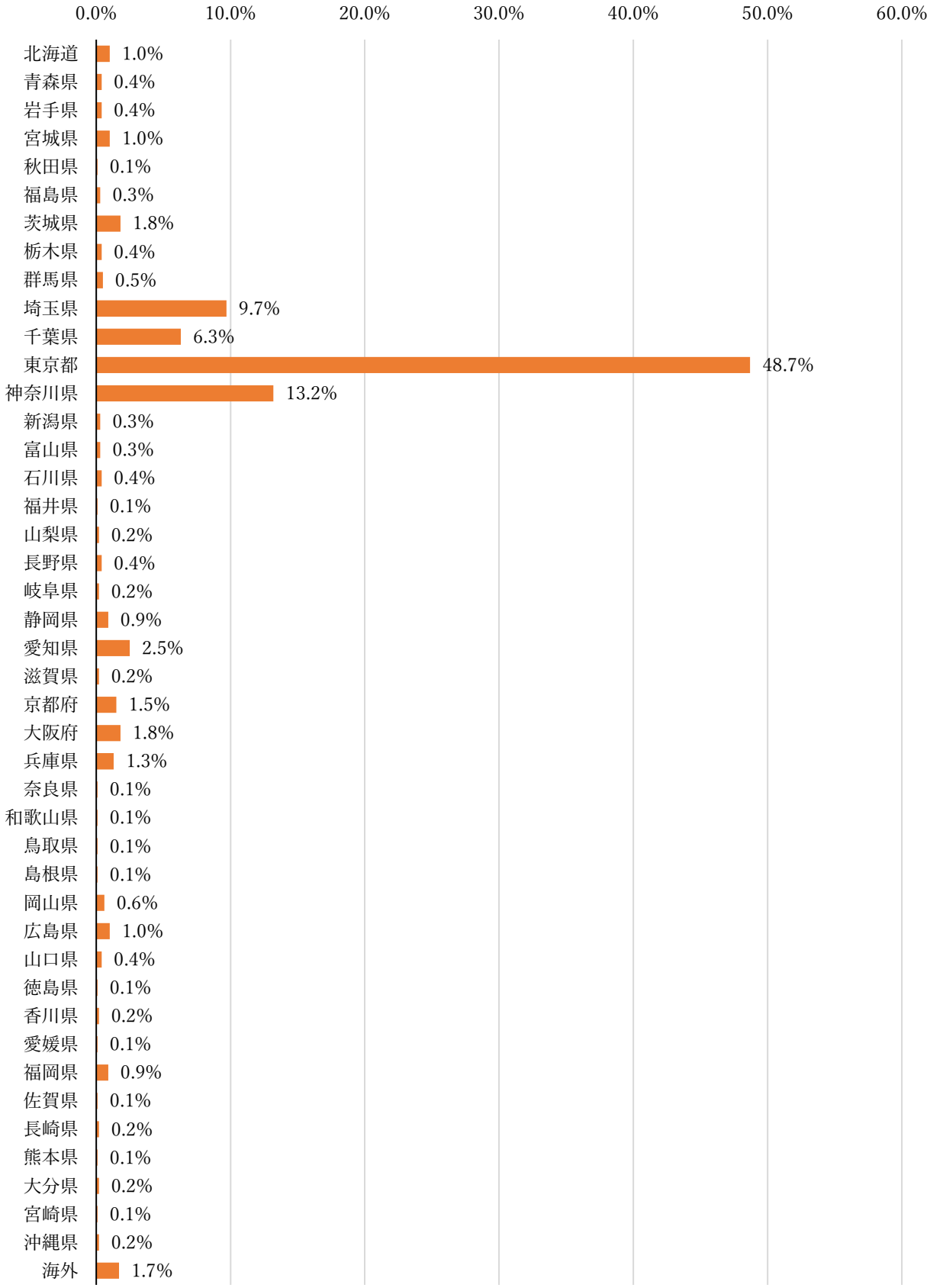
大学での専門分野との関連	168	安定性	96
業種	380	給与	63
地域条件（勤務地･転勤の有無など）	60	ＯＢやＯＧの存在	8
規模	15	勤務時間･休暇･福利厚生など	46
知名度やイメージ	111	在学中に既に就職していた	24
国際性	47	その他（具体的に）	59
経営方針	30		

Q23. あなたの最終学歴について、あてはまるものを一つだけお選びください。



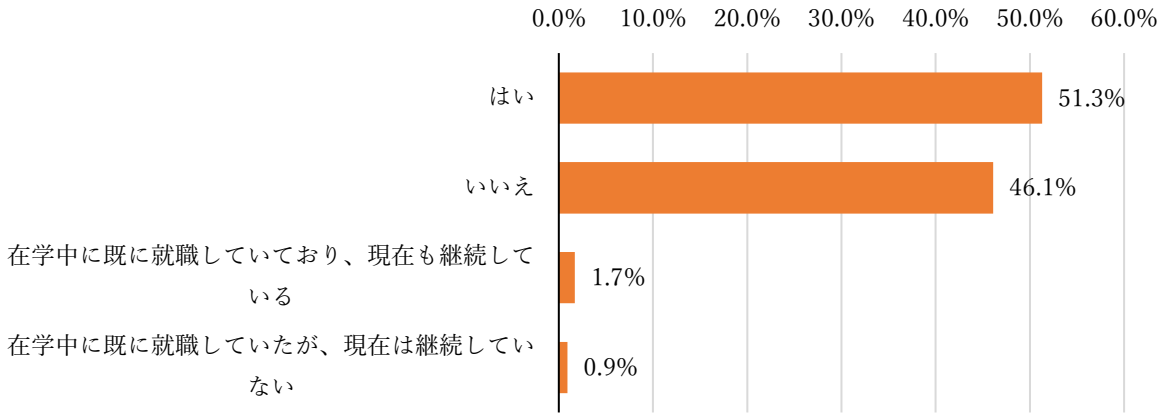
本学学部卒業	801
本学修士課程在学中	5
本学以外の修士課程在学中	12
本学修士課程修了	179
本学以外の修士課程修了	60
本学博士課程在学中	2
本学以外の博士課程在学中	5
本学博士課程修了	22
本学以外の博士課程修了	9
その他（具体的に）	18

Q24. あなたの学部卒業直後の居住地について都道府県名をお選びください（海外の場合は海外をお選びください）。



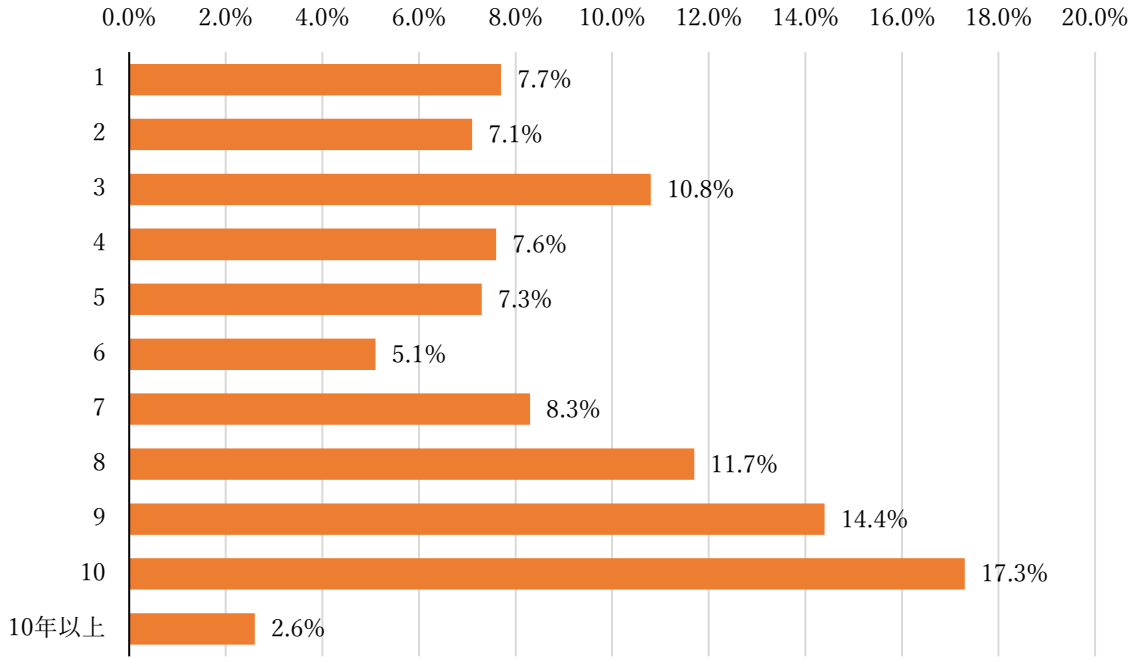
北海道	11	福井県	1	山口県	5
青森県	4	山梨県	2	徳島県	1
岩手県	4	長野県	4	香川県	2
宮城県	11	岐阜県	2	愛媛県	1
秋田県	1	静岡県	10	福岡県	10
福島県	3	愛知県	28	佐賀県	1
茨城県	20	滋賀県	2	長崎県	2
栃木県	5	京都府	17	熊本県	1
群馬県	6	大阪府	20	大分県	2
埼玉県	108	兵庫県	15	宮崎県	1
千葉県	70	奈良県	1	沖縄県	2
東京都	541	和歌山県	1	海外	19
神奈川県	147	鳥取県	1		
新潟県	3	島根県	1		
富山県	3	岡山県	7		
石川県	5	広島県	11		

Q25. 卒業後最初についたお仕事は、現在も継続されていますか。出向や転勤等などで異動している場合は、同じ会社・団体・組織としてください。



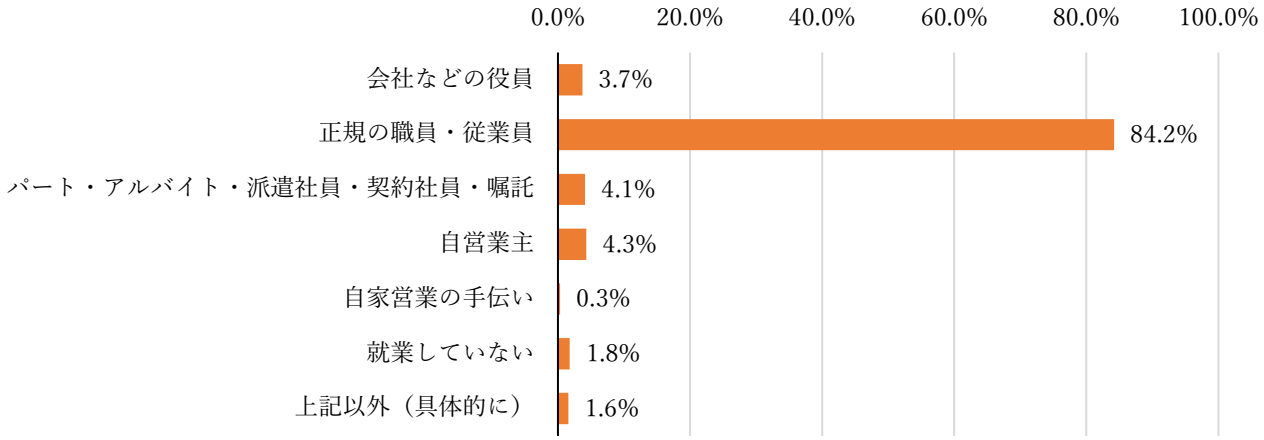
はい	571
いいえ	513
在学中に既に就職していており、現在も継続している	19
在学中に既に就職していたが、現在は継続していない	10

Q26. 学部・大学院等の卒業後に就いた最初のお仕事の勤続年数を記入してください。



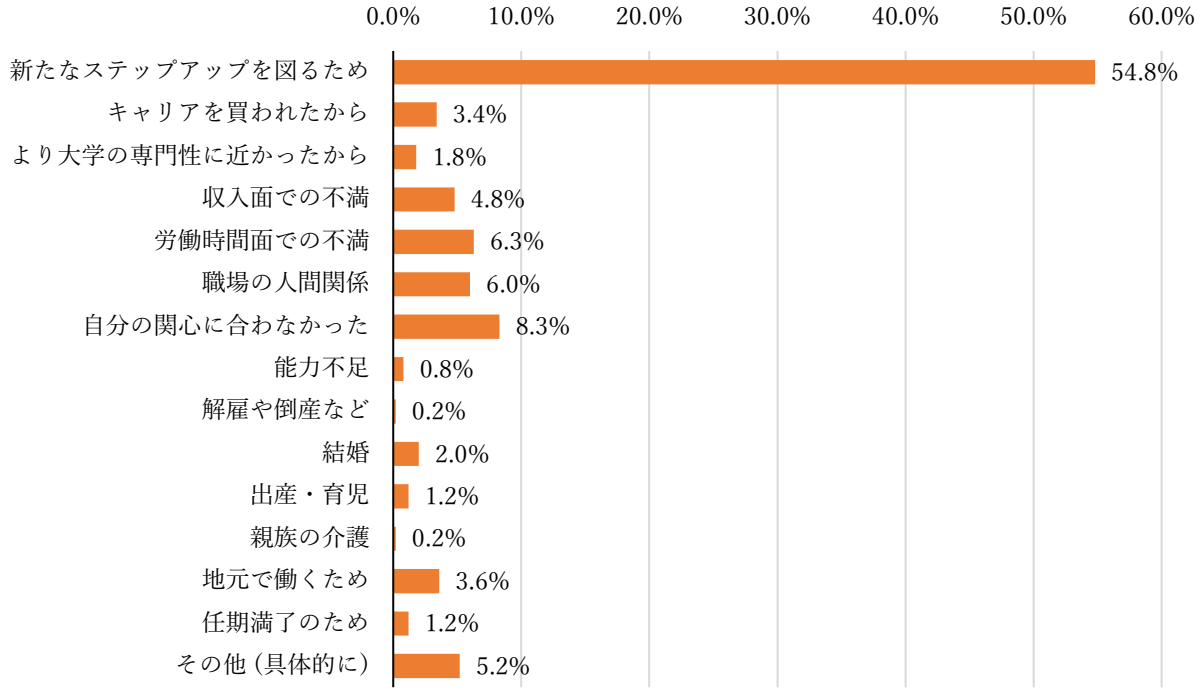
1 年	80
2 年	73
3 年	112
4 年	79
5 年	75
6 年	53
7 年	86
8 年	121
9 年	149
10 年	179
10 年以上	27

Q27. あなたの現在の就業形態について、該当するものを一つだけお選びください。　※現在、就業していない方は、「就業していない」を選択してください。



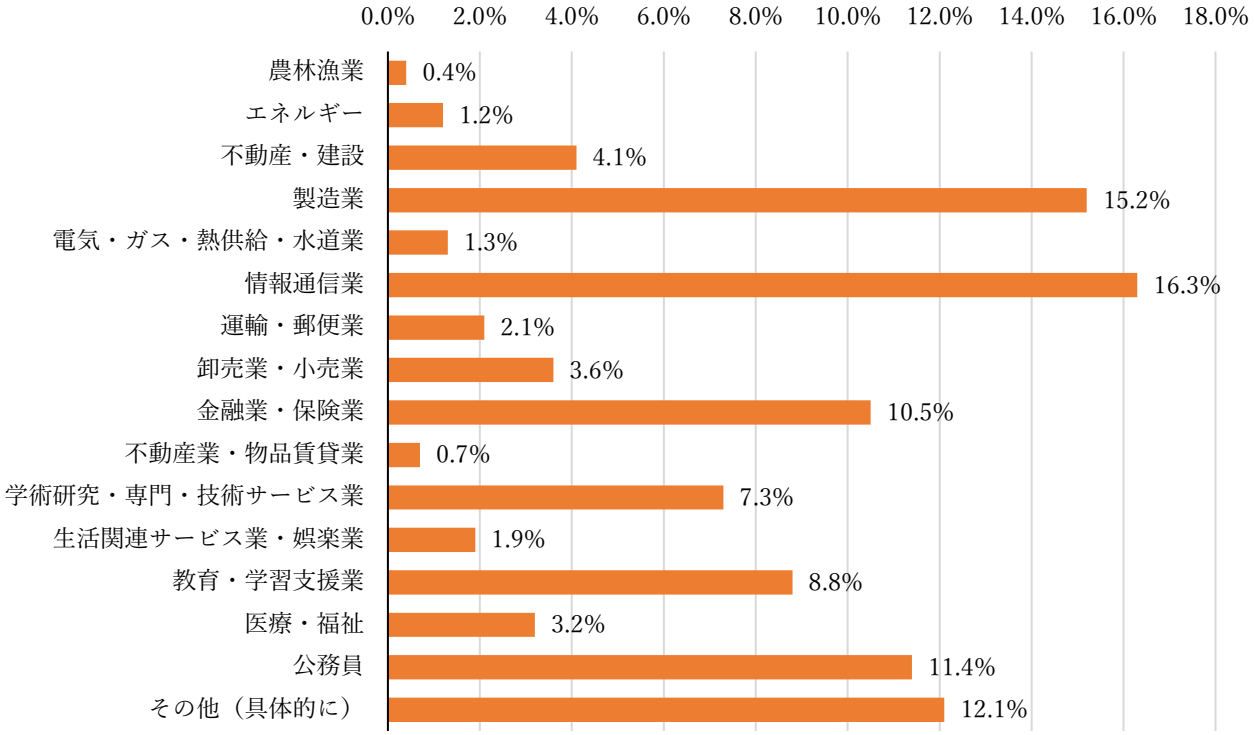
会社などの役員	41
正規の職員・従業員	933
パート・アルバイト・派遣社員・契約社員・嘱託	45
自営業主	48
自家営業の手伝い	3
就業していない	20
上記以外（具体的に）	18

Q28. 転職または辞職された理由は何ですか。最も大きい理由を一つだけお選びください。



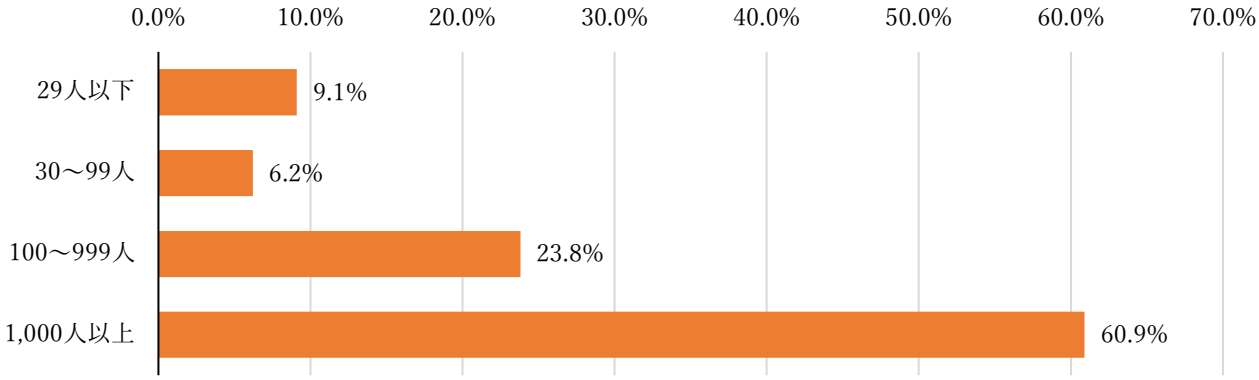
新たなステップアップを図るため	272
キャリアを買われたから	17
より大学の専門性に近かったから	9
収入面での不満	24
労働時間面での不満	31
職場の人間関係	30
自分の関心に合わなかった	41
能力不足	4
解雇や倒産など	1
結婚	10
出産・育児	6
親族の介護	1
地元で働くため	18
任期満了のため	6
その他 (具体的に)	26

Q29. 現在働いている企業・団体等の業種について、該当するものを一つだけお選びください。



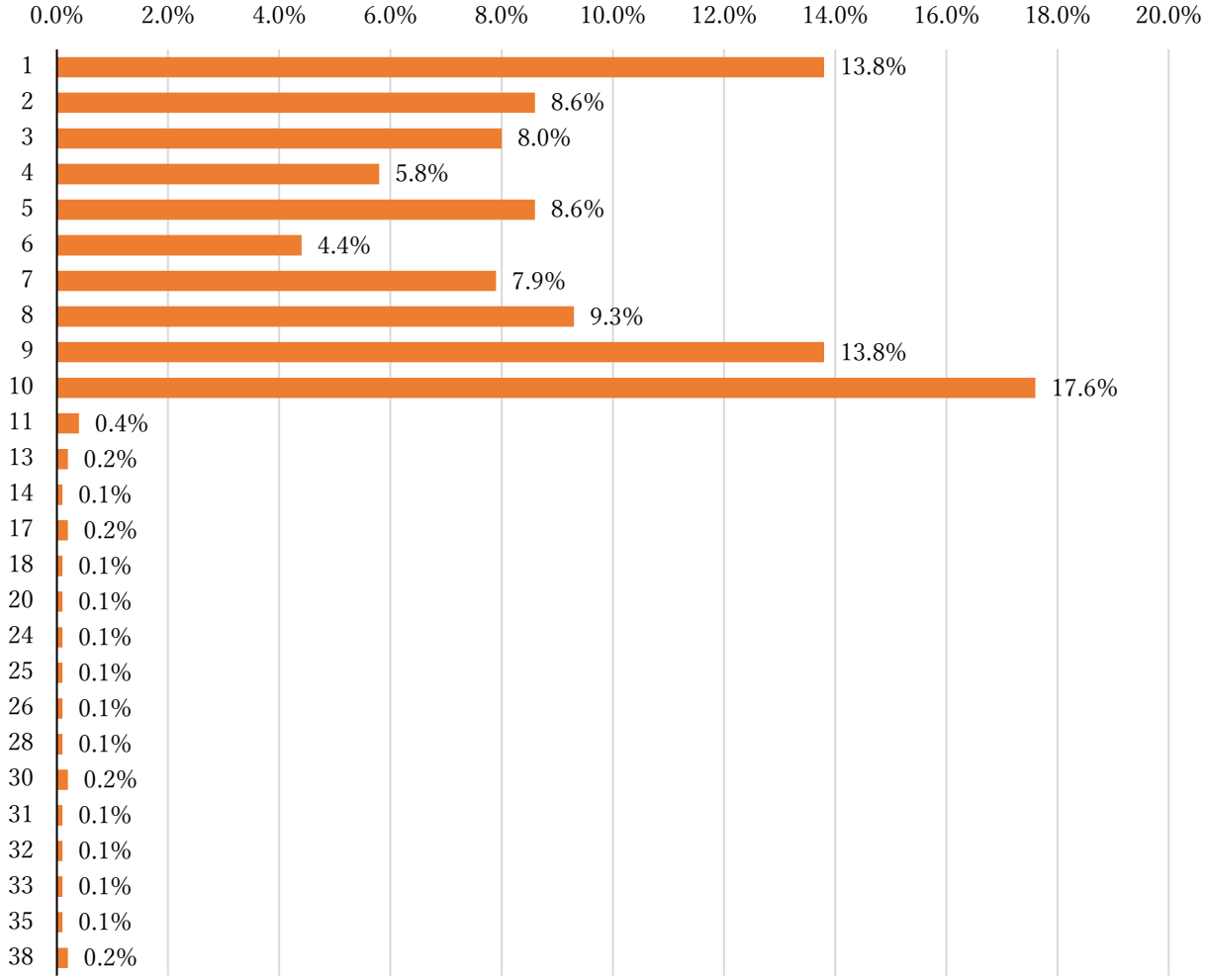
農林漁業	4
エネルギー	13
不動産・建設	44
製造業	163
電気・ガス・熱供給・水道業	14
情報通信業	174
運輸・郵便業	22
卸売業・小売業	38
金融業・保険業	112
不動産業・物品賃貸業	8
学術研究・専門・技術サービス業	78
生活関連サービス業・娯楽業	20
教育・学習支援業	94
医療・福祉	34
公務員	122
その他（具体的に）	130

Q30. 現在働いている企業・団体等の従業員規模について、該当するものを一つだけお選びください。



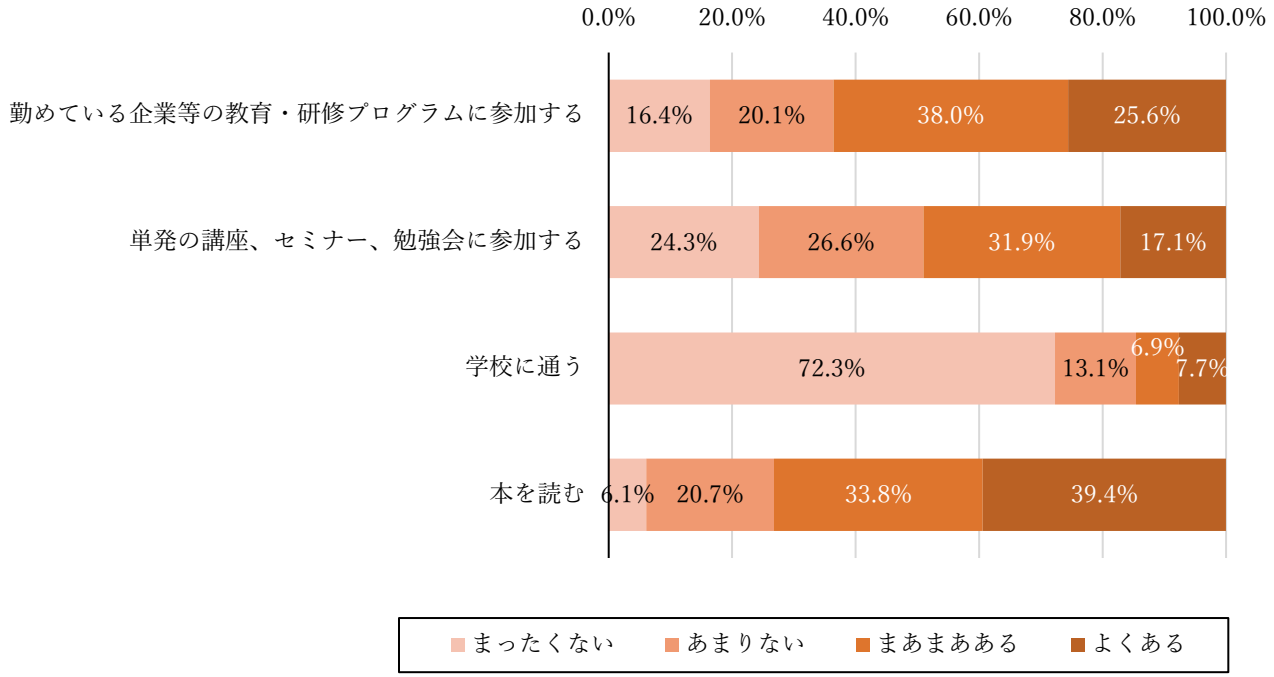
29 人以下	97
30～99 人	66
100～999 人	254
1,000 人以上	649

Q31. 現在のお仕事の勤続年数を記入してください。



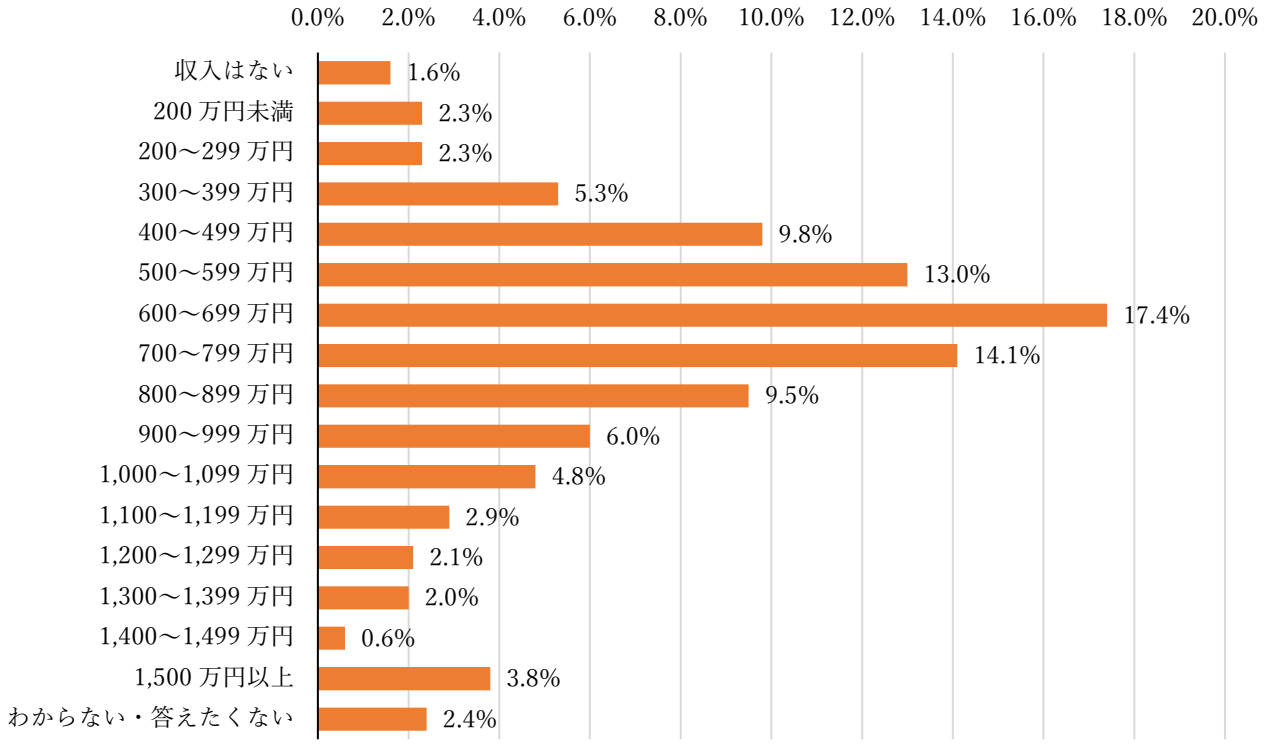
1 年	147	17 年	2
2 年	92	18 年	1
3 年	85	20 年	1
4 年	62	24 年	1
5 年	92	25 年	1
6 年	47	26 年	1
7 年	84	28 年	1
8 年	99	30 年	2
9 年	147	31 年	1
10 年	187	32 年	1
11 年	4	33 年	1
13 年	2	35 年	1
14 年	1	38 年	2

Q32. 現在の学習活動について、最もあてはまるものをお選びください。



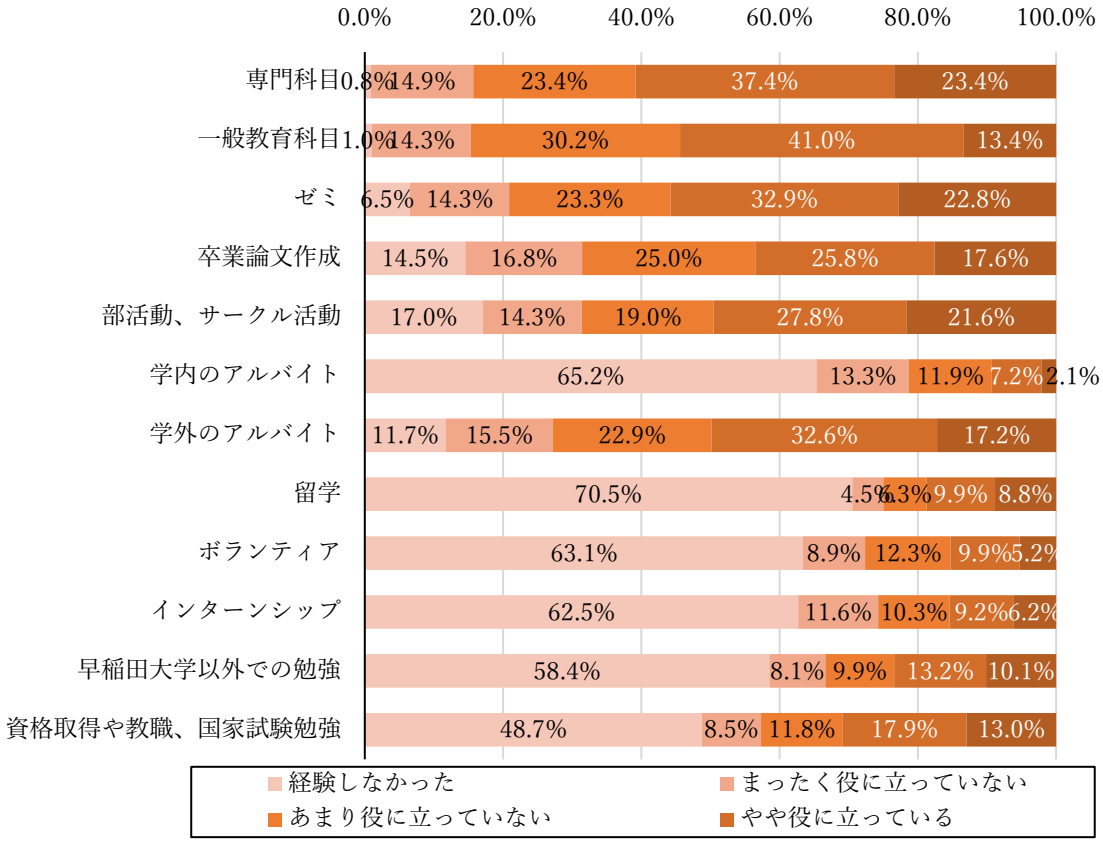
	まったくない	あまりない	まあまあある	よくある
勤めている企業等の教育・研修プログラムに参加する	178	218	413	278
単発の講座、セミナー、勉強会に参加する	264	289	346	186
学校に通う	783	142	75	83
本を読む	66	224	366	427

Q33. あなたの現在の年収（税込）について、該当するものを一つだけお選びください。



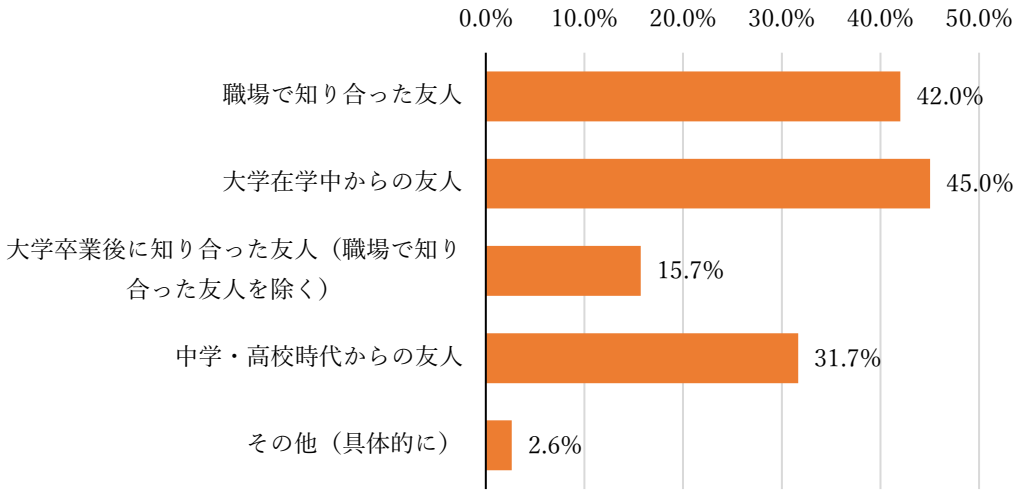
収入はない	18
200 万円未満	25
200～299 万円	25
300～399 万円	58
400～499 万円	107
500～599 万円	142
600～699 万円	190
700～799 万円	154
800～899 万円	104
900～999 万円	65
1,000～1,099 万円	52
1,100～1,199 万円	32
1,200～1,299 万円	23
1,300～1,399 万円	22
1,400～1,499 万円	7
1,500 万円以上	41
わからない・答えたくない	26

Q34. あなたの学部時代の経験は、現在の仕事にどの程度役立っていますか。該当するものをお選びください。



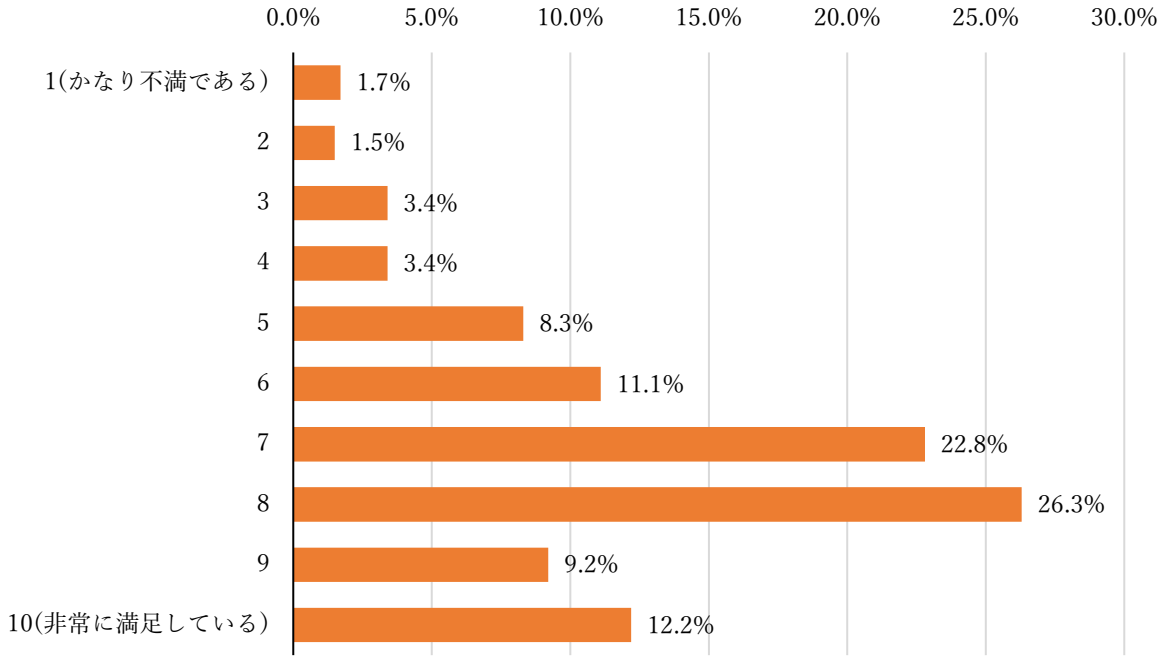
	経験しなかった	まったく役に立っていない	あまり役に立っていない	やや役に立っている	かなり役に立っている
専門科目	9	162	255	407	255
一般教育科目	11	156	329	446	146
ゼミ	71	156	253	358	248
卒業論文作成	158	183	272	281	191
部活動、サークル活動	185	156	207	303	235
学内のアルバイト	709	145	130	78	23
学外のアルバイト	127	169	249	355	187
留学	767	49	68	108	96
ボランティア	686	97	134	108	57
インターンシップ	680	126	112	100	67
早稲田大学以外での勉強	635	88	108	144	110
資格取得や教職、国家試験勉強	530	93	128	195	141

Q35. （仕事上の難しい問題に直面したときに、個人的に相談できる）友人は、どのような関係にある方ですか。あてはまるものすべてをお選びください。



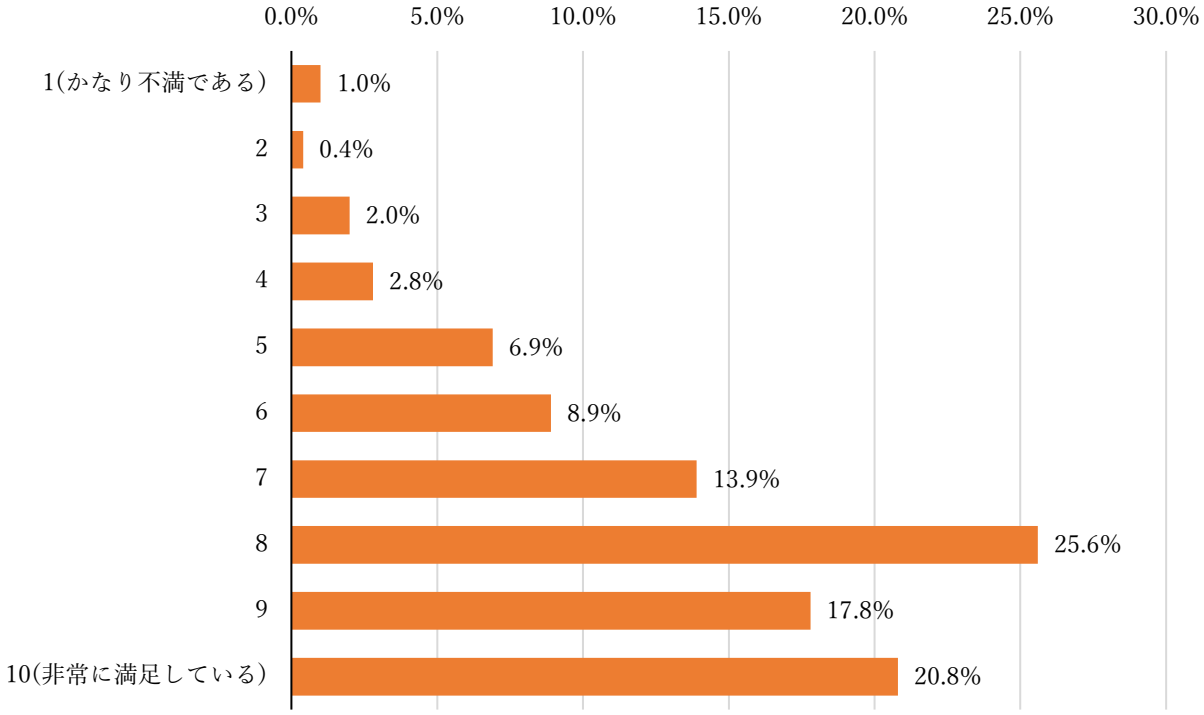
職場で知り合った友人	543
大学在学中からの友人	582
大学卒業後に知り合った友人（職場で知り合った友人を除く）	203
中学・高校時代からの友人	409
その他（具体的に）	34

Q36. あなたの現在の仕事の満足度はどの程度ですか。 それぞれ一つずつお選びください。



1(かなり不満である)	16
2	14
3	32
4	32
5	77
6	103
7	212
8	244
9	85
10(非常に満足している)	113

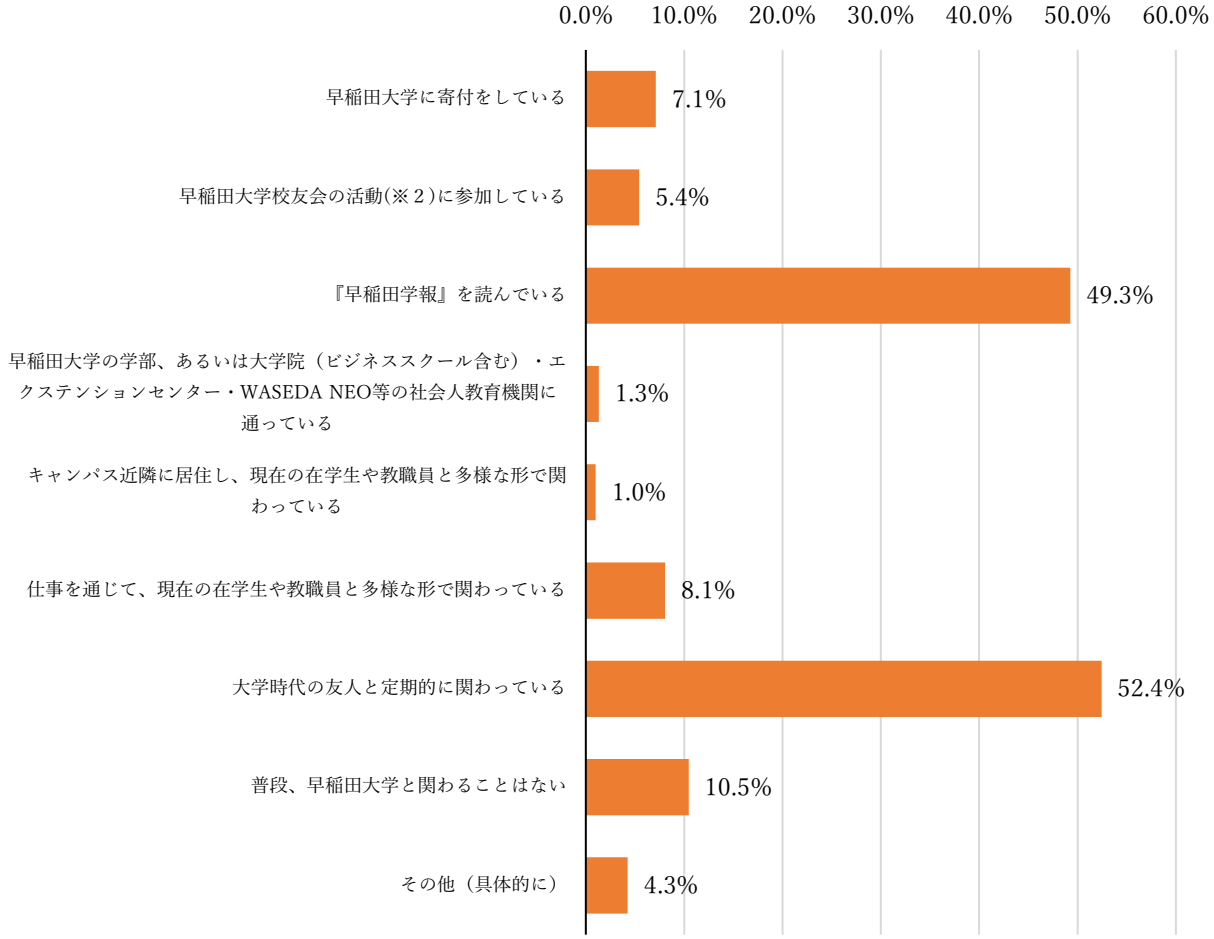
Q37. あなたの生活（仕事を除く）の満足度はどの程度ですか。 それぞれ一つずつお選びください。



1(かなり不満である)	9
2	4
3	19
4	26
5	64
6	83
7	130
8	239
9	166
10(非常に満足している)	194

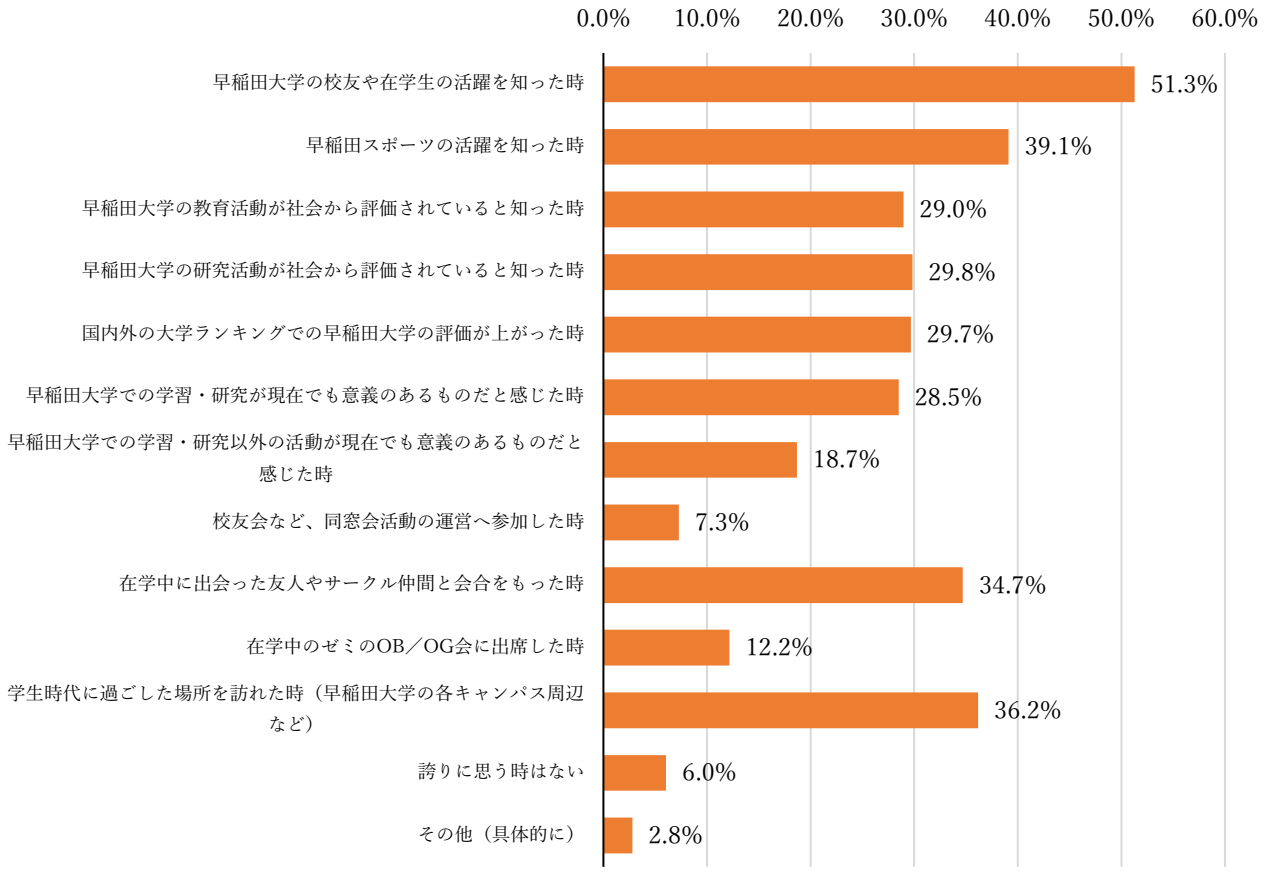
５．校友関連・自由記述

Q38. あなたは早稲田大学の校友(こうゆう)(※1)として、現在、早稲田大学とどのように関わっていますか。あてはまるものすべてを選んでください。



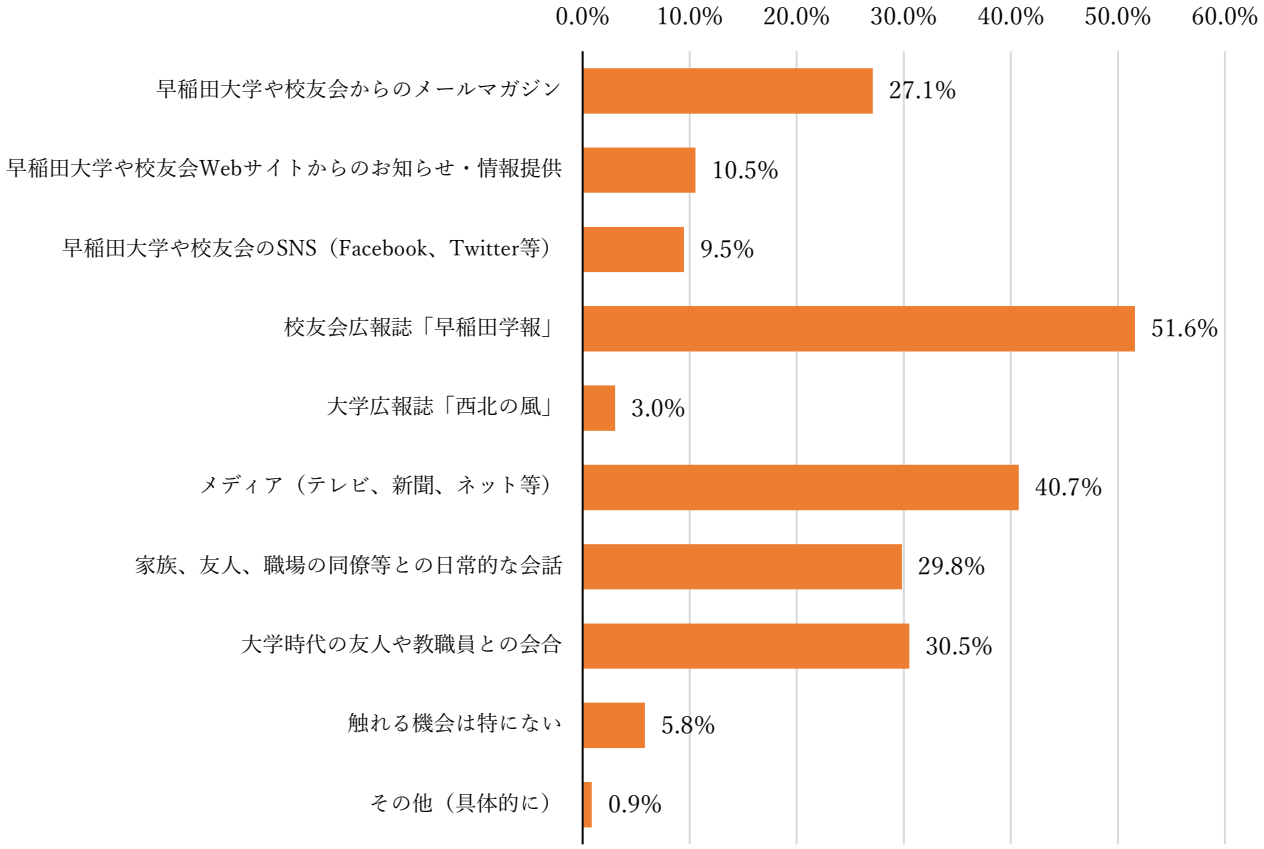
早稲田大学に寄付をしている	92
早稲田大学校友会の活動に参加している	70
『早稲田学報』を読んでいる	636
早稲田大学の学部、あるいは大学院（ビジネススクール含む）・エクステンションセンター・WASEDA NEO 等の社会人教育機関に通っている	17
キャンパス近隣に居住し、現在の在学生や教職員と多様な形で関わっている	13
仕事を通じて、現在の在学生や教職員と多様な形で関わっている	104
大学時代の友人と定期的に関わっている	677
普段、早稲田大学と関わることはない	135
その他（具体的に）	55

Q39. 早稲田大学の校友（卒業生）であることを誇りに思う時はどのような時ですか。あてはまるものすべてを選んでください。



早稲田大学の校友や在学生の活躍を知った時	662
早稲田スポーツの活躍を知った時	505
早稲田大学の教育活動が社会から評価されていると知った時	374
早稲田大学の研究活動が社会から評価されていると知った時	385
国内外の大学ランキングでの早稲田大学の評価が上がった時	383
早稲田大学での学習・研究が現在でも意義のあるものだと感じた時	368
早稲田大学での学習・研究以外の活動が現在でも意義のあるものだと感じた時	241
校友会など、同窓会活動の運営へ参加した時	94
在学中に出会った友人やサークル仲間と会合をもった時	448
在学中のゼミの OB／OG 会に出席した時	157
学生時代に過ごした場所を訪れた時（早稲田大学の各キャンパス周辺など）	467
誇りに思う時はない	78
その他（具体的に）	36

Q40. あなたが早稲田大学に関する情報に触れる機会・手段として、どのようなものがありますか。あてはまるものすべてを選んでください。



早稲田大学や校友会からのメールマガジン	350
早稲田大学や校友会 Web サイトからのお知らせ・情報提供	136
早稲田大学や校友会の SNS（Facebook、Twitter 等）	122
校友会広報誌「早稲田学報」	666
大学広報誌「西北の風」	39
メディア（テレビ、新聞、ネット等）	526
家族、友人、職場の同僚等との日常的な会話	385
大学時代の友人や教職員との会合	394
触れる機会は特にない	75
その他（具体的に）	11

2023 年度 早稲田大学卒業生調査　報告書
2024 年 7 月
早稲田大学　大学総合研究センター

〒169-8050　東京都新宿区西早稲田 1-6-1（７号館４F）